

一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告 1

かみ とう ばる いな もと や しき
上唐原稻本屋敷遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告 1

上唐原稻本屋敷遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

巻頭図版



上唐原稻本屋敷遺跡と山国川中流域

序

本書は、福岡県教育委員会が建設省大分工事事務所から委託を受けて、平成4年度から実施している、山国川築堤改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。今回の報告は平成4年度に発掘調査した、築上郡大平村大字上唐原所在の上唐原稻本屋敷遺跡についてのものです。

山国川築堤工事に関する調査は今後も継続実施の予定で、出土文化財資料の整理も並行して進めて、報告書も順次刊行する予定です。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、学術研究に役立つことを望みます。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例　　言

- 1 本書は、昭和61年度に福岡県教育委員会が建設省大分工事事務所から委託を受けて実施した、一級河川山国川の築堤改修工事によって破壊される埋蔵文化財の発掘調査の報告書で、その1冊目である。
- 2 出土遺物は、県文化課太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・平田春美・豊福弥生・北岡伸一らの協力を得た。なお遺物類、記録類の保管は、九州歴史資料館および文化課太宰府事務所で行っている。
- 3 II区土壙墓出土の動物遺体は、鹿児島大学農学部家畜解剖学教室の西中川駿教授に同定を依頼したが、同定結果については玉稿を頂いた。
- 4 掲載写真のうち、遺構写真は小池史哲が撮影し、遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸二の協力を得た。また空中写真撮影では、空中写真企画に撮影を委託した。なお、航空写真は国土地理院提供の写真を使用した。
- 5 挿図のうち、遺構図は小池と村上知文、高畠由美子が実測し、遺物実測図は小池と、平田、岡由美子、棚町陽子、田中典子、久富美智子、坂田順子、堀江圭子、藤原さとみ、堀之内久美子、江口幸子が実測した。また図面の淨書には豊福、原カヨ子の、図版作成には甲斐孝司、松永通明の助力を得た。
- 6 挿図で使用する方位は新平面直角座標系IIの座標北を使用した。
- 7 本書の執筆は、第4章を西中川駿が分担し、他は小池が執筆し、編集も小池が担当した。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	3
第2章 遺跡の位置と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	6
第3章 遺構と遺物	11
1. 0区の遺構と遺物	11
2. I区の遺構と遺物	26
3. II区の遺構と遺物	56
4. III区の遺構と遺物	80
5. IV区の遺構と遺物	97
第4章 福岡県上唐原稻本屋敷遺跡出土の牛骨および馬骨	103
第5章 おわりに	107

図 版 目 次

巻頭図版 上唐原稻本屋敷遺跡と山国川

	本文対照頁
図版 1 上唐原稻本屋敷遺跡周辺航空写真 (国土地理院 KU-62-9, C12-10)	1
2 - 1 上唐原稻本屋敷遺跡全景 (北北東上空から)	1
- 2 上唐原稻本屋敷遺跡 I・II区空中写真	1
3 - 1 上唐原稻本屋敷遺跡 0 区 (北から)	11
- 2 0 区 2・3 号遺構 (西から)	13
- 3 0 区 3 号遺構 (南から)	13
- 4 0 区 4 号遺構 (西から)	15
4 - 1 0 区 6 号遺構 (北から)	20
- 2 0 区 6 号遺構北部 (北から)	20
- 3 0 区 6 号遺構南部近景	20
- 4 0 区 6 号遺構北部近景	20
5 0 区出土土器 1	13
6 0 区出土土器 2	16
7 - 1 0 区出土土器 3	22
- 2 0 区出土石器・土製品・金属製品	11
8 - 1 I 区全景空中写真	26
- 2 I 区区画溝 (北から)	29
- 3 I 区東側溝 (北から)	29
- 4 I 区北側溝 (東から)	29
- 5 I 区北側溝堆積状況	29
9 I 区出土土器 1	29
10 I 区出土土器 2	29
11 I 区出土土器 3	29
12 I 区出土土器 4	46
13 - 1 I 区出土土器 5	46
- 2 I 区出土金属器・鉄滓	29
14 I 区出土石器・石製品・土製品	51
15 - 1 II 区 1 号建物跡 (西から)	56
- 2 II 区 1 号土坑 (東から)	57
- 3 II 区 2 号土坑 (北から)	57
16 - 1 II 区 3 号土坑 (南から)	57

図版16-2	II区4号土坑(北から)	58
-3	II区4号土坑遺物出土状況	58
-4	II区1号土壙墓(南から)	60
17-1	II区南半部(北から)	56
-2	II区1号建物跡と大溝・1号溝(北から)	56
-3	II区大溝と1号溝(南から)	61
18-1	II区大溝堆積状況	61
-2	II区大溝の石垣(南から)	61
-3	II区1号溝堆積状況	73
19-1	II区2号溝(北から)	77
-2	II区2号溝(南から)	77
-3	II区2号溝遺物出土状況	77
-4	II区2号溝遺物出土状況	77
20	II区出土土器1	62
21-1	II区出土土器2	62
-2	II区出土金属製品	57
-22	II区出土石器・石製品・土製品・鉄滓	69
23-1	III・IV区全景空中写真	80
-2	III・IV区全景(南から)	80
24-1	III区全景空中写真	80
-2	III区中央部(南から)	80
-3	III区住居跡状堅穴と2号溝(北から)	80
25-1	III区2号土坑(東から)	85
-2	III区1号土坑(南から)	83
-3	III区1号土坑遺物出土状況	82
-4	III区1号土坑遺物除去後	82
26-1	III区1号溝(南東から)	89
-2	III区2号溝(北西から)	91
-3	III区2号石垣(北西から)	89
27-1	III区3号溝(東から)	92
-2	III区3号溝(西から)	92
-3	III区1号石垣(北西から)	89
28	III区出土土器1	81
29-1	III区出土土器2	92
-2	III区出土金属製品	82
30-1	IV区全景(南から)	97
-2	IV区1号住居跡(南西から)	98
-3	IV区1号建物跡(南西から)	99

図版31-1	III区出土石器・土製品	85
- 2	IV区出土土製品・金属製品	100
- 3	調査風景	1

挿 図 目 次

第1図	上唐原稻本屋敷遺跡の位置 (1/500000)	1
第2図	山国川堤防改修関係の遺跡 (1/20000)	2
第3図	周辺の遺跡分布 (1/50000)	7
第4図	遺跡周辺の地形と調査区 (1/1000)	折込み
第5図	遺構配置図 (1/400)	折込み
第6図	0区1～3号遺構実測図 (1/40・1/30)	12
第7図	0区1号遺構出土土器実測図 (1/3)	13
第8図	0区2号遺構出土土器実測図 (1/3)	13
第9図	0区3号遺構出土土器実測図 (1/2)	14
第10図	0区出土石器実測図 (3/4・1/3・1/2)	15
第11図	0区4・5号遺構実測図 (1/60)	16
第12図	0区4号遺構出土土器実測図1 (1/3)	17
第13図	0区4号遺構出土土器実測図2 (1/3)	17
第14図	0区出土鉄製品実測図 (1/2)	20
第15図	0区5号遺構出土土器実測図 (1/3)	20
第16図	0区6号遺構実測図 (1/50)	21
第17図	0区6号遺構出土土器実測図1 (1/4)	22
第18図	0区6号遺構出土土器実測図2 (1/3)	23
第19図	0区その他出土遺物実測図 (1/3)	25
第20図	0区側溝工事部分出土土器実測図 (1/3)	26
第21図	I区1号土坑出土土器実測図 (1/3)	26
第22図	I区の土坑実測図 (1/40)	27
第23図	I区2・3号土坑出土土器実測図 (1/4)	28
第24図	I区4号土坑出土土器実測図 (1/3)	28
第25図	I区北側溝断面土層実測図 (1/60)	29
第26図	I区北側溝出土土器実測図1 (1/4)	30
第27図	I区北側溝出土土器実測図2 (1/3)	31
第28図	I区北側溝出土土器実測図3 (1/3)	33
第29図	I区北側溝出土土器実測図4 (1/3)	34
第30図	I区北側溝出土土器実測図5 (1/3)	37
第31図	I区北側溝出土土器実測図6 (1/3)	39

第32図	I 区北側溝出土土器実測図 7 (1/3)	40
第33図	I 区北側溝出土土器実測図 8 (1/3)	41
第34図	I 区北側溝出土土器実測図 9 (1/3)	43
第35図	I 区北側溝出土土器実測図10 (1/3)	44
第36図	I 区北側溝出土土器実測図11 (1/3)	45
第37図	I 区東側溝出土土器実測図 1 (1/3)	46
第38図	I 区東側溝出土土器実測図 2 (1/3)	47
第39図	I 区東側溝出土土器実測図 3 (1/3)	49
第40図	I 区東側溝出土土器実測図 4 (1/3)	50
第41図	I 区出土石器実測図 (1/3)	52
第42図	I 区出土石器・土製品実測図 (1/2・1/4・1/3)	54
第43図	I 区出土鉄製品実測図 (1/2)	55
第44図	I 区区画溝出土古錢拓影 (実大)	55
第45図	I 区 2号小溝出土土器実測図 (1/3・1/4)	56
第46図	II 区掘立柱建物跡実測図 (1/80)	57
第47図	II 区の土坑実測図 (1/60)	58
第48図	II 区 4号土坑出土土器実測図 (1/3)	59
第49図	II 区土壤墓実測図 (1/30)	60
第50図	II 区出土石製品実測図 1 (1/5)	61
第51図	II 区大溝と 1号溝断面土層実測図 (1/60)	61
第52図	II 区大溝と 1号溝石垣実測図 (1/50)	62
第53図	II 区大溝出土土器実測図 1 (1/3)	63
第54図	II 区大溝出土土器実測図 2 (1/3)	64
第55図	II 区大溝出土土器実測図 3 (1/3)	66
第56図	II 区大溝出土土器実測図 4 (1/3)	67
第57図	II 区大溝出土土器実測図 5 (1/3)	68
第58図	II 区出土石製品実測図 2 (1/4・1/5)	70
第59図	II 区出土石器・土製品実測図 (3/4・1/2・1/3)	71
第60図	II 区出土鉄製品実測図 (1/2)	72
第61図	II 区 1号溝出土土器実測図 1 (1/3)	74
第62図	II 区 1号溝出土土器実測図 2 (1/3)	76
第63図	II 区 2号溝遺物出土状況実測図 (1/30)	77
第64図	II 区 2号溝出土土器実測図 1 (1/3)	77
第65図	II 区 2号溝出土土器実測図 2 (1/3)	78
第66図	III 区住居跡状竪穴実測図 (1/60)	81
第67図	III 区竪穴出土土器実測図 (1/4)	81
第68図	III 区出土鉄製品実測図 (1/2)	82
第69図	III 区の土坑実測図 (1/40・1/30)	83

第70図	III区土坑出土土器実測図 (1/4)	84
第71図	III区出土石器・土製品実測図 (3/4・1/3・1/2)	85
第72図	III区土坑出土土器実測図 (1/4)	85
第73図	III区の土坑実測図 (1/40)	86
第74図	III区ピット等出土土器実測図 (1/3)	88
第75図	III区豎穴と2号石垣実測図 (1/50)	90
第76図	III区1・2号溝出土土器実測図 (1/3)	91
第77図	III区3号溝出土土器実測図1 (1/3)	93
第78図	III区3号溝出土土器実測図2 (1/3)	95
第79図	III区3号溝出土古錢拓影 (実大)	97
第80図	III区包含層出土繩文土器拓影 (1/3)	97
第81図	IV区住居跡実測図 (1/60)	98
第82図	IV区住居跡出土土器実測図 (1/3)	98
第83図	IV区掘立柱建物跡実測図 (1/80)	99
第84図	IV区ピット出土土器実測図 (1/3)	99
第85図	IV区出土土製品・鉄製品実測図 (1/2)	100
第86図	IV区1号溝出土土器実測図 (1/3)	101
第87図	IV区包含層出土土器実測図 (1/4)	102
第88図	高村焼の民俗資料 (1/8)	109
第89図	近世土師質土器の形態 (1/6)	110
第90図	近世土師質・瓦質土器の形態 (1/6)	112

表 目 次

表1 山国川堤防改修関係の遺跡一覧表 3

第1章 はじめに

1 調査の経過

建設省大分工事事務所からは、平成3年度に文化財に関する協議があり、平成3年4月24日に現地踏査による分布調査が実施されたが、平成3年度には用地が解決する見込みがなく、発掘調査は実施しない状況であった。

この後、平成3年8月1日付けの建九大一調第998号で、大分工事事務所長名の、「山国川—唐原地区河川改修工事に伴う埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」の文書が提出された。

福岡県教育庁文化課は、これを受けて8月に試掘調査を実施した結果、柱穴状ピットなどの遺構の存在と弥生時代土器片などの存在から文化財の存在することを確認して、8月20日付けの3教文調第14—7号で、県教育長名の「山国川—唐原地区河川改修工事に係る埋蔵文化財の有無について」の回答をした。

これを受け大分工事事務所と文化課は、翌年3月2日に埋蔵文化財の取扱いについて協議したが、事前発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずる必要が生じ、工事計画との関係から、唐原地区の発掘調査については平成4年度の4月から6月の間に調査を実施してほしい旨の要望があった。

また、恒久橋工事に係わる工事は平成4・5年度に計画されていて、文化財の有無の確認を含めた試掘調査を平成4年度の8月以降に実施してほしいとの要望もあった。

唐原地区的発掘調査は、平成4年4月14日から開始した。遺跡名は大字名と小字名を使用して、「上唐原稻本屋敷（Kamitoubaru-inamotoyashiki）遺跡」と呼称することにした。

4月23日、器材倉庫、テントを設営する。II区の遺構検出作業を実施。



第1図 上唐原稻本屋敷遺跡の位置(1/500000)（道路施設「九州自動車道」1996.8を改変）

1 調査の経過

5月7日、IV区に移動して、遺構検出作業開始。

5月8日、I区の遺構検出作業実施。

5月11日、I区区画溝の掘り下げ作業を行うが、近世陶磁器など多数出土する。福岡大学小田富士雄教授、武末純一助教授ら來訪。

5月16日、I区の作業終了。IV区の掘り下げ作業開始。

5月22日、III区の遺構検出と掘り下げ作業を実施する。

5月29日に全景の空中写真を撮影する。またこの日に上流側の試掘調査を実施する。調査地点の上流側では側溝工事の排土に弥生土器片が混じっていて、既に堤防本体の工事が終了した部分にも遺跡が拡がることが判明した。この付近では本体の盛土の反対側で護岸工事が目前に迫っていたが、川岸側にまで遺跡の拡がる可能性もあるために、重機による試掘調査を実施した。ここでは狭長な部分ではあったが、弥生時代～近世の遺構・遺物が確認された。排土置場などの制約もあったが、可能な範囲のみ発掘調査を追加実施した。この部分は0区と呼称することにした。

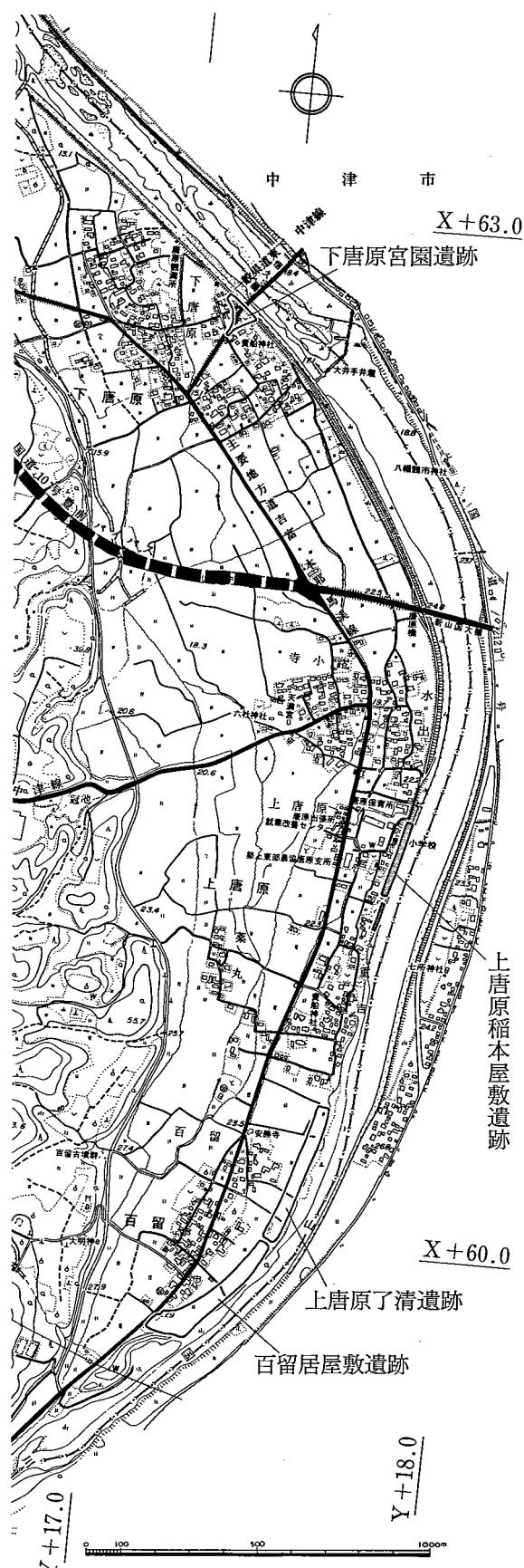
6月1日からはII区の北端部に積み上げていた排土をII区の調査終了部分に移動させて、北端部の表土剥ぎを開始した。遺構内の掘り下げ作業はIII区で実施する。

6月4日、大平村郷土史会の藤井較一氏、中園富夫氏ら來訪。II区北端部拡張区で大溝などの掘り下げ作業を始める。大溝と1号溝が重複する部分などで層序の検討に時間を要したが、14日には拡張区の調査をほぼ終了する。

0区は6月15日から遺構を検出して掘り下げを始めた。この日は県文化課から課長・文化財保護室長・管理係長らの文化財調査安全パトロールの視察があった。

写真撮影、遺構実測作業などを経て、現地での発掘作業ならびに器材・出土遺物等の撤収を終了したのは6月25日である。

また、百留地区(対象地約30000m²)と恒久橋架



第2図 山国川堤防改修関係の遺跡(1/20000)
(大平村全図 平成2年版を改変)

替に係わる地区（対象地約3300m²）の試掘調査は、11月16日から11月21日と11月30日～12月1日に実施したが、恒久橋架替の下唐原宮園遺跡では、用地幅や道路幅の関係などで重機を使用できない個所があり、人力による試掘調査も実施した。

調査の実施にあたっては、建設省大分工事事務所中津主張所、工事施工業者の二豊土建株式会社、久良木建設、空中写真企画の協力を得た。調査中には、県文化財保護指導委員の宮本工氏、中津市教育委員会栗焼憲児氏、三光村教育委員会植田由美氏、福岡県教育委員会小川泰樹氏、福岡県教育庁京築教育事務所飛野博文氏、大分県教育委員会吉田寛氏らの助言・協力を得た。

また、百留地区、恒久橋架替地区の試掘調査には、工事施工業者の豊洋土建株式会社、福島建設の協力を得た。

報告書作成の経過

平成4年度以降、山国川堤防改修に係わる埋蔵文化財の調査は、毎年継続して実施され、現在次ぎにあげる遺跡の調査を進めてきた、出土遺物、記録類は文化課太宰府事務所および九州歴史資料館、文化課甘木事務所において保管している。

表1 山国川堤防改修関係の遺跡一覧表

	遺跡名	調査面積	調査担当者	調査期間
平成4年度	上唐原稻本屋敷遺跡	5500m ²	小池 史哲	H 4.4.14～4.6.25
平成5年度	百留居屋敷遺跡	12,000m ²	高橋 章・吉田東明	H 5.5.13～6.2.28
〃	下唐原宮園遺跡	3,300m ²	〃・〃	H 5.7.16～5.10.22
平成6年度	上唐原了清遺跡	3600m ²	池辺元明・秦 憲二	H 6.7.18～6.11.11
平成7年度	上唐原了清遺跡	4,620m ²	木下 修・吉村靖彦	H 7.8.23～7.12.22
平成8年度	上唐原了清遺跡	8,000m ²	木下 修・吉村靖彦	H 8.6.3～9.1.24

上唐原稻本屋敷遺跡から出土した遺物は、一旦、椎田町に設置していた豊前バイパス関係の埋蔵文化財発掘調査事務所に仮置きしていたが、文化課太宰府事務所に移し、文化課太宰府事務所と九州歴史資料館で遺物整理を開始した。

平成8年度には、上唐原稻本屋敷遺跡の報告書作成業務、下唐原宮園遺跡の遺物復原・遺物実測作業を行った。これらの室内での整理作業には、文化課整理指導員らの協力を得た。

2 調査の組織

平成4年度の関係者は次のとおりである。

建設省大分工事事務所

所長	辻 英夫
副所長	安武 紘輝
調査第一課長	吉岡 寿治

同 係長	後藤 信孝 (前任)	丸井 茂俊 (後任)
同計画係長	後藤 正明 (前任)	三浦 一浩 (後任)
同 主任	加藤 光男	
中津出張所長	橋村 和敏	
同 事務係長	山本 和男	
同 技術係長	大野 治一	
同 技術吏員	狩野 家治	

福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜
教育次長	月森清三郎
指導第二部長	松枝 功
文化課長	森山 良一
同 参事兼文化財保護室長	柳田 康雄
同 課長補佐	石川 元彬
同 参事補佐兼室長補佐	井上 裕弘
同 参事補佐兼調査班総括	副島 邦弘
庶務 同 管理係長	毛屋 信
同 事務主査	東 勇治
調査 同 技術主査	小池 史哲 (調査担当)

発掘調査には、発掘作業員として地元在住の次の方々の参加があった。

久保 一子	増西 操	大森恵美子	北明 年枝	恵良ミエ子
金山 幸子	村上 照子	金山 定子	田井トキエ	道免アサノ
道免 文子	釘丸チエ子	仲 ユリ子	竹田シゲ子	高畠由美子
高畠ヤヨイ	野間口久子	松山 幸子	村上 知文	

平成8年度の関係者は次のとおりである。

建設省大分工事事務所

所 長	菅原 信二
副所長	林田 信
調査第一課長	内田 久男
同 係長	丸井 茂俊
同計画係長	三浦 一浩
同 主任	加藤 光男
中津出張所長	中原 鶴見
同 事務係長	丸谷順次郎
同 技術係長	小野 富生
同 技術吏員	狩野 家治

福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	竹若 幸二
文化課長	松尾 正俊 (前任) 石松 好雄 (後任)
同 参事兼文化財保護室長	柳田 康雄
同 課長補佐	元永 浩士
同 技術補佐兼室長補佐	井上 裕弘
同 参事補佐兼調査班総括	橋口 達也
庶務 同 管理係長	黒田 一浩
同 事務主査	東 健二
調査 同 参事補佐	木下 修 (発掘調査担当)
同 参事補佐	小池 史哲 (報告書作成担当)
同 主任技師	吉村 靖徳 (発掘調査担当)
文化課整理指導員	岩瀬 正信 平田 春美 豊福 弥生 北岡 伸一
整理補助員	岡 由美子 棚町 陽子
整理作業員	田中 典子 久富美智子 坂田 順子 堀江 圭子 藤原さとみ 江口 幸子 堀之内久美子 山本千鶴美 古田 千穂 若松三枝子 原 カヨ子 関 久江 土山真弓美 山田 智子 辻 清子 佐藤 緑 井上 典子



写真1 調査風景

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

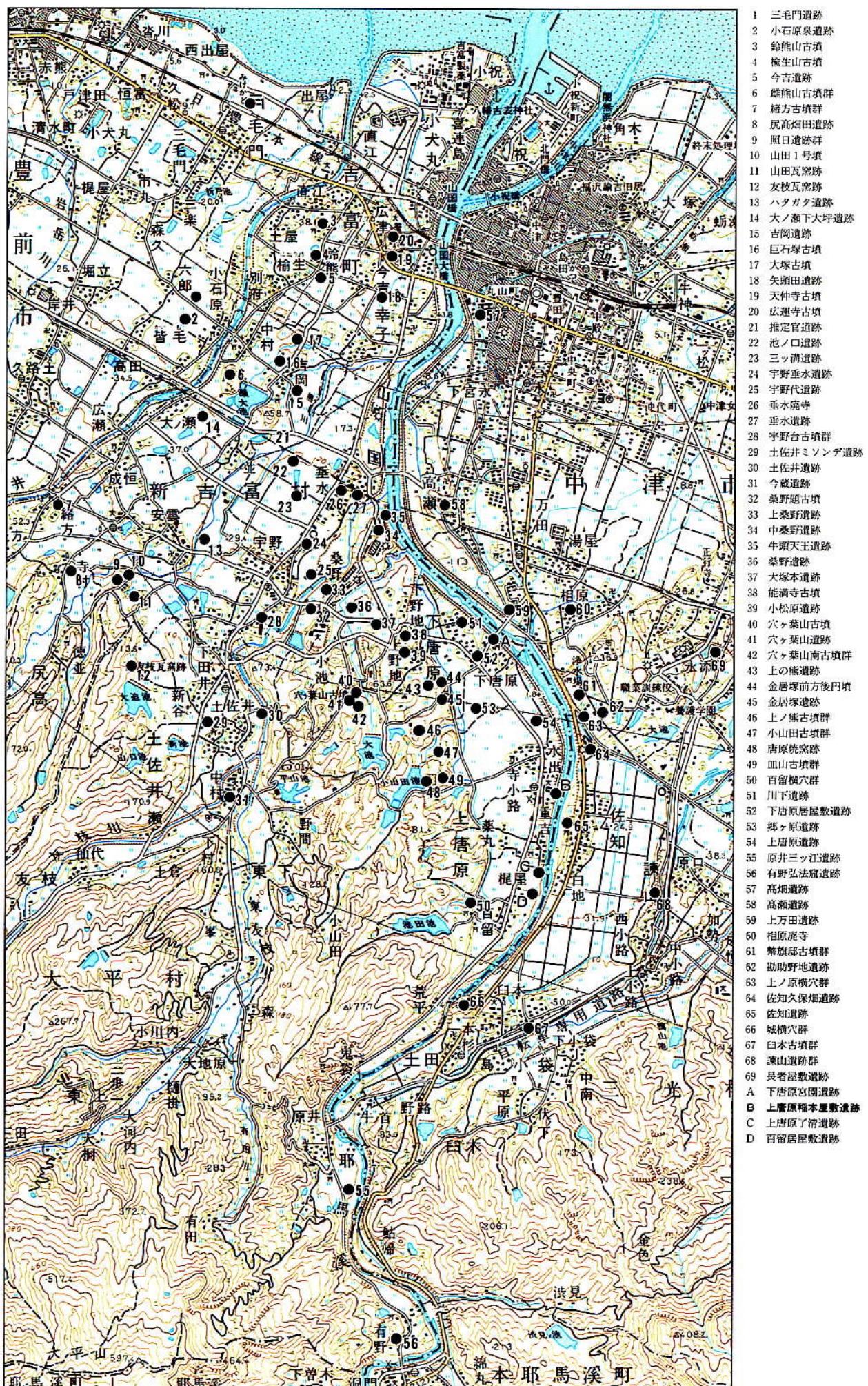
上唐原稻本屋敷遺跡は、福岡県築上郡大平村大字上唐原字稻本屋敷と字村ノ内にあり、山国川堤防改築に先立ち発掘調査を実施した範囲は、旧地番の1225・1231・1233・1243・1246番地に所在する。この位置は、東経 $131^{\circ}11'26''$ 、北緯 $33^{\circ}33'03''$ 付近に相当する。起点から7km730m～7km810mの間と、7km980m～8km040mの間で、用地幅の調査対象面積5500m²うち用地境の0.5～2.0mと、既設堤防道路と水路部分などを除いて実質発掘調査面積は約4000m²である。

上唐原稻本屋敷遺跡の所在する築上郡大平村は、福岡県の東端にあって、山国川を境に東は大分県中津市・下毛郡三光村・本耶馬渓町、南は耶馬渓町と接して、また西は豊前市、北は築上郡新吉富村と接し、面積は48.68k m²である。

大平村の南境をなす雁又山(807.1m)・瓦岳・大平山(597.4m)などは、耶馬日田英彦山国定公園の一角をなし、地質学的には^(註1)第三紀末から第四紀はじめに噴出した火山活動によって形成された角閃石輝石安山岩や両輝石安山岩の溶岩からなる。またその基盤をなす耶馬渓層(輝石安山岩系質の凝灰角礫岩)とよばれる安山岩質成層集塊岩の台地はいくつかの谷によって浸食されているが、耶馬渓周辺は奇岩・崖面が群集する独特の風景をみせ、谷底平野が多くみられる。英彦山山塊に源を発する山国川はこのような谷の水系を集めて流下して周防灘に注ぐが、耶馬渓の渓谷部から三光村野路付近で周防灘に面した平野部に抜け、東側には犬丸川沿いにかけて広い扇状地が形成されている。また犬ヶ岳(1130.8m)・雁又山などに源を発する佐井川・岩岳川流域にも扇状地が広がる。中津平野の扇状地堆積面には、約7～9万年前に噴出した阿蘇4火碎流が玖珠・耶馬渓を通じて流入して上に堆積することや、先端部で海成砂が確認されていて、7～9万年前以前の海進期に形成されたと考えられている。山国川本流沿いの沖積地には自然堤防が発達していて、左岸には百留・梶屋・重吉・水出・寺小路・下唐原などの集落が形成されているが、上唐原稻本遺跡は上唐原集落内の唐原小学校を乗せる自然堤防上に立地する。

2 歴史的環境

山国川下流域周辺の旧上毛郡・下毛郡地域での遺跡・遺物に対しては、古くから注目されてきたが、明治42年には岡為造が求菩提山の經筒を『考古界』に紹介している^(註2)。大正2年に弘津史文・吉村鉄臣によって調査された^(註3)大平村友枝瓦窯跡は柴田常恵の調査などを経て内務省の史跡指定を受けている。第二次大戦までは弘津史文・森貞次郎・森本六爾ら中央での考古学雑誌所収文献がみられ、地元では岡為造や久持恒雄らによって収集された資料がある。また、中津市相原古墳が広瀬幸吉によって報告されている^(註4)。戦後の昭和20年代には鏡山猛・渡辺正氣によって新吉富村垂水遺跡^(註5)、賀川光夫によって中津市相原廃寺^(註6)・植野貝塚^(註7)など考古学的な発掘調査が実施されるようになった。40年代後半には全国的に遺跡分布地図作成が進められ、遺跡・遺物の新発見・再確認が進められてきた。近年は国道10号の北大道路整備や、圃場整備事業などの大規模開発などに伴



第3図 周辺の遺跡分布図(1/50000)

う発掘調査が増加し、先史・古代・中近世などの遺構・遺物が急激に増加している状況にある。

旧石器時代の遺跡としては、宇佐市に小倉池遺跡が知られ、中津市大坪遺跡、大平村上の熊遺跡・桑野遺跡・金居塚遺跡・豊前市青畠遺跡向原遺跡などの発掘調査でナイフ形石器や細石刃核などの旧石器が出土している。この他、大平村にごり池畔・池田池畔や椎田町原池畔・後谷池畔からも細石刃核やナイフ形石器などが採集されている^(註8)。

縄文時代では、垂水遺跡・植野貝塚は後期前半から中頃の遺跡で、中津高等学校校庭から工事中に出土した土偶^(註9)とともに代表的な遺跡として著名であった。昭和49年から9年間8次にわたって別府大学・長崎大学で合同学術調査された上流域の本耶馬渓町粉洞穴遺跡は、早期から後期にかけての包含層と多数の埋葬人骨出土などで注目された^(註10)。人骨からみた形質では、華奢な四肢骨が特徴で、平均身長で前期例が早期・後期よりも高いとされている。早期の遺跡では豊前市吉木遺跡で押型文土器がまとまって出土した^(註11)が、垂水遺跡など数点出土する例もみられ、今後発見例が増加するであろう。昭和55年に調査された中津市ボウガキ遺跡も後期の住居跡と埋葬人骨の発見で話題になった^(註12)。60年代には椎田町山崎・石町遺跡で後期の住居跡群が発見され、土器埋設の複式炉が存在するなど注目される調査であったが^(註13)引き続き大平村の上唐原遺跡^(註14)・原井三ッ江遺跡^(註15)・土佐井遺跡^(註16)、豊前市中村石丸遺跡^(註17)・小石原泉遺跡^(註18)、狭間天神前遺跡^(註19)、川内楠木遺跡^(註20)、三光村佐知遺跡^(註21)・佐知久保畠遺跡^(註22)などで後期住居跡の発見例が急増した。住居形態では、方形プランで石囲炉をもつものから、円形プラン化し、炉に土器埋設複式炉・地床炉などが出頭し、石囲炉が消滅するなどの傾向が窺える^(註23)。上唐原遺跡・佐知遺跡・佐知久保畠遺跡はいずれも山国川自然堤防上に立地しているが、中津市上万田遺跡・高瀬遺跡・高畠遺跡、大平村川下遺跡^(註24)などは後・晚期の遺物を出土させる自然堤防上の遺跡である。

弥生時代では、昭和52年に新吉富村中桑野遺跡で前期末から中期末の集落跡が発掘調査されたが^(註25)、隣接する牛頭天王遺跡で平成4年に中期の大型建物跡などが発見された^(註26)。山国川に面する崖上に聳え、中津平野・周防灘を眺望する建物が想像されよう。このほか新吉富村尻高畠田遺跡^(註27)・大平村土佐井ミソンデ遺跡^(註28)・桑野遺跡^(註29)・下唐原宮園遺跡^(註30)・郷ヶ原遺跡^(註31)などで住居跡や建物跡が発見されている。墓地としては、中期の方形墳丘墓が調査された大塚本遺跡^(註32)、終末頃の石蓋土壙墓群の穴ヶ葉山遺跡^(註33)などがある。山国川右岸自然堤防上の中津市上万田遺跡・高瀬遺跡、三光村佐知遺跡などでも弥生時代中・後期の集落がみられる。

古墳時代の集落も引き続き山国川自然堤防上の各遺跡や、扇状地上の平坦部にみられ、5世紀頃からカマド付きの住居が出現するようである。墳墓では古式の前方後円墳である大平村能満寺古墳^(註34)や、中津市勘助野地遺跡の小型方形墳と土壙墓群^(註35)などはともに山国川を挟んで河岸段丘状に延びる丘陵先端部に位置する。後期の群集墳は、大平村上の熊古墳群^(註36)・穴ヶ葉山古墳群^(註37)・金居塚古墳群^(註38)、新吉富村桑野題古墳群^(註39)・宇野台古墳群^(註40)・宇野代遺跡・大塚本遺跡、中津市相原古墳群^(註41)など多数知られており、横穴墓でも三光村上ノ原横穴群^(註42)・城の百穴横穴群、大平村百留横穴群・金居塚横穴群などが知られる。須恵器生産地としての窯跡が新吉富村山田窯跡群や中津市伊藤田窯跡群^(註43)などにみられ、最近山田窯跡群の一角を占める照日窯跡群が発掘調査されたが^(註44)、大平村友枝瓦窯跡^(註45)などを含めて6世紀から9世紀までの操業が確認される。

律令期では新吉富村の垂水廃寺^(註46)・中津市相原廃寺^(註47)が古くから注目されてきたが、近年相原廃寺周辺の確認調査が相次いで実施され、三光村塔ノ熊廃寺も調査された^(註48)。また、大ノ瀬下大坪

遺跡では大形の建物跡や区画溝などがまとまって発見され、上毛郡衙跡と推定しうる状況になっている。垂水地区遺跡では古代官道跡らしい遺構も確認され^(註49)、古代官道は垂水廃寺推定地北側・牛頭天王遺跡北側を経て相原廃寺北側を走ると推定されている^(註50)。また正倉院文書にある「豊前國上三毛郡塔里」戸籍の塔里は大平村上唐原・下唐原に比定され、渡来系の姓が多いと指摘されている^(註51)。

平安後期以降は田部氏・宇佐氏一族の支配地であったが、末期頃には宇佐八幡宮・弥勒寺の荘園で占められていたようである。また鎌倉時代元寇前後に宇都宮氏が地頭として豊前国に下向してきて、宇都宮一族が勢力を振るうようになるが、この地域でも名主・御家人の居城とみられる中世城跡などが多数知られている。

唐原は山国川を挟んで中津に近い位置的条件などから、中津藩、小倉藩領が入りあい、生活圏としては中津圏で、山国川には下唐原・重吉・原井の3ヶ所に渡しがあったという。

近世の農村としての、唐原地区一帯は養蚕が盛んになり、桑畠がかなりの面積を占めていたとされる。

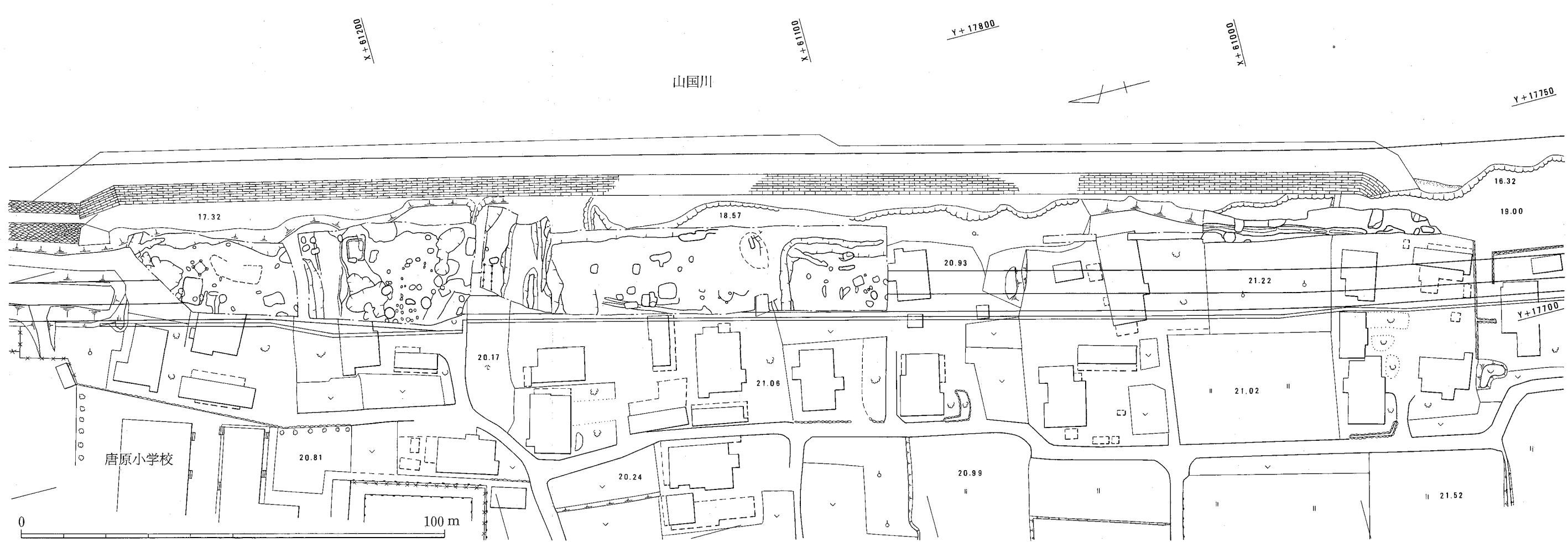
現在は、農業基盤整理事業が始まろうとしている。唐原周辺の自然堤防をとどめる地形はどの程度残されるのであろうか。新たな遺跡・遺物の発見も期待されるところであるが、利便さと引きかえに悠久の歴史が瞬時にうしなわれていく代償も大きい。

註1 地質については、福岡県1971 土地分類基本調査「中津」周防灘周辺開発区域によるところが多い。

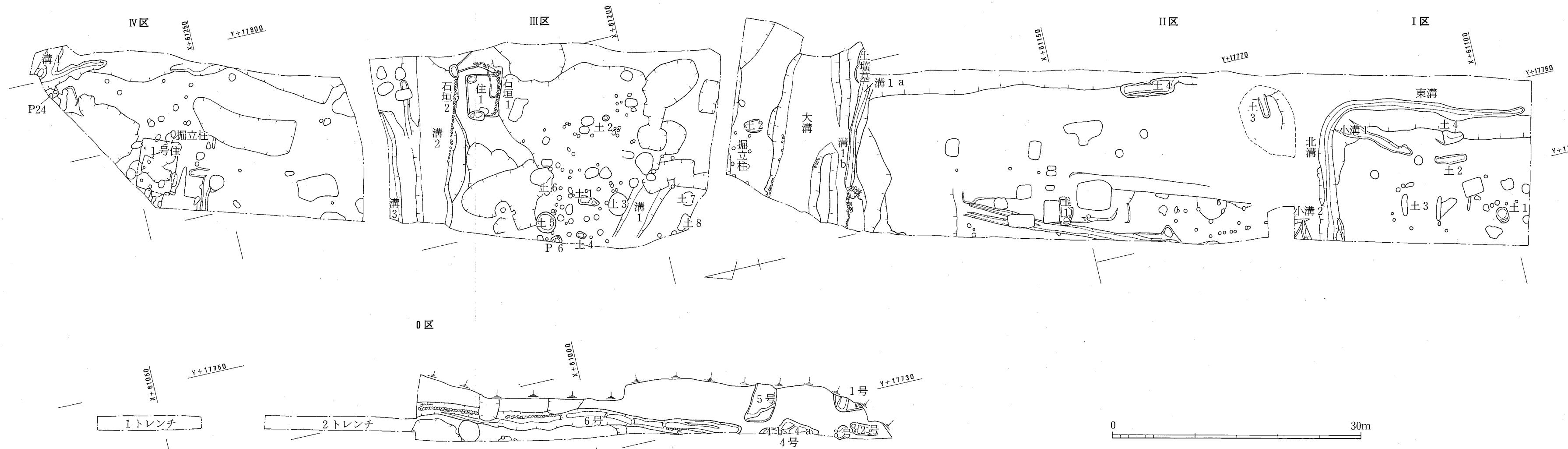
- 2 岡為造 1909 豊前求菩提山國魂神社藏經筒 考古界 第8篇第2号 東京
- 3 弘津史文 1924 豊前國友枝村瓦窯より発見の古瓦 考古学雑誌 第14巻第13号 東京
- 4 広瀬幸吉 1924 相原古墳 大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告書 第16輯
- 5 渡辺正氣 1983 福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告 古文化談叢 第11集 北九州
- 6 賀川光夫 1955 豊前中津市相原廃寺調査報告 中津市教育委員会
- 7 賀川光夫 1957 大分縣（豊前）中津市相原廃寺調査報告 中津市教育委員会
- 8 小池史哲 1991 豊前地方の旧石器 豊前市史 上巻 豊前市
- 9 九州考古学会 1950 北九州古文化圖鑑 第1輯 福岡県高等学校教職員組合
- 10 賀川光夫 1987 原史 本耶馬渓町史 本耶馬渓町
- 賀川光夫・内藤芳篤他 1977 大分県粉洞穴発掘調査概要—第1・2次調査— 考古学論叢4 別府
- 11 高橋章編 1989 吉木遺跡 福岡県文化財調査報告書 第84集
- 12 村上久和編 1992 ボウガキ遺跡 三保の文化財を守る会・中津市教育委員会
- 13 小池史哲編 1992 山崎遺跡（I）・石町遺跡 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告—7— 上巻 福岡県教育委員会
- 小池史哲編 1995 上唐原遺跡I 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集 福岡県教育委員会
- 14 小池史哲編 1996 上唐原遺跡II 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 福岡県教育委員会
- 15 小池史哲 1989 原井三ツ江遺跡 大平村文化財調査報告書 第5集
- 16 高橋章編 1990 土佐井地区遺跡 大平村文化財調査報告書 第6集
- 17 水ノ江和同編 1996 中村石丸遺跡 椎田道路建設関係埋蔵文化財調査報告 第6集 福岡県教育委員会
- 18 小池史哲 1993 豊前地方の縄文時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市
- 19 豊前市教育委員会が、1995年度に圃場整備事業に伴って発掘調査。丹羽博氏よりご教示を得た。
- 20 棚田昭仁・坂梨裕子 1996.12 豊前市大字川内所在の川内楠木遺跡について 郷土文化誌 豊豊 7号 豊前
- 21 坂本嘉弘編 1989 佐知遺跡 大分県文化財調査報告書 第81輯
- 22 三光村教育委員会が1992年度に大型店舗建設に先立ち発掘調査。調査を担当した植田由美氏よりご教示を得た。
- 23 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢 第30集（下） 北九州
- 24 宮本工他 1984 山国川流域における縄文時代後・晚期の遺跡 九州考古学 59 福岡
- 25 馬田弘稔編 1978 中桑野遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第3集
- 26 飛野博文編 1994 牛頭天王遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第8集
- 27 緒方泉 1992 尻高畠遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第7集

2 歴史的環境

- 28 伊崎俊秋 1991 土佐井ミソンデ遺跡 大平村文化財調査報告書 第7集
- 29 杉原敏之編 1997 三ツ溝・長田・桑野遺跡 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集 福岡県教育委員会
- 30 福岡県教育委員会が1993年度に山国川恒久橋架替に伴い発掘調査を実施した。現在整理中。
- 31 福岡県教育委員会が1989年度に豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 32 福岡県教育委員会が1991年度に豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 33 飛野博文 1993 穴ヶ葉山遺跡 大平村文化財調査報告書 第8集
- 34 飛野博文 1994 能満寺古墳 大平村文化財調査報告書 第9集
- 35 渋谷忠章編 1988 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会
- 36 上野精志・小池史哲 1978 上ノ熊古墳群 大平村文化財調査報告書 第1集
- 37 酒井仁夫 1985 穴ヶ葉山古墳群 大平村文化財調査報告書 第3集
- 38 高橋章 1989 桑野題古墳 新吉富村文化財調査報告書 第4集
- 39 高橋章 1990 宇野台古墳 新吉富村文化財調査報告書 第5集
- 40 小川泰樹編 1995 宇野代遺跡 一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
- 41 註4前掲書に同じ。
- 42 村上久和編 1989・1991 上ノ原横穴墓群I・II 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 大分県教育委員会
- 43 栗焼憲児編 1985 伊藤田城山窯跡群 中津市文化財調査報告 第5集
- 44 池辺元明・飛野博文編 1995 照日遺跡群 新吉富村文化財調査報告書 第9集
- 45 高橋章編 1976 友枝瓦窯跡 大平村教育委員会
- 46 森田勉編 1976 垂水廃寺 新吉富村文化財調査報告書 第2集
- 47 註6 前掲書。栗焼憲児 1989~91 相原廃寺I~III 中津市文化財調査報告 第7・8・10集
- 48 村上久和・吉田寛 1989 三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書 第1集
- 49 池辺元明・杉原敏之編 1996 池の口遺跡 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 福岡県教育委員会
- 50 秋吉心良編 1991 宇佐大路一宇佐への道調査 大分県文化財調査報告書 第87集
- 51 小田富士雄 1991 秦氏の入豊と大宝の戸籍 豊前市史 上巻 豊前市
- 小田富士雄 1993 秦氏の入豊と大宝の戸籍 豊前市史 考古資料 豊前市



第4図 遺跡周辺の地形と調査区(1/1000)



第5図 遺構配置図(1/400)

第3章 遺構と遺物

地区割りの設定

上唐原稻本屋敷遺跡の調査区内には、現在排水用に使用されている水路を確保しておく必要があり、旧地番区画にもなっている部分もあるため、調査でも便宜上この区画を用いて、I～IV区に区分した。また中途で試掘して追加調査した部分については0区と呼称する。

なお新平面直角座標系IIによって位置を示すが、調査実施時には公共座標の基準点、測点が付近で確認できず、工事用の基準点を援用して、調査後に填め込んで合成したものである。

1 0区の遺構と遺物

0区は幅が狭く細長い調査区で、1～6号遺構が発見された。

1号遺構（第6図）

南端部で発見され、東南側を崖で失う。南北3.2m、東西1.8mの範囲に暗灰茶褐色砂質土が堆積していた。この部分を10cm程掘り下げるに、内部の北側に長方形状の土坑と、南側の土坑と分かれて検出されたが、南側の土坑は端部のみ残る。北側の土坑（1a号）は、長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.3m程の規模で、周壁は傾斜する。主軸方向はN58°Wを向く。南側の土坑（1b号）は、長さ・幅ともに0.7m、深さ0.3m程しか残らず、全体の形状は窺い難い。土器類は上部で出土し、a・bを区別しえなかつたが、石鏃はb号から出土した。

出土遺物（第7図）

甕（1～3） 1は復原口径26.5cmの大きさの、口縁部が如意状に外反する甕の口縁部破片。端部は肥厚氣味で、上方につまみ上げ加減である。胴部内外面ともに器面が磨滅して調整手法は不明。2は1に似た口縁部破片で、やや厚みを有する。口唇端部はつまみ上げられて尖り氣味である。内外面ともにヨコナデ調整される。3は跳ね上り口縁の破片で、頸部の括れに角度を有する。胴部外面はハケ目調整されるが、内面は磨滅して調整手法は不明。いずれも胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

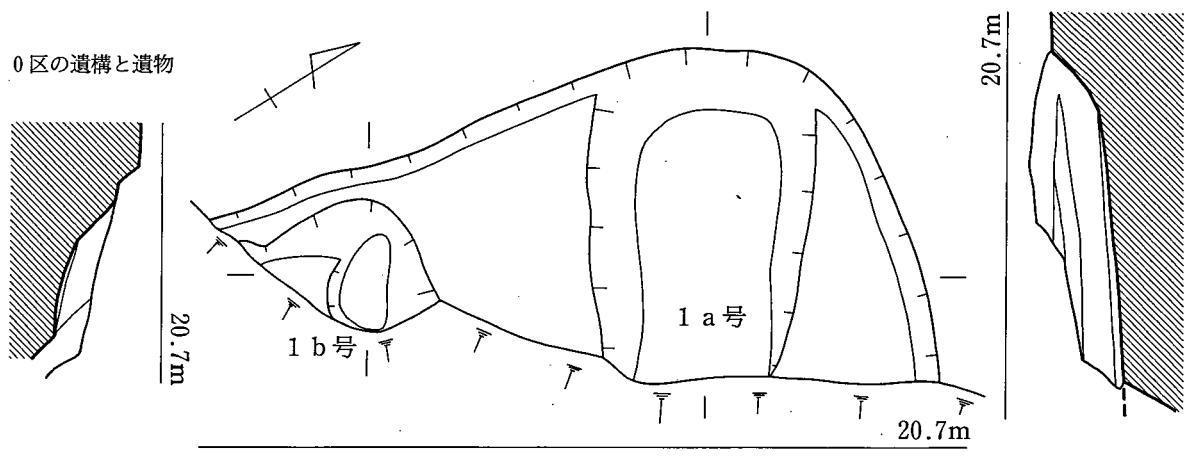
須恵器杯身（4） 復原口径10.4cm、外径13.0cmの大きさの、蓋受けのかえりを有する杯身。口縁部の立ち上がりはやや内傾する。砂粒を殆ど含まない胎土で、灰色に堅く焼成される。

弥生土器甕は、中期に属するもので、須恵器杯身は6世紀後半頃であろう。

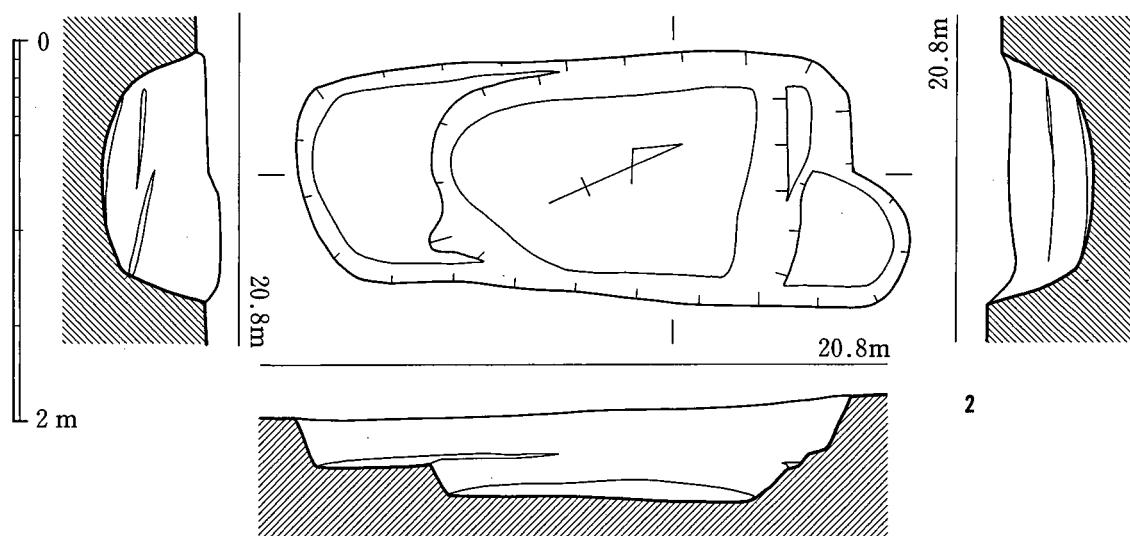
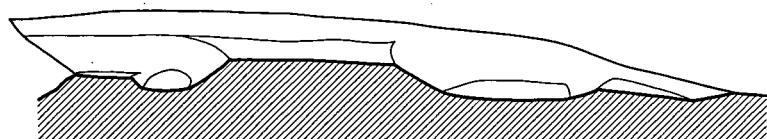
石 器（図版7-2、第10図）

打製石鏃（1） 姫島産黒曜石を用いた、基部のわたぐりの少ない凹基の打製石鏃。全面に調整剝離が及び、長さ25.1mm、幅14.4mm、厚さ4.9mm、重量1.4gを測る。

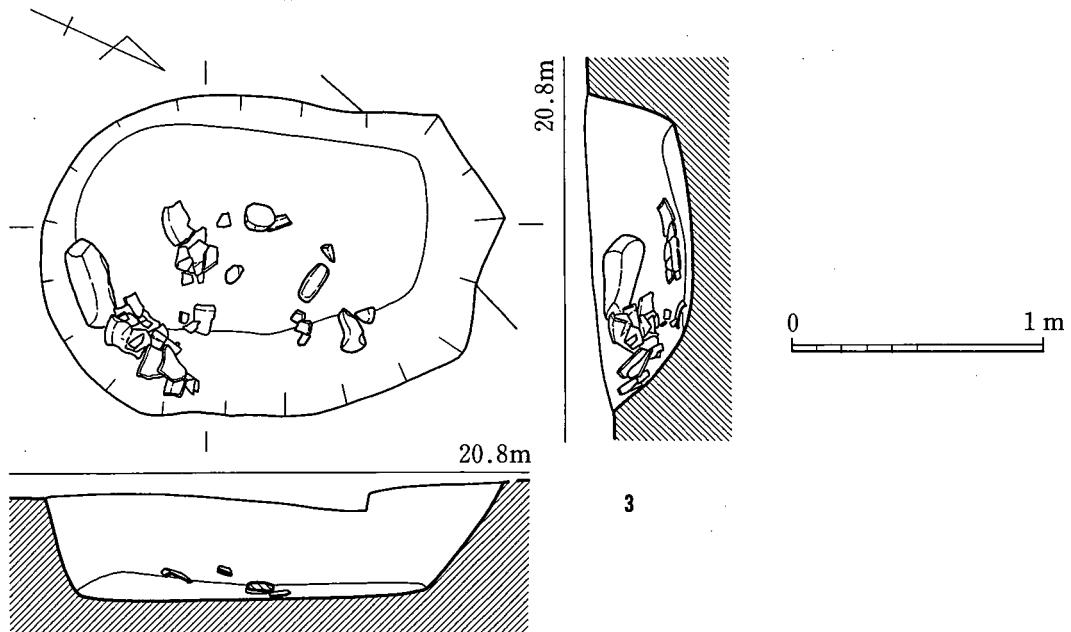
1 0区の遺構と遺物



1



2

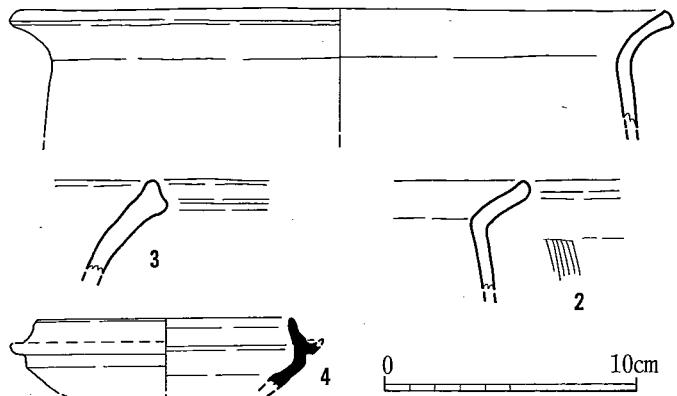


3

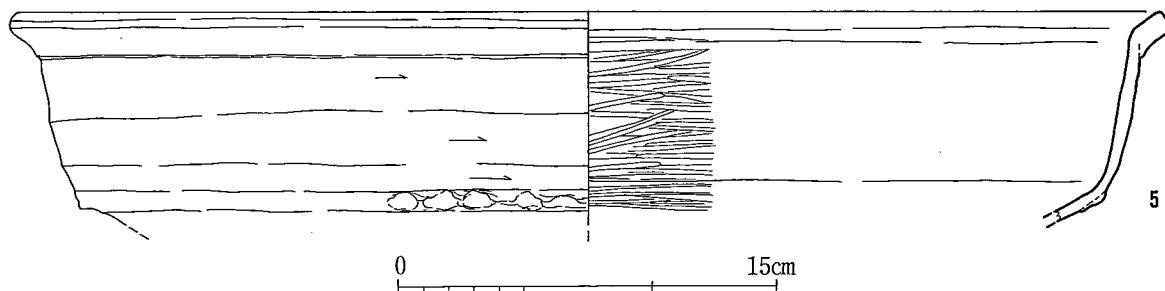
第6図 0区1～3号遺溝実測図(1・2号は1/40、3号は1/30)

2号遺構（図版3-2、第6図）

南端部で発見され、1号遺構の西側に近接する。南北3.0m、東西1.1mの長方形状の土坑で、主軸方向はN24°Eを向く。深さ25cm程の部分にテラスがあり、その内側の長さ1.9mの部分は更に20cm前後の深さをもつ。周壁はやや傾斜するが、床面は平坦である。暗灰茶褐色土が堆積していた。



第7図 0区1号遺構出土土器実測図(1/3)



第8図 0区2号遺構出土土器実測図(1/3)

出土遺物（第8図）

土師質鉢（5） 復原口径46.6cm、残存器高8.5cmの大きさの浅い鉢で、底部を欠く。底部は緩やかな傾斜で開き、胴部で屈曲して立ち上がり、口縁部は肥厚して外反する器形である。外面は叩き整形された後にヘラ削りされ、胴部屈曲部に巡らされた凸帯は指頭で刻まれる。内面はヘラミガキ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に堅く焼成されている。

18世紀後半以降のこね鉢であろう。

3号遺構（図版3-3、第6図）

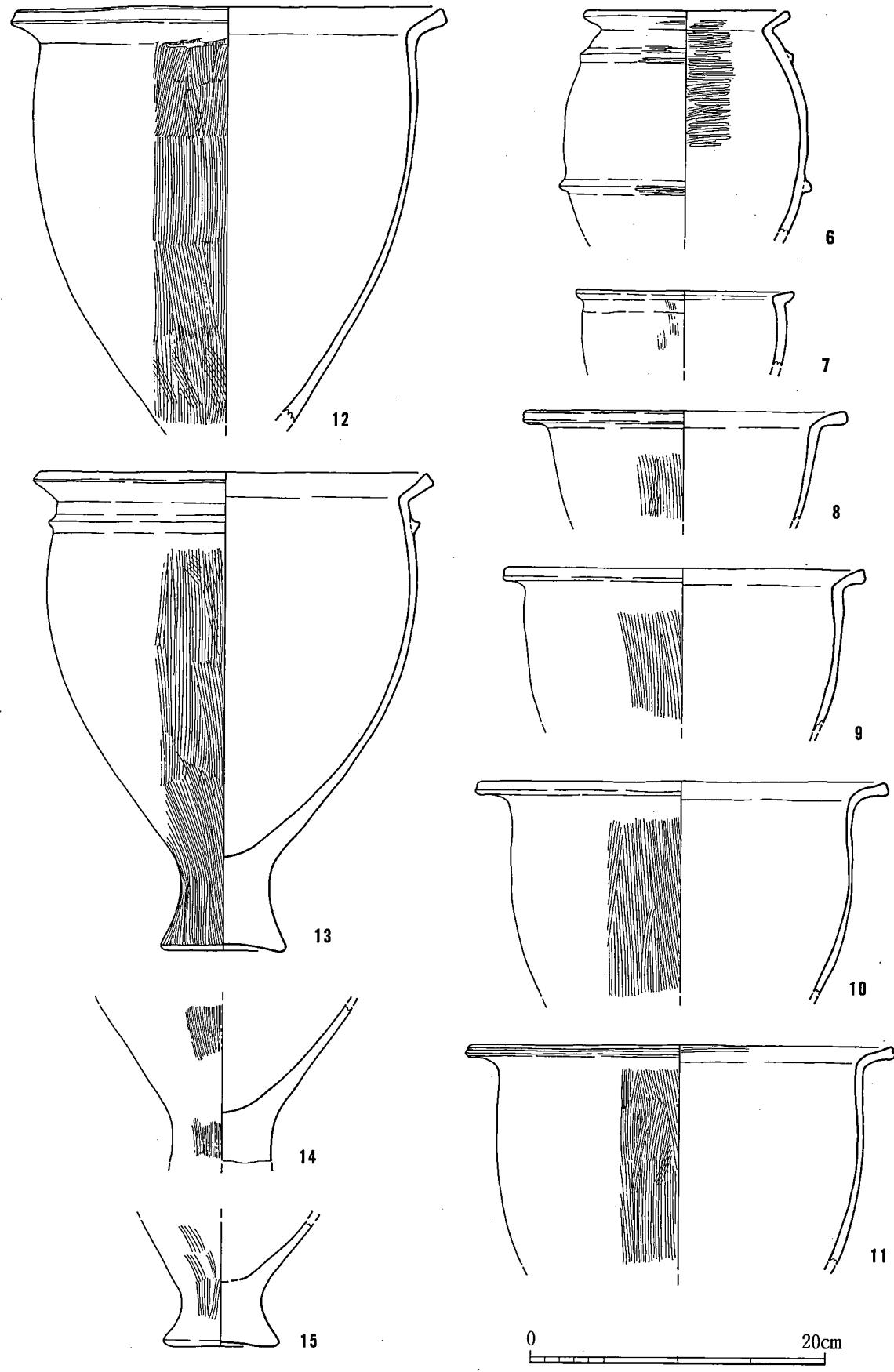
南端部で発見され、2号遺構の北側に近接する。一部は調査区域外に続くが、南北1.85m、東西1.25mの楕円形の平面形を呈する土坑で、主軸方向はN25°Wを向く。深さ40cm前後を有して周壁はやや傾斜するが、床面は平坦である。暗茶褐色土が堆積し、坑内の東側で傾斜した状態に土器片と塊石が発見された。

出土遺物（図版5、第9図）

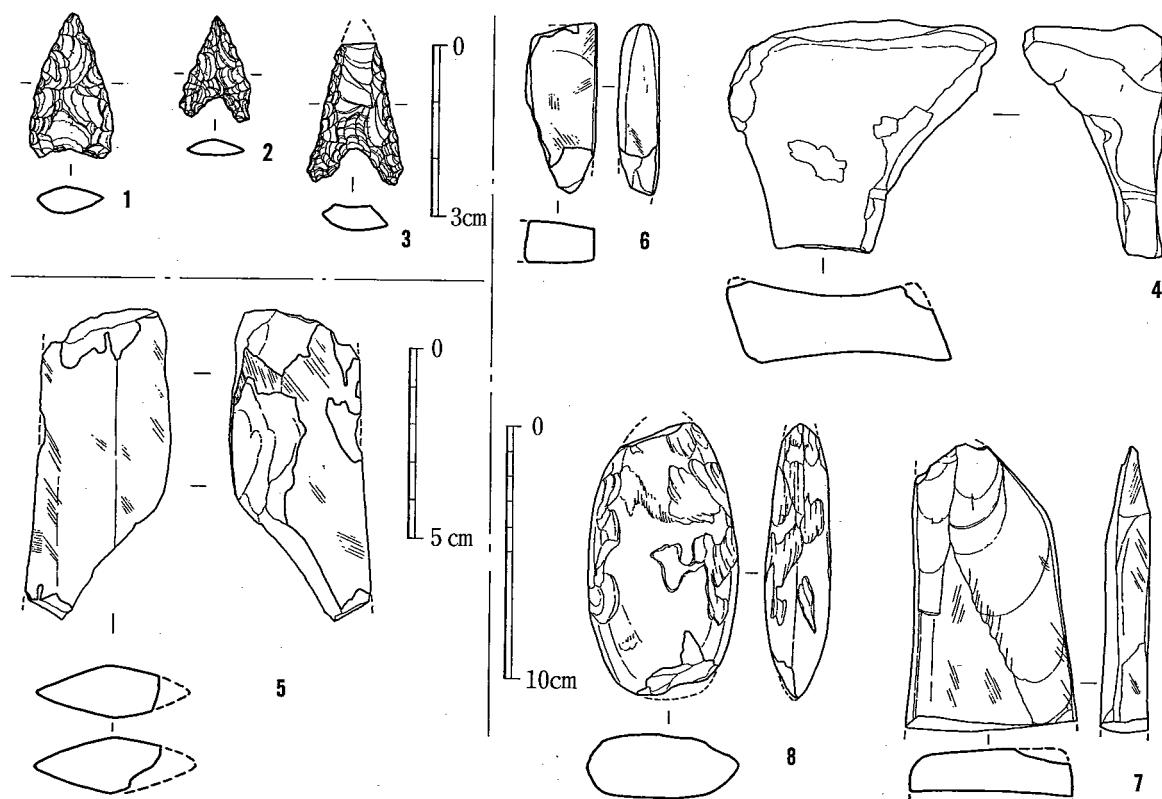
樽形土器（6） 底部を失うが、復原口径14.0cm、胴最大径16.6cm、残存器高15.2cmの大きさ。胴部は膨らみ、括れた頸部から、く字形に外反して口縁部が開き、口唇部は丸みをもつ。胴部下半部と肩部に断面三角形の凸帯を巡らせている。内外面ともにやや磨滅するが、ヘラミガキ痕が残る。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

甕（7～15） 7は肥厚気味の口縁部がL字状に短く外反する小形の甕。復原口径14.8cmの大きさで、胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。8・9は如意状口縁で端部は肥厚気味に外反する。

1 0区の遺構と遺物



第9図 0区3号遺構出土土器実測図(1/4)



第10図 0区出土石器実測図(3/4・1/3・1/2)

小振りの甕で、胴部の膨らみは少ない。胴部外面をハケ目、内面をナデ調整される。9は復原口径24.0cmの大きさ。

10～12は肥厚気味の口縁部が外反する甕で、やはり胴部の膨らみは少ない。胴部外面をハケ目、内面をナデ調整される。10・11は復原口径28.0cm・29.0cmの大きさ。底部を失う12は、口径29.6cm、残存器高28.0cm、胴最大径25.9cmの大きさ。口唇部は上側につまみ上げ加減で、外面が整えられる。

13は口縁部がく字形に外反し、端部がつまみ上げられる。胴部の膨らみは少なく、底部は括れて裾広がりで底面へ向かうが厚く高い。肩部に断面三角形の凸帯が巡る。胴部から底部の外面はハケ目、内面はナデ調整される。口径27.0cm、器高32.3cm、胴最大径25.0cmの大きさで、底部の高さは器高の1/5を占める。

14・15は13と同様な底部破片である。7～15の甕の全てが、胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色ないし橙褐色などの色調に焼成されている。

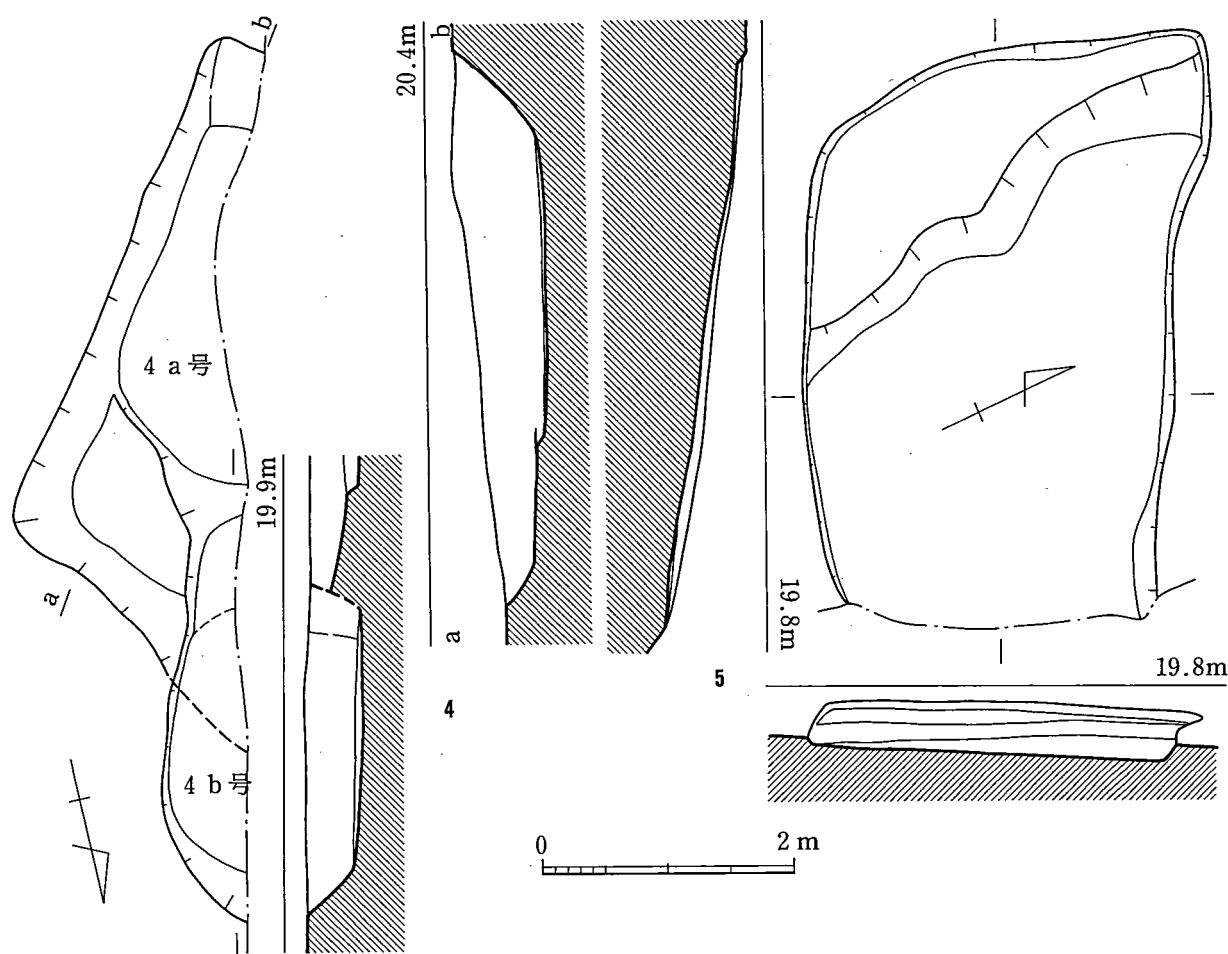
これらの弥生土器樽形土器、甕は中期前半に含まれる。

石 器 (図版 7-2、第10図)

打製石鏃 (2・3) ともに調整剝離が全面に及ぶ凹基の打製石鏃である。2は姫島産黒曜石を用いていて、長さ18.2mm、幅12.5cm、厚さ2.7mm、重量0.5gを測る。3は伊万里湾周辺産の黒色黒曜石を用いた鏃で、長さ24.5mm、幅16.6cm、厚さ4.4mm、重量1.5gを測る。

4号遺構 (図版 3-4、第11図)

南端部で発見され、3号遺構の北側に近接して位置する。西側は調査区域外に潜り、全体の形状



第11図 0区4・5号遺構実測図(1/60)

は不明。南北5.7m、東西1.7mの範囲に暗灰茶褐色土が堆積していた。この部分を掘り下げているうちに、北側端は地山と判断していた灰茶褐色の部分が薄く被っていて暗灰茶褐色土の堆積坑がオーバーハング状に発見された。このため南側の土坑を(4a号)、北側の土坑を(4b号)と区別した。

4a号土坑は、南側が65cm程の深さ、北側に浅く深さ35cm前後を有し、周壁は傾斜する。南東側の辺が直線的で4.40m程の長さをもち、軸線はN33°Eを向く。

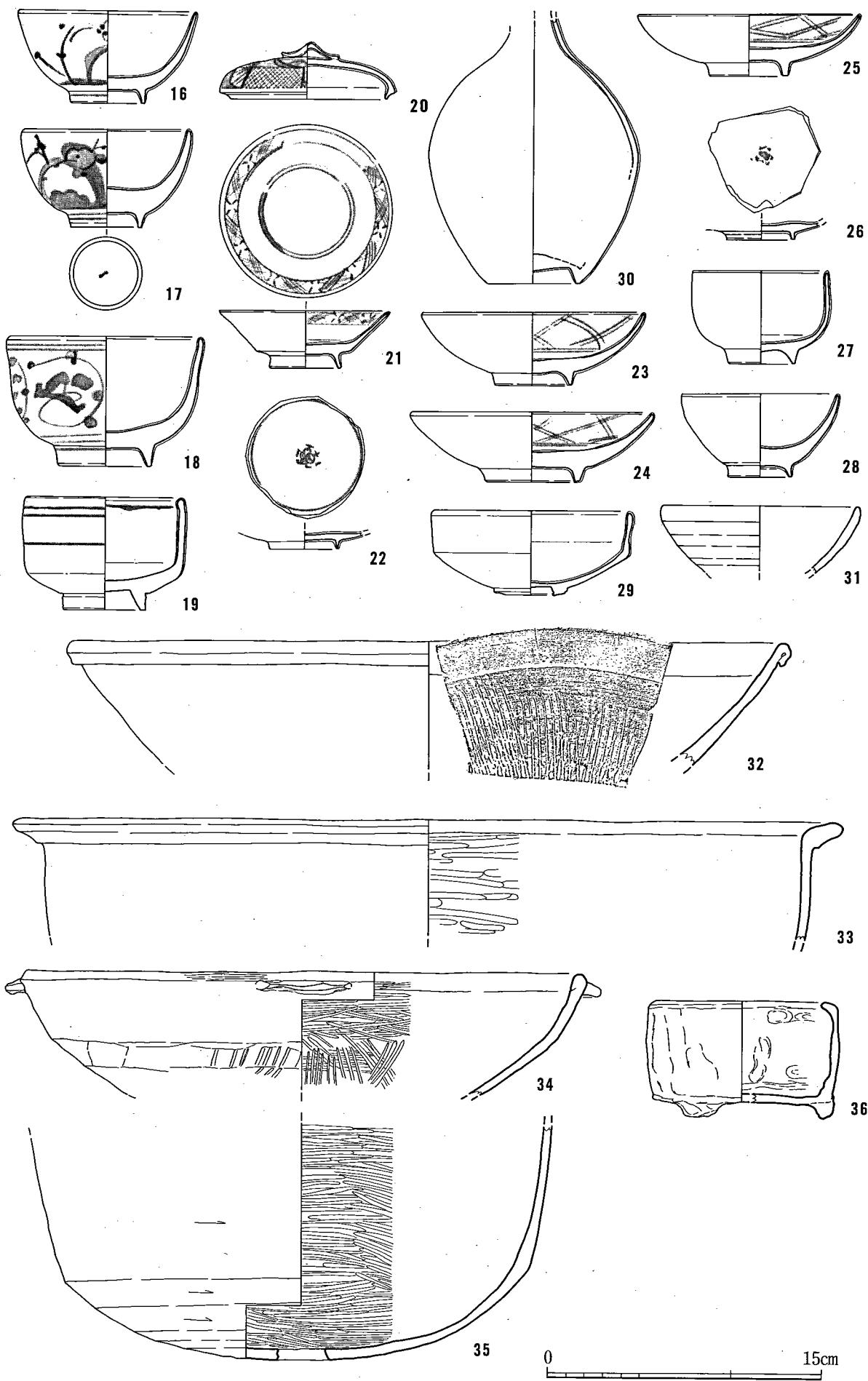
4b号土坑は、南端部を誤って掘り過ぎているが、南北の長さ2.80m前後であろう。東西には0.70m程を確認したが、深さ50cm前後で周壁が傾斜し、床面は平坦である。

出土遺物(図版5・6、第12・13図)

25~28・31・34・35・37・39~42は4b号から出土し、他は4a号出土した。

染付碗(16~18) 16・17は、くらわんか茶碗である。薄藍色で外面に花卉文が描かれている。胎は白色で透明な釉がかかる。17は内高台に短い一の字の記号もみられるが、厚手の碗で、初期のくらわんか碗であろう。16は口径10.0cm、器高5.1cm、高台径4.3cm。17は口径9.6cm、器高5.3cm、高台径5.3cmの大きさ。

18は腰が張って半筒形に近い器形で、やや厚手の茶碗。藍色で花卉文が描かれる。胎は灰白色で、釉は透明質の灰色を呈する。口径11.0cm、器高7.1cm、高台径5.1cm。



第12図 0区4号遺構出土土器実測図1(1/3)

1 0区の遺構と遺物

染付蓋 (20) 身受けのかえりを有し、内彎する器形の蓋。山形に曲げたつまみを外天井に貼付けている。段重の蓋であろう。縁から天井にかけて、放射状に8分割、内外に2分割した16区画を描き、向いあつた扇の隙間を濃で埋めた文様の区画と、斜格子文の区画が交互に配されている。胎は白色で、薄茶色味のある透明釉がかかるが、かえり部分は露胎である。口径9.8cm、器高3.1cm。

青磁染付蓋 (21) 縁文様に簡略化された四方擗文様、見込みに2条の圈線を描いている。見込み中央を欠くが、印判の花弁文様の一部が残る。釉は内面が透明な白色、外面は薄青色を呈し、外青磁とされる類である。口径9.5cm、器高3.2cm、高台径4.0cmの大きさ。

染付皿 (23~25) くらわんか手の皿である。縁文様に2本単位の弧線を交差させる連続文様、見込み境に2条の圈線が描かれる。透明な白色釉がかけられ、見込み部分は蛇の目に釉が剥ぎ取られている。口径12.3cm・13.5cm、器高3.4cm~4.0cm、高台径4.3cm~5.4cm。

染付皿? (22・26) 底部破片で、高台が低いことから皿かも知れない。高台際に藍色の細い線がみられ、内底見込み中央に意匠は不明ながら花弁らしい絵がある。印判であろうか。白色の胎で、畳付を除いて透明釉がかかる。高台径4.0・3.7cmの大きさ。

染付火入 (19) 半筒形のやや厚手の碗で、口唇部が肥厚して口縁内面に低い段をもつ。焼き締めの後に藍色の横線を描き、外面の腰から上と内面の口縁部に灰釉が施釉されるが、高台脇に釉溜まりがみられ、内底見込みに釉の粒が散る。施釉部分は貫入が生じ、露胎部分は暗茶褐色を呈する。口径9.0cm、器高6.2cm、高台径4.6cmの大きさ。

鉄釉碗 (27) 復原口径7.6cm、器高5.1cm、高台径3.8cmの大きさの、半筒形に近い茶碗で、口縁部は反り気味。高台以外は暗茶褐色の鉄釉がかかり、胴部外面は縞模様になる。

灰釉碗 (28) 復原口径8.8cm、器高4.6cm、高台径3.6cmの大きさの、やや器壁の厚い茶碗である。淡茶灰色の胎で、畳付以外は緑味乳白色の藁灰釉がかかる。

鉄釉鉢 (29) 口径11.4cm、器高4.6cm、高台径4.1cmの大きさ。胴から口縁部は直に立ち上がり、僅かに括れる。灰色の胎で、内面と外面の胴部に黒褐色ないし暗茶褐色の釉がかかる。

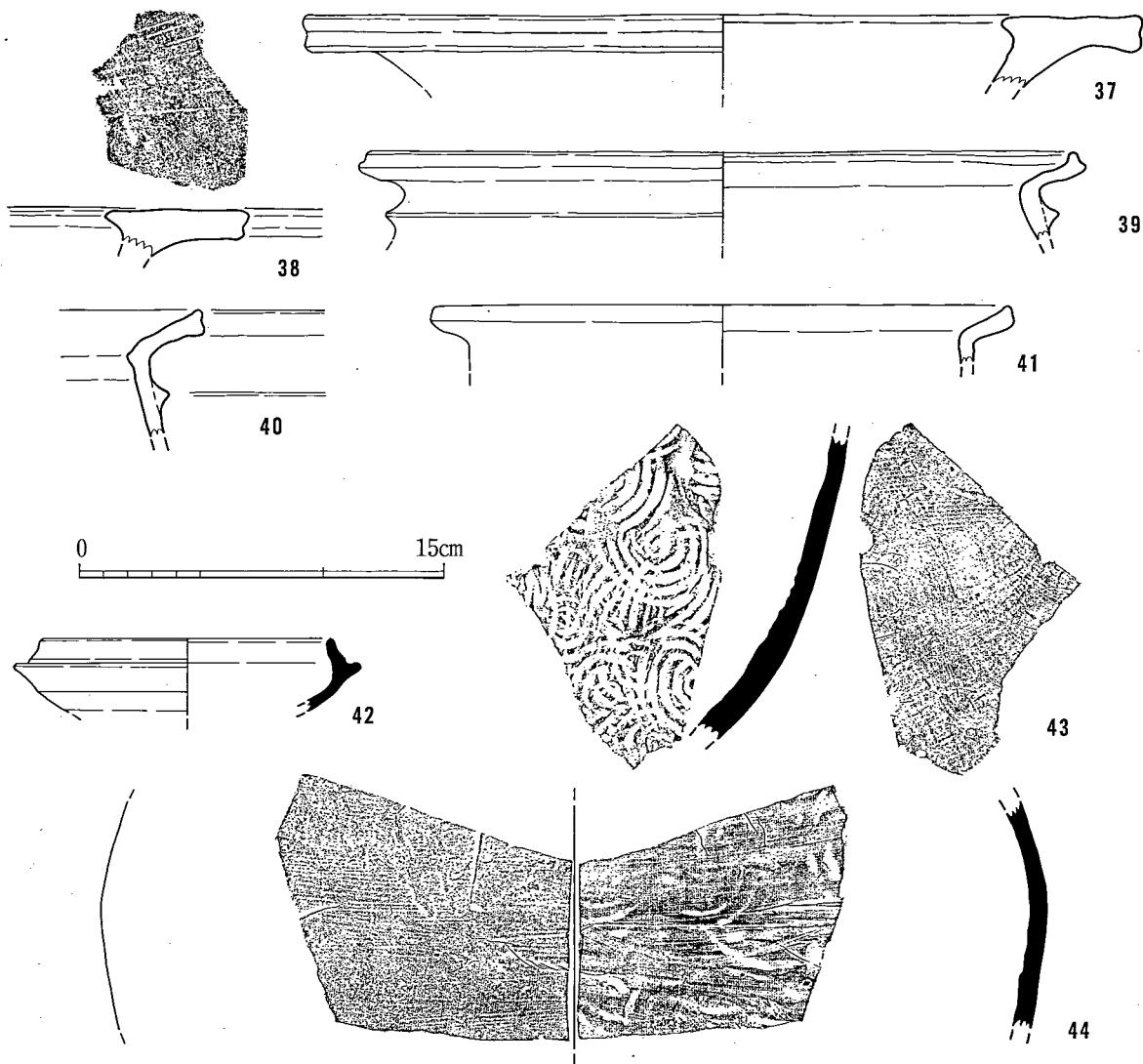
灰釉瓶 (30) 口縁部を欠くが、残存器高14.5cm、胴最大径11.6cm、底径5.3cmの大きさ。辣葷形を呈する体部で、底部は輪高台。明るい灰色の胎で、畳付以外は明るいオリーブ色の釉がかかる。貫入がみられる。

陶器擂鉢 (32) 体部は口縁部に向かって内彎気味に開き、口縁端部は外側に折り畳まれる。内外面ともに回転ナデ調整されて、内面に12条単位の櫛目が放射状に刻まれる。焼き締められて赤茶褐色を呈し、口縁部のみ鉄釉がかかる。復原口径30.0cmの大きさ。

土師質鉢 (33) 胴部から口縁部へ直に立ち上がり、口縁部が肥厚して外反する器形である。外面は叩き目整形された後にヘラ削りないし板ナデ調整され、内面はヘラミガキ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に堅く焼成される。こね鉢であろう。復原口径46.0cmの大きさ。

土師質焙烙 (34) 体部が内彎気味に立ち上がり、口縁端部は内側に折り畳まれて肥厚する。実測図では正面にも図示したが、口縁部外面に双耳の小さな把手が付く。外面は叩き目の後にヘラ削り、内面はヘラミガキ、口縁部内外面はヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に堅く焼成されるが、外面に煤が付着している。

土師質甌 (35) 口縁部を欠くが、残存部の胴部径30.0cm、残存器高13.0cmの大きさ。丸みをも



第13図 0区4号遺構出土土器実測図2(1/3)

つ底部から、屈曲して胴部が立ち上がる。外面は叩き目整形の後にヘラ削り、内面はヘラミガキ調整されて、底部の中央に直径2.6cmの円孔が穿たれる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に堅く焼成される。

土師質火入（36） 復原口径10.4cm、器高6.4cm、底径10.1cmの大きさ。体部は直に立ち上がり、口縁部で内傾して上面が平らに整えられている。底部は平らで、足が3ヶ所に付く。体部外面はヘラ削りされ、他の部分はナデ調整されている。胎土に細砂粒・雲母・角閃石、茶褐色に焼成され、口縁部は煤けている。

土師器椀（31） 復原口径11.0cmの大きさの椀で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。外面はヘラ削りされ、内面にはヘラミガキ痕がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成される。

壺（37・38） 断面鋤先状の口縁部破片で、口縁部内面は突出する。端部は凹み気味に整えられ、38の上面には放射状線刻がある。37は復原口径34.7cmの大きさ。

甕（39～41） いずれも、跳ね上がり口縁の口縁部破片で、口唇端部は上方につまみ上げられる。39・40では肩部に断面三角形の凸帯が貼付られる。復原口径は39が30.0cm、41が24.0cmの大きさ。

1 0区の遺構と遺物

須恵器杯身（42） 蓋受けのかえりを有する杯身で、復原口径12.2cm、外径14.4cmの大きさ。かえりの立ち上がりは内傾し、外部外面は回転ヘラ削りされる。

須恵器甕（43・44） 胴部破片で、外面はカキ目調整されるが、43の内面には同心円当て具痕がみられ、44の内面は当て具痕をナデ消して、一部に板ナデ痕がみられる。

染付類をみると、17のくらわんか茶碗は18世紀初頃の作であろうが、16や23～25のくらわんか手の茶碗・皿は18世紀代に長崎県波佐美窯で盛んに作られたものに似る。また20・21の蓋は18世紀後半頃のものらしい。

弥生土器壺・甕は中期前半頃、須恵器杯身は6世紀後半頃のものである。

石 器（図版7-2、第10図）

砥 石（4） 凝灰質砂岩製の砥石で、平坦な面はともに頻度の使用で内側が凹み、細くなっている。残存長9.3cm、幅10.8cm、厚さ5.8cmの大きさ。4 b号から出土した。

鉄製品（図版7-2、第14図）

鍔？（1） 破片資料で、全体の大きさは分からぬ。鋒膨れらしい玉が付く、直径7cm程の弧状の周縁は丸く、片面は丸みをもって膨らみ、片面は凹み加減である。縁部では7.0mmの厚みを有すが、内側は薄めになる。4 b号から出土した。

5号遺構（第11図）

南部で発見され、4号遺構の東側に近接するが、東端部を崖で失う。南北1.60m、東西3.10mの不整長方形の平面形を呈する土坑で、主軸方向はN66°Wを向く。深さ5～10cm程と浅く、床面も東側に低く緩やかに傾斜する。暗灰茶褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物（第15図）

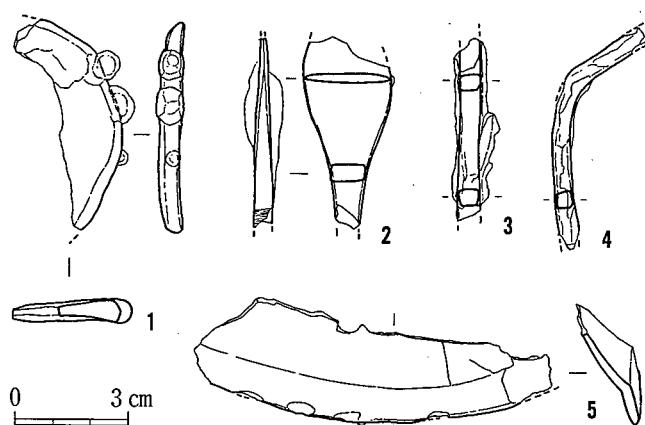
甕（45・46） 45はL字状に屈折する口縁部破片で、胴部外面にハケ目、内面にヘラミガキ痕がみられる。46は跳ね上り口縁の口縁部破片で、口唇部は上方につまみ上げられる。ともに胎土には細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

須恵器杯蓋（47） 内彎する口縁部破片で、外面に自然釉がかかる。

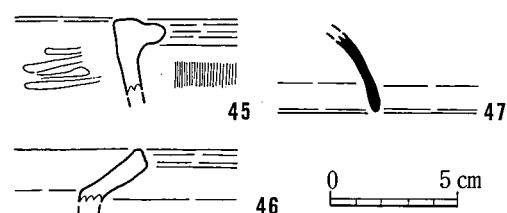
甕は弥生中期のものだが、須恵器杯蓋は6世紀後半頃であろう。

6号遺構（図版4、第16図）

調査区の約2/3を占める遺構で、所々に崩れ落ちた部分もあるが、南北に36m分を確認した。断面逆台形に掘り込まれた溝状部分に、川原石を積み上げられた列石がある。溝状の上縁は幅1.1～2.3mを測

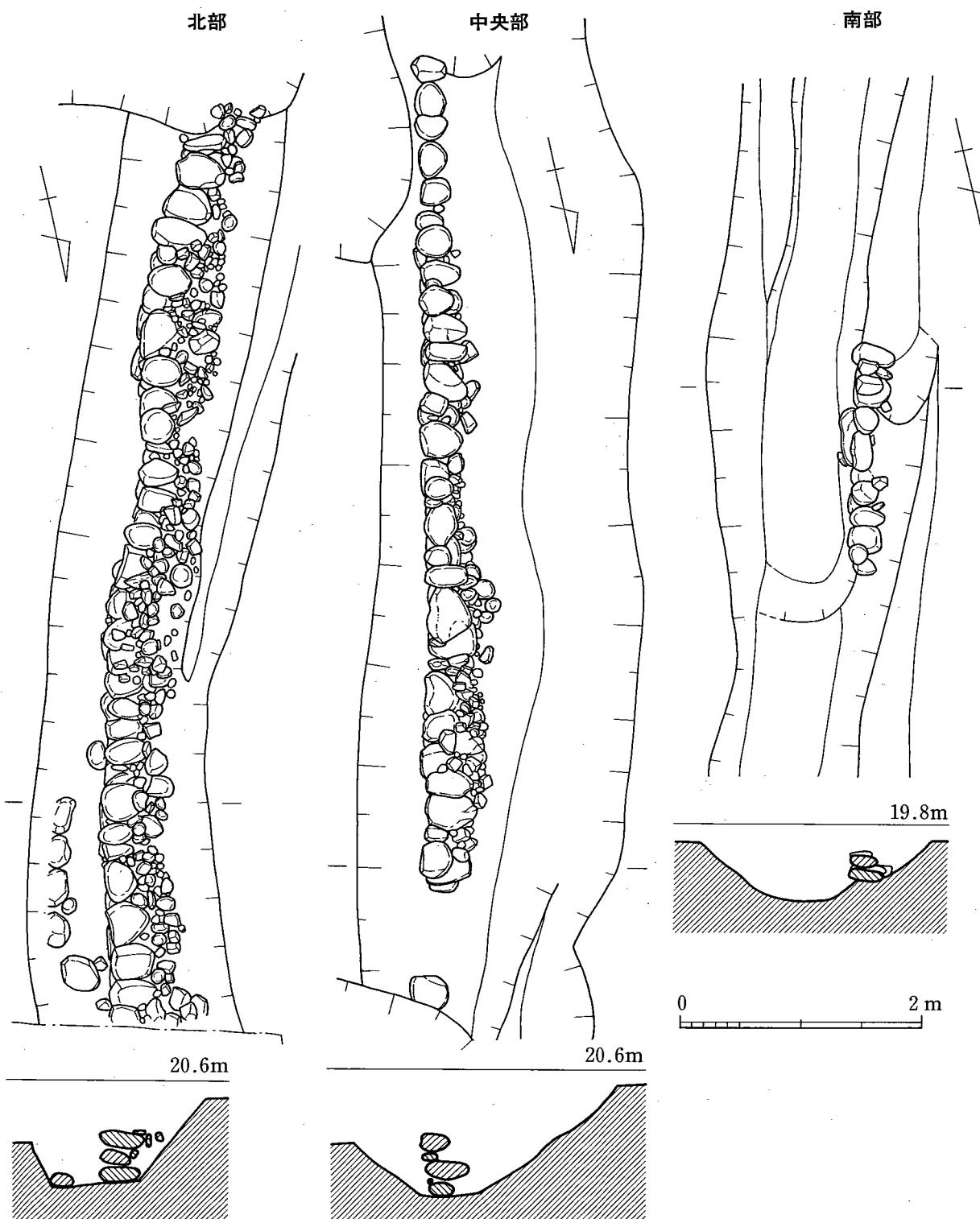


第14図 0区出土鉄製品実測図(1/2)



第15図 0区5号遺構出土土器実測図(1/3)

るが、西側が高く0.5m程の高低差をもつ部分もある。東側縁と溝状の底との高低差も0.5m前後であり、底面を基底面にした列石の高さは50cm前後に残る。列石は径30~40cm、厚さ15cm前後のやや扁平な川原石を選んで、東側の面をほぼ垂直に揃えて積み上げられ、隙間や西側の僅かな裏込めに小さな石が充填されている。裏込め部分には砂質土が堆積して、東側に比べて堅く締まるものの、版築工法などの痕跡はみられない。南部と中程の列石は直線的に並ぶが、北側の列石はやや蛇行し

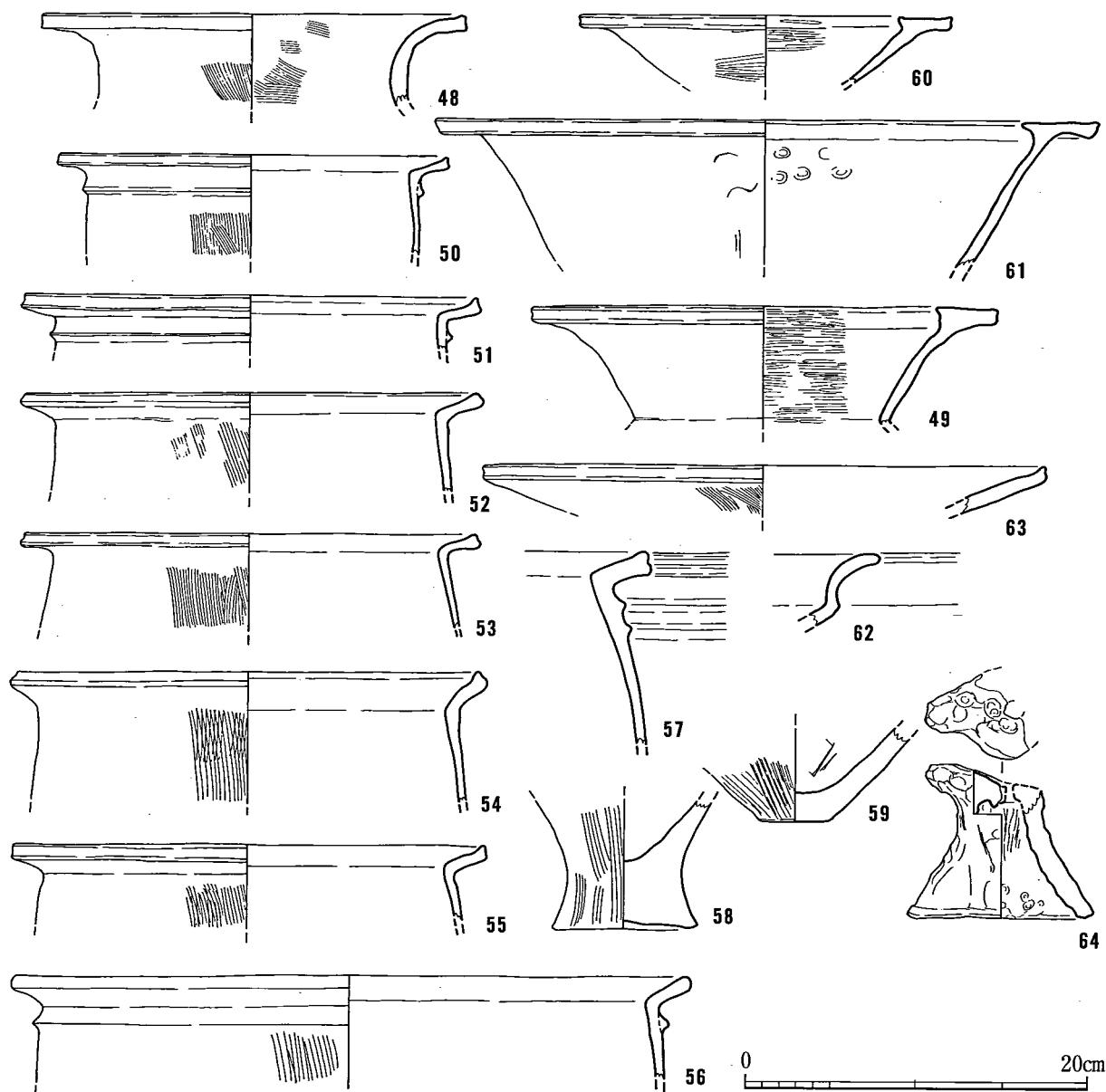


第16図 0区6号遺構実測図(1/50)

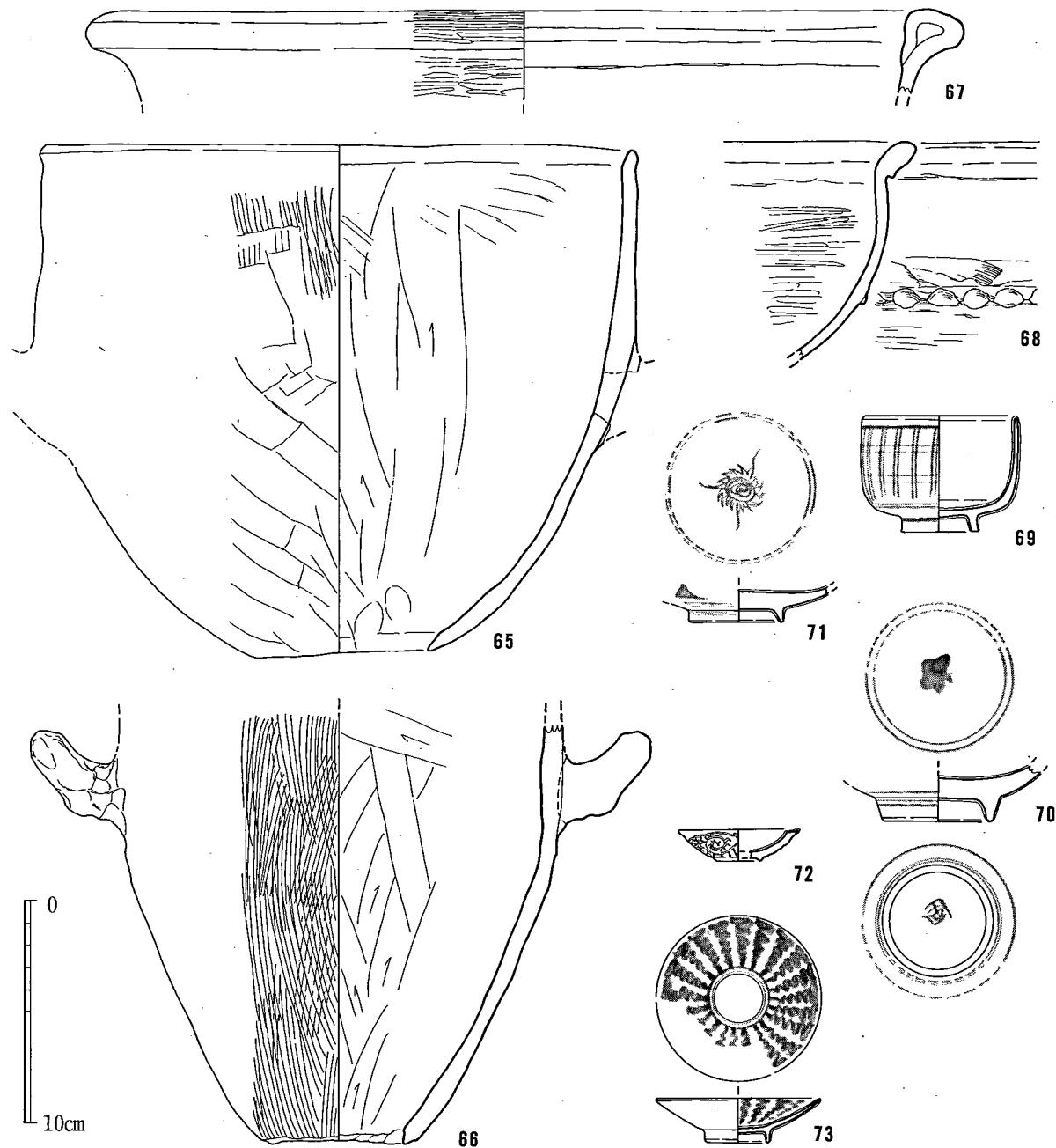
て、主軸は N13°E～N20°E を向く。6号遺構の西側は調査区域外に向かって高まりになるようだが、調査区域内では現代の塵芥を処理した攪乱坑や溜め枡に使用されていたらしい円形坑がある程度で、明確な遺構は検出出来なかった。

出土遺物（図版6・7-1、第17・18図）

壺（48～50） 48は強く外反する口縁部破片で、復原口径25.0cmの大きさ。口唇部端は上側につままれて突出気味になり、外面は平らに整えられている。頸部内外面にはハケ目がみられる。49・50は断面鋤先状の口縁部を有する口頸部破片である。口縁端部は上面と外面が平らに整えられる。復原口径は49が39.0cm、50が22.3cmで、50では頸部径15.0cmの大きさ。50の内面にはヘラミガキ痕がみられる他はヨコナデないしナデ調整されている。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色ないし淡橙褐色に焼成されている。



第17図 0区6号遺構出土土器実測図1(1/4)



第18図 0区6号遺構出土土器実測図2(1/3)

甕 (51~60) 51・52・54・56は強く外反する跳ね上がり口縁の口縁部破片で、口唇端部は上方に突出し、51・52の頸部下には断面三角形の凸帯が巡る。胴部外面をハケ目調整、内面をナデ調整される。53・57・57は外反する口縁部破片で、口唇端部は丸みをもち、57の頸部下に断面三角形の凸帯が巡る。これらの甕は頸部下若しくは凸帯下の胴部にハケ目がみられ、内面はナデ調整される。

58はく字形に外反する口縁部破片で、口唇部は上方に突出し、頸部下に断面三角形の凸帯が2条巡る。

59・60は底部破片で、外面はハケ目、内面はナデ・板ナデ調整される。59は厚い底部で外面が括れ、60は小さな底面から胴部へ開く。

これらの甕類はいずれも胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色ないし淡橙褐色・淡茶褐色に焼成されている。

高杯 (61~63) 61は断面鋤先状の口縁部を有する口頸部破片で、復原口径22.0cmの大きさ。

口縁端部は上側へ僅かに突出し、内外面ともにヘラミガキ調整される。62は杯底部から口縁部が屈曲して立ち上がり外反する破片である。63は直線的に開き端部が上方に突出する口縁部破片で、復原口径33.0cmの大きさ。外面にハケ目がみられる。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

支脚 (64) 脊形の支脚で、裾部径10.8cm、器高8.0cmの大きさ。体部上半は絞りで整形されて、天井部に円孔が穿たれる。外面をヘラ削りとナデ、内面をナデ調整で仕上げられる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

土師器皿 (65・66) 65は把手を欠くが、復原口径27.4cm、器高23.3cmの大きさの甌で、体部は丸みをち、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は直径7.5cmの孔が空き、体部のほぼ中程の高さに把手の剥落した孔がみられる。胴部内外面ともにヘラ削りで調整され、口縁部付近には外面にハケ目、内面に板ナデ痕がみられる。66は口縁部を欠くが、残存器高19.5cm、復原胴最大径20.4cmの大きさ。65に比してスマートな器形で、底部に直径6.0cmの孔が空く。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整され、凹凸のあるナデ調整の牛角状の把手が付く。ともに胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、淡茶褐色・橙褐色に焼成されている。

土師質鉢 (67・68) 67は口縁部を丸く肥厚させる口縁部破片で、復原口径40.0cmの大きさ。肥厚部分は外反させて内側に巻いて接合させるもので、内部に空洞が出来ている。外面はヘラミガキされ、内面はヨコナデ調整されている。68はこね鉢であろう。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部が肥厚して外反する器形である。外面は叩き整形された後にヘラ削りされ、胴部に巡らされた凸帯は指頭で刻まれる。内面はヘラミガキ調整される。ともに胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色に堅く焼成されている。

染付碗 (69~71) 69は小丸型の茶碗で、復原口径7.3cm、器高5.3cm、高台径3.6cmの大きさ。外面に2本線で格子文様が描かれ、内高台に跳ねた点のような記号がみられる。畳付以外に透明な釉がかかる。70はやや肉厚の底部破片で、2本圈線の描かれる見込みの中央に蝶々か五弁花らしいこんにゃく印判が、内高台に「固」字らしい落款がみられる。71は見込み中央に向日葵とも思える花文様を描く底部破片で、胴部外面に描かれる文様は不明。透明な釉が畠付以外にかかり、貫入がみられる。

染付蓋 (72) 口径7.6cm、器高2.0cm、高台径3.1cmの大きさの、口縁部へ直線的に開く器形で、内面に21本の蛇行文様が放射状に描かれる。畠付以外は透明な釉がかかる。

白磁紅皿 (73) 復原口径5.6cm、器高1.4cm、高台径2.1cmの大きさの皿で、口唇部は短く外反して、端部は薄く尖る。外面に型押しらしい蛸唐草文様が浮かぶ。内面のみに透明な釉がかかる。

弥生土器は、弥生中期初頭から中頃のものを多く含むが、高杯などは後期に入る資料であろう。土師器皿は古墳時代の後半にみられるタイプに似ている。また陶磁器は、染付碗の特徴などからみて、18世紀後半~19世紀前半のものであろう。

石 器 (図版 7-2、第10図)

石劍 (5) 片側の側縁と上下端を欠損する身部破片で、残存長8.2cm、残存幅3.6cm、厚さ1.5cmの大きさ。頁岩製で、両面ともに研磨されて鎬がみられる。

砥 石 (6・7) 6は凝灰岩製の小形な砥石で、片側縁と片方の端部を欠く。平坦な両面と側面が砥面に使用されていて、残存長6.8cm、幅2.8cm、厚さ1.7cm、重量28.4gを測る。手にもって使

用する砥石であろう。7は安山岩質の石材を用いた砥石で、欠損して厚みと長さが減少するが、片面と側面を砥面に使用している。現存長11.5cm、幅6.8cm、厚さ1.09cm、重量203.0gを測る。置いて使用する砥石であろう。

磨製石斧（8） 緑泥片岩に近い材質の蛇紋岩製の磨製石斧で、上下両端を僅かに欠損する。やや扁平で両刃のタイプで、残存長10.9cm、幅6.1cm、厚さ2.6cm、重量272.6gを測る。縄文時代後晩期の所産であろう。

なお実測図に図示しないが、安山岩製の打製石斧片と、チャートの石核が各1点出土した。打製石斧は横剥の剥片を用いた扁平なもので、残存長9.7cm、幅6.8cm、厚さ1.7cm、重量150.4gの大きさ。石核は、片側のみを剥離しているが、長さ5.3cm、幅4.7cm、厚さ4.3cm、重量136.5gを測る、黄褐色で光沢のある石材である。

鉄製品（図版7-2、第14図）

鉄 錆（2） 広根式の錆で、先端と基部側を欠く。残存長5.0cm、身部幅2.3cm、厚み0.3cmだが、基部側に笠被の一部が残る部分では、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。

角釘？（3・4） ともに両端を欠損するために、釘か否かも明確でないが、0.5cm角の棒状で、4は中途で曲がる。

鉄鍋？（5） 現存長9.3cm、幅2.6cmの破片で、縁部は弧をなし、直径24.0cm程の大きさであろう。厚さ0.2~0.3cmの板状で、縁から1.0cmの部分から膨らむ。用途は明確でないが、鉄鍋の可能性を考えておきたい。

その他の遺物

遺構面等出土土器（第19図）

溜め枠の円形土坑より2m南側の調査区端に、焼土のみられる幅1.6mの落ち込みがある。内部を十分に調査しえなかつたが、(74・75)の土器片が出土している。

壺（74） 復原口径15.6cmの大きさの、口縁部が直立する複合口縁の破片で、屈折部外面は凸帯のように突出する。内外面ともにヨコナデ調整されるが、頸部内面はナデ調整。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

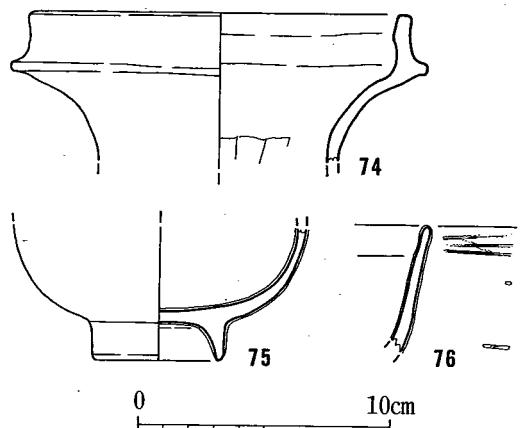
灰釉碗（75） 口縁部を欠くが、高台径5.3cmの大きさの茶碗で、置付以外に緑味薄茶色の灰釉がかかる。

壺は弥生後期末ないし古墳時代初期のもので、茶碗は江戸後期のものであろう。

染付碗（76） 外面に横走する線が藍色で描かれ、外面と口縁部内面に灰色透明な釉がかかる。露胎部分は焼き締められて暗茶褐色を呈している。

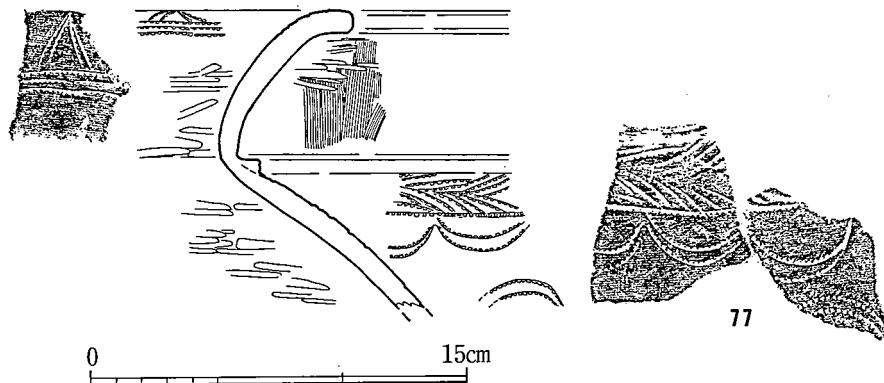
側溝工事部分出土土器（第20図）

0区調査区より南西側の大森邸脇で、既に堤防盛土工事が済んで、コンクリート側溝施設工事が行われた場所があり、工事排土に混じっていた土器片である。



第19図 0区その他出土遺物実測図(1/3)

2 I 区の遺構と遺物



第20図 0区側溝工事部分出土土器実測図(1/3)

壺 (77) 扱れた頸部から口縁部が外反して上面がやや平らになり、胴部も大きく膨らむ壺の破片である。内外面ともにヘラミガキ調整されるが、頸部下の断面三角形の凸帯より上側はハケ目が残る。口縁部上面と肩部外面に貝殻腹縁押捺の弧線が連続・反転などで描かれた文様がみられる。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。弥生前期に含まれる。

2 I 区の遺構と遺物

I 区では L 字状に曲がる溝と、溝に囲まれた部分で主に遺構が発見された。溝に囲まれた部分で発見した土坑などの遺構のうち、坑内の堆積土が黄灰色っぽい色調で、締まりがなく軟らかな状態のものについては、ごく最近の攪乱坑と判断して掘り下げていないが、堆積土が締まった状態の土坑でも遺物を伴わない土坑が幾つかあり、これについては特に名称を与えていないが深さ10cm前後と浅い例が殆どであった。土坑 4 基、L 字に曲がる区画溝 1 条、小溝 2 条がある。

1. 土 坑 (第22図)

1号土坑 (南土坑)

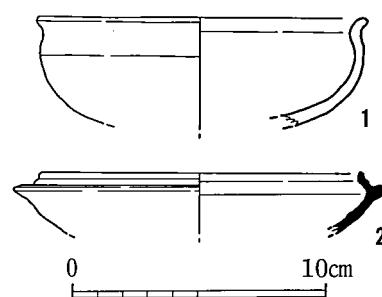
調査区の南西隅部で発見された、楕円形プランの土坑である。上縁で長径1.82m、短径1.40mを測り、深さは0.50m弱だが、長径を測る西側にテラス状の段がある。床面は平坦で、長径1.20m、短径1.10mの広さを有する。

出土遺物 (第21図)

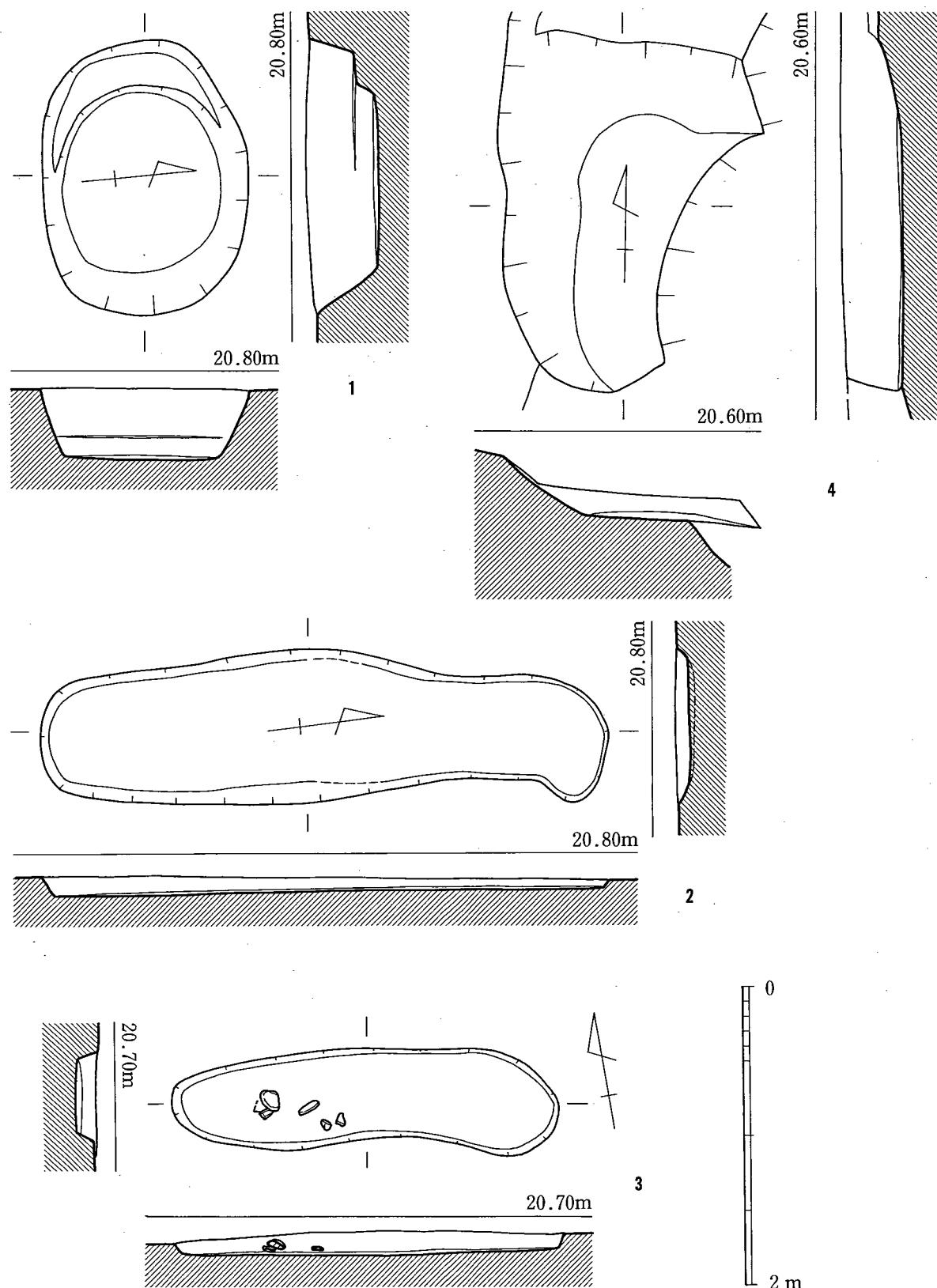
土師器椀 (1) 復原口径13.3cm、残存器高4.2cmの大きさの椀。丸みをもった体部から口縁部が短く屈曲する器形で、器壁は薄めである。内外面ともに磨滅気味だが、器面はヘラミガキされているようである。胎土に砂粒・褐色粒・雲母を含み、赤茶色に焼成されている。

須恵器杯身 (2) 蓋受けのかえりを有する杯身で、復原値に若干不安はあるが、口径13.0cm、外径15.0cmの大きさ。受け部かえりの立ち上がりに傾斜をもち、端部は上を向く。胎土に細砂粒を僅かに含み、灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身は 6 世紀後半～末のものであろう。



第21図 I 区 1号土坑出土土器実測図(1/3)



第22図 I区の土坑実測図(1/40)

2号土坑 (溝状土坑1)

1号土坑の約8m東北東側に位置する、溝状の土坑で、長さ3.80m、幅1.00m、深さ0.05~0.13

mを測る。主軸方向 N 7°E を向く。床面は平坦で、南側が僅かに低い。

出土遺物（第23図）

壺（3）複合口縁壺の口縁部破片で、復原口径18.2cmの大きさ。屈折部はかなり拡張されて、口縁部は直立気味に立ち上がり、端部内面が僅かに窪む。内外面ともにヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

複合口縁壺の特徴からみて、弥生後期中頃～後半にかかる頃であろう。

3号土坑（溝状土坑2）

2号土坑の約5m北西側に位置する、溝状の土坑で、主軸方向 N79°40'W を向く。長さ2.57m、幅0.70m、深さ0.10～0.15mを測る。床面は平坦で、西側が僅かに低い。

出土遺物（第23図）

甕（4）外反する口縁部破片で、ヨコナデ調整されるが、端部内外面は窪み加減である。胎土に砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、黄褐色に焼成されている。

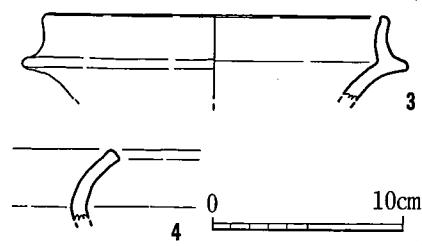
4号土坑（東斜面土坑）

2号土坑の東側に近接して位置する、楕円形プランらしい土坑で、主軸方向 N1°30'W を向く。東側を区画溝で削られて失うが、南北長2.35m、東西幅1.60m以上、深さ0.10～0.40mを測る。床面は平坦で、南北1.80m、東西0.70m以上の広さである。

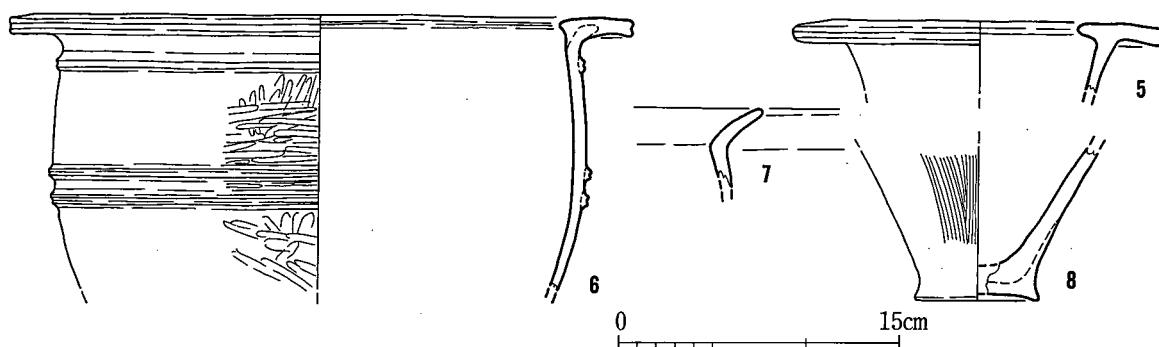
出土遺物（第24図）

壺（5）開口壺らしい鋤先口縁の破片で、復原口径20.0cmの大きさ。口縁部内面側の突出は大きく、内外面ともにヨコナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

甕（6～8）6は鋤先口縁の甕で、復原口径33.1cm、残存器高14.5cmの大きさ。頸部下に1条、胴最大径の位置に2条の断面M字形の凸帯が巡る。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。7は口縁部がく字形に外反する



第23図 I区2・3号土坑出土
土器実測図(1/4)

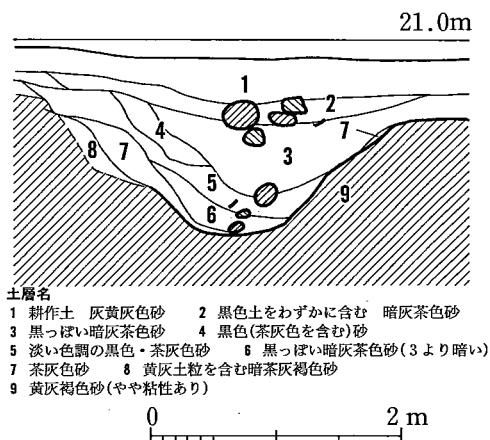


第24図 I区4号土坑出土土器実測図(1/4)

口縁部破片で、端部内面は僅かに凹む。内外面ともにヨコナデ調整される。8は底面がやや厚い底部破片で、底面は裾開き気味である。胴部側の外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

鋤先口縁を有する壺・甕の特徴から弥生中期後半に考えられ、く字形に外反する甕はやや時期的に下降する要素で、中期末ないし後期の可能性がある。底面のやや厚い底部は後期まで下がらないと思われる。

鉄 淬（図版13-2） 5.5cm×4.9cm×2.4cmの大きさで、重量102.1gを測る1点が出土している。



第25図 I区北側溝断面土層実測図(1/60)

2. 溝状遺構

区画溝（図版8、第25図）

北側溝はN80°Wの方向に約15mの長さで発見された。西側は調査区域外に潜り、東側で屈曲して東側溝に続く。東側溝は約25mの長さで、やや蛇行するが、概ねN15°Eの方向に伸びて、南側は調査区域外に続く。北側溝では、上縁での幅2.80m、深さ1.00m、底面の幅0.40～0.60mを測る。東側溝は西側上部から斜めに削られて、深さはあまり残らないが、床面幅は0.20～0.40mの規模をもつ。溝内には暗灰茶褐色系の色調の砂などが堆積して埋没するが、区画内側から徐々に埋没した後に一気に埋没した状況が窺える。溝内堆積土には川原石などと土器類、石器類などが多量に混じる。なお、この溝で囲まれた部分は南北25m以上、東西15m以上の広さを有するが、区画全体の規模は分からぬ。

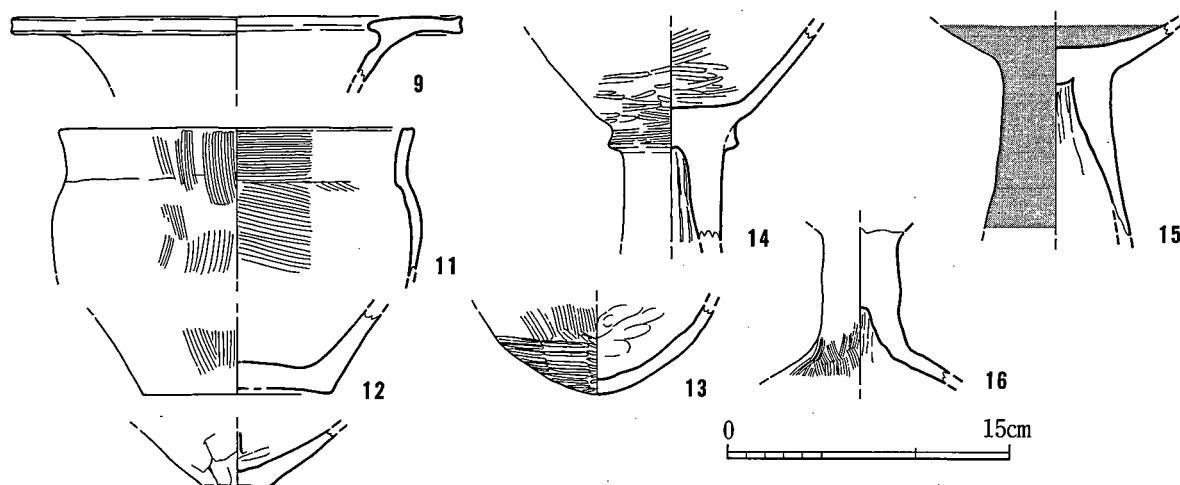
北側溝出土土器（図版9～11、第26～36図）

弥生土器

壺（9・10） 9は高杯か壺かの区別が難しいが、鋤先口縁の破片で、内面側の突出は強く、端部上側は僅かに窪む。復原口径24.0cmの大きさ。内外面ともにヨコナデ調整される。10は底部破片で内外面ともに板状原体でナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、9は白黄褐色、10は暗黄褐色に焼成されている。

甕（11～13・30・31） 11は頸部の括れが少なくて口縁部が直立気味に立ち上がる甕で、復原口径19.0cmの大きさ。内外面ともにハケ目調整される。12は平底の底部破片で胴部側の外面はハケ目、内面はナデ調整される。13は尖り気味ながらも丸底の底部破片で、外面の下半部は叩き目が蜘蛛の巣状に付されていて、胴部はハケ目調整される。内面は指頭痕の残るナデで調整される。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、11は淡橙褐色、12は淡茶褐色、13は暗茶褐色に焼成されている。30は口縁部が強めに外反して、端部が跳ね上げ状に突出する甕で、復原口径25.8cmの大きさ。31は復原口径14.0cmの大きさの、口縁部がく字形に緩く外反する甕で、内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

高杯（14～16） 14は深い杯部と柱状部の境目に断面三角形の凸帯が巡る高杯である。中空の柱状部は器面が風化磨滅して分からぬが、杯部内外面はヘラミガキ調整される。胎土に細砂粒・



第26図 I区北側溝出土土器実測図 1 (1/4)

角閃石・雲母・褐色粒を含み、淡赤褐色に焼成されている。15は中空の長い柱状部を有する、丹塗り磨研の高杯で、外面と杯部内面に塗布される。16は中実の柱状部を有する高杯で、折れ曲がるよう開く脚裾部内外面ともにハケ目調整される。脚裾部は破損して不明だが、4孔ないし4孔以上の円孔が穿孔される。

壺か高杯の鋤先口縁、深い杯部の高杯などは中期中頃の特徴であるが、13の外面に叩き目のある丸底の底部は終末期～古式土師器にみられるもので、時期幅を有する。

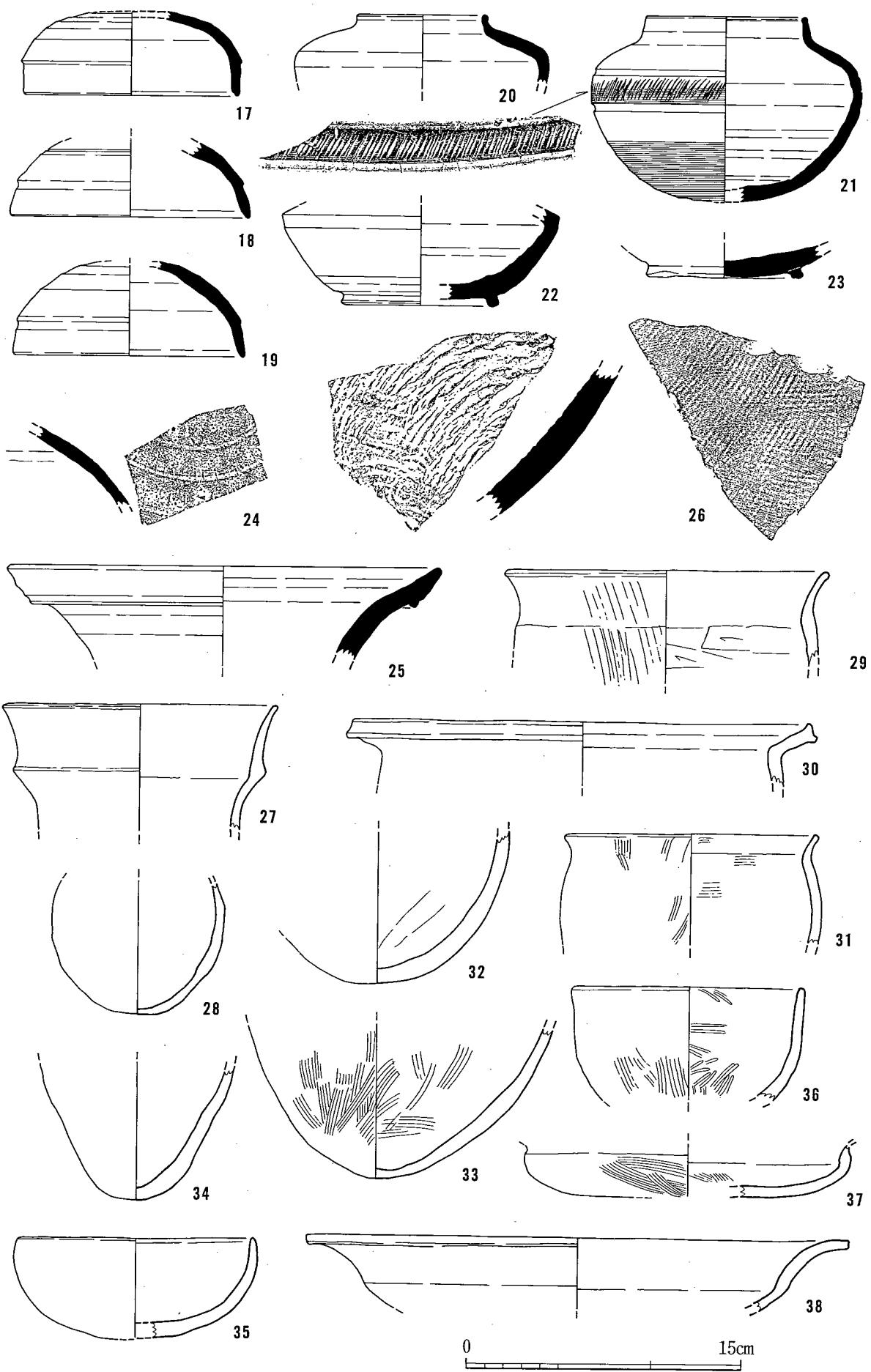
須恵器（第26図）

杯 蓋 (17~19) 17は復原口径12.0cm、器高4.5cmの大きさの、口縁部が直立する杯蓋で、端部内面に僅かな段がある。天井部外面は回転ヘラ削りされる。胎土に砂粒を僅かに含み茶灰色に焼成されている。18・19は天井部が丸く、口縁部も開くため、椀形に近い器形を呈する杯蓋で、外面に段状の浅い凹線が巡り、端部は丸みをもつ。ともに復原口径13.2cmの大きさで、外天井がヘラ切り離しの後にナデられる19では器高5.2cmを測る。胎土に細砂粒を含み、黒灰色に焼成されている。

壺 (20・21) 20は胴下半部を失うが、復原口径7.2cm、胴最大径14.0cmの大きさで、肩の張った体部で、口縁部が短く立ち上がる。胴下半部の外面は回転ヘラ削りされる。胎土に砂粒を若干含み、暗灰色に焼成されている。21は復原口径8.9cm、器高10.2cm、胴最大径14.7cmの大きさ。肩の張った扁球形の体部で、口縁部は内傾気味に立ち上がる。胴下半部はカキ目調整、胴最大径の位置に巡らせた2条の沈線間に板小口を連続押捺した文様がみられ、沈線の上下両側は回転ナデ調整されて文様が強調される。胎土に砂粒を若干含み、暗灰色に焼成されている。

長頸壺 (22~24) 22は算盤玉のような体部をもつ長頸壺で、口頸部を失う。底部外面は回転ヘラ削りされて、外開き気味の高台が貼り付けられる。復原胴最大径15.0cm、高台径8.6cmの大きさ。23は外開き気味の高台の付く底部破片で、高台径8.3cmの大きさ。24は肩部破片で、浅い沈線とヘラ状工具で連続押捺した文様がみられる。

甕 (25・26・133) 25は口径24.0cmの大きさの外反する口縁部破片で、僅かに肥厚する口縁部下端につまみ出したような低い三角凸帯が巡る。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。26は外面に平行叩き目とカキ目、内面に同心円当て具痕がみられる胴部破片である。胎土に細砂粒を含み、茶灰色に焼成されている。133は外面に波状文と波状文原体による縦方向の垂線のみられる頸



第27図 I区北側溝出土土器実測図 2 (1/3)

部破片である。

5世紀の特徴を有する杯蓋もあるが、6世紀後半～末頃の杯蓋もあり、長頸壺の高台の特徴は7世紀後半頃である。

土師器（第27図）

壺（27・28） 27は緩やかに屈曲して外反する複合口縁の破片で、復原口径15.2cmの大きさ。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。28は口頸部を失うが、小形の丸底壺であろうか。胴最大径9.6cmの大きさで、内外面ともにナデ調整される。胎土はともに細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、淡黄褐色・暗黄褐色に焼成されている。

甕（29・32～34） 29は復原口径17.8cmの大きさの、緩やかに口縁部が外反する甕。胴部外面は粗いハケ目で調整され、内面はヘラ削りされる。32は丸底の胴下半部破片で、外面はナデ、内面はヘラ削りされるが、器壁は厚い。33は倒卵形の体部をもつ甕の胴下半部破片で、内外面ともにハケ目調整される。34は窄まる胴下半部破片で、内外面ともに板状原体によるナデで調整される。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、茶褐色ないし暗黄茶褐色などの色調に焼成されている。

椀（35） 復原口径13.0cm、器高5.5cmの大きさの、内彎して立ち上がる椀。内外面ともにナデとヨコナデで調整される。

鉢（36） 深い体部を有する椀のような鉢で、口縁部は直に立ち上がる。復原口径13.0cmの大きさ。外面はハケ目とヨコナデで調整され、内面はヘラミガキで調整される。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

杯（37） 底部の中心部と口縁端部を失うが、復原最大径17.6cmの大きさの杯で、器高は低い。内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

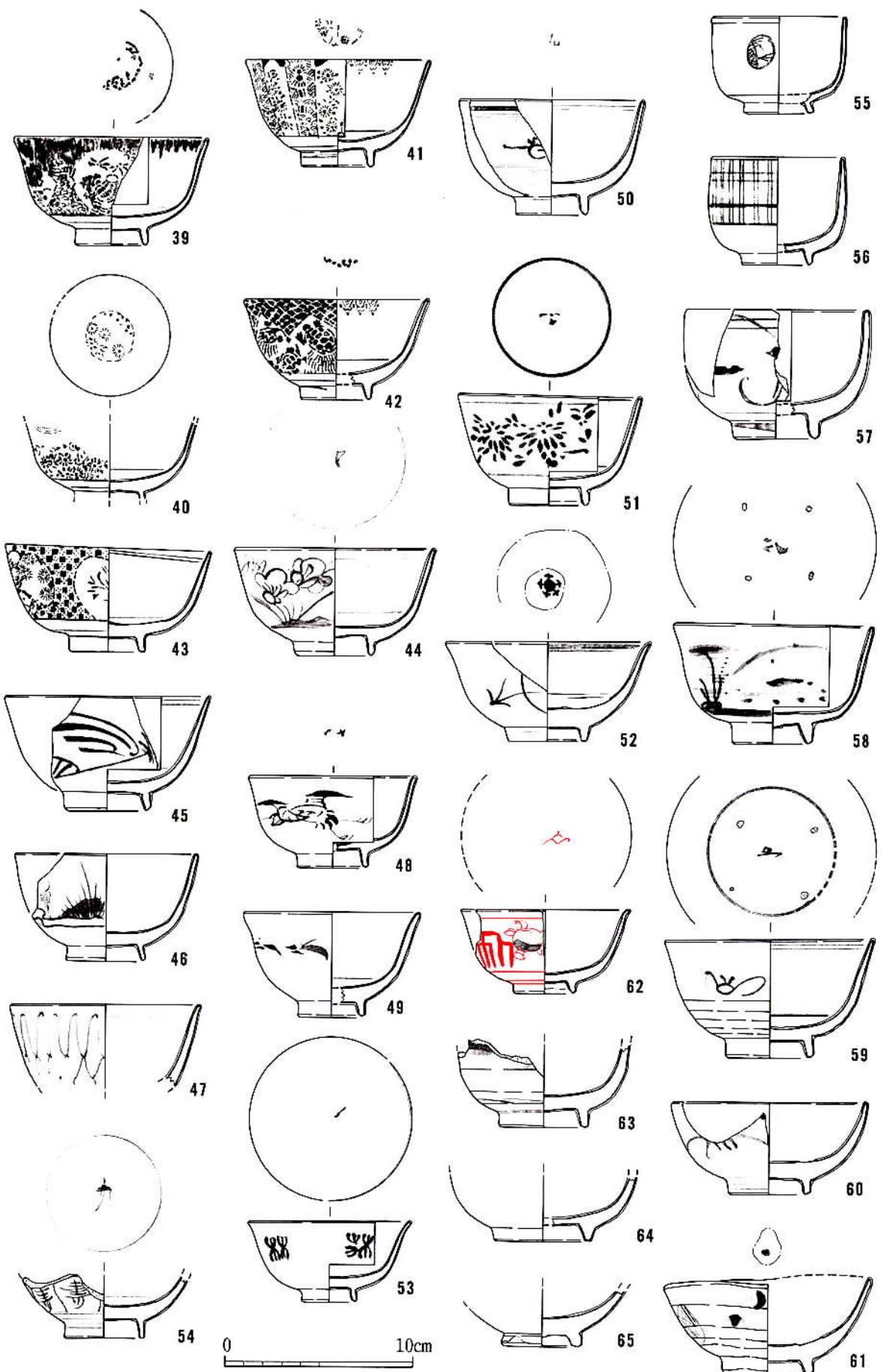
高杯（38） 杯底部以下を欠く破片で、緩く外反した口縁部は端部上側が僅かに凹む。内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、暗黄茶褐色に焼成されている。

土師器壺などは古式土師器の範疇に入るが、器壁の厚い甕は時期が下るものであろう。

陶磁器（第28～31図）

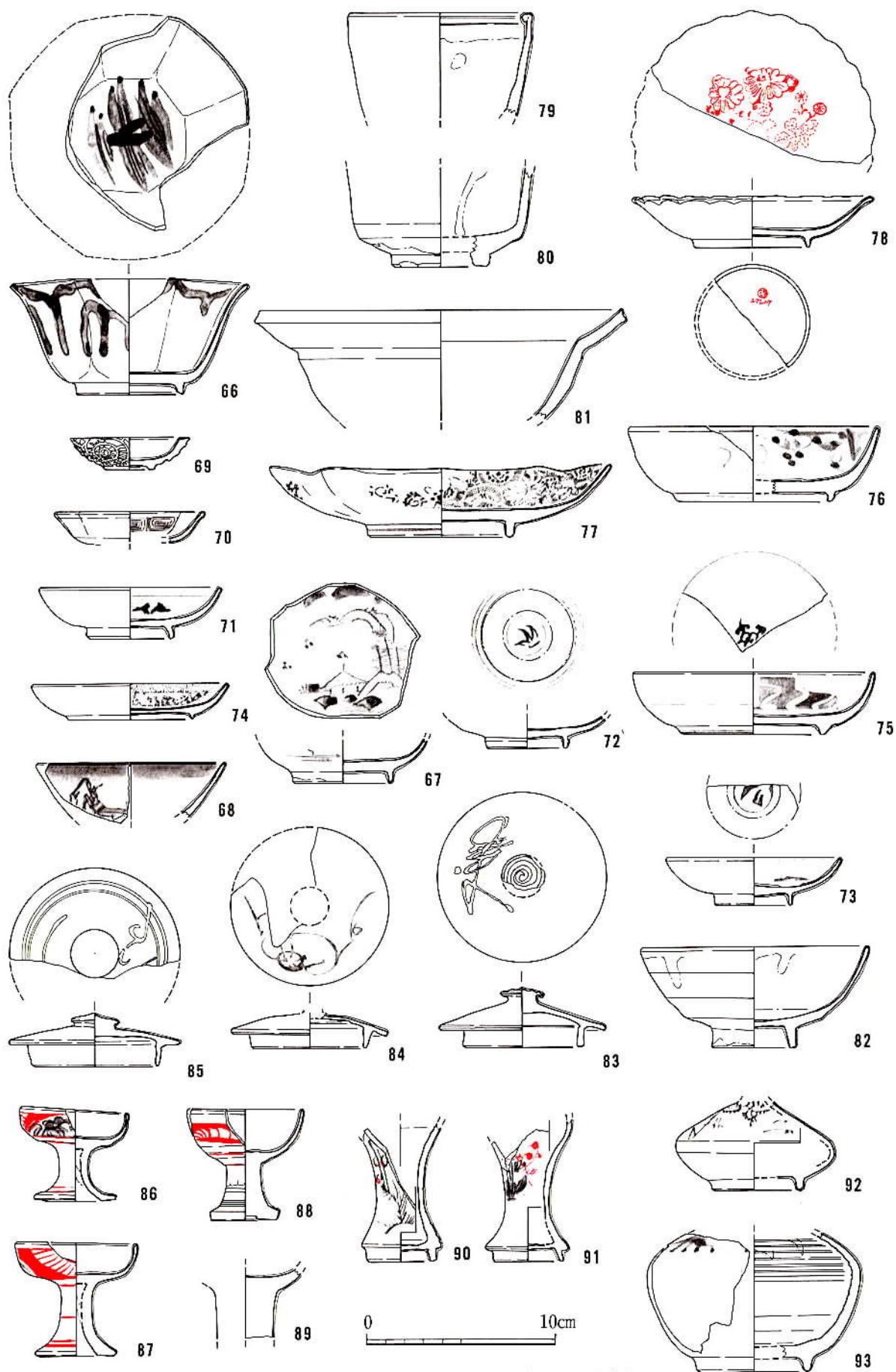
染付碗（39～61・68） 39～43・51は型紙による染付文様のみられる碗である。高めの高台が付く端反りの碗である。縁文様の輪宝繫文や内底見込みにも型紙文様がみられる。39では扇形や円形の窓抜き意匠の中に菊や蜻蛉が描かれていて、縁文様は雨降り文になっている。41では区画内を交互に花文様で飾る意匠がみられ、42では窓抜き意匠の中に亀が描かれる。51では二対の花が描かれる型紙文様で、見込みに点を落としたような文様があり、内面の縁文様は単直線である。43でも窓抜き意匠で花文様が描かれるが、内面の縁文様は双直線が走り、見込みの釉は蛇の目に搔き取られている。いずれも白色の胎で、藍色の染付で透明な釉が畳付以外の全面にかかる。

44は色調の淡い藍色の花文様、45は蝶のような文様、47は網目文様が描かれる。49は蝶の飛ぶ姿が描かれて、見込みに橢円の記号がある。50は横走する平行線の帯の間に動物かと思われる文様が描かれる。これらの見込みには文字か記号か分からぬが文様があり、内面の縁文様は双直線が横走する。いずれも灰色の胎で透明な釉がかかるが、型紙染付の例に比して色調は青灰色味を帯びる。



第28図 I区北側溝出土土器実測図 3 (1/3)

2 I区の遺構と遺物



第29図 I区北側溝出土土器実測図 4 (1/3)

46は外面に葦の繁る水辺と驚らしい鳥が描かれるが、他は無文の碗である。復原口径9.9cm、器高5.7cm、高台径4.4cmの大きさ。幾分灰色がかった胎で、透明な釉がかかり緑灰色がかった色調を呈する。

48・53は浅めの小形端反り碗で、見込み中央に記号らしい文様がある。復原口径9.1cm、器高4.9cm、高台径3.8cmの大きさの48では外面に鳥が描かれる。53の外面には「林」と判読できない隸書文字が配される。53の釉はやや灰色っぽく、口唇部に飴色の釉が付く。

52は復原口径11.5cm、器高5.3cm、高台径4.2cmの大きさの、端反りの碗で、外面に草らしい文様、見込み中央に五弁花の印判が押されて、縁文様などに崩れた双直線が横走する。見込みの釉が蛇の目に搔き取られている。

54は外面の区画10列内に「寿」の字が埋められ、見込み中央に寿の異体字のような文字？がみられる。灰褐色の胎で、透明な釉がかかる。

55・56は深めの小丸形碗で、55では外面に円形文様が、56は外面に格子文様が描かれて、縁は赤茶色に染められる。55の胎は白く、56はやや灰色を呈する。56の口径7.2cm、器高5.2cm、高台径3.8cmの大きさ。

57は腰が張る半筒形に近い器形の、やや厚手の茶碗。藍色で花卉文が描かれる。胎は灰白色で、釉は透明質の灰色を呈すが、貫入がみられる。復原口径9.8cm、器高6.9cm、高台径4.6cm。

58・59は内底見込みに4ヶ所の砂目痕がみられ、見込み中央に記号らしい文様が付されている。58では外面に山と樹木・笹などが描かれている。口径10.8cm、器高6.4cm、高台径4.3cmの大きさ。59は外面に蝶とも蟹ともみられる文様と、別の広い文様が描かれるが大半を欠損して意匠は不明。内面の縁文様に双直線が巡らされる。口径11.3cm、器高6.3cm、高台径4.7cmの大きさ。畠付以外に釉がかかり、黄褐色っぽい色調を呈するが、貫入がみられる。萩焼きに似る。

60・61はくらわんか茶碗である。見込みの釉を蛇の目に搔き取っている。60は口径10.5cm、器高4.9cm、高台径4.5cmの大きさで、器壁はやや厚い。外面に花卉文様が描かれている。61は歪みを生じるが、口径11.2cm前後、器高5.0cm前後、底径4.9cmの大きさ。外面に円形文が3対に配される文様が描かれる。

68は銅版転写かと思われる精緻な文様が外面にみられる碗で、武者と橋の欄干が見えることから、五条大橋の牛若丸を描いたものであろう。縁文様は濃で埋められる。復原口径10.2cmの大きさで、朝顔形の器形であろうか。明治期以降の作であろう。

色絵碗(62) 復原口径9.0cm、器高4.4cm、高台径3.3cmの大きさの碗。外面の区画内に源氏香文と藍色を配した文様と濃のように塗り込みで対称的な文様が描かれている。また見込み中央にも細い線で描いた文様がみられる。

陶器碗(63～65) いずれも口縁部を失う。63は高台径4.8cmの大きさの碗で、褐色の胎で黒っぽい藍色の文様が描かれて、畠付以外に灰白色っぽい半透明な釉がかかる。64は高台径5.2cmの大きさで、褐色の胎に灰釉を刷毛目で加える。透明釉だが焦茶色と淡黄褐色の縞模様を呈する。外面は波状文様、内面は放射状の縞模様がみられる。65は褐色の胎で、高台以外に鉄釉がかかる。

染付向付(66・67) 66は八面の端反り鉢形の向付で、復原口径12.8cm、器高6.2cm、高台径5.8cmの大きさ。外面に源氏香文らしい文様、見込みに葉を表したと思われる文様がみられ、一方に片寄った目土痕もある。67は底部破片で、見込みに建物を含む風景画が描かれ、外面には水辺らしい

文様が四面に描かれる。高台径5.4cmの大きさで、畳付にも釉がかかる。

白磁紅皿 (69) 外面に蛸唐草文様のみられる型押し整形の紅皿で、内面や口縁にも笠先の傷があるために青白磁のような効果を得ているが、外面には僅かに釉が垂れる程度である。口径6.4cm、器高1.7cmの大きさ。

染付小皿(70~76) 70は隅角面を含めて八面になる四方皿で、印判手の雷文がみられる。71~73は口径9.5cm前後、器高2.5cm前後の大きさの小皿で、見込みの釉が蛇の目に搔き取られる。見込み・縁部の文様は三本線・四本線の同心円と簡略化された記号のような文様が配されている。74は型紙絵付の文様がみられる小皿。3ヶ所の扇形区画内に松竹梅がそれぞれ描かれ、これらに挟まれる区画内には輪宝繫文らしい文様が配される。見込み中央には五弁花があり、その周囲の部分には鳥が並ぶ。口径10.6cm、器高1.9cmの大きさ。

75・76は四寸皿である。75は器高3.3cm、高台径7.8cmの大きさで、外面の文様は単直線以外よく分からぬ。見込み中央には十字花文様、内面の縁文様には墨弾きの波文が描かれている。76は器高4.0cm、高台径8.0cmの大きさで、外面の文様は意匠不明だが、内面の縁文様に花卉が描かれている。

染付木瓜形皿 (77) 長径18.4cm、短径14.9cm、器高3.8cm、高台径5.4cmの大きさの隅入りの変形皿である。型紙による文様で飾られるが、見込み中央に桜文様、周囲に紅葉などの文様が描かれている。外面は六弁花と唐草文様で飾られている。

色絵皿 (78) 輪花の四寸皿で、器高2.7cm、高台径6.3cmの大きさ。色絵はかなり剥げているが、痕跡などからみて菊花文様が赤色で描かれ、黄色も加色されているのが分かる。高台内中央の藍色文様は分からないが、赤色で描かれた丸に囲まれた「許」と29207の文字がみえる。

陶器火入 (79・80) 79は復原口径10.0cm程の大きさの、口縁部が直立気味に立ち上がり端部で内に折れて肥厚する鉢。焼き締めらしい褐色の胎で、外面と口縁部内面に鉄釉がかかる。80は口縁部を失うが、高台径5.2cmの大きさの筒形を呈する鉢。灰色の胎で、体部外面と口縁部内面に灰色半透明の釉がかかる。露胎部分は焼き締め効果による茶褐色を呈する。

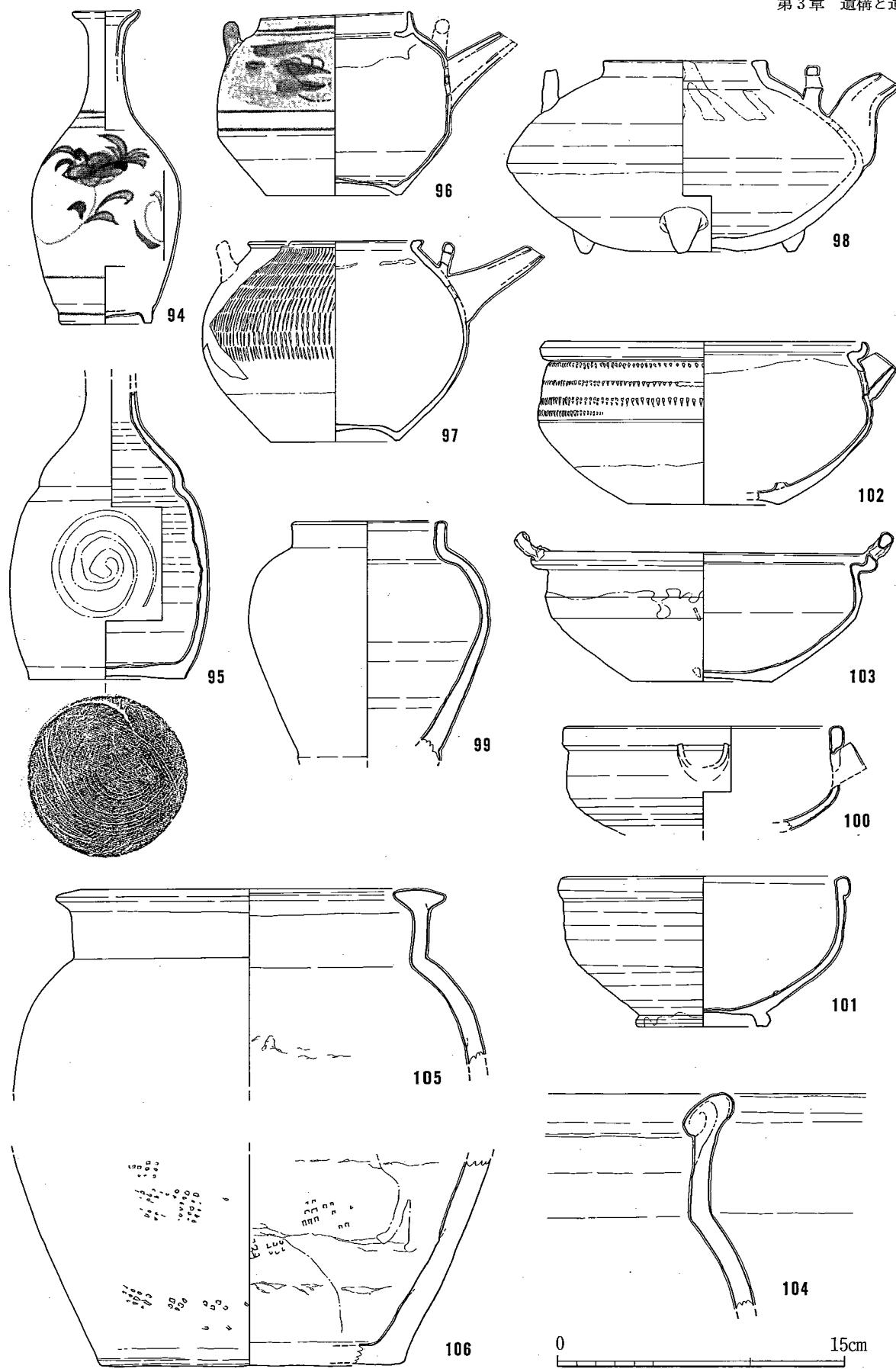
陶器鉢 (81) 丸みをもった体部から、口縁部が内彎気味ながら外反する器形で、復原口径19.6cmの大きさ。灰色の胎で、内外面ともに黒褐色の鉄釉がかかる。

灰釉陶器碗 (82) 口径12.4cm、器高4.3cm、高台径4.6cmの大きさの碗で、体部外面の下半部は回転ヘラ削りされ、口縁端部は丸みをもつ。畳付以外に灰黄色を呈する灰釉がかかり、見込みの釉は蛇の目に剥ぎ取られる。

陶器蓋 (83~85) 身受けのかえりを有する、低い円錐形の蓋で、外天井部に扁平な擬宝珠形のつまみが付く。83・84は二寸口径の容器（土瓶など）の蓋らしく、85はこれより口径が僅かに大きい容器の蓋であろう。外面に灰緑色の灰釉がかかる。83・85は天井部に白色の藁灰釉でイッチン描きで線や文字が描かれるが、崩し文字らしく判読できない。84は刷毛目で白色の藁灰釉が加えられて、鉄釉で花卉文様が描かれている。

色絵仏飯具 (86~89) 86・87は平たい椀形の杯部に中空の柱状部が付き、裾部が開く高杯形。86の柱状部は器壁が薄めで裾は跳ねるが、87は器壁が厚めである。杯部外面の文様は赤・青・緑色を用いて描かれる。86では復原口径5.9cm、器高4.8cm、87では口径6.6cm、器高6.1cmの大きさ。

88・89は深めの椀形の杯部に中実の柱状部が付き、裾部は蛇の目高台のような形状をなす。88は



第30図 I 区北側溝出土土器実測図 5 (1/3)

復原口径6.2cm、器高5.9cmの大きさ。杯部外面の文様は赤色で菊花らしい文様が描かれる。

色絵御神酒徳利（90・91） 脇部上半部を失うが、細めの体部で脇部が括れて、外開き気味の高台が付く。高台径3.8cm、脇最大径4.5cm程の大きさ。脇部に色絵で梅と若松、若竹が描かれている。

染付油徳利（92） 口縁部を失うが、玉葱に似た形の下膨らみの体部で頸部へは細く窄まる。脇最大径8.5cm、高台径5.1cmの大きさ。肩部に蛸唐草と竹らしい染付文様が描かれ、外面全体に施釉されている。

陶器壺（93） 口頸部を失うが、復原脇最大径11.2cm、高台径6.3cmの大きさ。肩部に薄墨色の文様が描かれるものの、意匠は不明。灰色の胎で、畳付以外の外面に灰色半透明な釉がかかる。

染付瓶（94） 復原口径3.6cm、器高16.4cm、脇最大径7.9cm、高台径4.9cmの大きさで、頸部は細長い。高台は輪高台に近いが、底部との境目に僅かな段がある。脇部に草花文様が描かれる。

陶器瓶（95） 口縁部を失うが、復原脇最大径10.6cm、底径8.4cmの大きさ。肩部に括れた段があり、内面は回転ナデの際の凹凸がある。糸切り離しの外底面は露胎だが、外面に茶色の鉄釉がかかり、肩部括れから口縁部側は更に黒色の鉄釉がかかる。脇部外面に白色の藁灰釉でイッチン描きの渦巻文様が描かれる。

陶器土瓶（96～98・108） 96は蓋と一方の釣手を失い、器高9.6cm、脇最大径12.4cm、底径7.1cmの大きさで、長さ4.0cm程の注口が付く。口径8.0cmの口縁部は直立気味で、内面側に蓋受けのかえりが付く。底部は薄く、内側に凹む。注口部は先端が斜め上方を向いて付けられるが、体部との間は3つの円孔が穿たれる。また注口の軸線にほぼあった方向に把手が取り付けられるように、口縁部を挟んで、環状の釣手が貼付られている。脇部外面と口縁部下に横走する双直線の間に墨色と緑色で風景らしい文様が描かれ、注口の上側に放射状に3本線が描かれている。淡黄褐色の胎で、口縁部内面と外面の脇下半部が露胎だが、透明釉がかかる。

97は蓋と一方の釣手を失うが、復原口径9.7cm、器高10.5cm、脇最大径14.1cm、底径6.9cmの大きさで、長さ5.0cm程の注口が付く。脇部は丸く膨らみ、口縁部は短く端部が外反気味に肥厚する。注口部は先端が斜め上方を向いて付けられ、体部との間に円孔1孔が穿たれる。注口の付け根部分に接して山形の釣手が貼付られている。体部上半部は飛び鉢文様で埋められる。口縁部外面から脇下半部に茶褐色の鉄釉がかかり、露胎の底部は内側に凹む。

98は蓋を失うが、体部側は口径8.6cm、器高10.0cm、脇最大径18.7cm、底径5.2cmの大きさで、長さ4.5cm程の注口が付く。脇部は算盤玉のように稜をもって膨らみ、口縁部は短く立ち上がる。注口部は肩部に上向きに付けられ、先端は外反して斜め上側を向くが、体部との間に円孔3孔が穿たれる。注口の付け根に近接して山形の釣手が貼付けられ、口縁部を挟んで貼付られる釣手と対峙する。脇下半部には突起状の3足が貼付られ、僅かに内側に凹む底面は僅かに浮く。口縁部内面と上面、脇下半部が露胎だが、体部内面に灰色の釉、体部上半に暗茶色の釉がかかる。

108は、器面が風化して素焼きのような状態の急須で、蓋と取手を失う。扁球形の体部で、口縁部は短く立ち上がり、底部は僅かに内側に凹む。長さ3cm程の注口は体部上半に先端が斜め上がりに貼付られて、体部との間には3孔が穿孔される。口径6.7cm、器高9.4cm、脇最大径12.7cm、底径6.7cmの大きさ。

白磁壺（99） 復原口径8.2cm、残存器高15.5cm、脇最大径12.6cm、底径7.4cmの大きさの壺で、口縁部は短く直立する。内外面ともに施釉されるが、口唇部は露胎。

青磁鉢 (100・101) 100は復原口径14.8cmの大きさの鉢で、口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は折り畳んだように幅1.1cmの帯状に肥厚する。口縁部下には片口が付けられる。胴部下半部の外面は回転ヘラ削りで調整される。底部側を失うが、内外面ともに黄緑色の釉が施釉される。101は100と同様な器形で、復原口径15.0cm、器高7.9cm、高台径6.7cmの大きさ。口縁端部の肥厚はやや丸みを帯びる。胴部下半部の外面は回転ヘラ削りされ、高台は畠付外側が斜めに削られる。高台を除いて緑灰色の釉が施釉される。片口部分などは残らないが、片口の可能性もある。

陶器鉢 (102・103) 102は口径17.3cm、器高8.5cm、胴最大径17.6cm、底径8.0cmの大きさの鉢で、口縁部は外側に開くがキャリパー状に内彎して、内面側は蓋受けになる。口縁部下に斜め上側を向く片口が貼付られる。胴部上半に飛び鉋手法がみられ、沈線も巡る。口縁部内面と胴下半部は灰白色の露胎だが、内面に抹茶色の釉、胴上半部外面に茶褐色の釉がかかる。なお、胴部下半部には煤が付着するので、煮沸具としても使用されたことが分かる。

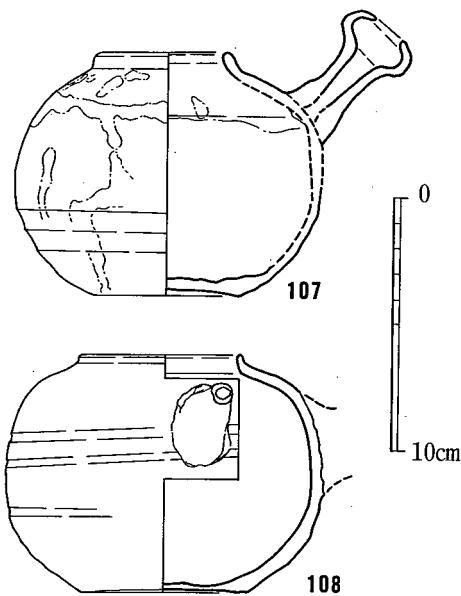
103は口径18.1cm、器高7.8cm、胴最大径16.5cm、底径7.3cmの大きさの鍋で、口縁部は102と同様な形態で、内面側は蓋受けになる。口縁部上には対峙する釣手が外開きに貼付けられている。体部下半は回転ヘラ削りされ、底面は僅かに内側へ凹む。体部下半は淡褐色の露胎だが、他の部分は全体に暗褐色の釉が施釉され、見込みに5ヶ所の目土痕がある。外底部には煤が付着する。

陶器甕 (104~106) 104は直立気味に立ち上がる口縁部破片で、器壁が厚く、端部は内側に巻いたように肥厚する。胴部は叩き整形されて、全体にヨコナデ調整され叩き目などは消される。口縁端部は露胎だが、内外面に茶褐色の釉がかかる。105は復原口径20.6cmの大きさの口縁部破片、106は復原底径17.6cmの大きさの底部破片で、ともに平行叩き目をナデ消す調整手法がみられ、赤褐色を呈する、細砂粒を僅かに含む胎土や色調からみて、同一個体らしい。口縁部は内彎気味に立ち上がるが、端部は内外に拡張される。胴部内面には粘土帶接合の隙間が所々に残り、叩き目の痕跡も僅かながらみられる。口縁部上面と外底部、胴下半部内面は露胎だが、暗灰茶褐色の釉がかかり、内面の胴下半部に広い範囲の釉垂れがみられる。

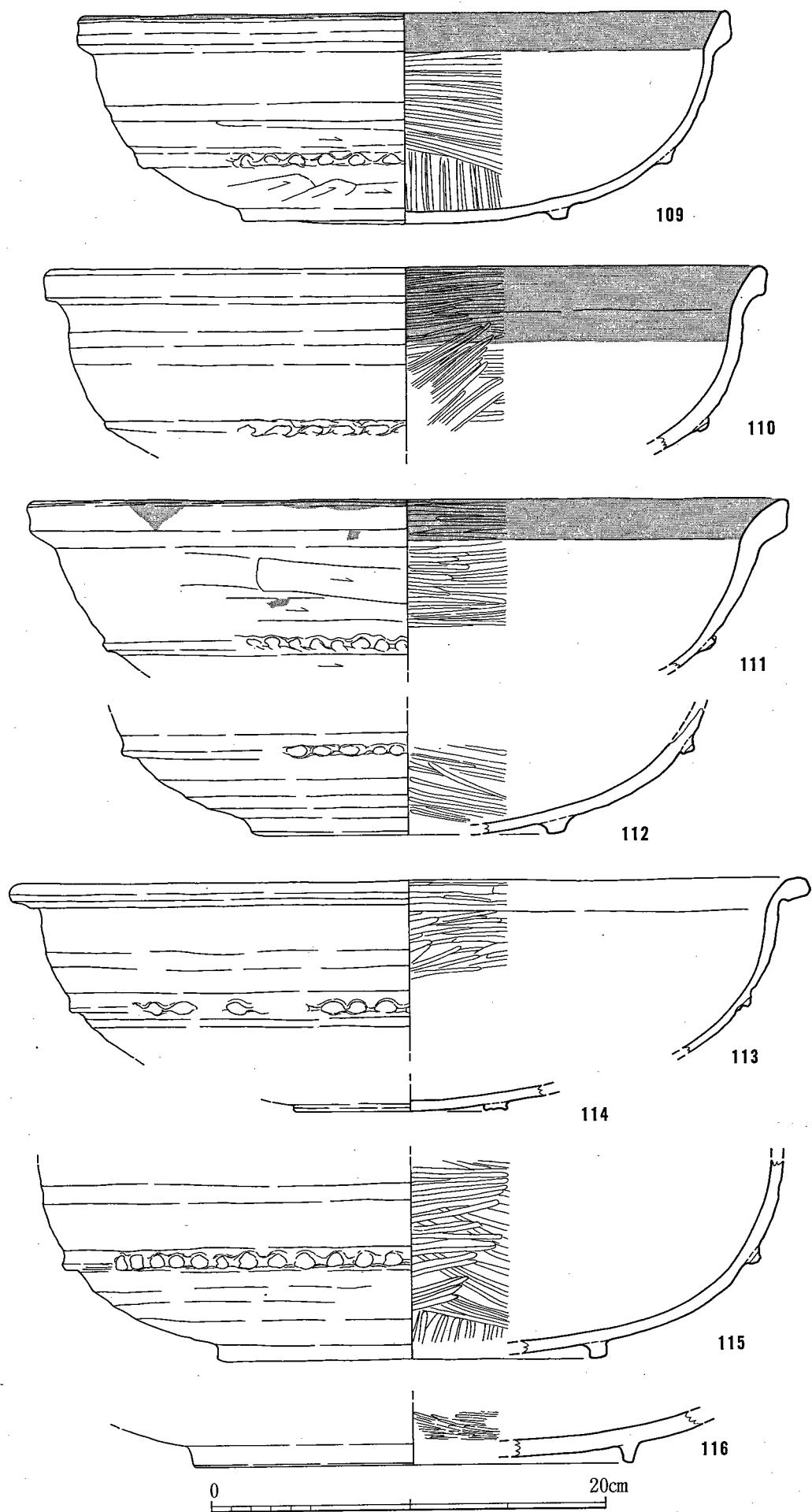
陶器丸鍋 (107) 復原口径5.7cm、胴最大径12.4cm、底径5.8cm、器高9.6cmの大きさの体部に中空の取手が斜め上側に貼付く。口縁部は短く内傾して立ち上がり、底部は僅かに内側へ凹む。体部上半は回転ナデ調整、下半は回転ヘラ削りされる。取手は長さ4.9cm、中間での径1.6cmだが、端部は径3.2cmの袋状に膨らむ。体部上半にイッチン掛けのように垂らした暗茶褐色の釉が垂れる。外底部には煤が付着し、内面の下半部は茶褐色に変色する。胡麻炒りに用いたものであろう。

土師質土器 (第32~35図)

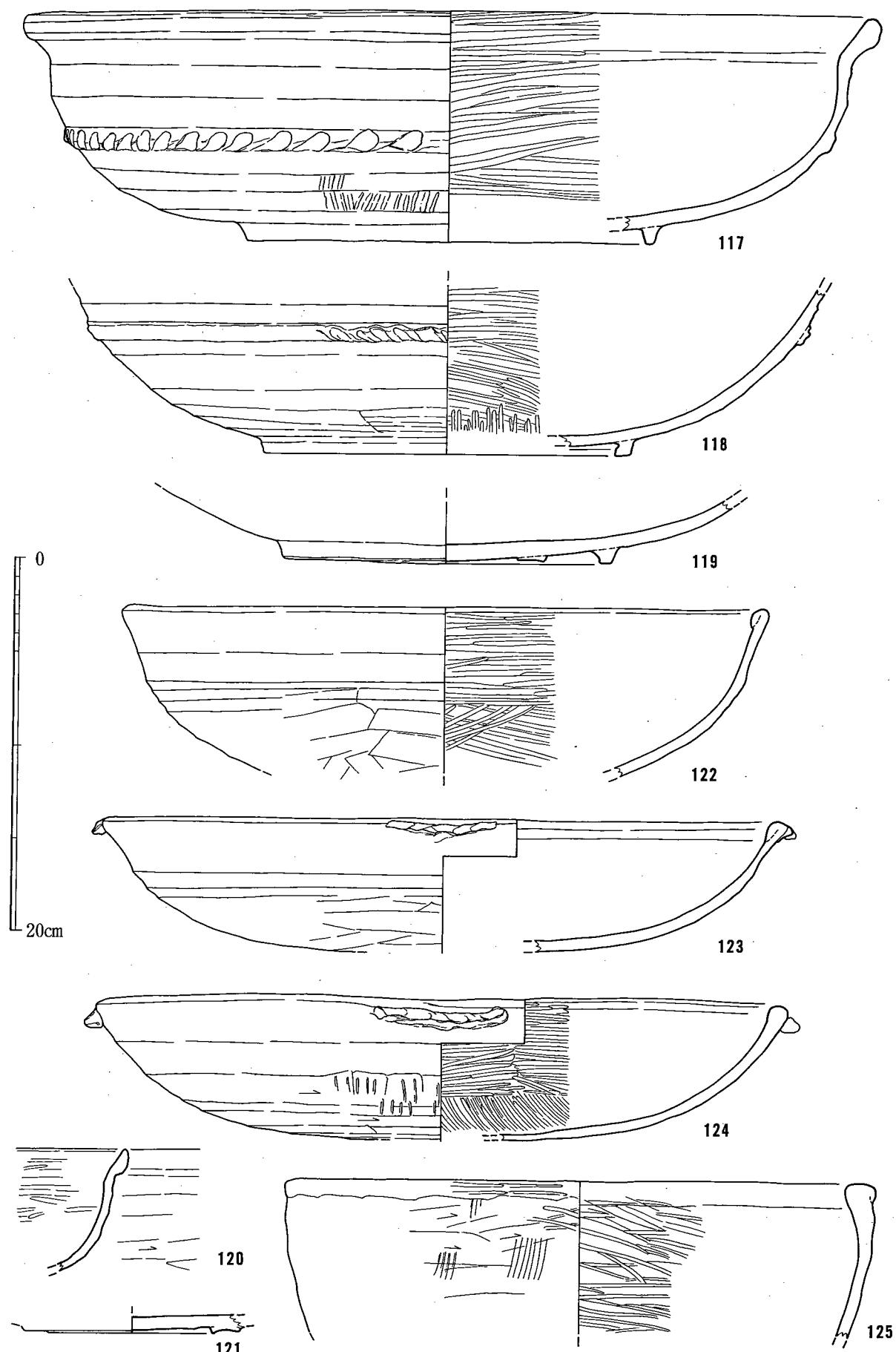
土師質鉢 (109~121・129) 109~111・117は体部が内彎しながら開き、外反する口縁部は断面三角形に肥厚する。外底部には低めの高台が付き、体部下半に指頭で刻まれる凸帶が貼付けられる。体部外面は叩き目整形された後にヘラ削り調整されるが、凸帶より上側はヨコナデ調整が加わる。



第31図 I 区北側溝出土土器実測図 6 (1/3)



第32図 I区北側溝出土土器実測図 7 (1/3)



第33図 I 区北側溝出土土器実測図 8 (1/3)

一方内面は全体に丁寧にヘラミガキ調整されている。完形に復原できる109は復原口径33.6cm、器高10.4cm、高台径16.7cmの大きさ。117では口径46.4cm、器高12.5cm、高台径22.0cmの大きさである。また110は復原口径37.0cm、111は復原口径39.0cmの大きさである。いずれも0.5~0.8cm厚さの器壁を有していて、胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色ないし淡赤褐色の色調に焼成されている。109~111の口縁部内面には赤色顔料が付着し、外面まで垂れ落ちているが、111の体部内面には煤らしい黒色の付着物もみられる。

113は、109・117などと同様な体部を有する鉢で、口縁部は強く外反して肥厚する。底部を欠き、復原口径41.0cm、残存器高8.8cmの大きさで、器壁は0.4cm厚さと薄めである。

120は109と同様な体部と口縁部を有する破片資料だが、口縁部の肥厚は薄めで、体部下半の刻み目凸帯がみられない。口径の小さな鉢には凸帯が巡らないのかも知れない。これも口縁部内面に赤色顔料が付着している。

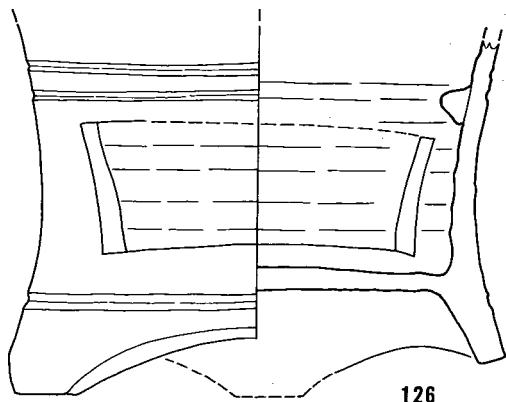
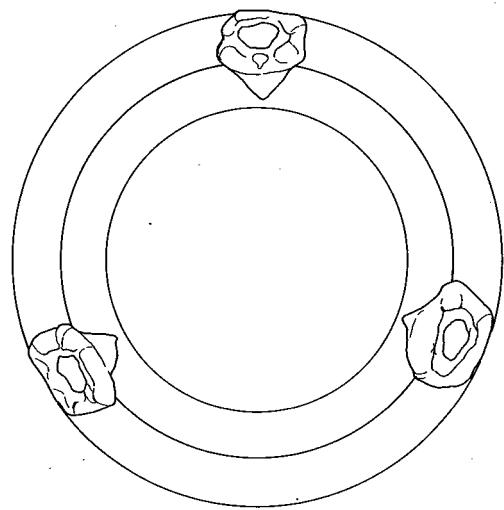
112・114~116・118・119・121は底部側の破片資料で、口縁部の形状は分からぬが、109~111・113・117などの鉢と同一の特徴を有していて、高台径は口径の1/2弱の大きさと類推されるので、112は口径33cm前後、115・118は口径40cm強、116は口径46cm前後、119は口径36cm強の大きさの鉢であろう。119では高台が二重に貼付られていて、外側の高台は高さをもつが、内側の高台は蛇の目高台のように扁平である。おそらく大形の鉢の底部中央への補強の役割を果たすものと思われるが、114・121の扁平な高台を有する破片は115~118のような口径の大きな鉢の底部に使用されていたものであろう。

129は平面橜円形の鉢で、長径21.0cm、短径15.0cm、器高7.9cm、底径11.0×15.8cmの大きさ。粘土紐巻き上げ整形で、内外面ともにヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、灰黄色に焼成されていて、外面と口縁部内面に煤が付着する。

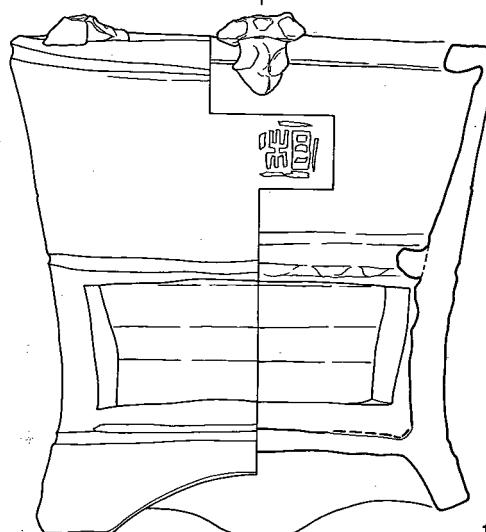
土師質焙烙 (122~124) いずれも北側溝の東隅部付近から出土し、東側溝出土破片と接合する資料もある。ともに浅く内彎して広がる体部を有して、口縁部も直線的あるいは内彎気味に開いて、口縁端部が肥厚する。122・123は口縁部が外反気味に開きながらも端部が内側に折り曲げられて、内側に丸く肥厚する。体部下半はヘラ削りされ、体部上半と口縁部はヨコナデ調整され、内面は全面ヘラミガキ調整される。123には把手が口縁部端の外側に貼付けられ、両耳になるものと思われる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、暗茶褐色に焼成されていて、外面には煤が付着する。ともに底部を失い122は復原口径35.2cm、残存器高9.0cmの大きさで、123は復原口径39.0cm、器高7.2cmの大きさ。

124は口縁部がそのまま内彎気味に立ち上がり、端部は内側に丸く肥厚する。口縁端部の下側に手捏の把手が貼付けられる。体部下半は叩き目整形された後にヘラ削りで調整されて、体部上半と口縁部はヨコナデ調整され、内面は全面ヘラミガキ調整される。角閃石・雲母・褐色粒を含むが精良な胎土で、暗黄茶褐色に焼成されているが、外面には煤が付着する。復原口径38.6cm、器高7.7cmの大きさ。

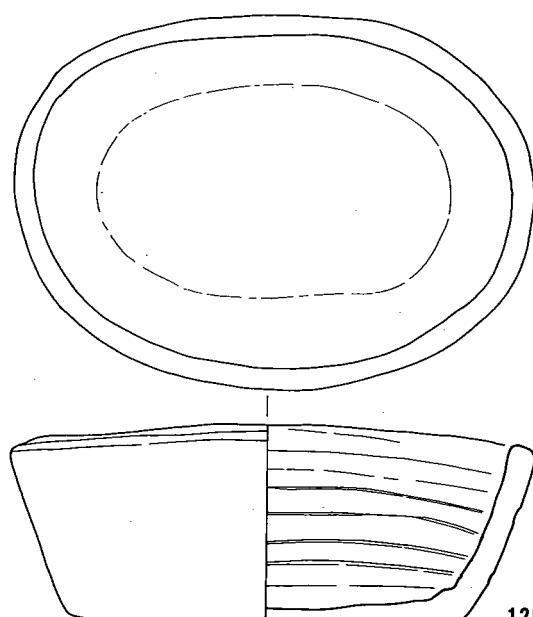
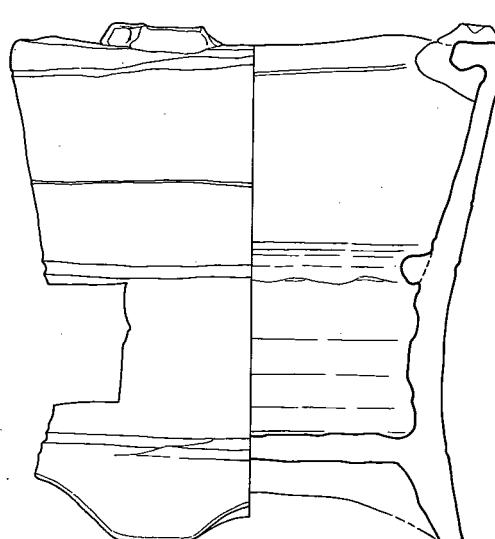
土師質甕 (125) 内彎して立ち上がる口縁部破片で、復原口径32.0cmの大きさ。口縁端部は外側に折り返したように肥厚する。内面はヘラ削りに近いヘラミガキで調整されて、外面は叩き目整形の後にヘラ削りされ、板ナデ調整されるが部分的にはハケ目に残る。胎土に砂粒・雲母・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。



126



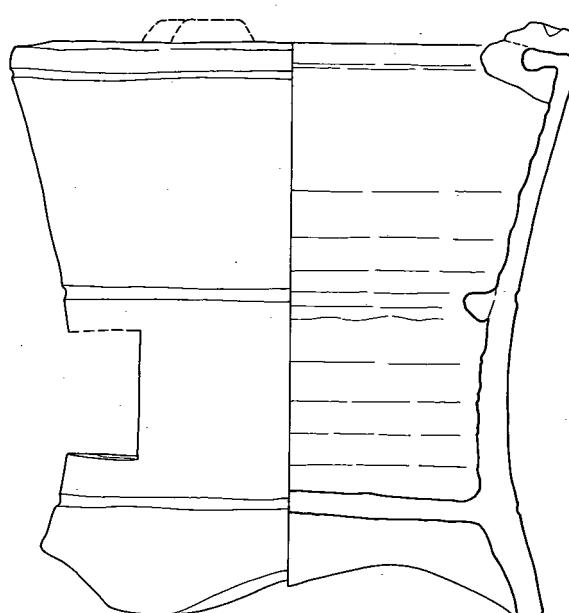
127



129

0

15cm



128

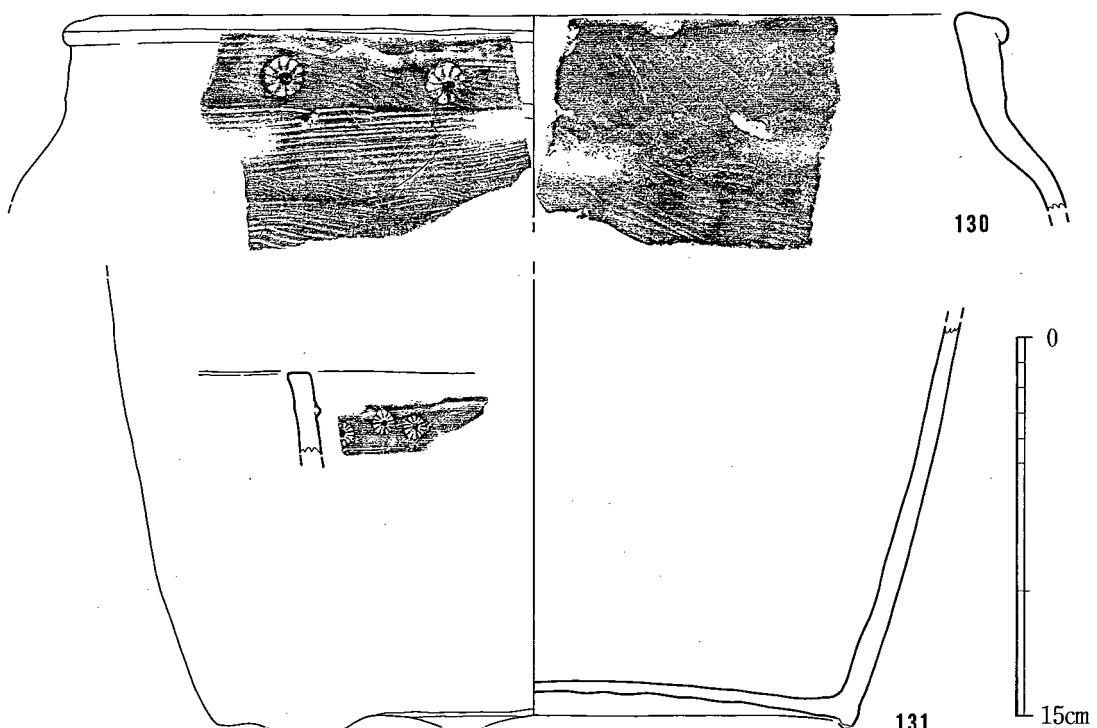
第34図 I 区北側溝出土土器実測図 9 (1/3)

土師質焜炉 (126~128) バケツ形の体部の焜炉（七厘）で、波状の3足が付く。口縁部は内側に屈折して、上面を平らに整えられ、上面から内側にかけての3ヶ所に突起が貼付けられている。体部中央の内面に羽が付き、羽と底部の間に送風口になる胴部窓がヘラで切り込まれている。外面の口縁部、底部と、内面の羽部分に相当する高さには沈線が巡る。体部はヨコナデとナデで調整され、外底面には糸切り離し痕が残る。胎土は細砂粒を僅かと角閃石・雲母・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。127は口縁外径19.6cm、器高21.0cm（うち脚台部高3.4cm）、底部外径16.0cm、器厚0.6~1.6cm、窓の横幅12.0~13.5cm、高さ4.5~5.0cmの大きさ。正面上半に「相」の囲み文字が刻印されている。128は127よりも一回り大きく、口縁外径22.5cm、器高24.0cm（うち脚台部高4.0cm）、底部外径18.5cm、器厚0.6~1.6cm、窓の高さ5.2cmの大きさ。126は128と法量が近いもので、体部中位の沈線は2条である。

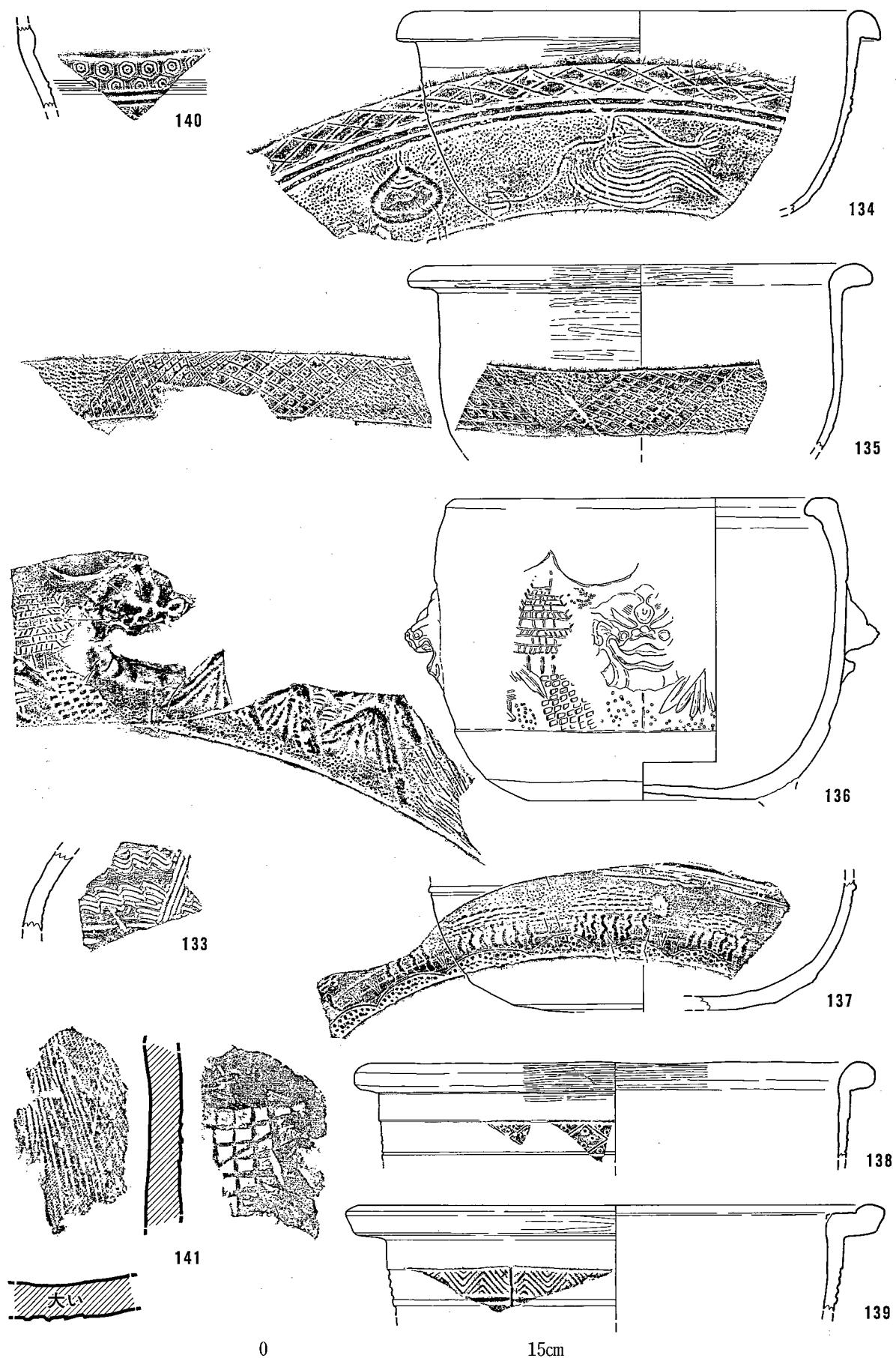
土師質火鉢 (130~132) 130は膨らんだ胴部から頸部が括れて、口縁部は内傾して、端部が外側に短く折り返すように肥厚する。復原口径38.0cmの大きさで、内外面ともにハケ目調整されて口縁部はヨコナデが加わるが、口縁部外面に菊花文様が押捺される。胎土に砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。131は底径25.8cmの僅かに内側に凹む平底からバケツ状に胴部が広がる。内外面ともに板状工具によるナデで調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、灰黄色に焼成されているが、やや軟質の感じがある。132は内傾する口縁部破片で、口縁部下に鐘状の凸帯が巡り、菊花文の押捺がみられる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

瓦質土器 (第36図)

瓦質火鉢 (134~140) 134・135・138は体部が内彎して開き、直に立ち上がる口縁部は端部で外側に強く折れ曲がり肥厚する。外面には型に刻まれた文様が浮かび、内面はヨコナデもしくは板ナデ調整され、137の外底面には脚台の剥落した接合面がみられる。134は復原口径26.0cm、残存器高



第35図 I 区北側溝出土土器実測図10(1/3)



第36図 I 区北側溝出土土器実測図11(1/3)

10.8cmの大きさで、胴部外面に斜格子文様帯と沈線を挟んで粒文帯があり、粒文帯には兜と蓑らしい絵が表わされている。135は斜格子と粒文が交互に区画される文様帯がみられ、137の胴下半には樹木と草らしい文様がみられる。135は復原口径22.8cmの大きさ。137は胴部外径21.0cm、剝落面の外径14.0cmの大きさ。138は復原口径28.0cmの大きさで、粒文と重なる斜格子文がみられる。

136は体部が内彎して開き、内彎気味ながら直に立ち上がる口縁部は端部で内側に折れ曲がり肥厚する。外面には型に刻まれた文様が浮かび、内面はヨコナデで調整される。胴部には把手を兼ねる口を空けた獅子の突起があり、建物と山・樹木が表わされている。復原口縁外径21.0cm、器高16.0cm、脚台の剥落した部分の外径16.8cmの大きさである。

139は直に立ち上がる口縁部が外側へ折れ曲がり、端部が上側に突出するもので、蓋受けのような形状の口縁部である。復原口径29.0cmの大きさで、胴部に綾杉文の連続する文様帯がみられる。

140は胴部破片だが上下も定かではない。外面に断面蒲鉾形の凸帯と、細かな亀甲文と菊らしい花文様の連続する文様帯がある。

瓦 (141) 凸面に格子目叩き痕、凹面に布目圧痕のみられる、厚さ2cm前後の平瓦片である。格子を斜めに貫く直線もみられる。

東側溝出土土器 (図版11~3、第37~40図)

弥生土器 (第37図)

甕 (142) く字形に外反する甕の口縁部破片で、内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

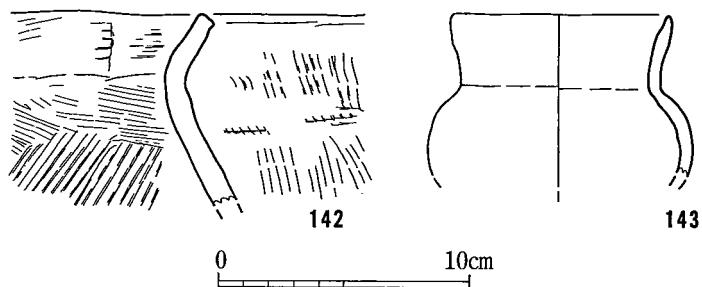
土師器 (第37図)

小形丸底壺 (143) 扁球形の体部から僅かに外開きの口縁部が立ち上がる。復原口径8.6cm、残存器高6.5cm、胴最大径10.6cmの大きさ。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、黄褐色に焼成されている。

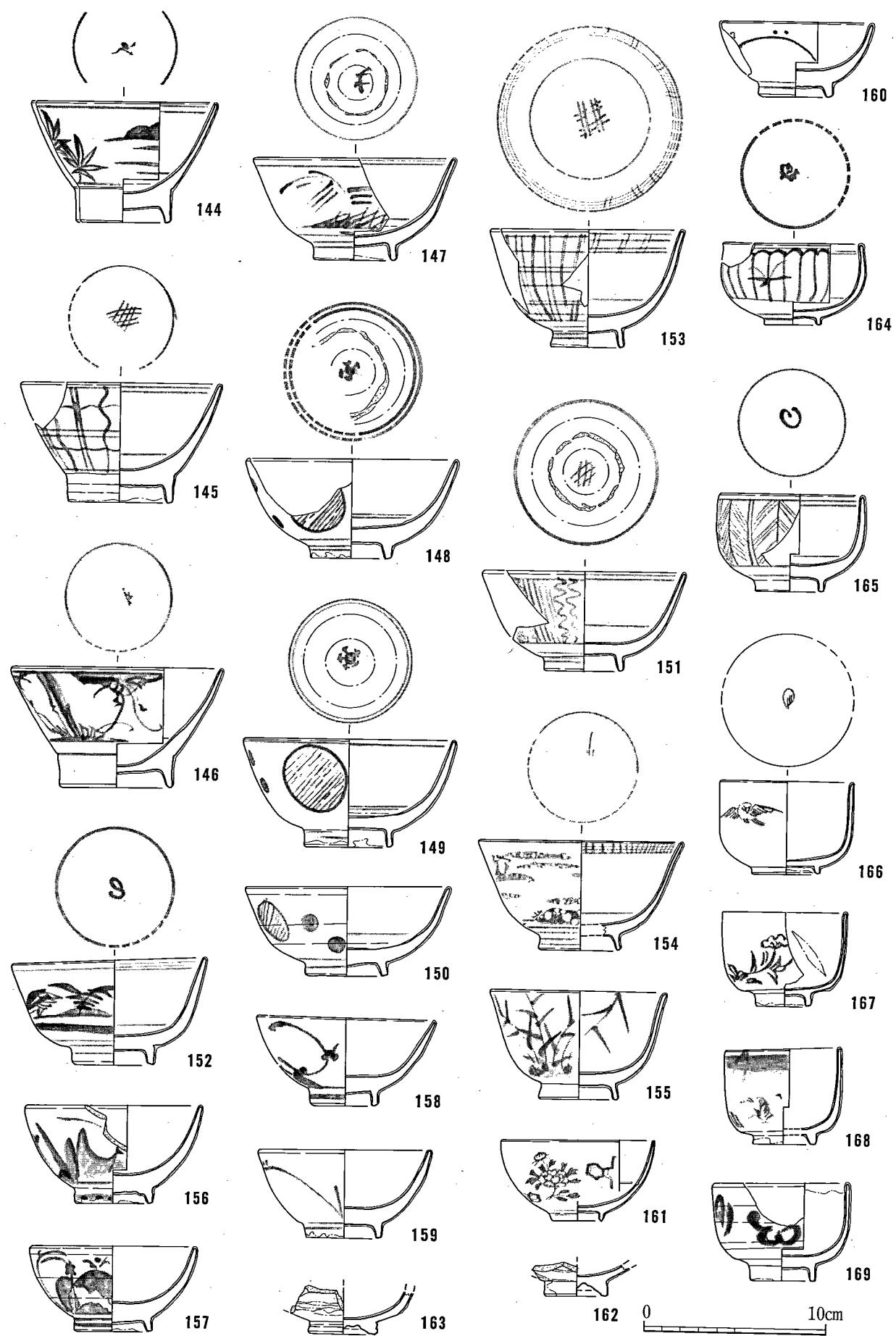
陶磁器 (第38~40図)

染付碗 (144~161・164~172) 144~146は高台が高く、口縁部が直線気味に開く広東形の碗である。口縁部内面に双直線、見込みに単直線が巡る。144は口径9.9cm、器高6.6cm、高台径5.4cmの大きさ。外面に紅葉と山水風景が描かれ、見込み中央に記号状に略した文字が描かれる。145は口径11.2cm、器高6.6cm、高台径6.0cmの大きさ。外面に蛇行する網目模様と双直線の格子模様が交互に重なる文様が描かれ、見込み中央に4本線の交差する文様が描かれる。146は口径11.8cm、器高6.6cm、高台径6.4cmの大きさ。外面に樹木・草と蝶らしい動物の絵、見込み中央に記号らしい文様が描かれている。146と同一文様の碗は他に2個体出土した。いずれも疊付以外に透明な釉がかかる。

147~151は見込みの釉を蛇の目に搔き取る、くらわんか茶碗の類である。147・151は端反り気味ながら直線的に開き、口縁部内面に双直線が巡る。147は口径11.3cm、器高5.6cm、高台径4.7cmの大きさ。外面に草の繁る水辺と飛ぶ鳥を描き、見込み中央にサ字状の記号が描かれる。151は口径11.4cm、器高5.5cm、高台径4.5cmの大きさ。外面には6条の平行線と2条の蛇行線が交互に配されて見



第37図 I 区東側溝出土土器実測図 1 (1/3)



第38図 I区東側溝出土土器実測図 2 (1/3)

込み中央に3条の平行線の交差する文様が描かれる。148～150は内彎気味に開く器形の丸型の碗で、外面に円文と2点が交互に3つ配され、148・149の見込みには2条圏線と中央に五弁花が描かれる。148は復原口径11.8cm、器高5.5cm、高台径4.5cmの大きさ。149は口径11.8cm、器高5.9cm、高台径4.9cmの大きさ。150は口径11.3cm、器高5.1cm、高台径4.6cmの大きさ。見込みの搔き取りは深めで、胎を一部削っている。

152～155は端反り気味に開く碗である。152はそのなかで反りの少ない碗だが、口径10.9cm、器高5.7cm、高台径4.6cmの大きさ。外面に樹木と水辺が描かれ、内面は口縁部に4条圏線、見込みに単圏線が配されて、中央にS字状の記号が付される。153は口径10.8cm、器高6.5cm、高台径4.1cmの大きさ。外面に双直線と单直線のそれぞれの格子が交差する文様が描かれ、口縁部内面に4条圏線と双直線の交差する格子文様、見込み中央には双直線の井桁文様が描かれる。154は復原口径11.5cm、器高6.0cm、高台径4.6cmの大きさ。外面に水辺と海老らしい文様が描かれ、口縁部内面に4条圏線と短直線を交差させる格子文様、見込み中央にも細い線描きの文様がみられるが、呉須と釉が馴染まずに釉が泡のように弾いている。155は半磁器のような焼成の碗で、口径10.0cm、器高6.0cm、高台径4.4cmの大きさ。外面と内面の一部に筈らしい文様が描かれ、見込み中央に2条のS字蛇行文が付される。

156・157もくらわんか碗の類である。半磁器のような焼成で発色が悪く、外面の文様は不鮮明である。内面は無文である。復原口径9.9cm・9.4cm、器高5.4cm・4.7cm、高台径4.4cmの大きさ。

158～160もくらわんか碗である。内面が無文で、外面に花卉文様が描かれる。158は口径10.0cm、器高4.8cm、高台径3.9cm、159は復原口径9.6cm、器高4.8cm、高台径4.2cmの大きさ。160は復原口径8.6cm、器高4.1cm、高台径4.2cmの大きさ。156～160の器高の低い碗はいずれも底部の器壁が厚めである。

161は内面が無文で、外面に牡丹と亀甲文が描かれる器壁の薄い碗。復原口径8.6cm、器高4.4cm、高台径2.8cmの大きさ。胎は透明感のある白で、透明な釉がかかる。

164・165は体部の低い丸型湯飲み碗である。164は復原口径7.8cm、器高3.2cm、高台径4.5cmの大きさ。菊花と蝶が外面に描かれ、見込み中央に五弁花のコンニャク印判がみられる。165は口径8.0cm、器高5.3cm、高台径3.8cmの大きさ。外面に綾杉文が描かれ、見込み中央に渦巻きの記号がみられる。発色はやや悪い。

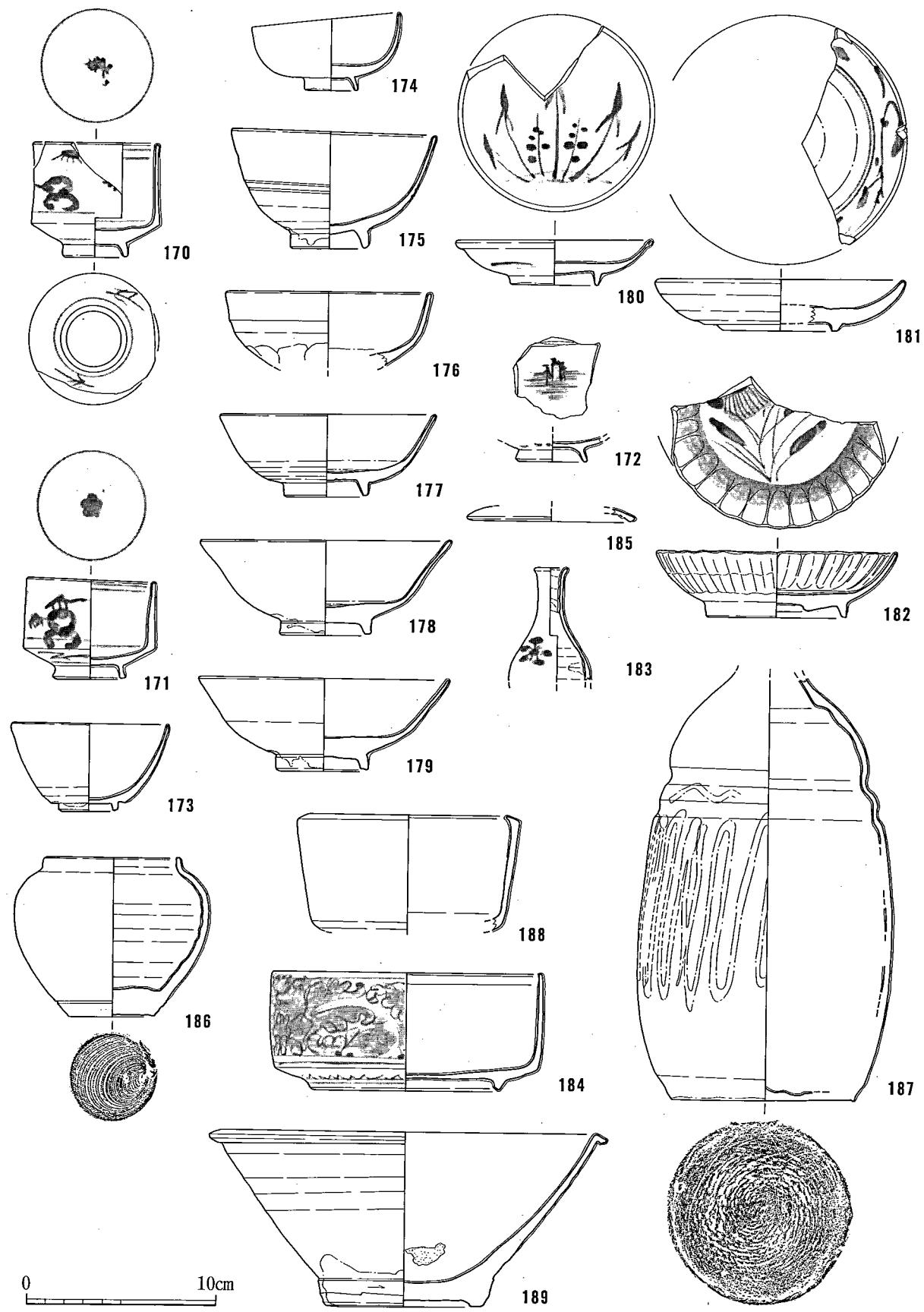
166～169は体部がやや深めな丸型湯飲み碗である。166は口径7.5cm、器高5.1cm、高台径3.8cmの大きさ。外面に雀らしい鳥と束ねた稻株？が一対ずつ描かれ、見込みに鳥羽根状の記号がみられる。167は口径7.0cm、器高5.2cm、高台径3.1cmの大きさ。168は口径6.6cm、器高5.2cm、高台径3.5cmの大きさ。ともに外面の文様は草花が描かれ、168では源氏香文と交互に3つ配されて口縁部下に濃の帶がみられる。169は口径7.7cm、器高5.4cm、高台径3.7cmの大きさ。外面に梅花文と意匠不明の文様が交互に3つ配される。

170・171は筒型の湯飲み碗で僅かに体部が括れる。170は口径6.8cm、器高6.0cm、高台径3.5cm、171が口径7.0cm、器高6.3cm、高台径3.9cmの大きさ。ともに外面の文様は岩と飛ぶ鳥の群を描き、高台脇に記号のような文様を配している。また見込み中央に五弁花のコンニャク印判が押されている。

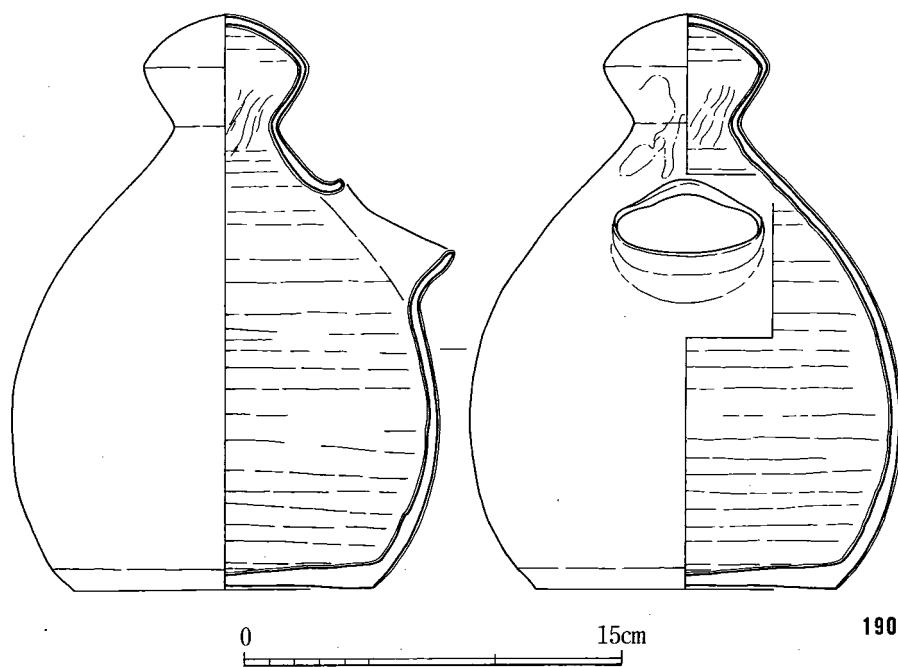
172は高台がかなり開き、器壁が薄いことから、蓋かも知れない。破片が小さくて外面の文様は不

明だが、見込みに水中の岩松らしい絵が描かれている。高台径3.8cmの大きさ。

陶器碗 (162・163) 162・163はともに胎が灰色で外底部が露胎の底部破片。内面に灰釉がかか



第39図 I区東側溝出土土器実測図3 (1/3)



第40図 I 区東側溝出土土器実測図 4 (1/3)

り、外面には鉄釉とイッチン掛けのみられる碗である。高台内側が笠先で斜めに削り出されて、中央に突起をもつ渦状の段がみられる。162の高台径3.8cm、163の高台径3.6cmの大きさ。

青磁碗 (173) 緑灰色の釉で細かな貫入がみられる碗で、露胎の高台は脇が斜めに削られている。復原口径8.5cm、器高4.6cm、高台径3.2cmの大きさ。

青磁鉢 (188) 筒形の体部で口縁端部が内側につままれたように拡張する鉢で、火入れかも知れない。復原口径10.2cmの大きさ。外面と口縁部内面に淡い緑灰色の釉がかかる。

灰釉碗 (174～177) 174は体部がやや浅めな丸型碗で、歪みを生じている。幾分か青みを帯びた灰白色の釉がかかる。口径8.0cm、器高3.8cm、高台径3.0cmの大きさ。175は口径10.5cm、器高6.2cm、高台径4.2cmの大きさの碗。灰色の胎で、釉は発色が悪く黄緑味のある褐色を呈する。

176・177は見込みの釉を蛇の目に搔き取られる、くらわんかタイプの碗である。176の外面のヘラ削りの痕は明瞭に段を残す。復原口径11.0cmの大きさで、黄茶褐色の釉がかかる。177は復原口径11.5cm、器高4.3cm、高台径4.5cmの大きさ。渴灰色の釉がかかる。

灰釉鉢 (189) 輪高台の底部から口縁部へ直線的に開く鉢で、口縁端部は短く屈折して外側に垂れる。口径21.1cm、器高9.2cm、高台径8.5cmの大きさ。体部下半と高台部はヘラ削りされる。細砂粒を若干含む黄灰色の胎で、外底部を除いて灰黄緑の釉がかかる。

染付皿 (180～182) 180は玉縁の小皿で、口径10.6cm、器高2.3cm、高台径4.7cmの大きさ。内面には沢瀉が描かれ、外面には水を表す簡単な絵が描かれる。181はくらわんか手の皿である。復原口径13.2cm、器高2.7cm、高台径6.4cmの大きさ。縁文様に花卉が描かれている。182は輪花皿で、蛇の目四形高台が付く。復原口径12.8cm、器高3.4cm、高台径7.4cmの大きさ。見込みに草花文が描かれ、縁は見込み側に濃の帶が波状になり鉄錆の口紅が引き締めた感じを与える。

染付神酒徳利 (183) 復原口径1.8cm、残存器高5.9cm、胴最大径4.4cmの大きさ。外面に梅花文

が描かれる。

染付鉢 (184) 浅い筒形の鉢で、復原口径14.2cm、器高6.2cm、高台径10.0cmの大きさ。外面に草花文、高台脇に鋸歯文を描いている。口縁端部内面が露胎で、他は乳白色半透明の釉がかかる。

鉄釉碗 (178・179) ともに見込みの釉を蛇の目に搔き取られるくらわんかタイプの碗である。法量は同規模で、復原口径13.8cm、器高4.9cm、高台径4.9・5.0cmの大きさ。口縁部は直線的に開き、高台には釉をかけないが、暗茶褐色の釉がかかる。

鉄釉蓋 (185) 復原口径9.0cmの大きさの蓋口縁部破片で、端部内面は露胎。釉は暗茶褐色を呈し、内天井の釉に別個体の一部が融着している。

鉄釉壺 (186) 復原口径7.4cm、器高8.4cm、底径4.5cm、胴最大径10.4cmの大きさの、薬味壺。口縁部は短く直立し、底部の器壁は厚い。糸切り底の底部と口縁部内面は露胎で、他は暗茶褐色の釉がかかる。

鉄釉瓶 (187) 口頸部を失うが、体部に2段の括れをもつ瓢形の瓶で徳利であろう。底径9.7cm、胴最大径13.4cm、残存器高22.4cmの大きさ。静止糸切りの平底の外底面は露胎で、他は暗茶褐色の釉がかかり、胴部に縦に長い波状文、括れ部に短い横方向の波状文が灰白色のイッチン掛けで描かれる。

鉄釉洩瓶 (190) 底径12.3cm、器高22.8cm、胴最大径17.7cmの大きさ。どっしりとした下膨らみの体部に、掌に納まる程度の頭部が付き、肩部上位に受け口が開く。頭部は径6.6cm、高さ5.0cm弱、受け口の径5.5～6.0cmの大きさ。外面は回転ナデ調整されて、内面は指頭痕の起伏が残るヨコナデで調整される。糸切り痕が僅かに残る平底の外底面は垂れ落ちた釉を削り取っているが、外底面以外に暗茶褐色の鉄釉がかかる。小石原焼き系統であろう。

これらの土器類では、口縁部内面が無釉の染付鉢や、蛇の目に見込みの釉を搔き取るくらわんか手の碗や皿などに18世紀後半頃の様相をみると、広東タイプの染付碗や小丸型湯飲み、型紙絵付けの皿など19世紀前半頃の資料も多数みられる。更に量的には少ないが、繊細な文様を有する銅版転写絵付けとみられる明治期後半を代表するような資料も含まれている。

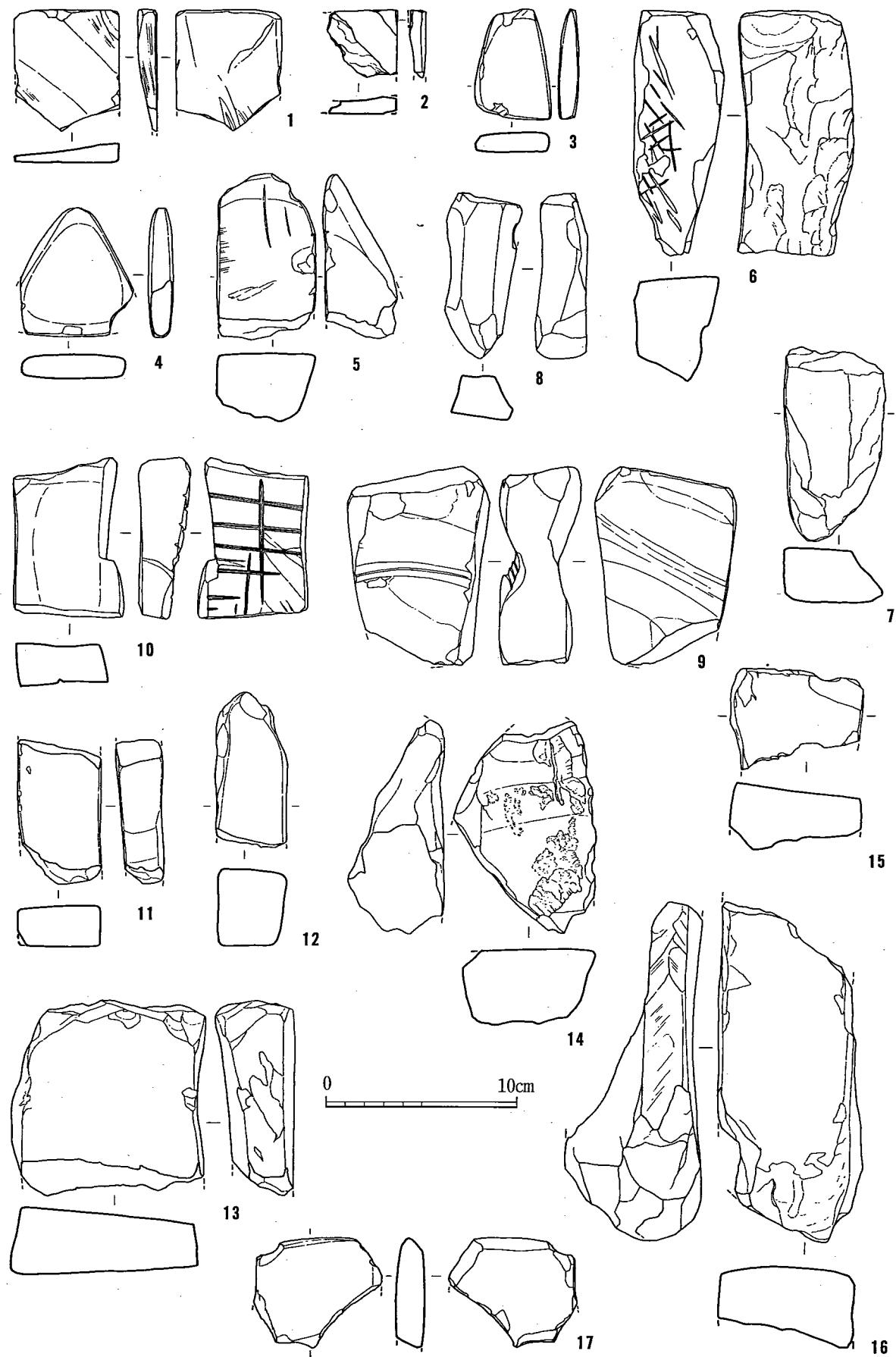
石器・石製品(図版14、第41図)

砥石 (1～17) 1～15は北側溝、16・17は東側溝から出土した。1・2は粘板岩質の石材を用いた扁平な板状の砥石で、表裏の平坦面は砥面に使用される。また狭長な端部面には切断痕がみられる。1は残存長6.4cm、幅5.5cm、厚さ1.0cm、重量44.1g、2は残存長3.0cm、残存幅3.7cm、厚さ0.9cm、重量11.4gを測る。

3・4・17は安山岩質凝灰岩製の小形扁平な砥石で、表裏両面が砥面に使用されるほか、側縁面にも使用痕がみられる。3は長さ5.8cm、幅4.1cm、厚さ1.1cm、重量22.9g。4は長さ6.8cm、残存幅6.1cm、厚さ1.3cm、重量47.4gを測る。17は残存長5.8cm、幅6.8cm、厚さ1.5cm、重量47.6gを測る。

5～7・11は凝灰岩製の方柱状の砥石である。5は先端側が薄く尖り、火熱を受けているが、残存長8.7cm、幅5.2cm、厚さの現存値3.7cm、重量186.2gを測る。6は長さ12.9cm、幅6.0cm、厚さ4.8cm、重量453.3gを測る。砥面の一つに刃先傷が集中する。7は長さ10.3cm、幅5.3cm、厚さ2.9cm、重量203.0g。11は現存長7.6cm、幅4.4cm、厚さ2.5cm、重量126.4gを測る。いずれも4面が砥面に用いられている。

2 I 区の遺構と遺物



第41図 I 区出土石器実測図(1/3)

8・12は凝灰岩質砂岩製の方柱状の砥石である。8は頻度の使用で4面ともに中程が深く湾曲する。長さ8.7cm、幅4.0cm、厚さ2.7cm、重量74.2gを測る。12は現存長8.2cm、幅3.8cm、厚さ4.1cm、重量205.7gを測る。

9・10は安山岩系の凝灰岩質砂岩製の板状砥石である。9は長さ10.4cm、幅7.5cm、厚さ4.3cmの大きさ。平坦な表裏両面ともに中程が深く凹み、刃先傷や段が残る。欠損部や焼けた部分がみられ、重量は406.1gを測る。10は長さ8.4cm、幅5.2cm、厚さ2.8cm、重量164.5gを測る。平坦な片面は中凹みで、片面は直線的な刃先傷が平行して刻まれ、交差する刃先傷もみられる。また両側縁の面は砥面にされるが、掌に握る際に利便な掛かりらしい突起が片方に残る。

13～16は凝灰岩あるいは凝灰岩質の石材を用いた砥石で、置いて使用する砥石であろう。13は扁平な形状で、残存長10.3cm、幅10.3cm、厚さ4.2cmの大きさ、重量571.9gを測る。平坦な表裏面と一方の側縁が砥面に使用されて凹む。14は破損面を砥面に再使用する砥石で、長さ11.2cm、幅7.5cm、厚さ5.1cm、重量350.5g。15は小破片で、残存長5.3cm、幅6.9cm、厚さの残存値3.5cm、重量115.8gを測る。16は残存長17.9cm、幅7.6cm、厚さ7.2cm、重量689.0gを測る。平坦な片面が砥面で、両側縁には刃による削り痕が顕著に残るもの砥面には使用されていない。

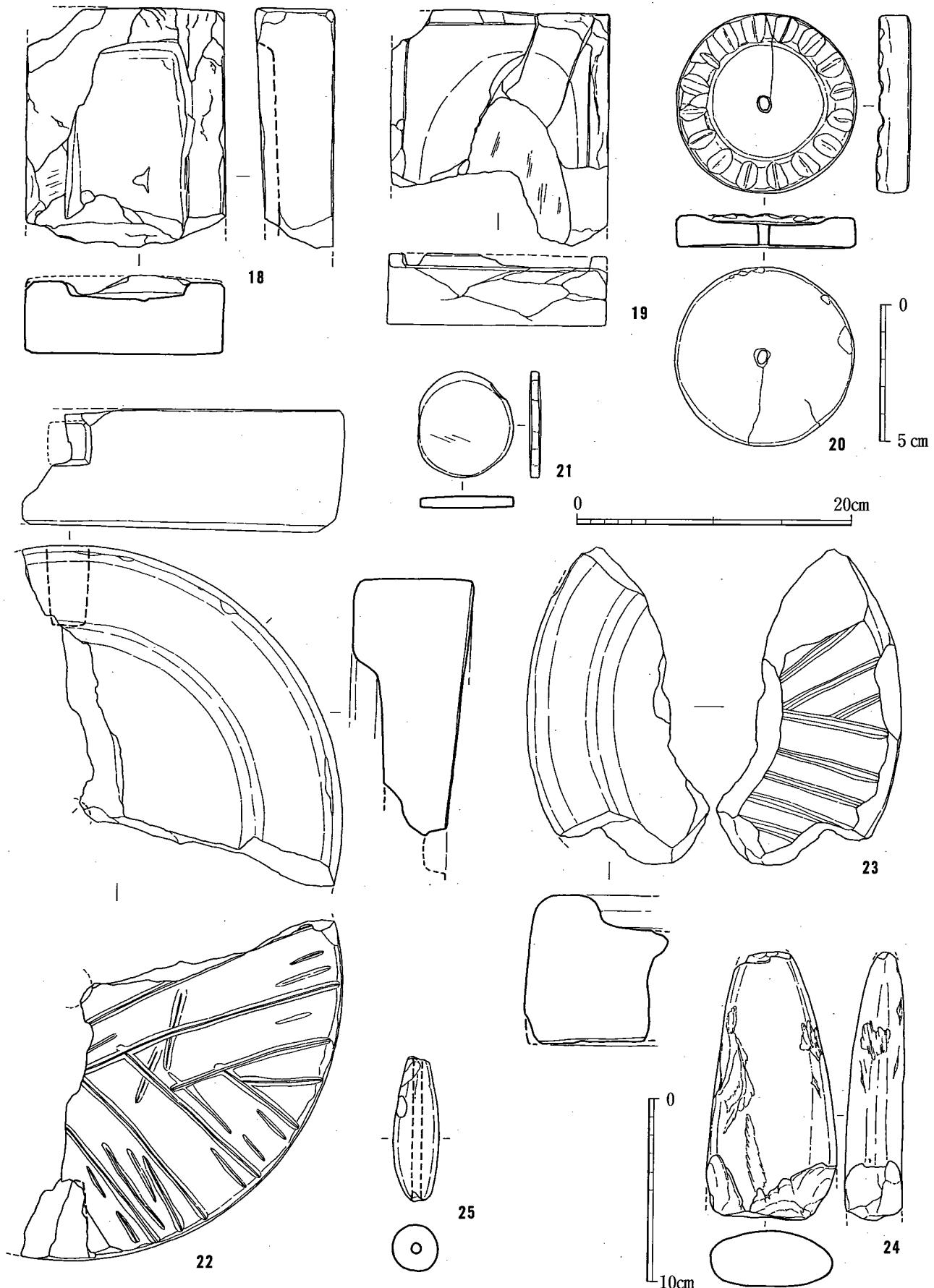
硯（18・19）ともに北側溝から出土した。凝灰岩ならびに凝灰岩質砂岩を用いた硯の陸部分の破片で、海側は残らない。18は残存長8.7cm、幅7.3cm、厚さ2.9cmの大きさ。陸部分は1.0～1.5cm、深さ0.5cm程の深さに縁を残して削り出されて、使用による磨耗で中央部が凹む。19は残存長8.5cm、幅8.0cm、厚さ2.6cmの大きさ。幅0.5～0.6cm、高さ0.5cm程の縁を残して削り出された陸部分は頻度の使用で中凹みになっている。重量は275.6gと173.0gを測る。

円盤状石製品（20・21）20は東側溝、21は北側溝から出土した。20は直径6.5cm、厚さ1.2cmの円盤で中央に0.4×0.5cmの楕円形の孔が穿孔される。片面は僅かに中凹みながらも平坦面、片面は幅1.0～1.3cmの縁を残して内側が0.2～0.3cm凹む。縁の面は放射状に16ヶ所の刻み目が刻まれ、花弁状を呈する。周縁はほぼ平らで、角は斜めに削られる。肌理の細かな凝灰岩質砂岩を用いている。重量56.4gを測る。21は安山岩質凝灰岩の扁平で、径3.5×3.9cmの楕円形を呈する円盤。両面ともに平滑に研磨されて、片面にはコンパスで刻まれたような細い線が刻まれる。周縁は削り整形されて小さな面が続くが、未完成品であろう。重量7.6gを測る。

石臼（22・23）ともに北側溝から出土した上臼片で、摺り面に分割放射状の目が刻まれている。22は安山岩製の高さ9.0cmの、全体の1/4程の破片で、外縁から復原すると直径40.0cm前後であろう。摺り面は中央の軸孔側に向かって凹み、目の刻み直しの痕跡もみられる。上面は5.0～6.5cm幅、高さ2.0cm程の縁を残して内側が凹むが、全体に研磨されて平滑である。側縁も平滑に研磨されるが、上臼を回す軸棒を挿入する挽手孔が穿たれている。挽手孔は一辺3.0cm、深さ5.5cmの規模であろう。重量5.22kgを測る。23は石英粒を多く含む安山岩製の高さ11.0cmの破片で、残された外周から復原して直径40.0cm前後の上臼であろう。摺り面は中央の軸孔側に向かって凹み、目は深めに刻まれる。上面は4.0～5.0cm幅、高さ2.0cm強の縁を残して内側が凹むが、全体に研磨されて平滑である。重量3.44kgを測る。

磨製石斧（24）蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部を欠損する。残存長14.8cm、幅6.7cm、厚さ3.3cmの大きさ。重量564.0gを測る。頭部がやや尖り、断面楕円形のタイプで、縄文時代後期にみられる磨製石斧である。北側溝から出土した。

2 I 区の遺構と遺物



第42図 I 区出土石器・土製品実測図(1/2・1/4・1/3)

土製品(図版14、第42図)

管状土錘(25) 東側溝の北寄り出土した。エンタシス状に膨らむ管状土錘で、長さ5.3cm、外径1.7cm、孔径0.3cm、重量12.2gを測る。胎土に細砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。

鉄製品(図版13-2、第43図)

図示する5点以外に脆弱な破片も出土したが、図示しない。

なお1~4は北側溝から、5は東側溝から出土した。

鉢金具(1) 一辺6.1cm前後、厚さ0.3cmの方形板状金具と、その中央を貫く太さ1.1cm程、長さ2.0cmの六角棒の鉢で、鉢の頭は直径2.2cm、厚さ0.8cmの六角錐状を呈する。

楔(3) 先端部を失うが、残存長7.2cm、幅1.9cm、厚さ0.7~0.8cmの大きさの楔である。

用途不明鉄製品(2・4・5) 2は幅2.5~2.7cm、厚さ0.2cmの板状で、両端を失うため全体の形状は分からぬが、一方は丸みをもって直角方向に曲がる。4は断面形が円形に近い棒状の先端部破片で、基部側を失う。5は厚さ0.5cmの板状で、長さ3.9cmを有するが、中程の幅1.9cmで、両端部の幅が1.1cmに窄まる鉄製品である。

鉄 淬(図版13-2) 北側溝から8.6cm×8.3cm×4.1cm大で、重量160.1gを測る1点と、東側溝から6.9cm×5.4cm×5.4cm大で、重量116.1gを測る1点が出土した。

銅製品(図版13-2、第43・44図)

耳 環(6) 太さ3.2mm×3.5mmの楕円形断面の丸棒を、外径19.0mm×16.2mmの大きさの環に曲げたもので、1.8mmの隙間がある。表面は綠鏽が吹き、金銅装か否かは分からぬ。東側溝から出土した。

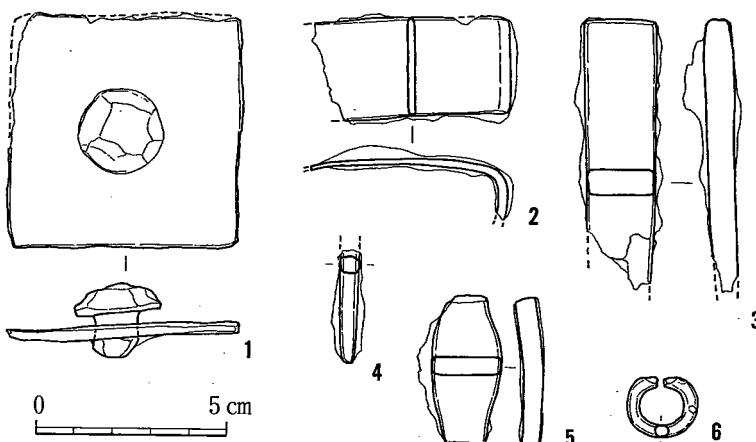
古 錢(第44図) 「寛永通寶」で、裏面には「文」字がある。外径25.5mm、厚さ1.3mmの大きさで、5.9mm四方の孔が空く。北側溝から出土した。

1号小溝(北東小溝)

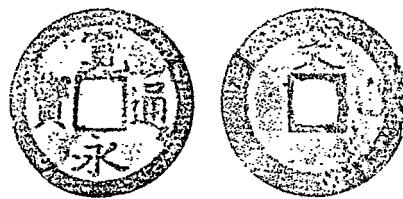
区画溝の北東隅に向かう幅0.7~2.0m、深さ0.1~0.4mの断面U字形の小溝で、長さ9.8m分を発見した。黒茶褐色の粘質砂が堆積していた。主軸方向はN35°30'E方向を向く。

出土遺物

弥生土器小片、土師器片、陶磁器片、土師質土器片などが出土した。図示しえる資料はないが、土師質土器片には北側溝出土の土器と同一個体らしい破片も含まれているので、同時期に埋没したものと考えられる。



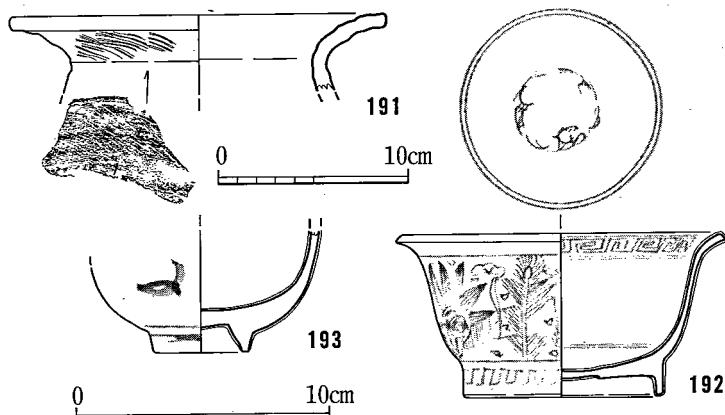
第43図 I区出土鉄製品実測図(1/2)



第44図 I区区画溝出土古錢拓影(実大)

2号小溝（北側小溝）

I区の北端にあり、区画溝の北溝から約1.5m北側に位置する。長さ2.5m分が発見されたが、東側は僅かな段落ちで削られて残らない。上縁での幅0.6m～1.0mを有していて、調査区西端で最大深さ0.3mを測る。淡めの黒茶褐色粘質砂が堆積していた。



第45図 I区 2号小溝出土土器実測図(1/3・1/4)

出土遺物(図版13-2、第45図)

須恵質壺 (191) 口縁部が強く外反する口縁部破片で、端部上面は僅かに凹む。復原口径20.0cmの大きさ。口縁部外面に粗いハケ目状の痕が残り、内外面ともにヨコナデ調整される。胎土に砂粒を殆ど含まず、黒灰色に焼成され、口縁部に自然釉が付着する。

染付鉢 (192) 復原口径13.2cm、器高6.5cm、高台径8.0cmの大きさ。蛇の目凹形高台が付き、口縁部が外反する深めの鉢である。体部外面に蓮花などを描き、高台外面に櫛歯を巡らせていている。内面は口縁部に雷文を巡らせて、見込み中央に省略化された松竹梅の円文が描かれている。

染付碗 (193) 口縁部を失う丸型湯飲み碗で、高台径3.9cmの大きさ。体部外面と高台外面に文様が描かれるが、釉は乳白色半透明である。

192の染付鉢にみられる、蛇の目凹形高台は18世紀以降に出現するもので、文様などの省略化からみて、明治期以降であろう。

3 II区の遺構と遺物

II区では西端部と北部で主に遺構が発見された。発見された土坑のうち堆積土が黄灰色っぽい色調で、締まりがなく軟らかな状態のものについては、ごく最近の攪乱坑と判断して掘り下げていないうが、堆積土が締まった状態の土坑でも遺物を伴わない土坑が幾つかあり、これについては特に名称を与えていないが深さ10cm前後と浅い例が殆どであった。また柱穴状ピットがいくつか発見されたが、北端で発見された建物跡は調査時に同一遺構を構成する柱穴と判断できたものの、他の柱穴状ピットでは判断しえなかった。

II区では、建物跡1棟、土坑4基、土壙墓1基、大溝1条、小溝2条がある。

1. 掘立柱建物跡**1号建物跡(図版15-1、第46図)**

調査区隅に発見された柱穴列で、1×3間の建物跡である。北側はIII区との間に流れる水路を保全した非調査区、西側は調査区外のため、桁行、梁間がそれ以上の可能性もある。柱間間は均等ではないが、概ね1.90m～2.00mである。柱穴はいずれも暗めの黄茶褐色土が堆積していたが、直径30cm前後、深さ7～15cmとあまり深く残らず、柱痕も確認しえない。

なお、柱穴内からはなんらの遺物も出土しなかった。

2. 土 坑

1号土坑（図版15-2、第47図）

調査区の中央部の西寄りで発見された、不整方形プランの土坑である。上縁では南側で突出部をもったプランに検出して掘り下げたところ、中途で、2つの遺構が重複していることが判明した。南側の土坑は、長さ3.40m、幅1.20~1.55mを測り、深さは0.45m前後だが、中央部西寄りの床面が高く、東側に傾斜する部分と西側のピット状部分に分かれる。堆積土は暗灰茶褐色の粘質砂で、床面などは淡茶褐色ないし淡乳白色の粘質砂である。

北側の土坑は南側土坑と同じく、西寄りの部分の床面が高く、東側に深く傾斜する部分と西側のピット状部分に分かれる。堆積土は南側土坑と殆ど同色だが、僅かに土質が堅い。

東西2.70m、南北1.85m以上。深さは南側とほぼ同様である。

出土土器

出土土器片の大半は弥生後期末頃の土器片、古式土師器片である。この他に須恵器片が数片あり、鉢らしい土師質土器片、碗らしい染付片も僅かに含まれているが、図示しえない。

鉄製品（図版21-2、第60図）

不明鉄製品（1）両端を欠損するために本来の形状は分からぬが、0.4cm角で、残存長4.0cmの大きさ。角釘などの可能性があろう。

2号土坑（図版15-3、第47図）

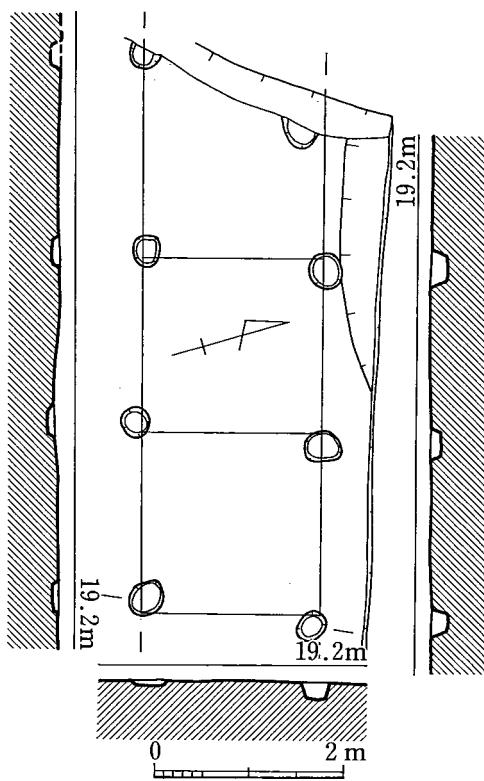
1号建物跡の南東東側に隣接して位置する、楕円形プランの土坑で、長径2.20m、幅1.55m、深さ0.10~0.13mを測る。主軸方向N9°Eを向く。坑内には暗黄茶褐色砂質土が堆積するが、南寄りには川原石が集中し、一部の石の隙間に粘土が詰まる。床面は平坦である。

出土遺物

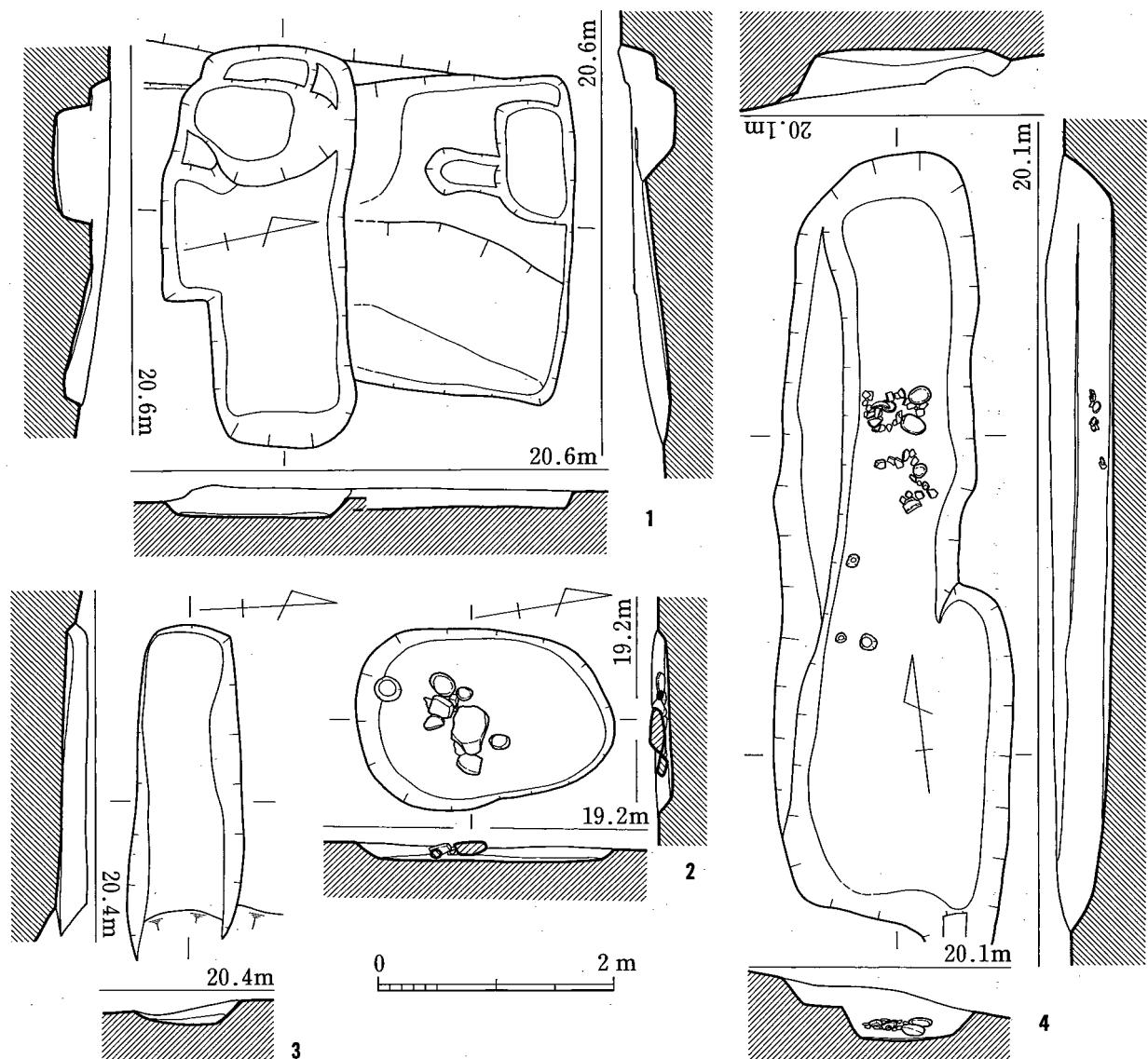
10片程の土器片が出土した。弥生後期末頃と思われる内外面にハケ目調整のみられる甕の小破片、やや器壁の薄い高杯若しくは椀らしい小破片が含まれている。いずれも図示しえるような資料ではないが、弥生後期末ないし古墳時代初頭頃であろう。

3号土坑（近世墓下土坑）（図版16-1、第47図）

II区南東隅の旧地境で、I区との境目に墓地と言っていた部分は、僅かに盛り上がった地形であった。しかし掘り下げたところ土師質の焜炉若しくは七厘らしい破片や瓦片などが含まれていた



第46図 II区掘立柱建物跡実測図(1/80)



第47図 II区の土坑実測図(1/60)

他には遺物は出土せず、堆積土は表土から漸次的に色調が淡くなる程度の変化がみられるのみで、淡黄茶褐色粘質砂の面に至って東寄りの部分に長方形プランの土坑1基を確認したにとどまる。

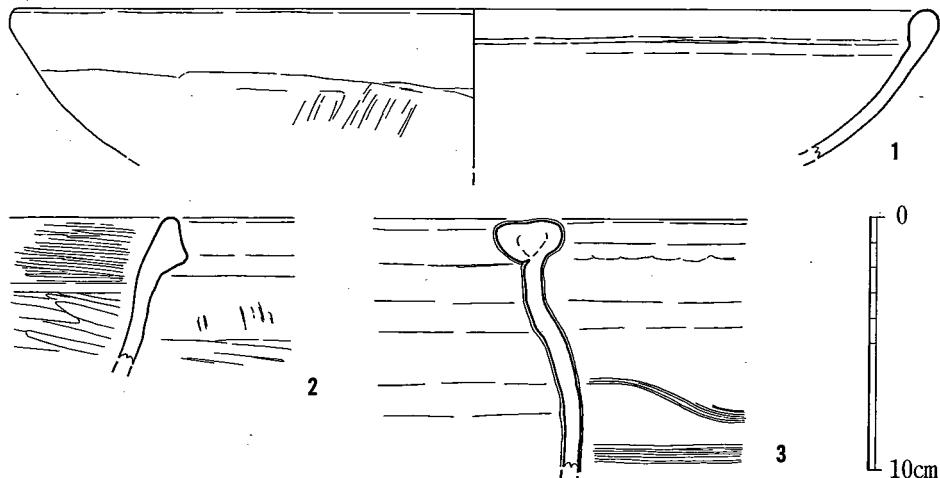
土坑は、主軸方向N87°Wを向き、東側を削られる。残存長2.80m、幅0.70~0.95m、深さ0.10~0.25mを測る。床面はやや平坦で、東側が僅かに低い。

出土遺物

20片程の土器片が出土した。弥生後期土器片、土師器片、須恵器片などが含まれ、図示しえるような資料はないが、最も後出する土器片は瓦質土器片である。中世ないし近世のものであろう。

4号土坑（溝状土坑）（図版16-2・3、第47図）

3号土坑の約10m北側に位置する、不整長方形プランの土坑で、主軸方向N6°30'Eを向く。東側は斜面の傾斜のために上部を削られて浅いが、上縁での南北長6.50m、北側半分の東西幅1.50m、南側半分の東西幅2.00mの広さがある。北側と南側半分で幅が異なり、プランにも段があるため、



第48図 II区4号土坑出土土器実測図(1/3)

重複関係を精査したが差異はみとめられなかった。床面は南北ともに平坦で、僅かに南側が浅く、深さ0.40~0.55mを測る。南北長5.90m、北側半分の東西幅0.75m、南側半分の東西幅1.45mの広さがある。北側半分の中程に、土器片と川原石などの集中する部分がみられた。

出土遺物（第48図）

土師質焙烙（1） 口縁部を含む破片資料である。浅く内彎して広がる体部から口縁部が直線的に開いて、口縁端部が内側に丸く肥厚する。体部外面はヘラ削りされるが、叩き目痕が僅かに残り、体部上半と口縁部はヨコナデ調整され、内面は器面が風化するがヘラミガキ調整であろう。耳は分からぬ。胎土に細砂粒を含み、茶褐色に焼成されていて、外面には煤が付着する。復原口径37.4cm、残存器高5.9cmの大きさ。

土師質鉢（2） 口縁部破片で、外反する口縁部は断面三角形に肥厚する。体部は内彎しながら開くようである。体部外面は叩き目整形の後にヘラ削り調整され口縁部はヨコナデ調整、体部内面はヘラミガキ調整されている。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、褐色に焼成されるが、口縁部内面に赤色顔料が塗布され、外面に煤が付着する。

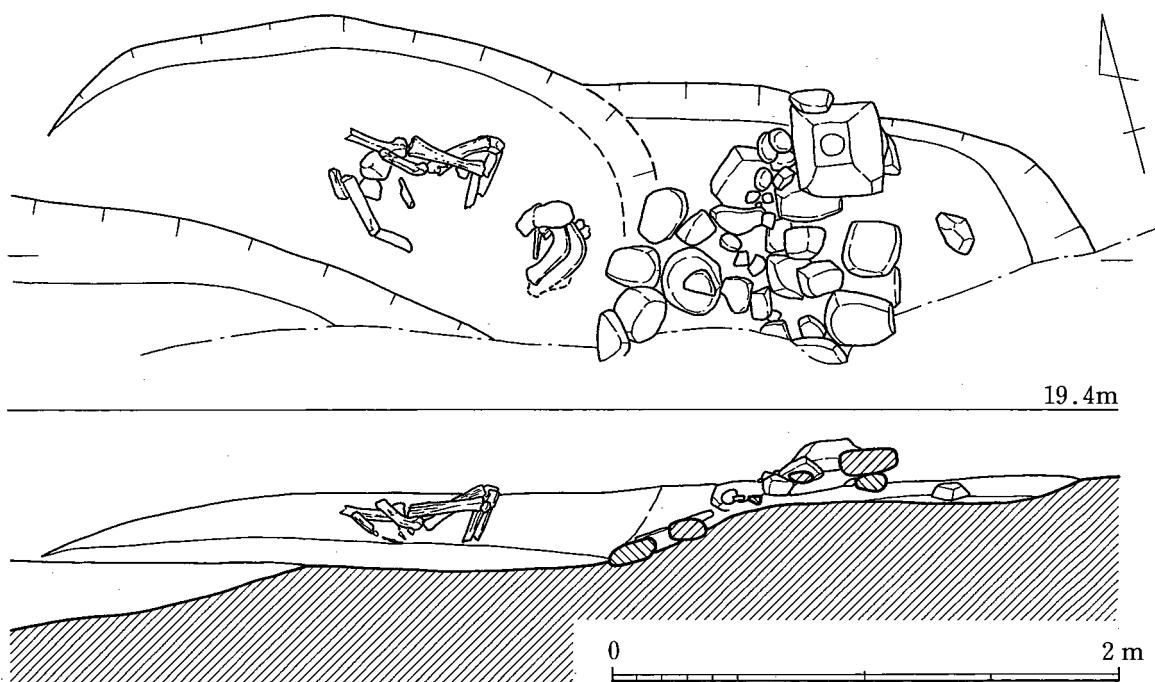
なお、接合しない破片のなかに同様の口縁部破片で肥厚する幅がもう少し広い例があり、同じく口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。また、刻み目凸帯の巡る体部下半部の破片も出土した。

実測図で示さないが、かなり径が大きな鉢あるいは甕と思われる幅4.0cm、厚さ0.5cm程の扁平な凸帯を有する、器壁の厚さが0.8~0.9cmの胴部破片もある。内外面ともにヨコナデ調整され、外面の凸帯とその上側に赤色顔料が塗布されている。

陶器甕（3） 口縁部が直立気味に立ち上がる破片で、器壁が厚く、端部は内側に巻いたように肥厚する。胴部は叩き整形されて全体にヨコナデ調整されて、叩き目などは消される。肩部外面に波状文と横走するカキ目がみられる。砂粒を殆ど含まない黄灰褐色を呈する胎で、口縁端部は露胎だが、内外面に紫味のある暗茶褐色の釉がかかる。

この他に、瓦質火鉢の台部破片や焜炉（七厘）らしい土師質の破片、サナとみられる円盤状の破片が出土している。

サナは、復原径が15~16cm前後、厚さ1.0cmの円盤状破片で、皿状に内彎する。内外面ともにナデ調整され、直径1.6cmの円孔が穿孔される。穿孔の数は外側に12つ前後、内側に6つ程であろう。胎



第49図 II区土壙墓実測図(1/30)

土に細砂粒・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

瓦質火鉢は、復原裾外径17.0cm程の大きさで、裾部は内弯する。

これらの土器類は、I区区画溝出土土器類に類例がみられることや、焙烙の特徴からみて19世紀以降で、明治期に入る可能性が高い。

3. 土 壙 墓

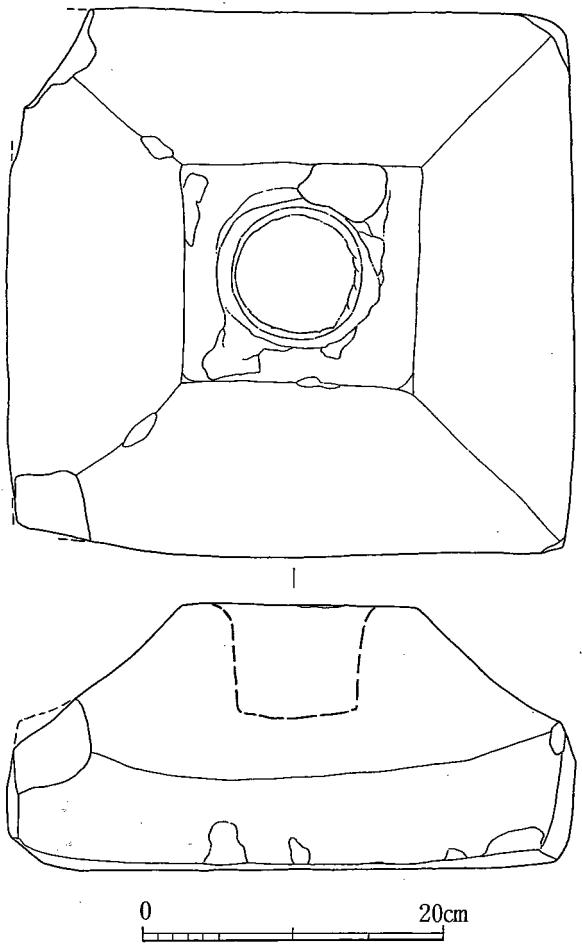
1号土壙墓 (図版16-4、第49図)

II区調査区の北東部で発見された遺構で、1号溝によって南側を削られる。排土置き場の関係で、調査区を充分に拡げられなかった部分の隅部に、五輪塔の一部を含む集石が発見されたが、この集石部分の西側に重複する。集石は1.00m四方程の範囲にまとまり、西側に幾分か崩れたような状況で発見された。集石を含む掘り込みのプランを検出する際に、1号小溝の一部と判断していた部分に動物遺存体が発見されて、土壙墓と分かったが、集石部分との境については判断できなかった。状況からみて土壙墓が集石よりも後出する可能性は高いが、明確なプランは確認できず、長径2.50m、幅1.00m以上の楕円形プランであろうか。深さは20~30cmである。

坑内の中央に膝を折り曲げた状態の下肢骨が発見されたが、前肢らしい骨も近接して重なった状態であった。動物遺存体についての記述は後章に譲る。また集石に近接して発見された、重なった状態の木製品らしい遺物は脆弱で、整理中に紛失した。

石製品 (図版22、第50図)

五輪塔 (1) 凝灰岩質安山岩を用いた火輪で、幾分か風化が進む。軒隅部分を一部欠損し、総高17.5cm、最大幅36.0×37.5cmの大きさ。頂上は14.5×15.5cm程の広さで、直径8.0~9.0cm、深さ7.5cm程の円筒状ほぞ孔が穿たれる。降軒は緩やかだが、反りをもって整えられる。軒幅は6.0cmを測るが、隅部に向かって反り上がりながら幅が広くなり、8.0cm前後の幅をもつ。軒先はやや内傾加



第50図 II区出土石製品実測図 1 (1/5)

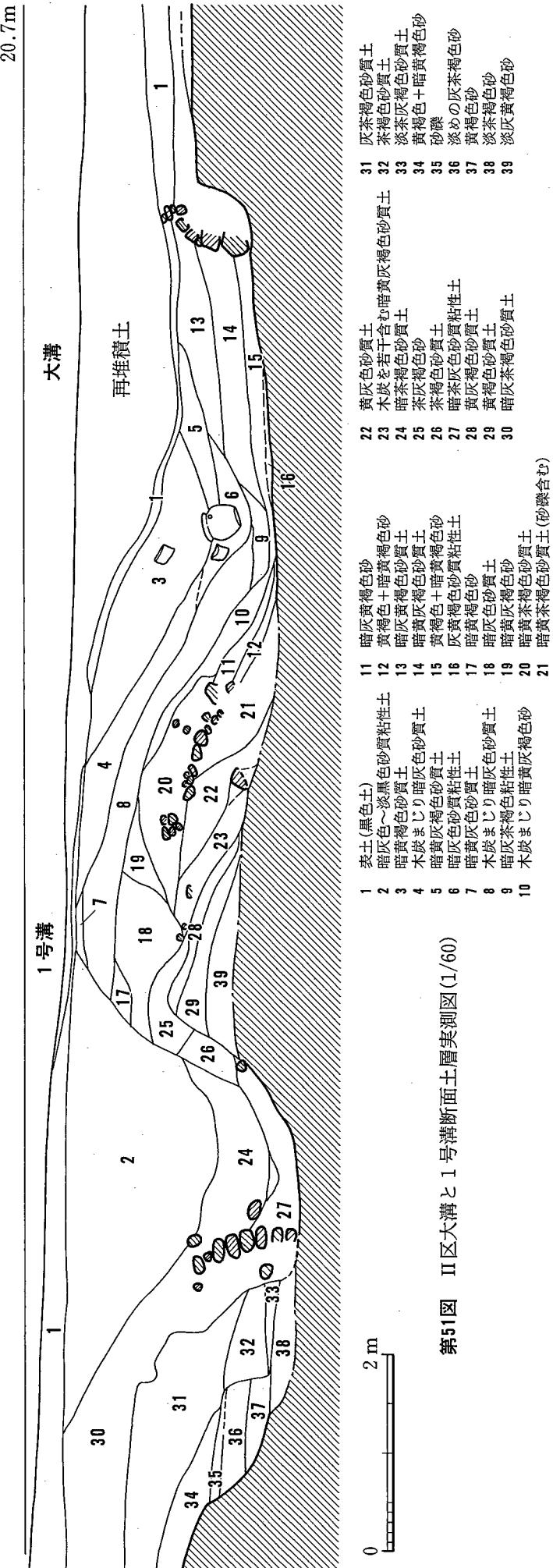
減に切り落とされる。下面は34.0cm×35.0cm程の広さで、ほぼ平坦だが、削り調整痕が明瞭に残る。

火輪の形態から中世14世紀～15世紀前半頃につくられたものであろうが、中世期の遺物は後述する1 b号溝などに若干含まれるもの量的には少なく、他の五輪塔の部材が遺跡内にみられないことから、集石が墓を意識するものではあっても、近傍で崩落した塔の部材を転用したに過ぎないのかも知れない。

4. 溝状遺構

大溝(図版17-3・18-1・2、第51・52図)

II区の北端部に位置する溝で、上面での幅が6.5～9.0mをもつことから大溝とした。20.0m程の長さを確認したが、主軸方向はN66°Wを向き、



両端とも調査区域外に続く。深さは約1.0mで、溝底には砂礫層が露出している、緩やかに中程が凹む断面U字形に掘り込まれている。溝肩部のうち北側岸の西端部などには安山岩の川原石を積み上げた石垣が設けられている。石垣は基底部から煉瓦積みのように積み上げられていて、3～4段に残るが裏込めなどの施設は特に認められず、隙間に小さな石を詰める程度である。調査区端の土層観察面では、80cm程の高さに塊石がみられるので、当初はこれより更に高く積み上げられていたものと推測される。また対岸になる南側肩の西端部などでは石垣の崩壊した状況が窺えた。

溝内を埋める堆積土は主として南岸側から傾斜している。

出土遺物

陶磁器（図版20・21-1、第53・54図）

染付瓶（4） 4は口径4.1cm、器高25.3cm、高台径9.4cm、胴最大径が16.0cmの大きさの棘茎形の徳利瓶である。

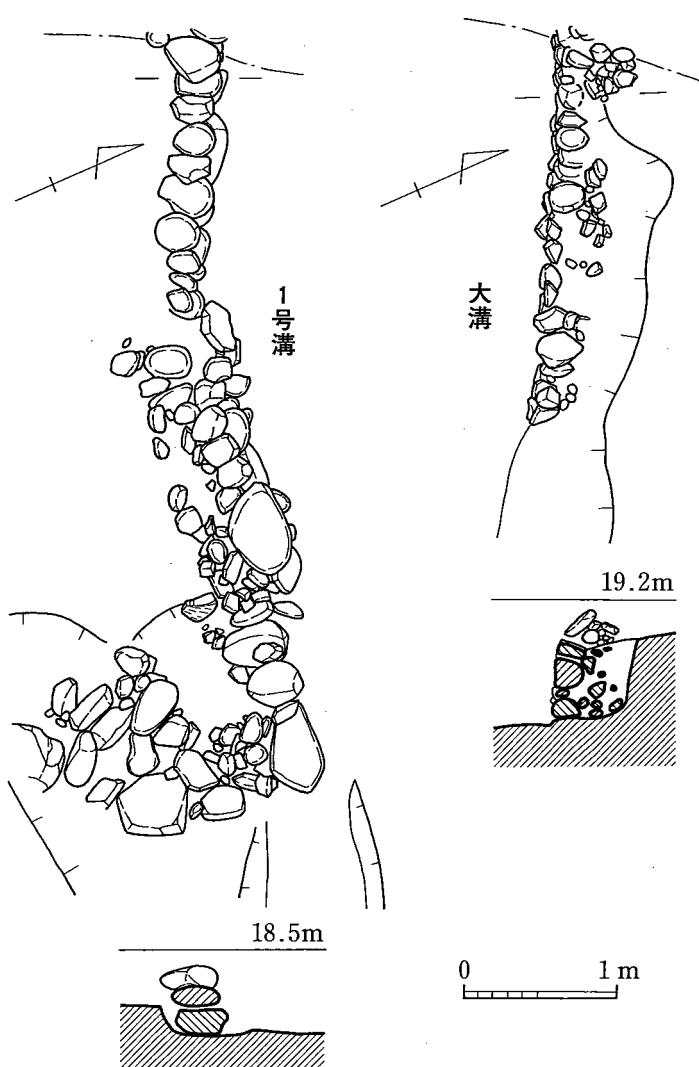
白磁質で、高台は輪高台に近く、口縁端部は玉縁状に肥厚する。外面に草花を大きく描いて、裏側の面に3羽の蝶が飛んでいるように描かれている。

染付碗（5） 口縁部へ直線的に開く丸形碗で、口径11.2cm、器高5.2cm、高台径4.2cmの大きさで、器壁は薄めである。外面に菖蒲らしい草花文が描かれているが、釉が馴染まずに釉の撥せた部分がみられる。

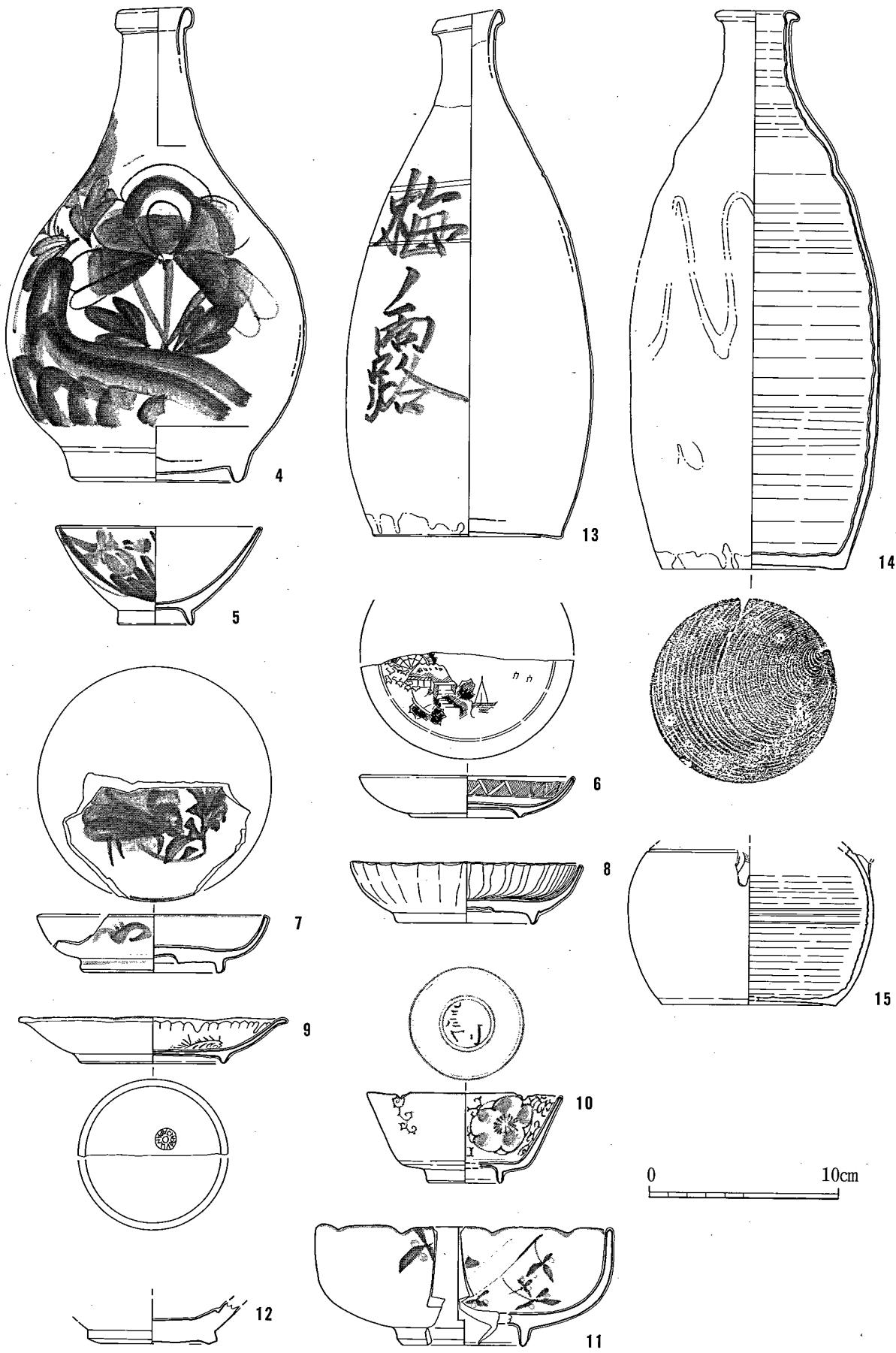
染付皿（6・7） 6は復原口径11.4cm、器高2.2cm、高台径6.1cmの大きさの小皿である。見込みに建物と水車・木立と、背後に帆掛け船が浮かぶ水面が描かれる。縁文様には網代状鋸歯文が配される。銅板転写絵付けで灰黒色のインクが使用される。

7は復原口径12.5cm、器高3.1cm、高台径7.8cmの大きさの小皿である。蛇の目凹形の高台が用いられる。見込みに草花と意匠不明の絵が描かれる。縁文様には藍色の濃手法の線が巡る。外面には蝶らしい絵がみられる。

染付向付（10） 口径10.5cm、器高4.8cm、高台径4.2cmの大きさの、輪花鉢である。体部内面に梅花と唐草文が四方に配されて、見込み中央には二重圈線に囲まれた「壽」が描かれる。外面では、



第52図 II区大溝と1号溝石垣実測図(1/50)

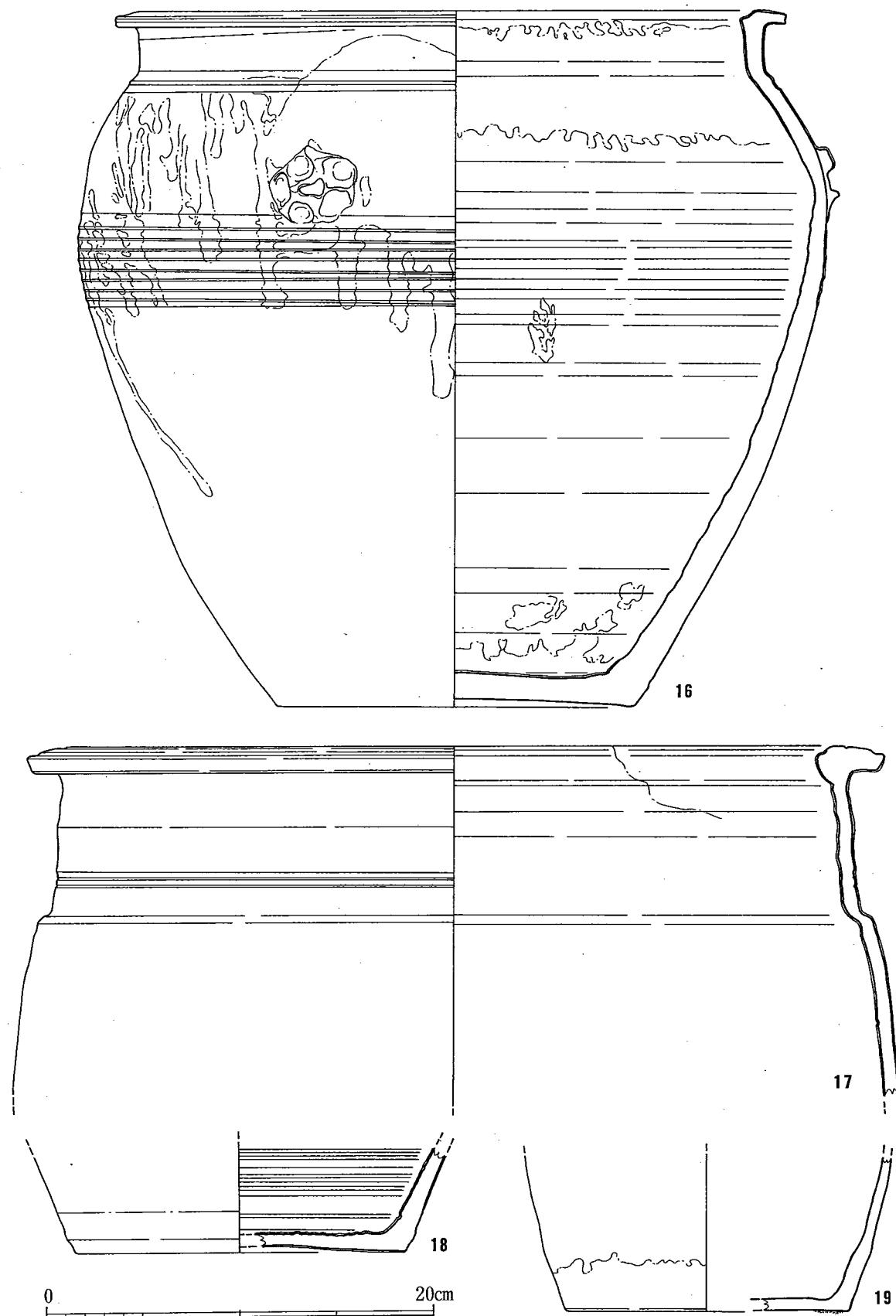


第53図 II区大溝出土土器実測図1 (1/3)

3 II区の遺構と遺物

一对の口縁部切り込み部分から外面に唐草文が垂れた状態にも描かれる。

青白磁皿（8）復原口径12.4cm、器高3.2cm、高台径7.6cmの大きさの、輪花皿である。見込み



第54図 II区大溝出土土器実測図 2 (1/3)

から縁にかけて放射状に彫り込んで菊花状を呈する。蛇の目凹形高台の部分は露胎である。

色絵皿（9） 復原口径14.6cm、器高2.4cm、高台径8.2cmの大きさの、輪花皿である。見込みに低い段がある。口唇部は深い赤色で縁取られ、朱赤で魚の印判絵が描かれ、緑で如意雲文様が描かれる。外面の高台内にも低い段があり、中央部に「MEDE IN JAPAN」の丸記号が印判されている。

色絵向付（11） 復原口径16.0cm、器高6.3cm、高台径7.0cmの大きさの、輪花鉢である。体部内面に藍色と茶褐色で南天らしい花卉文が描かれる。口唇部は藍で縁取りされる。

白磁碗（12） 高台径7.0cmの大きさの、高台内側が低く削り出され、見込みに段がある白磁碗の底部破片で、外底部を除いて淡緑灰色の釉がかけられる。

施釉陶器瓶（13・14） 13は口径3.8cm、器高28.3cm、底径10.2cm、胴最大径13.2cmの大きさの辣薑形でも細身の徳利瓶である。底部は糸切り底の平底、口縁端部は断面三角形に肥厚する。淡茶褐色の胎で、外底面は露胎だが、体部は灰釉を施釉し口縁部に鉄釉を重ねている。外面に「梅ノ露」と背面に「福田□□（福田酒場であろうか）」と銘を書いて、更に、文字部分を含む縦長の帯状に透明釉を上から施釉している。

14は巧く接合しないが、復原器高30.0cm、口径4.5cm、胴最大径13.2cm、底径9.7cmの大きさの瓢形に近い器形の徳利瓶である。口縁端部は短く外側に折れ曲がり、肩部に括れがある。茶褐色の胎で、糸切り底の外底面は露胎だが、体部に暗茶褐色の鉄釉がかかり、口縁部には黒褐色の鉄釉がかかる。胴部外面に灰白色の波状文がイッチン掛けで描かれている。

陶器急須（15） 体部上半部を失うが、胴最大径13.2cm、底径9.4cmの大きさの、平底で胴の膨らむ朱泥急須である。薄い器壁で、焼き締めによる精緻な焼きで赤褐色を呈する。常滑焼きの初期に近い作であろう。

陶器甕（16～19） 16は口径34.4cm、器高35.8cm、底径18.4cm、胴最大径38.4cmの大きさの甕である。括れた頸部から口縁部が直に立ち上がり、口縁端部は外側に折れ曲がるが、口縁部内側の上面に蓋受けらしい凹みがある。胴部最大径の位置に浅い凹線状のカキ目が巡り、肩部に釦状の突起が貼付けられる。砂粒を僅かに含む暗茶褐色の胎で、糸切り底の外底面を除いて、暗灰褐色の灰釉がかかり、部分的に釉滴が厚くみられる。

17・18は胎土や焼成具合、色調などが酷似しているので、同一個体の可能性が高い。17は復原口径44.0cm、胴最大径は46.0cm前後であろう。緩やかに膨らむ胴部から頸部へは段をもって括れ、口縁部へ内傾加減に立ち上がり、口縁部は内側に肥厚しながら外側に折れ曲がる。外面と胴部内面は横方向に板ナデ調整される。18は復原底径17.0cmの大きさで、底部は僅かに内側に凹む。内底面と胴内面はカキ目調整される。ともに赤褐色の精良な胎土で、焼き締められるが、釉のかかる部分は暗茶褐色を呈する。備前焼き系の甕である。

19は復原底径14.0cmの大きさの、平底から緩やかに胴部が開く底部破片である。器壁が薄く、甕ではなく壺や瓶などの底部の可能性もある。淡褐色の精良な胎土で、外底部以外に、濃い黄緑色の釉がかかる。瀬戸焼き系統であろうか。

陶器摺鉢（23・24） 23は復原口径28.4cm、器高11.2cm、底径15.0cmの大きさの摺鉢である。やや器壁の厚い平底の底部から体部が内彎気味に開き、口縁部は外側に折り返って垂れるように肥厚して、口縁部内外面に沈線が2条巡る。内面の櫛歯状の目は11条単位に刻まれ、内底見込みの目は

八方に向きそれぞれ三角形の隙間を伴う。砂粒を若干含む赤褐色の胎で、底面に露胎部分を残すが、褐色ないし赤茶褐色の釉がかかる。24は口縁部を失うが、復原底径9.6cmの大きさの摺鉢である。外面に糸切り痕を残す平底の底部から体部は直線的に開くが、器壁は薄めである。内面に刻まれる櫛歯状の目は7条程の単位で全面に亘っている。

土師質・瓦質土器（第55・56図）

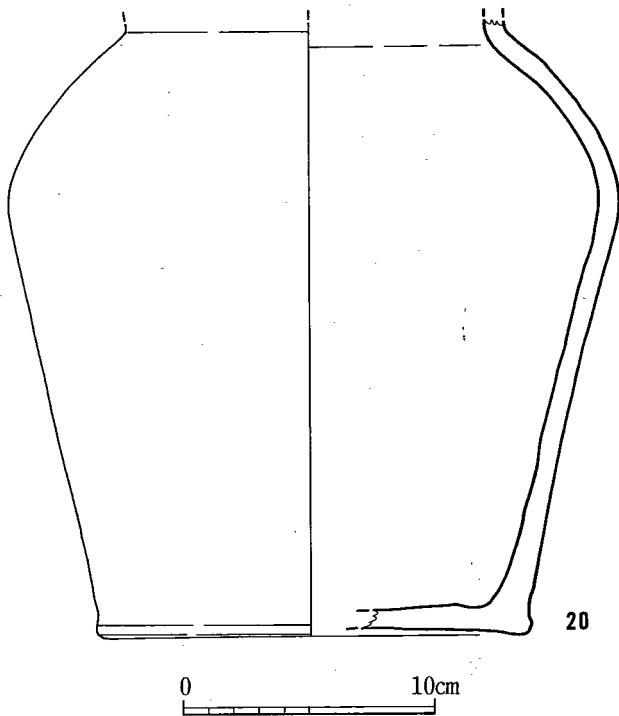
土師質壺（20） 口縁部を失い、復原頸部径15.4cm、胴最大径24.6cm、底径17.5cm、残存器高24.6cmの大きさ。底部は僅かに凹む平底で、胴部へは緩やかに開いて膨らむ。内外面ともにヨコナデ調整される。砂粒を殆ど含まない精良な胎土で、白橙褐色に焼成されている。

土師質熔焰（21・22）ともに浅く内彎して広がる体部を有して、口縁部が外反気味に開いて端部が僅かに肥厚する。体部下半はヘラ削り、体部上半と口縁部はヨコナデ調整され、内面はヘラミガキとナデで調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、暗褐色ないし暗黄褐色に焼成されていて、外面には煤が付着する。ともに底部を失い21は復原口径39.6cm、残存器高8.1cmの大きさで、22は復原口径44.8cmの大きさ。

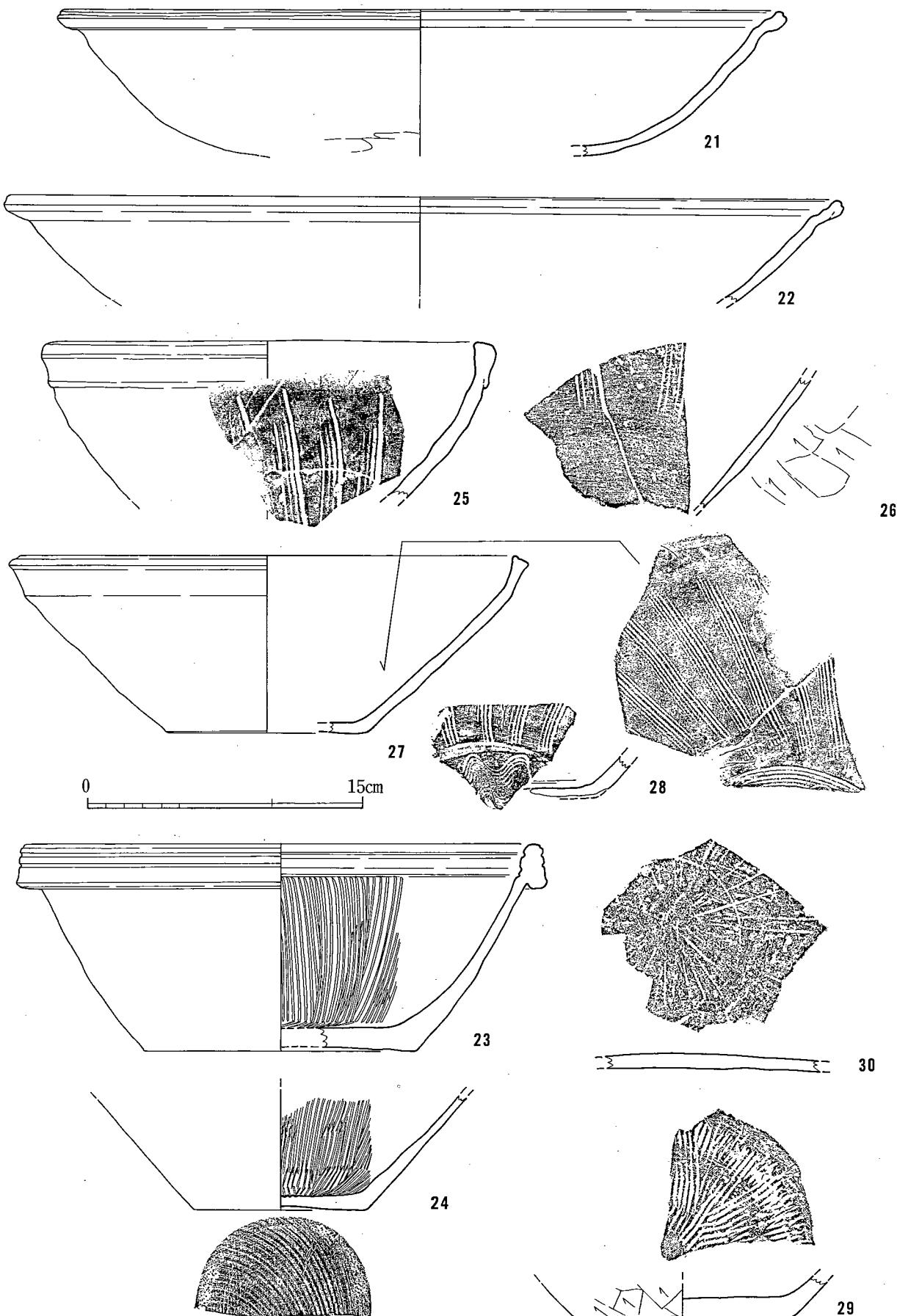
土師質摺鉢（25・26） 25は復原口径25.0cmの大きさの、体部が内彎して開く摺鉢。口縁部は端部が丸く肥厚して外側に折り返して幅広の口縁帯をつくる。体部外面はヘラ削りの後にナデ調整され、内面には4条単位の櫛歯状の目が放射状に刻まれる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、暗灰黄褐色に焼成されている。26は体部下半の破片で、外面はヘラ削り調整され、内面には5条単位の櫛歯状の目が刻まれるが、頻度の使用で底部側の目が摺り切れている。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、暗灰黄褐色に焼成されている。

瓦質摺鉢（27～29） 27は復原口径28.6cm、器高9.6cm、底径11.0cmの大きさの、体部が直線的に開く摺鉢。口縁部は僅かに内に折れて、端部はつまんだように肥厚する。器壁はやや薄めで、外面はヘラ削りとナデで調整され、内面はナデの後に6条単位の櫛歯状の目が刻まれる。胎土に雲母・角閃石を含み、灰色に焼成されている。28も同様な特徴を有する底部破片で、内底見込みに櫛歯状の目が花弁状に刻まれる。29は復原底径12.0cmの大きさの底部破片で、外面はヘラ削りされ、内面には放射状に櫛歯状の目が刻まれる。

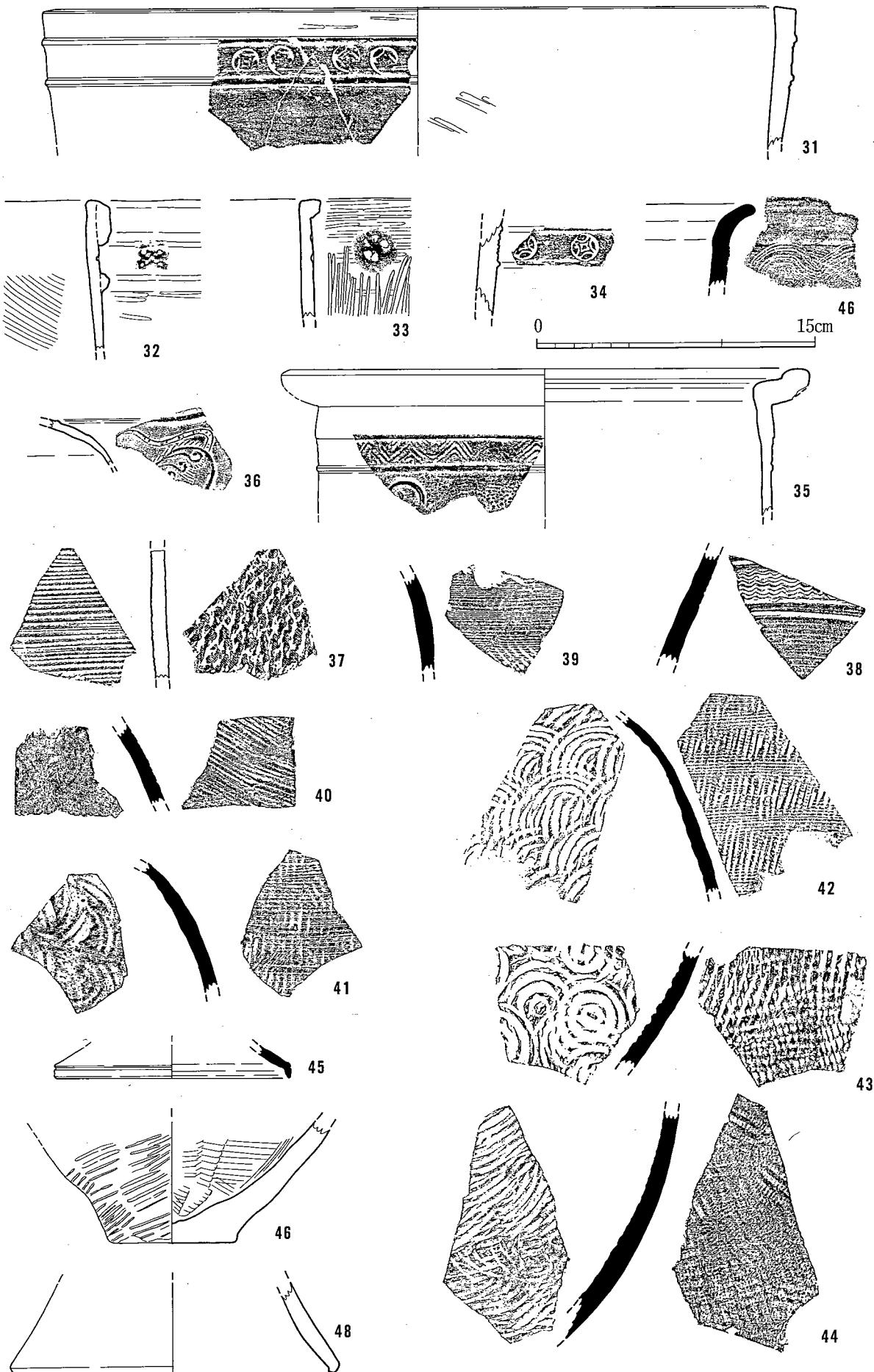
土師質火鉢（32・33） 32は内傾気味に直立する口縁部破片で、端部外面に幅広凸帯状に折り返す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整される。口縁部凸帯の下に巡らされる籠状凸帯との間にX字文の刺突がみられる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。33は直立する口縁部破片で、端部は短く外側に折れて肥厚する。外面はヘラミガキ、内面



第55図 II区大溝出土土器実測図3 (1/3)



第56図 II区大溝出土土器実測図4 (1/3)



第57図 II区大溝出土土器実測図 5 (1/3)

はナデ調整され、外面に五弁花状の刺突文様がある。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、灰黄褐色に焼成されている。

瓦質火鉢 (30・31・34~37) 30は火鉢か否かは不明確だが、扁平で平坦な底部破片である。片面に円弧と放射状の浅い線刻がみられる。31は復原口径41.0cmの大きさの、直立気味に僅かに開く口縁部破片である。口縁部上面は直線的に切られ、口縁部下に巡る2条の箍状凸帯間に七宝状の文様が押捺されている。34も31と同様な凸帯と押捺文様がみられる。

35は直に立ち上がる口縁部が外側へ折れ曲がり、端部が上側に突出するもので、蓋受けのような形状の口縁部である。復原口径29.0cmの大きさで、胴部に綾杉文の連続する文様帯と、その下の箍状凸帯を挟んで粒文帯が広がり、円弧を用いた文様が浮かび上がる。胎土に僅かな細砂粒・雲母・褐色粒を含み、灰褐色に焼成されている。36は内彎する胴部破片で、上下は逆かも知れない。箍状凸帯と長い尻尾をもった動物かと思われる文様が浮かび上がっている。35に比して更に精良な胎土で器壁が薄い。37は外面に撚糸状の文様が浮かび、内面はカキ目状になる胴部破片で、精良な胎土が使用されている。

須恵器・弥生土器 (第57図)

須恵器甕 (38~44) 38は外面に沈線と波状文の巡る口頸部破片で、内外面とも回転ナデ調整される。39・40は外面に平行叩き目の痕跡とカキ目や回転ナデがみられ、内面の当て具痕をナデ消す胴部破片。41・42は外面に平行叩き痕とカキ目、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片。43・44は外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片である。

須恵器高杯 (45) 脚裾部破片で、高杯以外の器種の可能性もある。復原裾径13.0cmの大きさに開き、端部は鳥嘴状に折れ曲がり、沈線が1条巡る。

弥生土器甕 (46・47) 46は外彎する口縁部破片で、外面の胴部上位に波状文が描かれる。内面は磨滅するがハケ目らしい痕跡もみられる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。47は小さな平底の底部破片で、胴部側の外面に叩き目、内面にハケ目がみられる。畿内第V様式の特徴をもつ甕である。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、角閃石の量は多めである。暗黄褐色に焼成される。

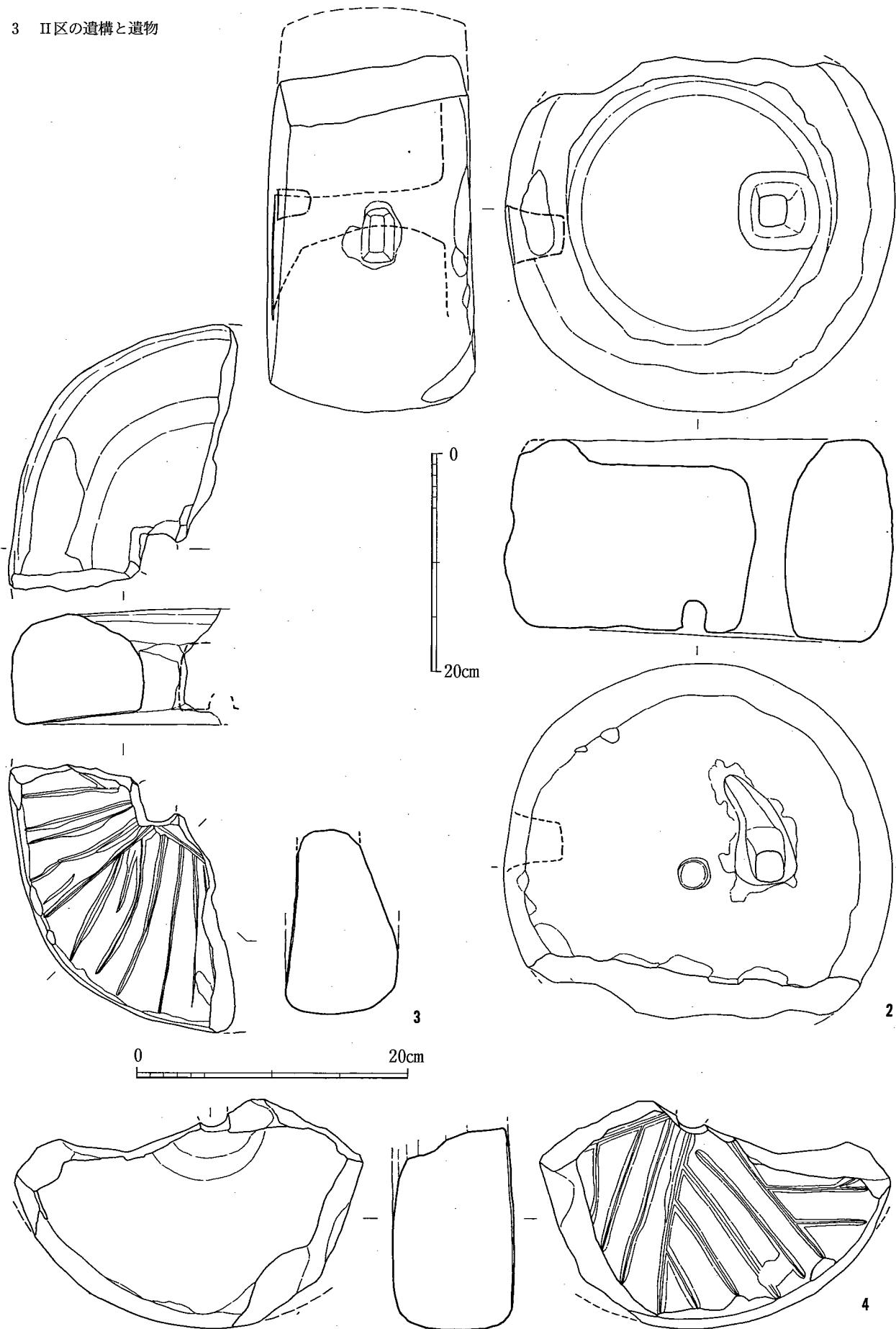
弥生土器器台 (48) 端部内面が僅かに凹む破片で口縁部か裾部かの区別はし難い。復原径18.0cmの大きさで、内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、橙褐色に焼成される。

弥生時代に属す土器類も含まれるが、近世の土器類も多く、大半は19世紀代以降に含まれるものと思われる。一部の染付碗や染付向付、色絵皿などに使用されるインクの彩やかな色調などは更に時期が下降するものであろう。

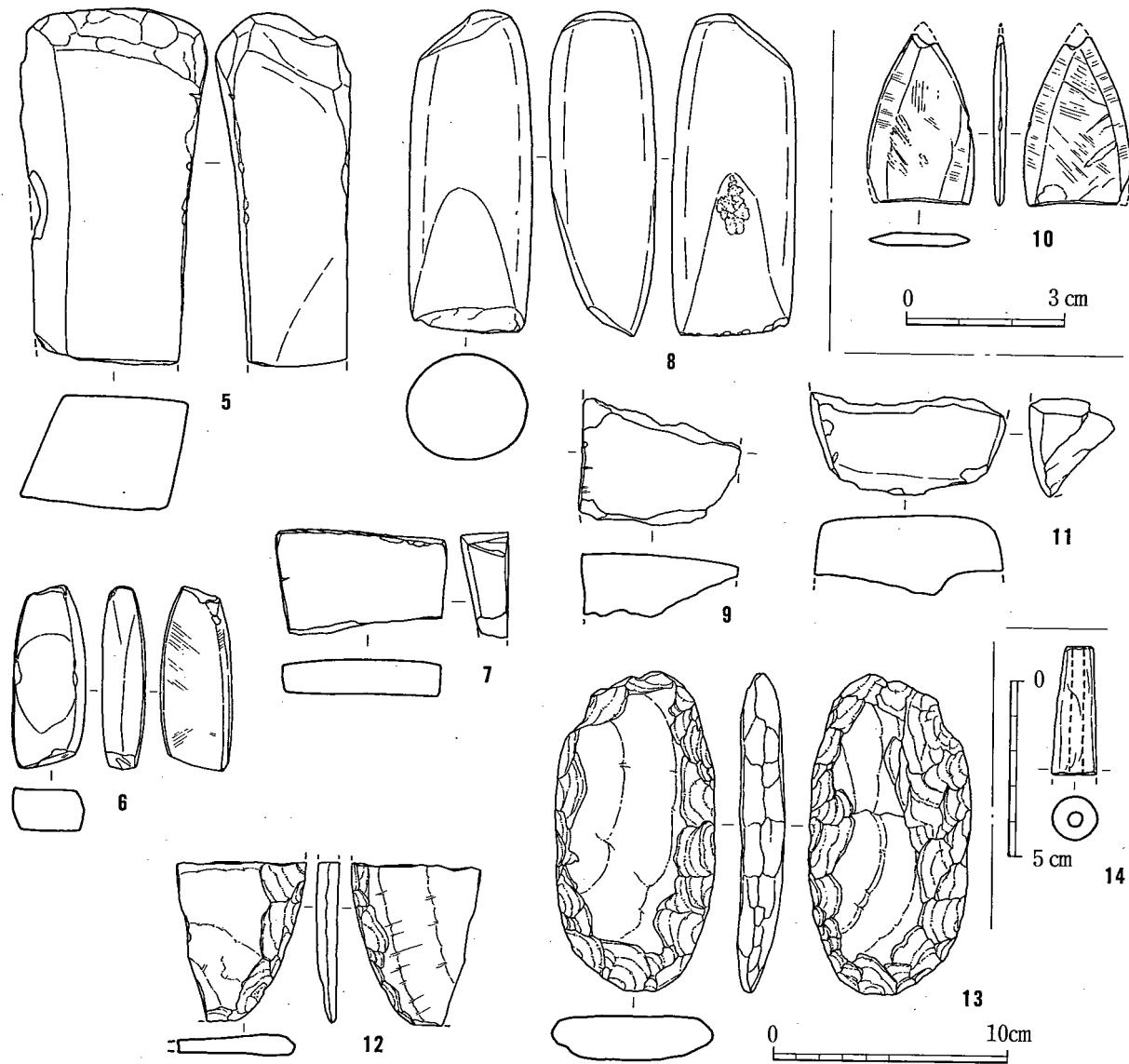
石器・石製品 (図版22、第58・59図)

石臼 (2・3) 2は側縁の一部を欠損するが、凝灰質安山岩製の上臼である。外径35.5cm、高さ18.5cmの大きさ。上面は研磨調整されるが、くぼみは直径23.0cm前後、深さ2.5cmの大きさで、端寄りに上縁で7.0cm四方の供給口が穿たれ、中途で窄まるが挽き面の2~4cm幅、長さ6.0cm程の広さの「ものくばり」に続く。周縁は削り整形され、研磨の痕跡は分からぬが、一ヶ所に幅3.5~5.0cm、高さ1.5~3.0cm、深さ5.0cm程の大きさの挽手孔が穿たれる。挽き面の中央には、直径2.0cm強、深さ2.8cmの大きさの芯棒受けが穿たれる。頻度の使用で挽き面に刻まれた目は既に磨耗して残らない。重量29.8kgを測る。

3 II区の遺構と遺物



第58図 II区出土石製品実測図 2 (1/4・1/5)



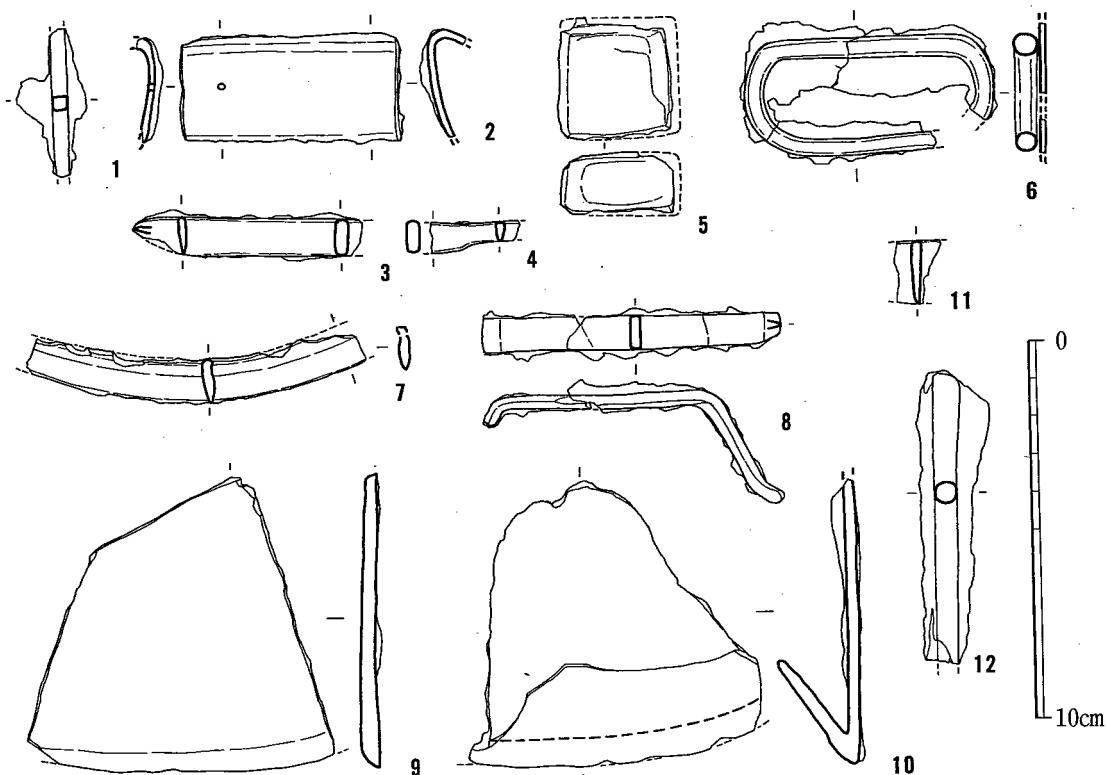
第59図 II区出土石器・土製品実測図(3/4・1/2・1/3)

3は約1/4しか残らないが、凝灰質安山岩製の上白である。周縁の円弧から復原すると直径31~32cm、高さ8.6cmの大きさ。上面は研磨調整され、くぼみは直径23.0cm前後、深さ2.5cmの大きさで、端寄りに上縁で5.0cm四方程度の供給口が穿たれ、挽き面のものくぼりに続く。周縁は削り整形され、研磨される。挽き面は高さ1.0cm程のふくみをもち、6分割らしい刻み目が残る。

砥石 (5~7) 5は凝灰岩製の方柱状の砥石で、残存長30.2cm、幅8.0cm、厚さ5.3cmの大きさ。平坦な4面は砥面に使用されて平滑である。重量804.7gを測る。6は長さ7.8cm、幅3.1cm、厚さ1.8cm、重量46.4gを測る、平面形が舟形の砥石で、肌理が細かいことから、掌に握って使用する仕上げ砥石であろう。7は一方を欠損するが、残存長4.5cm、幅7.3cm、厚さ2.0cm、重量98.0gを測る凝灰岩製の砥石である。

打製石斧 (13) 安山岩の横剥ぎ剥片を用いた扁平打製石斧で、長さ13.8cm、幅6.9cm、厚さ2.0cmの大きさの短冊形を呈し、重量277.1gを測る。やや風化が進む。

土製品(図版22、第59図)



第60図 II区出土鉄製品実測図(1/2)

管状土錘 (14) 一方の端部を欠損し、残存長3.7cm、外径1.3cm、孔径0.4cm、重量 g を測る。エンタシスのように膨らむ筒形で、細砂粒・角閃石を含む胎土で、淡赤褐色に焼成されている。

鉄製品 (図版21-2、第60図)

刀装金具? (2) 幅5.7cm、厚さ0.2cmの板状で、長さ3.7cm分に残るが、一方が丸く曲がる。一方の縁から1.0cmの位置に孔径0.2cm弱の円孔が穿たれる。長径3.0cm弱、短径1.0cm強の橢円形断面の棒状のものに巻かれた可能性があり、円孔を留め孔とすれば、刀装金具などの可能性があろう。

刀子? (3・4) 同一個体の可能性もあるが、接合しない。先端側の3は残存長6.1cm、幅1.1cm、厚さ0.2~0.4cmの大きさ。先端側に尖りながら厚みも減少する。基部側の4は残存長2.4cm、幅0.5~0.9cm、厚さ0.3~0.4cmの大きさ。基部端も欠くが片側の縁が薄めになる。

権? (5) 一部を欠損するが、3.2~3.3cm角で、厚さ1.6cm、重量59.2gを測る塊で、片面の四隅は角に丸味をもつ。度量衡で、重量に係わるものであろうか。

引手金具 (6) 薄い鉄板に銹着する、直径0.5cm弱~0.6cm弱の丸棒を曲げた長橢円形の金具である。外径で長径6.6cm、幅3.1cmの大きさ。

不明鉄製品 (7~9) 7は両端を欠損するが、弧を描く体部で、弧の内側縁は僅かに反り、外側縁は薄く尖る。残存長7.0cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmの大きさ。8は幅0.8~0.9cm、厚さ0.3cmの細長い板状を呈すが、6.0cm程の長さを残して両端側が曲がる。一方の端部は更に3.0cm程先で逆方向に短く反る。9は一方の縁が緩やかな弧を描き、片刃状に尖る扁平な板で、両側を欠くために全体の形は不明。刃の幅8.0cm、厚さ0.3~0.5cmの大きさ。後述する鋤先らしい鉄製品の一部が破損したものかも知れない。

鋤先？ (10) 両端を欠くが、V字状に折り返す刃部を有し、幅7.5cm程が残る。

鉄 淚 (図版22) 8.1cm×6.0cm×5.1cmの大きさの一方の面が弧を描く鉄滓で、鬆が目立つ。

1号溝 (図版17-2・3、18-3、第51・52図)

大溝の南側に隣接する溝で、断面逆台形に掘り込まれている。上面での幅が1.5~2.5m、深さ1.3m前後、底面の幅0.6~1.0mの規模で、約23.0mの長さを確認した。主軸方向は N68°W を向き、両端とも調査区域外に続く。溝底には砂礫層が露出し、南西部の溝肩部には安山岩の川原石を積み上げた石垣が設けられている。溝内を埋める堆積土は下半が暗茶灰色砂質粘性土や暗茶褐色砂質土で、上半部は黒っぽい砂質土で一気に埋没している。この上半部の埋没は昭和20年代中頃の水害だと古考は伝える。

なお、石垣施設部分は、この溝よりも先行する溝の部分で軟弱な地質のために、石垣が築かれたものと思われる。石垣は0.8m前後に残り、調査区西端の壁では1.0m以上の高さに施設された痕跡が看取できる。

出土遺物

弥生土器片、須恵器片、土師質土器片などが出土している。図示しないが、このなかには、瓦質火鉢や土師質鍋片などが含まれる。また陶磁器片は少ないが、型紙染付の小皿片があり、焼き締めて鉄釉のかかる陶器大甕の胴部破片がみられる。乳白色の胎で、肩部に空色の釉をかけて、赤褐色の「NI」の文字を配した破片がみられる。

鉄 淚 (図版) 10.6cm×10.6cm×7.7cmの大きさの、一面が椀形を呈する鉄滓で、重量903.1gを測る。東南側肩部から出土した。

1b号溝 (図版18-3、第51図)

1号溝に先行する溝は、大溝と東側で繋がり、主軸方向はほぼ東西を向く。断面U字形に緩やかに肩が傾斜する。深さ1.1m前後、底面幅2.0m前後の規模で、長さ約13.0mに残り、大溝堆積土に大きな変化がみられないことから、大溝よりも先行する溝であろう。

出土土器

陶磁器 (図版21-1、第61図)

陶器蓋 (49) 外径10.5cm、高さ1.8cm、有効径7.4cmの大きさ。蓋の体部が容器身の内側に入り込み、身受けのかえりが笠形に開くタイプで、凹んだ体部の中央に擬宝珠形のつまみが付く。容器身側になる面は露胎だが、焼き締められて褐色を呈し、外面側には暗褐色の鉄釉がかかる。

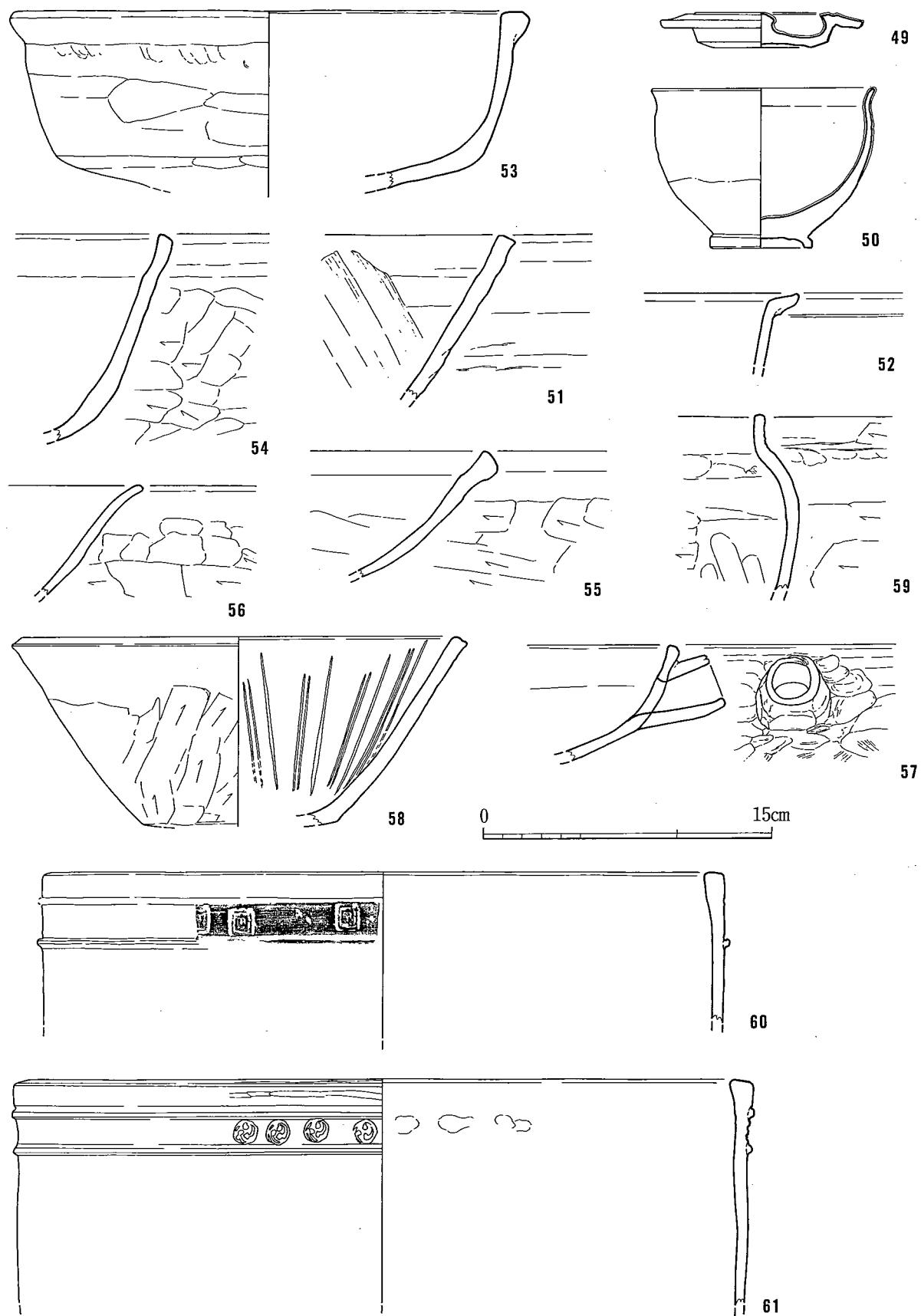
陶器壺 (50) 復原口径11.7cm、器高8.3cm、高台径5.4cm、胴最大径11.3cmの大きさの塙筒形壺である。半球形の体部に、短く緩やかに外反する口縁部と、低い台状の高台が付く。胴下半から底部外面は回転ヘラ削りされて、高台内面は渦状に搔き取られて、畳付が0.5~1.0cm幅の三日月高台になっている。胎は黄褐色を呈し、外面の下半部以外に緑灰色の灰釉がかかる。

須恵質・土師質・瓦質土器 (第61図)

須恵質鉢 (51) 体部から口縁部へ直線的に開く鉢の口縁部破片で、端部内外面が僅かに凹む。器面はヨコナデ、ナデで調整される。砂礫を僅かに含む胎土で、灰褐色に焼成される。

土師質鉢 (52~57) 52の口縁部は内面に稜をもって外反しするが、外側に折り畳んだように肥

3 II区の遺構と遺物



第61図 II区 1号溝出土土器実測図 1 (1/3)

厚する。体部からは直立気味に開くようで、内外面ともにヨコナデ調整され、体部内面側はヘラミガキらしい痕跡もみられる。細砂粒を含む胎土で、灰褐色に焼成されるが、内面側はよう黒色を呈する。53は復原口径27.4cm、残存器高9.1cmの大きさの鉢。底部から屈曲して体部が直立気味に立ち上がり、口縁部は外側に折り畳んだように丸く肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整され、体部外面はヘラ削り、内面はヘラミガキで調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、灰茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。54・55の鉢は内彎して開く体部から口縁部が直線的に伸びて端部が内彎気味に肥厚する。体部外面はヘラ削り、内面は板ナデとヨコナデで調整される。胎土に細砂粒などを含み、灰茶色ないし茶褐色に焼成されるが、外面に煤が付着する。

56は体部が内彎気味に開き、口縁部が緩やかに外反する破片資料で、体部外面はヘラ削りとナデ、内面は板ナデ調整され、口縁部内外面はヨコナデ調整される。胎土に砂粒を若干含み、茶褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

57は体部は屈曲して内彎気味に体部が開いて、口縁部は内側に僅かな凹みをもって、端部は外側に丸く肥厚する器形の鉢。体部の屈曲部から口縁部下に穿たれた穴には、長さ3.0~4.5cm、直径3.0cm程の円筒形の注口が貼付けられる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。行平鍋の類か柄を差し込むタイプの焙烙であろう。

土師質摺鉢 (58) 平底の底部から体部が口縁部まで直線的に開く器形で、端部は外側につまみ出したように僅かに尖るが平坦に整えられる。体部外面はヘラ削りされ、口縁部内外面はヨコナデ調整される。内面側は磨滅するが、2条と1条に分かれるものの3条単位の櫛歯状の目が放射状に刻まれている。胎土に細砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。

土師質釜 (59) 破片資料だが、やや肩が張って丸く膨らむ胴部から、口頸部が括れて、口縁部は短く直に立ち上がる。胴部外面はヘラ削り、内面はナデ調整され、口縁部はヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、灰茶褐色に焼成される。

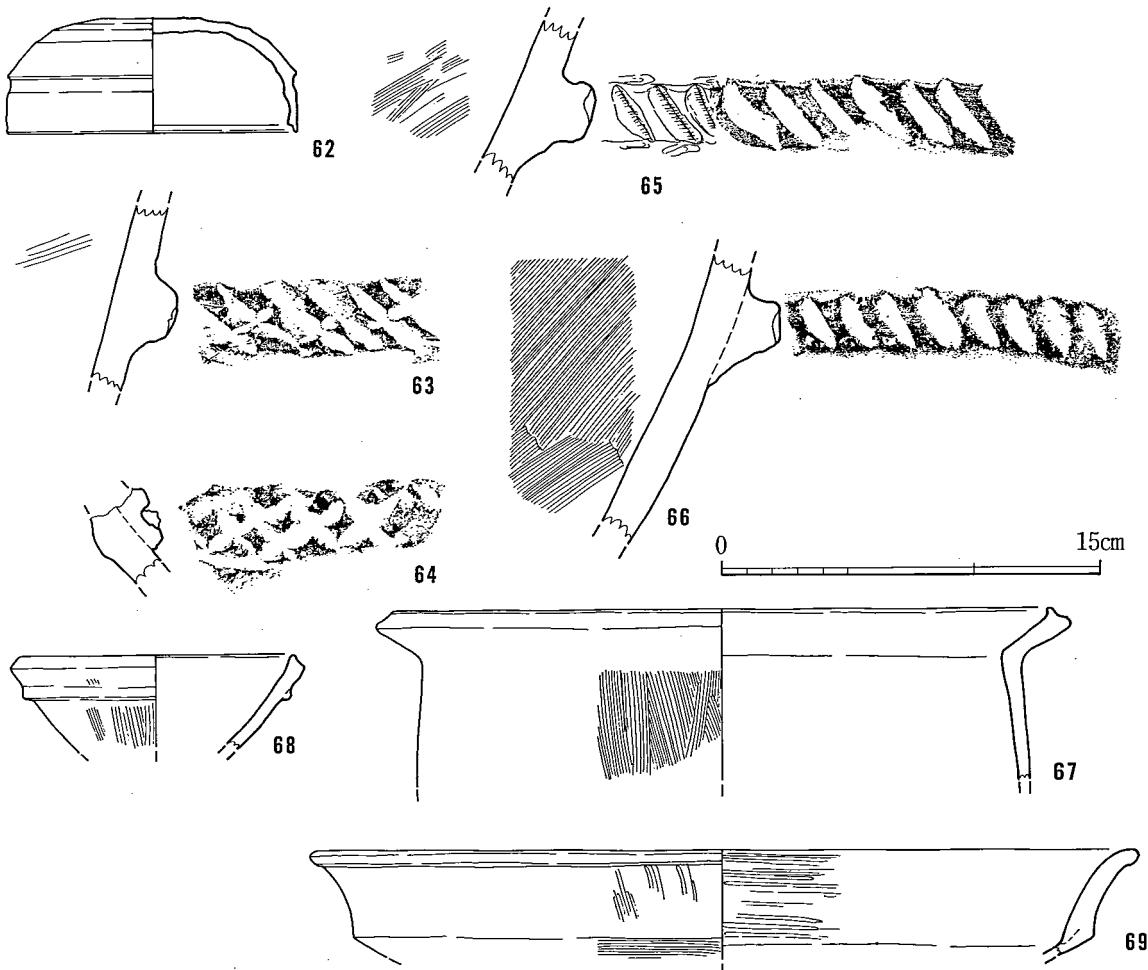
土師質火鉢 (60・61) 体部が口縁部まで直立気味に立ち上がり、口縁端部は僅か内彎気味に肥厚する。内外面ともにナデ調整されて、外面の口縁部下に巡る2条の箍状凸帯間に文様が押捺される。60は復原口径36.0cmの大きさで、雷文が押捺されるが、箍状凸帯の一部が剥落する。61は復原口径29.0cmの大きさで、三つ巴文が押捺される。ともに胎土は雲母などを含むが精良で、灰黄褐色に焼成される。

須恵器・弥生土器 (第62図)

須恵器杯蓋 (62) ヘラ削りされて上面が平らな天井をもち、体部は丸味があり、体部と口縁部の境に段をもつが、口縁部は直立気味で、端部内面に沈線状の段がある。復原口径11.6cm、器高4.6cmの大きさ。胎土に細砂粒を若干含み、暗灰色に焼成されている。

弥生土器甕 (63~67) 63~66は刻み目凸帯をもつ甕の破片で、64は頸部だが、他は胴部に巡る凸帯であろう。凸帯は断面台形を呈し、63・64では斜格子状に、65・66は斜方向に連続して刻まれる。いずれも内面はハケ目調整され、外面はナデ調整だが、器壁の厚さなどからみて大形甕で、後期末ないし古墳初頭期頃であろう。

67は復原口径28.0cmの大きさの、頸部がく字形に外反する跳ね上がり口縁甕の口縁部破片。口縁端部は肥厚気味で、口唇部上端が上側に突出する。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、茶褐色に焼成されている。中期前半であろう。



第62図 II区1号溝出土土器実測図2(1/3)

弥生土器鉢（68） 復原口径11.8cmの大きさの、小振りだが、底部から口縁部へ直線的に開く鉢である。口縁端部は上面につままれたように突出し、口縁部下に断面三角形の凸帯が巡る。胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。中期後半頃であろう。

弥生土器高杯（69） 復原口径33.4cmの大きさの杯部破片である。杯底部から明瞭な稜をもって屈曲した口縁部が外反し、端部は丸味をもつ。杯部外面はハケ目調整、口縁部内外面はヘラミガキで調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。後期前半頃であろう。

弥生土器を含むが、I区の区画溝などで出土する土師質鉢など19世紀以降とみられる土器類も多くみられ、一部は明治期に入るものと思われる。

石器・石製品（図版、第58・59図）

石臼（4） 凝灰質安山岩製の下臼で、約1/3の破片。周縁の円弧などから直径32cm前後、高さ9.1cmの大きさ。軸受け穴は直径2.0～3.0cmで、下側に皿状の凹みをもつ。下面と周縁の面は平滑である。挽き面は僅かにふくらみをもち、6分割5溝の溝が刻まれる。

磨製石斧（8） 刃先を欠くが、円柱状の体部をもつ両刃の磨製石斧で、全体に研磨される。刃先の欠損面は敲打に再使用されたらしく、敲打痕と磨耗痕がみられる。縞模様の入る硬砂岩製で、残存長13.8cm、幅5.3cm、厚さ4.6cmの大きさ。重量579.3gを測る。

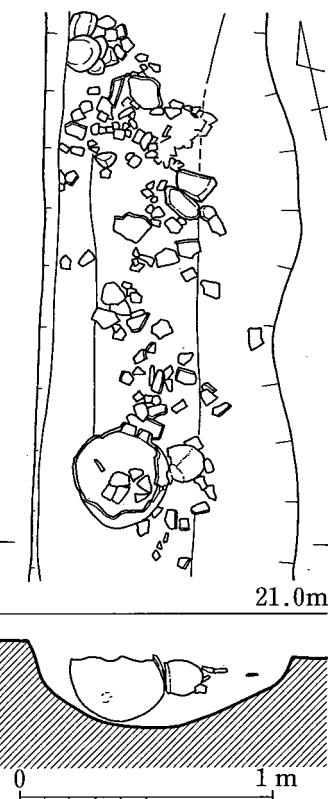
砥石 (9) 凝灰岩製の肌理の細かな砥石片で、本来は方柱状の砥石であったと思われる。図示した面が砥面に使用される。残存長5.3cm、幅6.8cmの大きさ。

2号溝 (図版19、第63図)

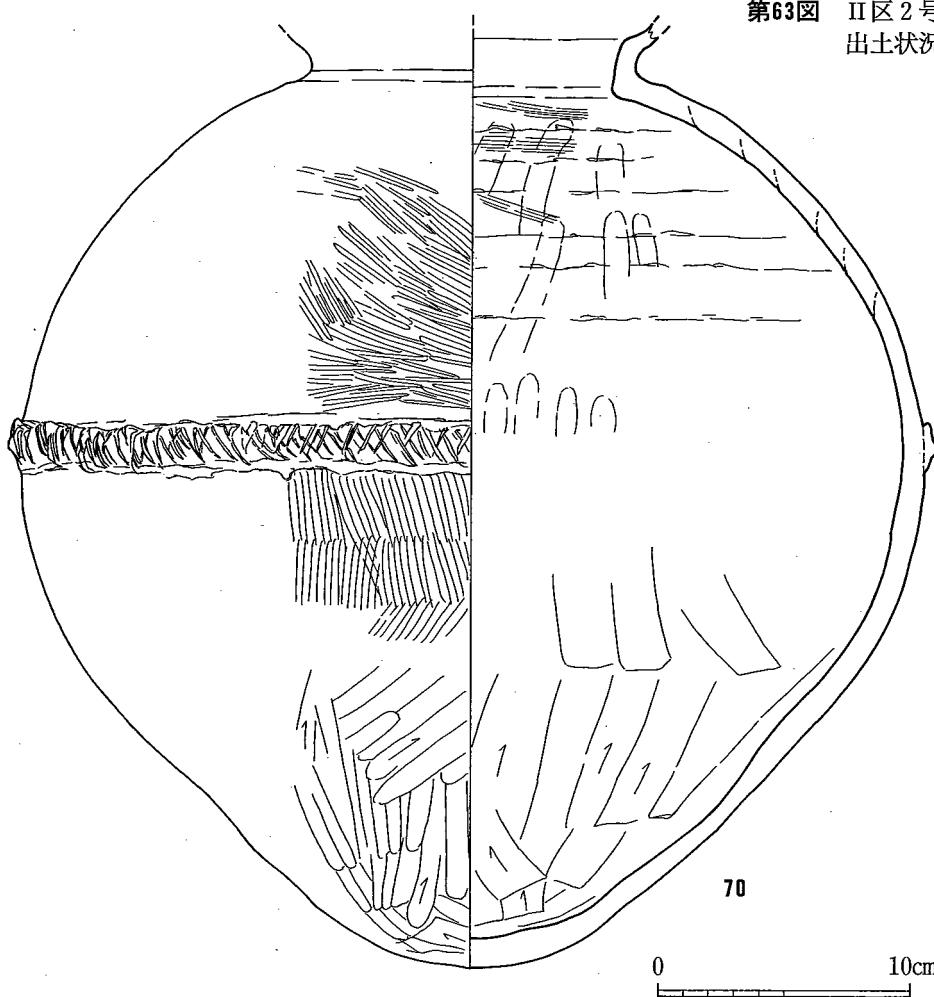
II区調査区西端部の中程に発見された。主軸方向は N22°E を向く。断面U字形の深い溝で、上縁の幅0.8~1.2m、深さ0.1m弱~0.3m、底面幅0.6m前後の規模で、長さ約30.0mを確認したが、南側は調査区域外に潜り、北側は1号土坑付近から2条に枝分かれして、北端は地形の傾斜で消滅する。溝内には茶褐色ないし暗茶褐色土が堆積していたが、南半部で土器片が多数含まれていた。なかには土師器壺と小形甕が近接して出土した処もある。

出土土器 (図版21-1、第64・65図)

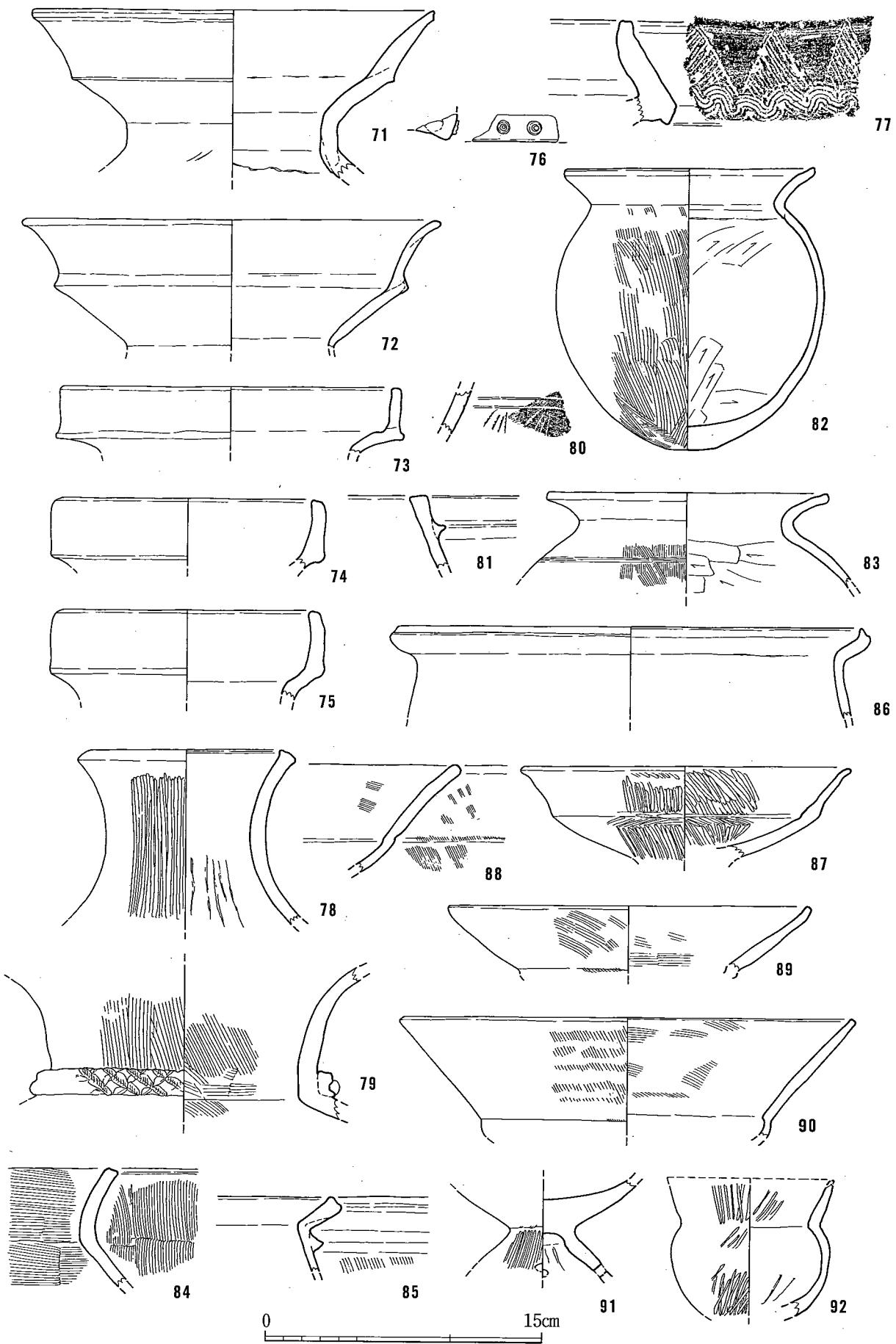
壺 (70~81) 70は口縁部を失うが、複合口縁の壺で、残存器高37.2cm、頸部径12.7cm、胴最大径36.0cmの大きさ。丸みの強い倒卵形の体部で、底部は尖り気味の丸底。括れた頸部は短



第63図 II区 2号溝遺物
出土状況実測図(1/30)



第64図 II区 2号溝出土土器実測図 1 (1/3)



第65図 II区2号溝出土土器実測図2(1/3)

く直立気味に立ち上がり、口縁部は内彎して開く模様である。胴部最大径の位置には幅2.0cm前後の扁平な凸帯が巡り、斜格子状に刻み目が付される。胴下部は内外面ともにヘラ削りされ、胴中位の外面はハケ目、肩部はヘラミガキで調整され、内面の胴上半はナデ調整されるが、肩部内面に粘土の継ぎ目が残り、頸部付近にはハケ目がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

71・72は口縁部が外反する複合口縁壺の口頸部破片で、71では口縁部の外反が直線的なのに比して、72は一旦内傾して反り、外彎気味である。71は復原口径22.2cm、72は復原口径23.0cmの大きさで、72の器壁は薄めである。

73~75は外反した口縁部が屈折して、上方に立ち上がる複合口縁の破片である。73は屈折部が突出して誇張されて、口縁端部は直線的に伸びるが、74・75は屈折が幾分か緩やかで、口縁端部は内彎気味に伸びる。73は復原口径18.8cm、74・75は復原口径15.2cmの大きさ。

76は複合口縁の屈折部破片で、外面に竹管文刺突の粒が貼付けられる。77は外反した口縁部が強く屈折して内傾する複合口縁壺の口縁部破片で、外面に反転波状文と複線鋸歯文が描かれる。

78は器台の可能性もあるが、復原口径12.0cmの大きさで、頸部から緩やかに開いた口縁部は端部の内側がつまんだように突出する。外面は縦方向のハケ目、内面は絞り痕の残るナデで調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。

79は口縁部を失うが、頸部に斜格子状の刻み目の付く凸帯が巡る。内外面ともにハケ目調整され、口縁部側の内外面はヨコナデ調整される。

80は小破片で、上下逆かも知れない。外面に沈線と貝殻腹縁文がみられる。

81は内傾する無頸壺の口縁部破片であろうか。口縁端部は肥厚して上面が平らに整えられ、外面に断面三角形の凸帯が巡る。

甕 (82~86) 82は復原口径13.5cm、器高15.2cm、胴最大径14.7cmの大きさの、倒卵形の体部に外反する口縁部と僅かに平底の底部が付く。体部外面はハケ目調整、内面は板ナデとヘラ削りで調整されて、底部の器壁が厚く、頸部下に粘土の継ぎ目が残る。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、角閃石が目立つが、橙褐色に焼成されている。

83は膨らんだ肩部と長めに外反する口縁部をもつ。胴部外面はハケ目調整されて、肩部に横方向のハケ目が巡る。内面は頸部直下までヘラ削りされて、口縁部内外面はヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。復原口径15.4cmの大きさ。

84は口縁部が緩く外反する破片で、内外面ともにハケ目調整される。

85は口縁部がく字形に外反して、口縁端部は肥厚するが上方につままれたように突出する。頸部下には断面三角形の凸帯が巡り、胴部外面はハケ目調整される。86は復原口径26.4cmの大きさで、口縁部は内彎気味に開いて、端部が上方につまみ出されて突出する。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、明褐色に焼成されている。

高杯 (87~91) 87は杯底部から屈曲して口縁部が緩やかに外反し、復原口径17.8cmの大きさ。内外面ともにヘラミガキ調整される。

88~90は杯底部は丸味をもち、屈曲部から口縁部が幾分か長めに開く。内外面ともにハケ目調整されてナデが一部加わる。口縁部は88が外反気味で、89は内彎気味に開き、90は直線的に開く。

91は杯底部から脚台部にかけての破片で、杯底部の器壁が厚く、中空で短い柱状部を介して裾部

へ喇叭状に開くが、円孔が4ヶ所に穿孔される。杯部側の器面は風化するが、脚部の外面はヘラミガキ、内面はナデ調整される。

小形丸底壺 (92) 扁球形の体部から僅かに外開きの口縁部が立ち上がる。外面はヘラミガキ、内面は板ナデ調整される。復原胴最大径8.8cmの大きさ。

土器の特徴は、一部弥生前期の破片や後期前半頃の破片を含むものの、大半は弥生後期末頃ないし古墳時代初頭頃に属し、小さな平底を残す甕は弥生後期末頃の特徴であるが、胴部内面のヘラ削りがみられるなど古式土師器の特徴を備えることからみて、古墳時代初頭頃に含める方が妥当であろう。

石器・石製品（図版22、第59図）

磨製石鎌 (10) 結晶片岩系の砂岩製の無茎磨製石鎌で、先端の一部を欠くが、残存長31.5mm、幅20.0mm、厚さ2.2mm、重量2.0gを測る。両面ともに平坦に研磨され、両側縁は丸味をもたせながら両刃のように尖る。

砥石 (11) 凝灰岩製の幅8.1cmの破片で、厚さ3.4cmに残り、残存長4.3cmの大きさ。図示した面と両側面が砥面にされている。

打製石斧 (12) 安山岩製の扁平打製石斧の刃部破片である。横剥ぎの剥片を用いたものであろう。残存値で長さ6.9cm、幅5.5cm、厚さ1.0cmの大きさ。

鉄製品（図版21-1、第60図）

刀子？ (11) 幅1.7cm、厚さ0.3cm弱の、両側を欠損する小破片で、刃をもつ。

用途不明鉄製品 (12) 直径0.5～0.6cmの丸棒状で、一方の端部を欠き残存長7.7cmだが、全体の形状は不明。丸棒の芯は脆弱な状態である。

4 III区の遺構と遺物

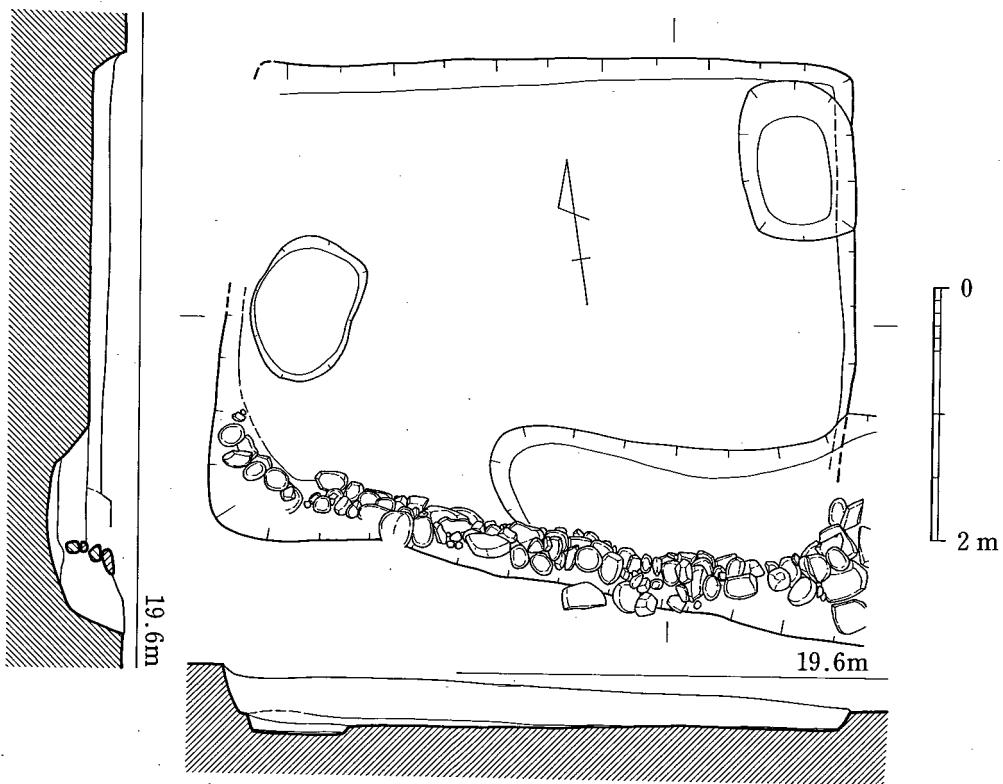
III区では南東部や中央部に建築廃材を焼却したとみられる大きな攪乱坑があり、残された西寄りと北部で主に遺構が発見された。発見された土坑などの遺構のうち堆積土が灰黒色や黄灰色っぽい色調を呈し、締まりがなく軟らかな状態のものについては、ごく最近の攪乱坑と判断して掘り下げていないが、堆積土が締まった状態の土坑でも遺物を伴わない土坑が幾つかあり、これについては特に名称を与えていない例も多い。深さ10cm前後と浅い例が殆どであった。また柱穴状ピットがいくつか発見されたが、掘立柱建物跡を構成するピットは確認できなかった。

III区では、住居跡状竪穴1基、土坑6基、溝3条がある。

1. 住居跡状竪穴

1号住居跡状竪穴（図版24-3、第66図）

調査区北東部に発見された遺構で、東西4.7m～5.0m、南北3.8m前後の広さの、平面形が長方形を呈する遺構である。長軸方向はN81°30'Wを向く。堆積土は淡茶褐色の砂質土で、周壁は北西部で0.3m前後の高さがある。南側の周壁は安山岩円礫などで積まれる石垣構築で破壊されて明確ではない。床面は平坦で、床面を掘り込むピットは西側端に発見された浅い1穴のみで、柱穴らしいピットは発見されなかった。北東隅と北西隅にあるピットは堆積土の上部から切り込まれていて、時期



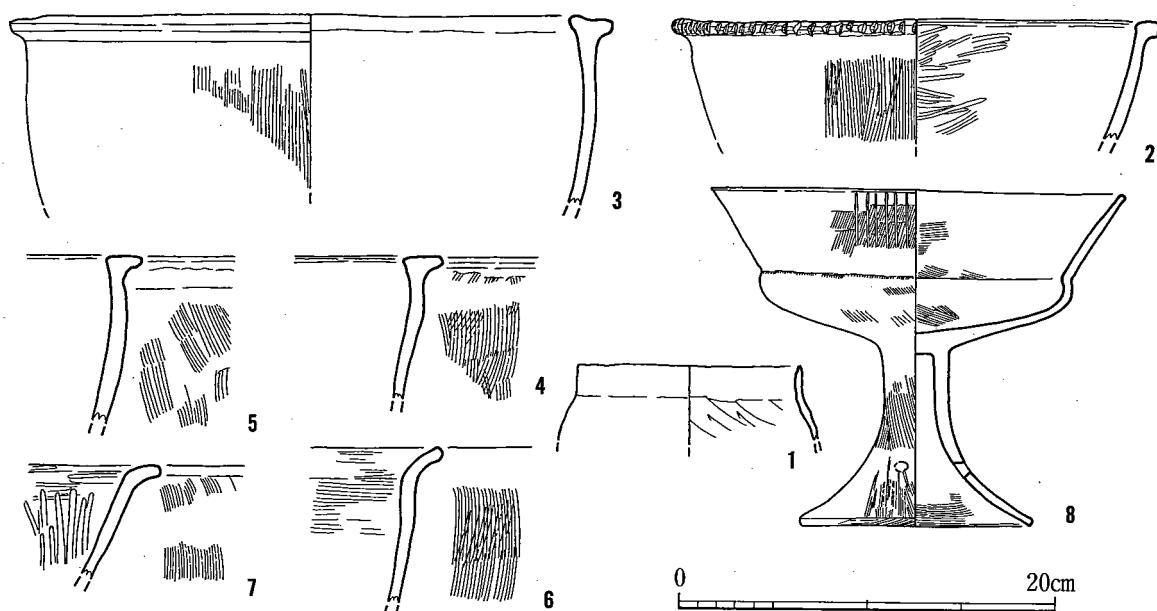
第66図 III区住居跡状竪穴実測図(1/60)

の下降するピットである。北西隅の長楕円形のピットからは高杯片が出土した。

出土土器 (図版28、第67図)

壺 (1) 復原口径12.0cmの大きさの無頸壺で、ヨコナデ調整される口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部外面はナデ調整、内面は板ナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

甕 (2～6) 2は、復原口径26.0cmの大きさの、短くL字に屈曲して肥厚する口縁部外面に刻



第67図 III区竪穴出土土器実測図(1/4)

み目が付される。口縁部上面と胴部外面はハケ目調整され、口縁部外面はハケ目原体で刻まれる。内面は横方向と斜方向のヘラミガキで調整される。細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含む胎土で、茶褐色に焼成されている。

3~5は、口縁部が短くL字に屈曲して肥厚する甕で、胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。口縁部上面もハケ目調整される。3は復原口径32cmの大きさで、口縁部内面端が拡張気味に突出する。いずれも胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色ないし茶褐色に焼成されている。

6は、く字形に外反する口縁部破片で、内外面ともにハケ目調整され、口縁部にはヨコナデ調整が加わる。胎土に粗砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

鉢(7) 直線的に開いて、端部がL字状に外反する口縁部破片である。外面はハケ目、内面は口縁部が横方向、胴部が縦方向にヘラミガキされる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

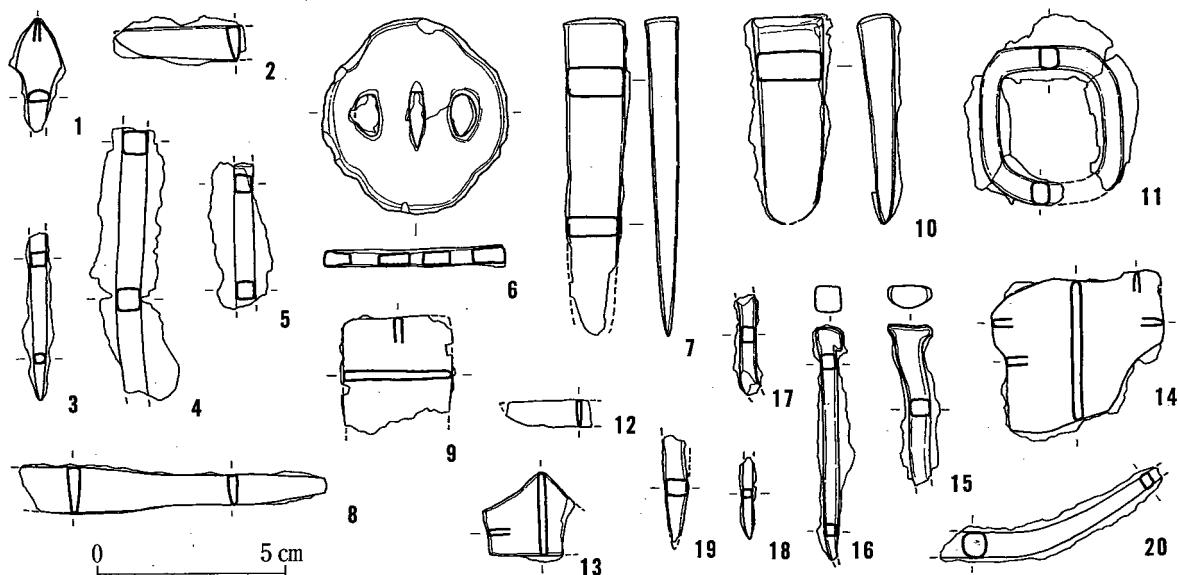
高杯(8) 北西隅のピットから出土した。杯部は体部が内彎し、口縁部が直線的に開いて深さのある器形になり、中空の柱状部から裾部は緩やかに外反する。脚裾部には円孔が3ヶ所穿孔されている。器壁は薄めで、器面は内外面ともにハケ目調整されて、杯部外面は暗文状の縦方向ヘラミガキが加わる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。口径22.3cm、器高17.8cm、裾径12.5cmの大きさ。

これらの土器類では、弥生中期前半頃の甕や鉢がみられるが、1の壺や6の甕は後期に入るもので、後期中頃であろうか。また高杯は終末期のものである。

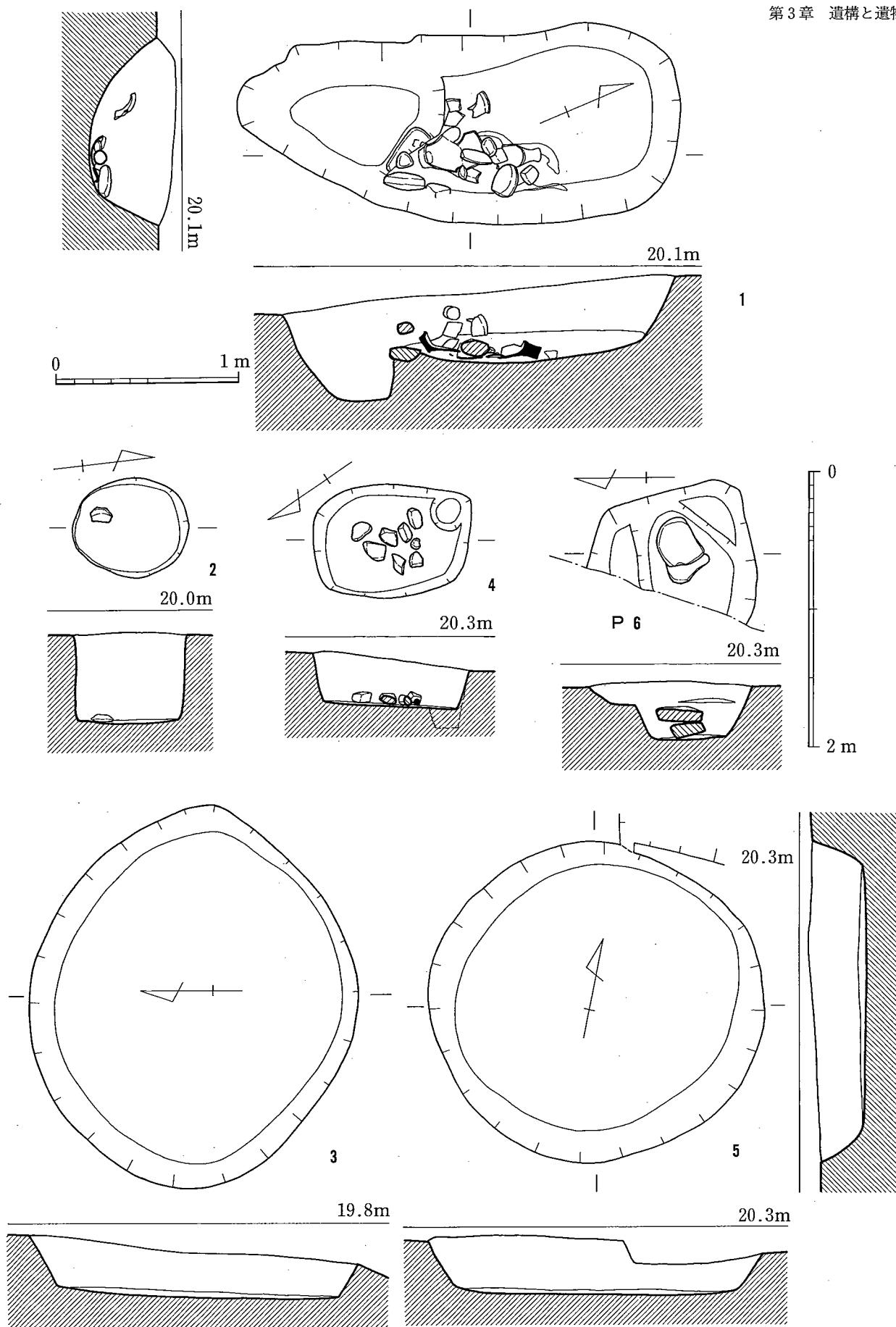
鉄製品(図版29-2、第68図)

鉄 錐(1) 南側の石垣付近から出土したので、時期的に下降する可能性が高い。基部を欠失するが、ペン先状の身を有する錐である。残存長3.0cm、幅1.2cm、厚さ0.1~0.3cmの大きさで、先端から関までの長さは1.3cmを測る。

刀 子(2) これも石垣付近から出土した。先端部破片で基部側を欠失する。残存長3.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmの大きさ。



第68図 III区出土鉄製品実測図(1/2)



第69図 III区の土坑実測図 1 (1号は1/30, 他は1/40)

2. 土 坑

1号土坑 (図版29-2、第69図)

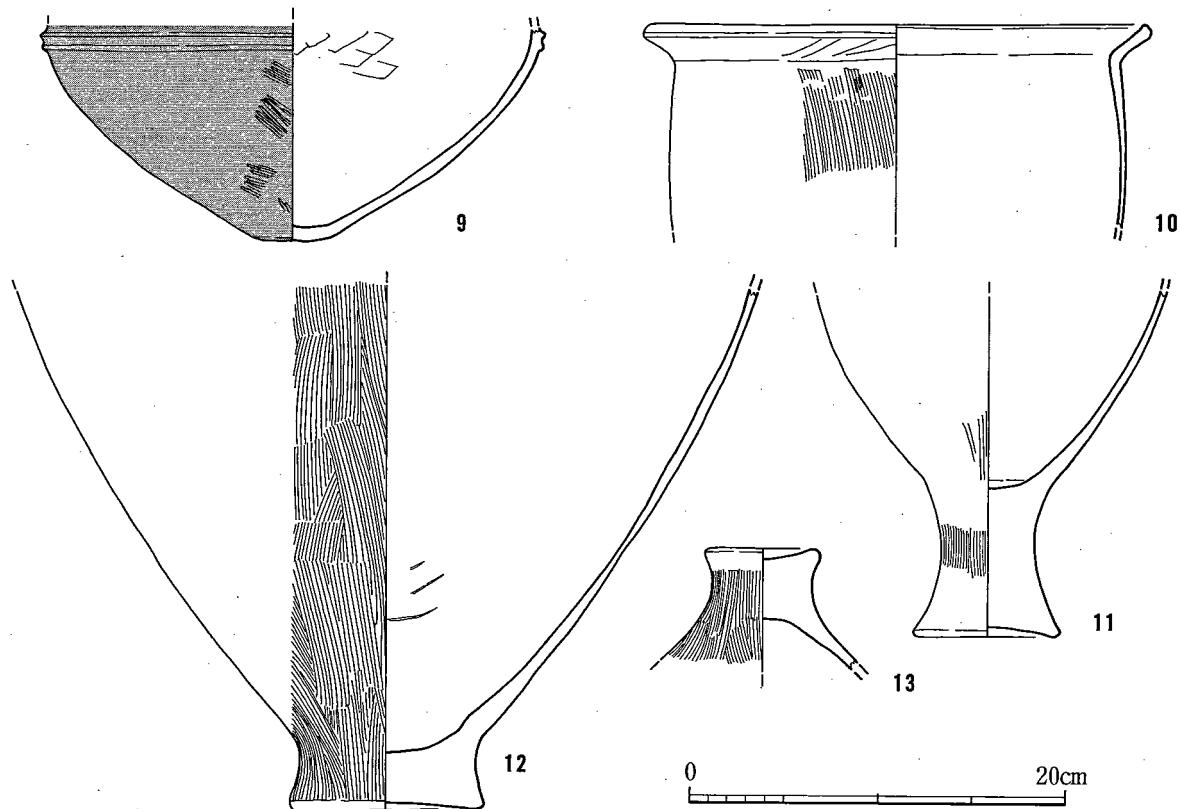
調査区の中央部の西寄りで発見された、不整楕円形プランの土坑である。南側の突出部は後出する柱穴状ピットと重複している。土坑の長径は上縁で1.80m前後であろう。短径は1.05mを測る。深さは0.50m弱で、暗茶褐色の砂質粘性土が堆積土して、床面などは黄茶褐色の砂質粘土である。坑内の南東側に焼けた塊石と木炭、焼土と弥生土器がまとまって発見された。

出土土器 (図版28、第70図)

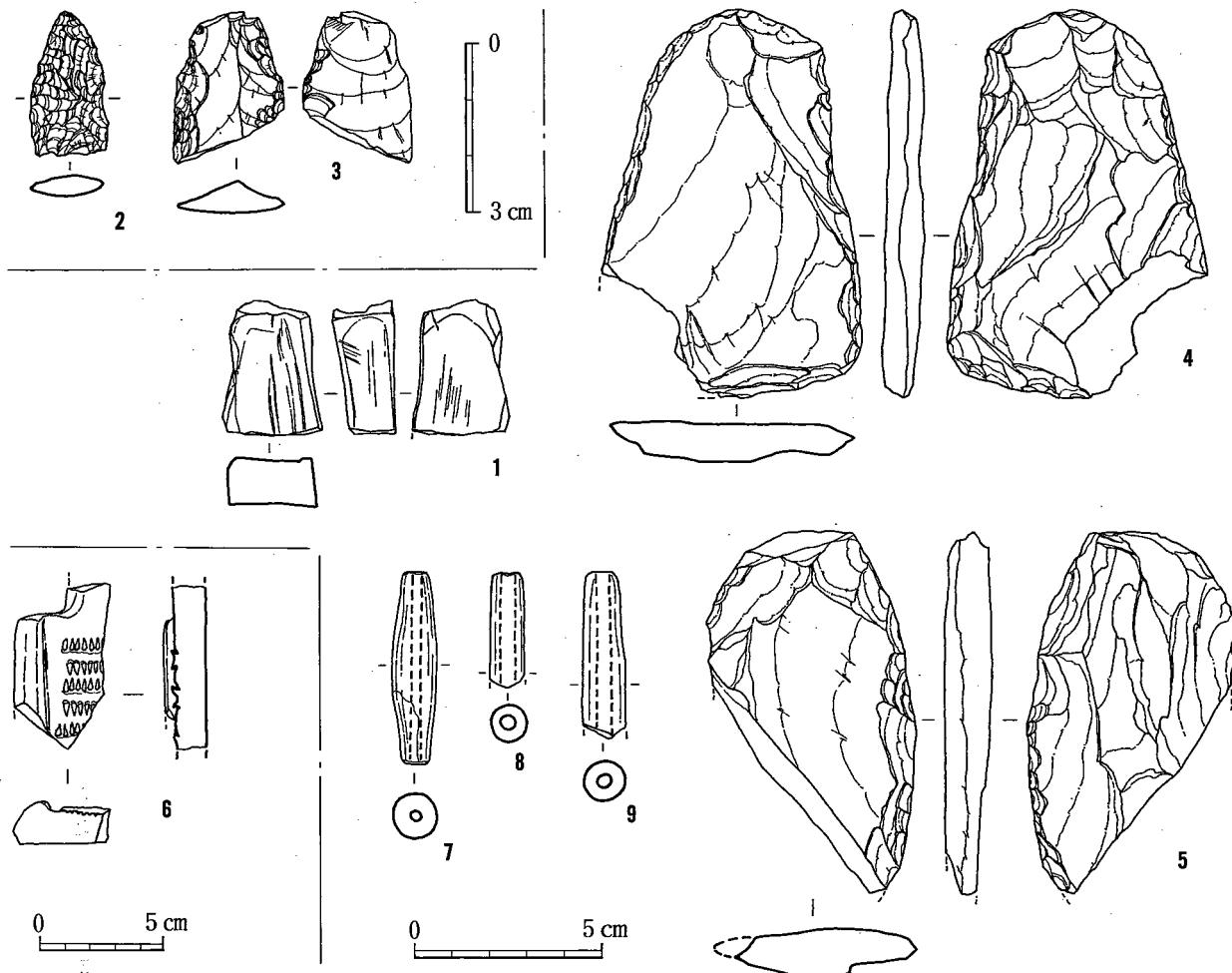
壺 (9) 平底の底部から胴部が内彎しながら開く破片で、胴部には断面M字形の凸帯が巡る。外面はヘラミガキされて赤色顔料がみられるので、丹塗り磨研の壺であろう。内面は板ナデ調整される。復原胴最大径27.0cm、底径4.2cm、残存器高11.3cmの大きさ。

甕 (10~12) 10は、如意状口縁で端部が僅かに上方に突出する口縁部をもつ。口径27.2cmの大きさで、胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。11は細長く括れた台状の底部をもつ胴下半部で、外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色ないし褐色を呈するが、二次的な火熱を受けて赤変し、風化が進む。12は厚めの底部をもつ甕の胴下半部で、胴部へはやや直線的に開く。底径10.4cmの大きさ。外面はハケ目、内面は板ナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、橙褐色を呈すが二次的な火熱を受けて変色する。

蓋 (13) 天井部の破片で、外径6.1cmの大きさで、一旦括れて胴部が開く。外面をハケ目、内面をナデ調整される。



第70図 III区土坑出土土器実測図 1 (1/4)



第71図 III区出土石器・土製品実測図(3/4・1/3・1/2)

甕の特徴は高く厚い底部をもち中期初頭から前半の様相をみる。壺の特徴は須玖式タイプであり、中期中頃に相当する。

石 器 (図版31-1、第71図)

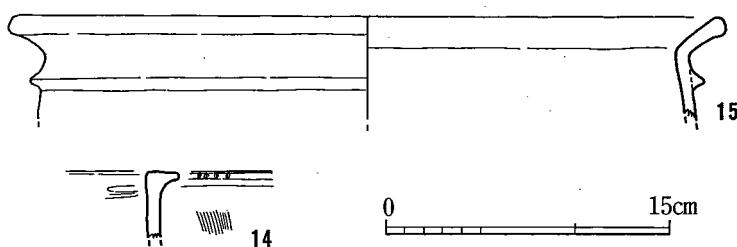
砥 石 (1) 凝灰岩質砂岩製の肌理の細い砥石で、一方の端部側を欠失するが、細長い棒状であろう。四面ともに砥面に使用されて各面ともに面が凹む。残存長3.6cm、幅2.6cm、厚さ1.6cmの大きさ。

2号土坑 (図版25-1、第69図)

調査区中央部で発見された橢円形プランの土坑で、長軸方向は N 6°E を向くが、長径0.80m、短径0.74m、深さ0.65mの規模である。坑内には茶褐色砂質粘性土が堆積し、周壁はほぼ垂直で、床面は平坦。床面に接して須恵質甕の底部が出土した。

出土土器 (第71図)

甕 (14) 短くL字に屈曲して肥厚する口縁部外面に刻み目が付される。胴部外面はハケ目調整され、口縁部はヨコナデ調



第72図 III区土坑出土土器実測図 2 (1/4)

整されて外面をハケ目原体で刻まれる。内面は横方向のヘラミガキで調整される。細砂粒・角閃石・褐色粒を含む胎土で、橙褐色に焼成されている。

甕の特徴は弥生中期前半頃の特徴をもつ。しかし、坑内は須恵質甕が出土しているので、中世以降の遺構で、混入であろう。

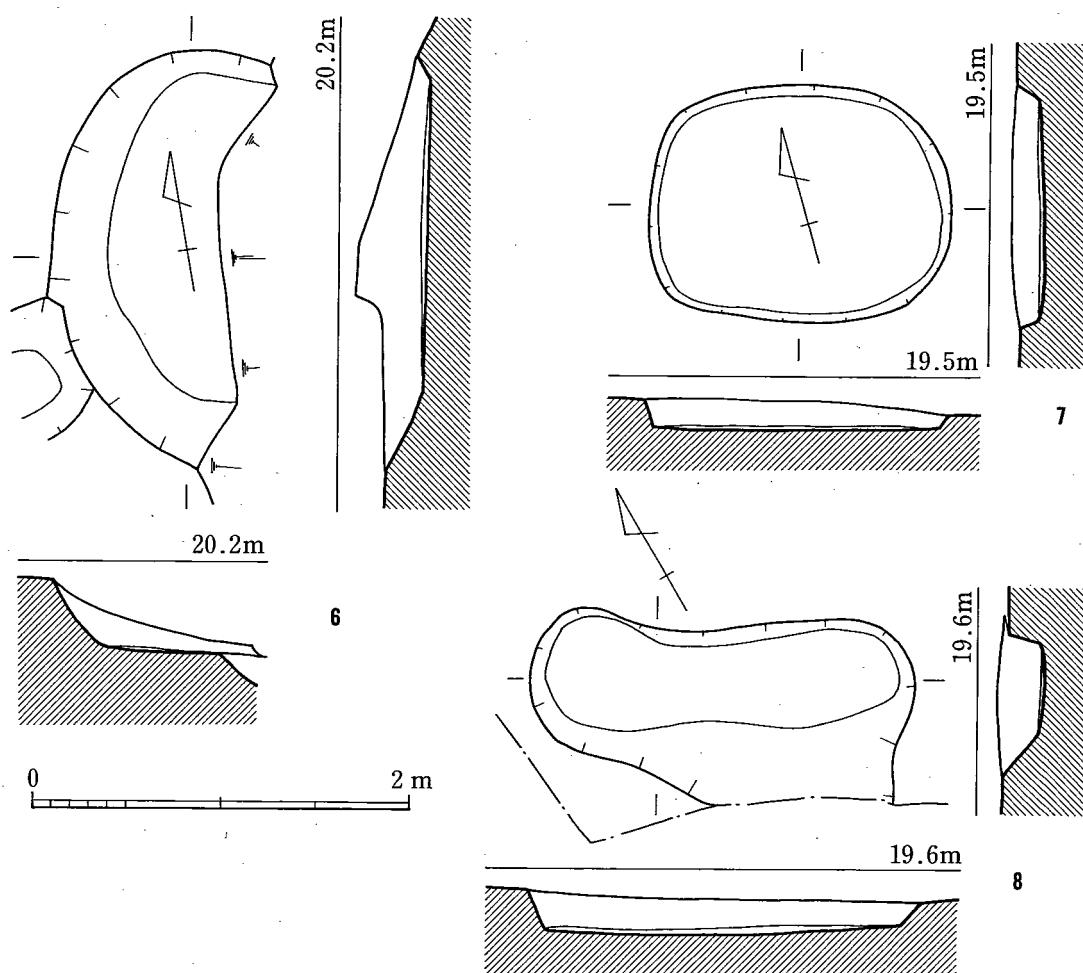
3号土坑（第69図）

1号土坑の南側に近接する、東西に長軸が向く楕円形プランの土坑で、長径2.80m、短径2.35mの広さをもつ。坑内には暗茶褐色の砂質粘性土が堆積し、周壁は急傾斜で0.30~0.40mの高さをもち、床面は平坦である。

出土遺物は少なく、弥生後期頃とみられる甕の胴部片が数点含まれるのみである。

4号土坑

調査区西端部で、1号土坑の西側に弥生土器片を含む柱穴状ピットを挟んで位置する。主軸方向をN34°Eに向ける楕円形プランの土坑で、長径1.14m、短径0.83mの広さ。茶褐色砂質粘性土が堆積し、深さは約0.40mある。周壁は直に近い傾斜で、床面は平坦だが、床面に接して塊石が数個まとまって発見された。



第73図 III区の土坑実測図 2 (1/40)

弥生土器片に混じって、土師質火鉢の胴部破片がみられる。近世のものであろう。

5号土坑

調査区西端部にあり、4号土坑の2.5m程北東側に位置する。ほぼ円形の平面形をもち、暗めの茶褐色砂質粘性土が堆積する。周壁は急傾斜で0.30~0.40mの高さをもち、床面は平坦である。

弥生後期甕小破片、土師器片、須恵器片が出土した。須恵器片は図示しえないが、6世紀後半頃の杯らしい破片を含む。

鉄製品（図版29-2、第68図）

鉄釘？（3）0.4cm角の太さの先端部破片で、残存長4.5cm。釘以外の可能性もある。

用途不明鉄製品（4・5）0.5cm角と0.7cm角の角棒で、ともに両端を欠失するために本来の形状は不明である。残存長7.0cmと3.8cm。

6号土坑

5号土坑の約3.5m東側に位置する、楕円形プランと思われる土坑で、長径2.20m、深さ0.35mを測るが、北東側は攪乱坑で削られて不明である。茶褐色砂質粘性土が堆積し、床面は平坦である。

出土土器（第72図）

甕（15）復原口径38.0cmの大きさの、く字形に外反する口縁部破片で、頸部下に断面三角形の凸帯が巡る。胴部外面にハケ目がみられる。細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含む胎土で、淡茶褐色に焼成されている。

この土器は、弥生中期中頃であろう。

7号土坑

調査区南端部にあり、3号土坑の約7m南側に位置する。長径1.60m、短径1.25mの楕円形プランで、暗めの茶褐色砂質粘性土が堆積する。周壁は急傾斜で0.10~0.15mの高さをもち、床面は平坦である。

坑内からは、なんらの遺物も出土しなかった。

8号土坑

調査区南西隅部にあり、7号土坑の約1m西側に位置する。長径2.10m、短径0.75~0.95mの長楕円形プランで、暗めの茶褐色砂質粘性土が堆積する。周壁は南西壁を除いて急傾斜で0.10~0.20mの高さをもち、床面は平坦である。

坑内からは、なんらの遺物も出土しなかった。

柱穴状ピット等出土遺物

ここでは土坑という名称を与えていないが、土坑と柱穴状ピットの中間ほどの穴も多い。これらを一括して柱穴状ピット等とするが、これらから出土した遺物のうち主なものを幾つか紹介しておくこととする。

土器類（第74図）

弥生土器甕 (16・17) 16は復原口径24.0cmの大きさの、口縁部が短くL字状に屈曲する甕で、胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。17はL字状に短く屈曲するが、拡張気味に肥厚する口縁部破片である。中期中頃であろう。

弥生土器壺 (18)

鋤先状口縁の端部が跳ね上がり口縁状になるもので、内外面ともにヨコナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、暗黄褐色に焼成されている。1号住居跡状竪穴の東側にある溝状部分から出土した。弥生中期中頃であろう。

土師器甕 (19・20) 19は緩やかに外反する口縁部破片で、外面は風化するが、胴部内面は横方向にヘラ削りされる。甑かも知れない。20は括れた頸部から口縁部が外反するが、端部は肥厚しない。胴部外面はハケ目調整、内面はハケ目の後にナデ調整が加わる。胎土に砂粒・角閃石・雲母を含み、茶褐色に焼成されている。古墳後期のものであろう。

土師器小皿 (21) 糸切り底の小皿で、復原口径9.6cm、器高1.7cm、底径7.0cmの大きさ。13世紀頃のものであろう。

土師質擂鉢 (22) 直線的に開く体部から口縁部が内彎して立ち上がるが、外面に折り畳んだように肥厚した口縁部帶は幅広である。体部外面はヘラ削りされ、内面は3～4条単位の櫛齒状の目が刻まれる。胎土に砂粒・角閃石・雲母を含み、褐色に焼成されている。

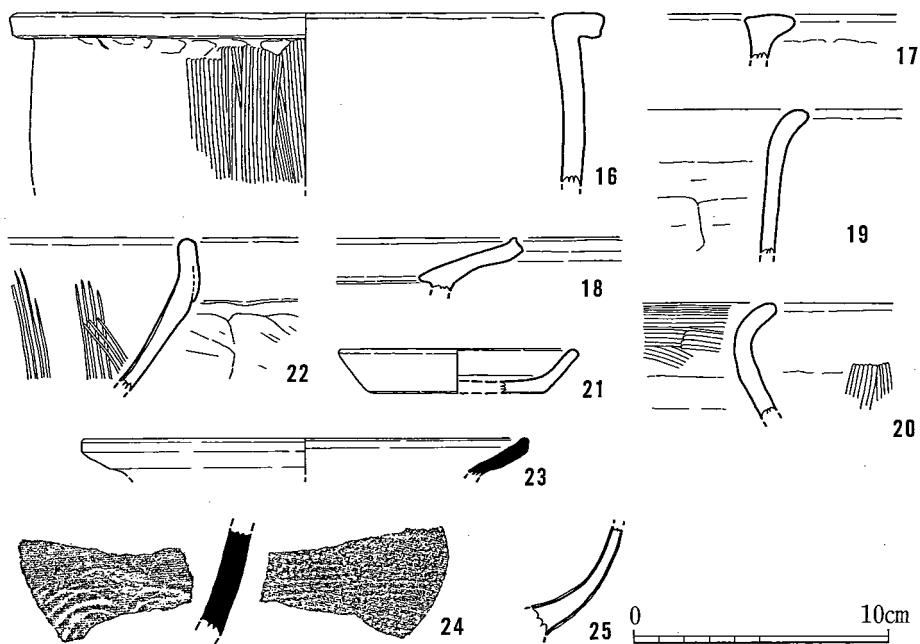
須恵器甕 (23・24) 23は復原口径18.0cmの大きさの、内彎気味に外方に開く口縁部破片である。24は外面にカキ目調整、内面に同心円当て具痕の残る胴部破片である。

陶磁器碗 (25) 胴部下半の破片である。乳白色の胎で、内外面ともに灰黄緑色の釉がかかり、貫入もみられる。

土製品 (図版31-1、第71図)

陶製おろし板 (6) 破片資料で、残存値で長さ6.5cm、幅4.0cm、厚さ1.7cmを測るが、本来は長さと幅が倍以上の大きさであろう。板状のおろし板で、握り部分は幅が狭く、縁は肥厚する。おろしの目は3本単位で並べて刺突し、交互に向きを変えた5列の目がみえる。淡赤褐色を呈する精良な胎で表面には赤茶色の鉄釉がかかる。

鉄製品 (図版29-2、第68図)



第74図 III区ピット等出土土器実測図(1/3)

鍔（6） 四方木瓜形の鍔で、中央の身孔を挟んで左右に半月形？の透かし孔が設けられている。外径は縦5.2cm、横5.0cm、厚さ0.4cmの大きさ。身孔は1.7cm×0.4cm、透かしは1.1cm×0.6cmの広さである。調査区西端で、5号土坑の西側にあるp21から出土した。

楔（7） 先端を一部欠損するが、長さ8.5cm、幅1.6cm、最大厚0.9cmの大きさ。

刀子（8） 先端を一部欠損するが、長さ8.2cmのうち4.8cmが茎部が占める。身部は幅1.2cm、背の厚さ0.3cm、茎部の幅0.8cmの大きさ。

用途不明鉄製品（9） 幅2.9cm、厚さ0.2cm強の薄い板状で、一方の端部を欠くが、残存長3.2cmを測る。

3. 石垣遺構

1号石垣（図版27-3、第75図）

1号住居跡状竪穴の南側に重複する石垣で、高さ50cm前後に残り、長さ5.50mに亘る。主軸方向は概ねN70°Wを向き、直線的に続く石列は約4.0mの長さで、左右両端とともに僅かに内側へ曲がる。この石列は竪穴の壁とほぼ一致する部分にあり、石積みの基底部が竪穴の床面とほぼ同じ高さであることから、本来竪穴に伴う施設である可能性も全く否定できない。しかし、石積みが必要な施設であれば、竪穴の周壁全体に巡らせる必要があろう。また後述する2号石垣との位置関係からみて、居住区と溝などを区画する石垣でもなさそうである。このため、ここでは軟弱な竪穴部分の堆積土に石積みを施して、地山部分の地山を補強したものと解しておきたい。石積みは概ね表面が揃うが裏側にも0.50cm程の幅で塊石が詰め込まれている。

2号石垣（図版26-3、第75図）

1号石垣の約5.00m北側に位置する石垣で、1号住居跡状竪穴との間は1.00～1.80の距離がある。長さ8.50mに亘る一直線の石積み遺構で、N73°Wの方向を向く。高さ30cm前後に残るが西側では崩落が目立つ。1号石垣が裏込めを有するのに比して、単に面を揃えて一列に積み上げた構造で、前面からは煉瓦積みのように交互に乗せられている部分もみられる。なお、2号石垣は2号溝の南岸に相当しているので、溝の護岸と区画を兼ねた施設であろう。

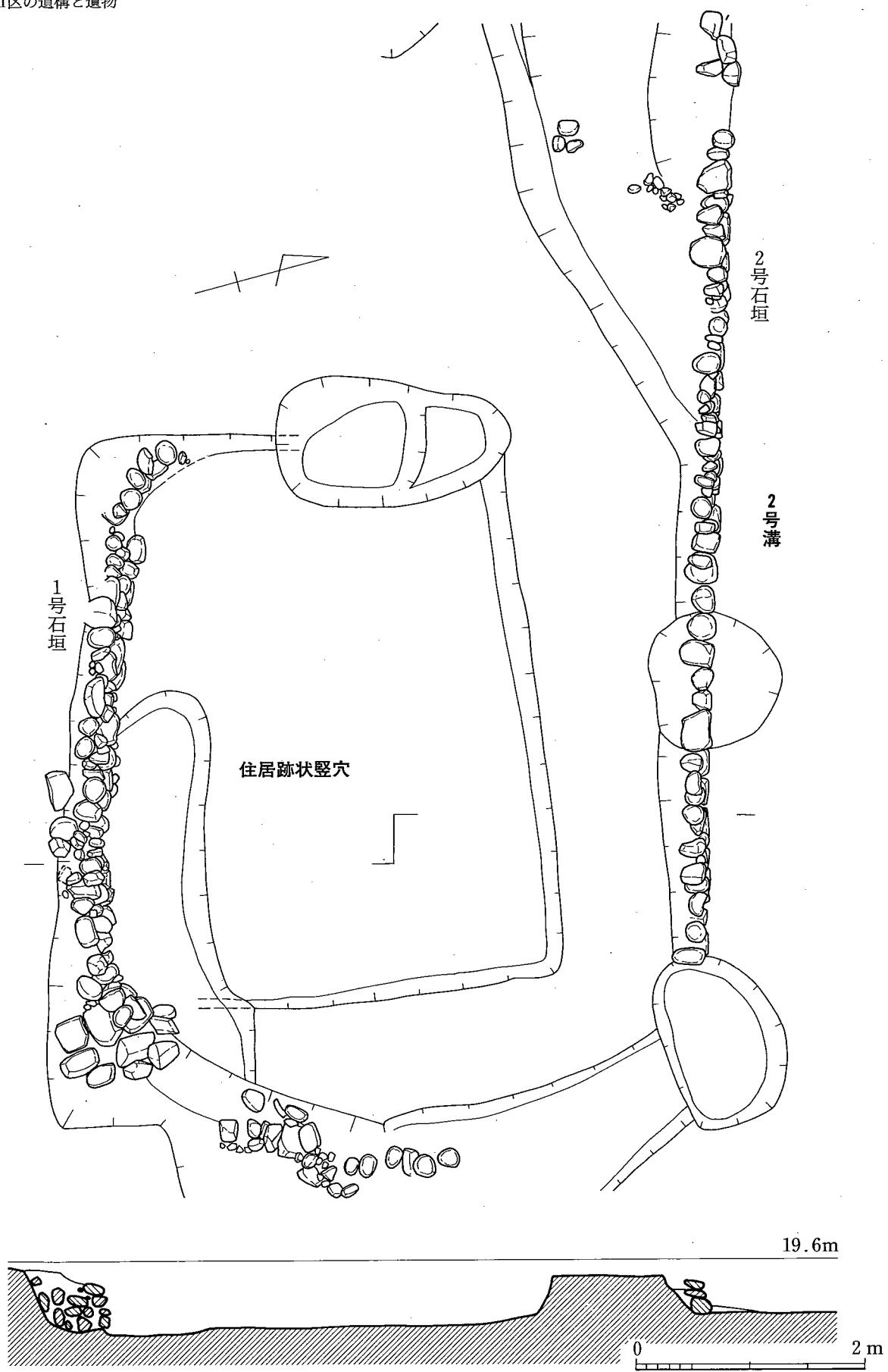
4. 溝状遺構

1号溝（図版89、第5図）

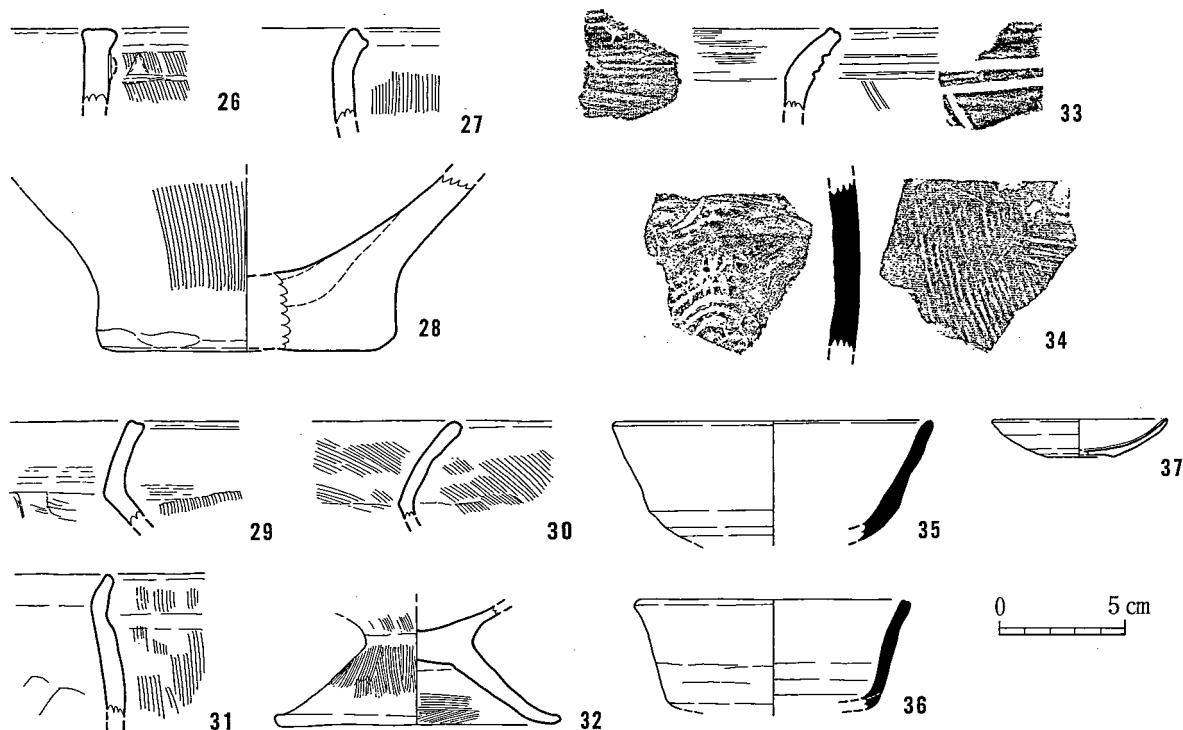
III区の南部に位置する溝で、約9.0mの長さを確認したが、北西側は調査区域外に続き、南東側は攢乱坑などで削られる。上面での幅が3.0～3.8mをもち、主軸方向はN50°Wを向く。緩やかに中程が凹む断面U字形の溝で、暗茶褐色砂質粘性土が堆積していて、深さは0.3m前後。溝底は黄褐色砂質粘土層が露出する。

出土土器（第76図）

弥生土器甕（26～28） 26は直立する口縁部破片で、端部上面は拡張気味に整えられる。外面に凸帯が巡るが、剥落して残らず、胴部外面のハケ目が剥落面に続くようすが分かる。27は如意状に外反する口縁部破片で、端部はつまんだように僅かに尖る。外面に縦方向のハケ目がみられる。28は平底の底部破片で、胴部外面はハケ目、内面はナデで調整される。



第75図 III区住居跡状豊穴と2号石垣実測図(1/50)



第76図 III区1・2号溝出土土器実測図(1/3)

28の底部破片の特徴から中期中頃であろう。

2号溝 (図版26-2、第5・75図)

III区の北部に位置する溝で、約20.0mの長さを確認したが、東西両側ともに調査区域外に続く。上面での幅は西端部で4.0m、東端部で3.0を測るが、2号石垣の施設される部分では幅が6.5mに拡がる。北岸からみた主軸方向はN80°Wを向き、2号石垣部分の南岸はN73°Wを向く。緩やかに中程が凹む断面U字形の溝で、暗灰茶褐色砂質粘性土が堆積していて、深さは0.1~0.3mを有する。溝底は黄褐色を呈する砂礫層で礫が露出する。

出土土器 (図版28、第76図)

弥生土器甕 (29~32) 29・30は口縁部が外反して、端部が平らに整えられる。内外面ともにハケ目調整されて胴部内面は板ナデ調整される。31は口縁部が短く直立気味に立ち上がる。外面はハケ目、内面はナデで調整される。32は台付き甕の脚台部である。据径11.4cmの大きさで、朝顔形に開く。内外面ともにハケ目調整され、胴部内面はナデ調整される。

須恵器甕 (34) 外面に平行叩き目痕、内面に同心円当て具痕の残る胴部破片である。

須恵器杯 (35) 丸味をもった体部下半から僅かに括れて口縁部が開く器形で、復原口径13.0cmの大きさ。回転ナデ調整されて、青灰色に焼成されている。

須恵質杯 (36) 平底から口縁部が外反気味に開く器形で、復原口径11.2cm、器高5.5cm程の大きさ。回転ナデ調整されるが、体部下半の外面はヘラ削りされる。軟質な焼成で、淡灰色を呈する。

磁器皿 (37) 復原口径7.0cm、器高1.5cm、底径2.8cmの大きさの皿。灰白色の胎で、ヘラ切り離しの外底部は露胎だが、灰黄褐色を呈する透明感のある灰釉がかかり、貫入がみられる。

土器類では弥生後期土器、古墳後期の須恵器などを含むが、陶磁器皿は19世紀代のものであろう。

なお、33の土器は縄文土器であり、包含層の縄文土器の項で後述する。

土製品（図版31-1、第71図）

管状土錘（7～9） 7はエンタシス状に膨らむ筒状の管状土錘の完形品で、長さ5.1cm、外径1.2cm、孔径0.2cm、重量6.7gを測る。2・3は半次資料だが、さほど膨らまない筒状の土錘である。外径1.0・1.1cm、孔径0.4・0.3cmを測る。

鉄製品（図版29-2、第68図）

楔（10） 長さ5.5cm、幅1.4～1.9cm、厚さ0.9cmの大きさ。

刀子（12） 先端部破片で、残存長2.3cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmの大きさ。

用途不明鉄製品（11・13・14） 11は太さ0.6cm角の丸棒を4.3cm×3.7cmの大きさに曲げた隅丸方形の輪である。13・14は厚さ0.2cmの板状破片である。

鉄釘（15～19） いずれも角釘で、15・16は頭部を残すが、他は先端部などの破片である。

3号溝（図版27-1・2、第5図）

III区の北端に位置する溝で、約14.0mの長さを確認したが、北側は現水路を保全した非調査部分に潜る。上面での幅は西端部で1.5m以上であることが分かり、東部ではIV区側に溝が検出されないことから、非調査部分幅の3.0mを越さないことが分かる。南岸では0.7～0.8mの深さがあり、やや急傾斜の断面U字形の溝であろう。主軸方向はほぼ東西に向く。暗灰褐色砂質粘性土が堆積していて、溝の肩と底は黄褐色を呈する砂礫層で礫が露出する。

出土土器（図版28・29-1、第77・78図）

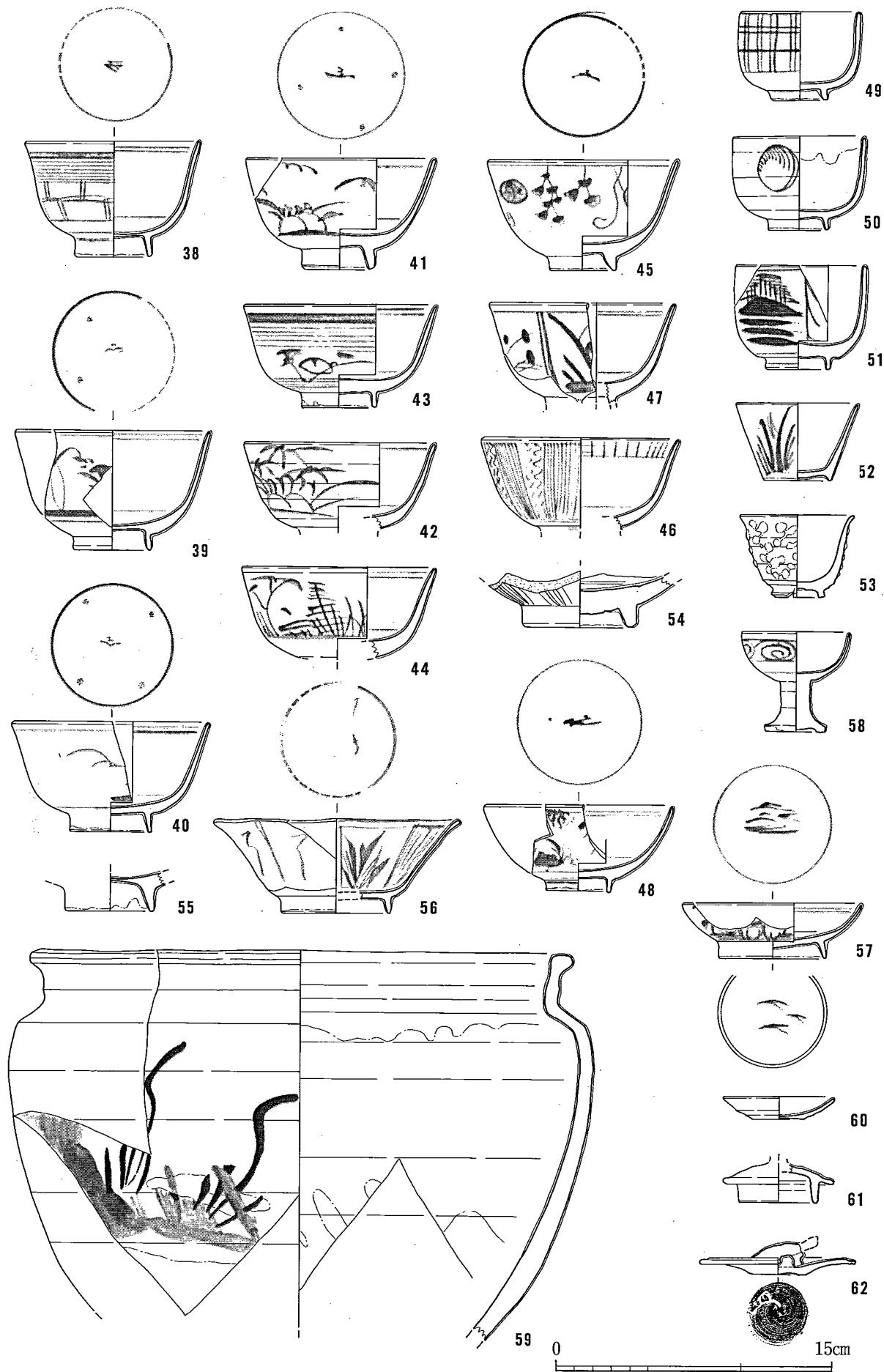
陶磁器（第77図）

染付碗（38～51） 39～42は見込みに目土跡がみられるもの。39は復原口径11.0cm、器高6.5cm、高台径4.6cmの大きさの碗で、外面に草花らしい文様が描かれ、内面は口縁に2条の圈線、見込みに1条の圈線をもち、見込み中央に記号のような文様を付ける。白色の胎で畳付を除き透明感のある釉がかかる。40～42は外面の文様が同様で、鳥の飛ぶ姿と岩山？を描いていて、40には上下に単直線が巡る。内面は40の口縁部圈線が2条で、41・42が1条だが、いずれも見込み中央に三の字のような記号が付く。40は復原口径11.0cm、器高6.0cm、高台径4.6cmの大きさ。41・42は口径10.4cm、器高6.1cm、高台径4.1cmの大きさ。

43は復原口径10.5cm、器高5.6cm、高台径4.2cmの大きさ。外面に横走する多条の平行線に挟まれて花卉文様が描かれる。内面は口縁部に2条、見込みに1条の圈線を巡らせて、釉を蛇の目に搔き取る。

38は腰部の器壁が薄く、端反り気味の深めな碗。復原口径9.8cm、器高6.3cm、高台径4.3cmの大きさ。外面には多条の平行線を巡らせて、下半に双直線で煉瓦積みのような連続文様を描く。内面は口縁部2条、見込み1条の圈線と見込み中央に双直線を交差させた記号状の文様が付される。

44～47は端反碗の類で、目土や釉の蛇の目搔き取りのないもの。44は復原口径10.6cmの大きさ。外面に樹木を描き、内面は口縁に2条、見込みに1条の圈線を巡らす。灰色の胎で、透明な釉がかかる。45は高台内側が斜めに削り出される。復原口径10.6cm、器高6.0cm、高台径3.7cmの大きさ。口縁部内外と腰部、見込みに圈線を巡らせて、外面に唐草などを描く。見込み中央には記号状の文様が付される。乳白色系の胎で透明な釉がかかる。46は復原口径10.8cmの大きさ。外面は多条の垂線と2条単位の波状線が交互に配され、内面の縁文様は4条の圈線に短直線を交差させた格子文様



第77図 III区 3号溝出土土器実測図1 (1/3)

が描かれる。淡灰色の胎で透明な釉がかかる。47の外面には区画内に草花が描かれ、内面は口縁部に2条、見込みに1条の圈線が巡らせている。白色の胎で透明な釉がかかる。

48は復原口径10.4cm、器高4.8cm、高台径3.6cmの大きさの碗。外面の圈線に挟まれた文様帯に蟹と竹籠らしい文様が描かれて、内面は口縁に2条、見込みに1条の圈線と中央に記号状の文様が付される。

49～51は小丸形の湯飲み碗である。49は双直線を用いた格子目、50は丸文が3ヶ所に配される。49は口径6.7cm、器高4.8cm、高台径3.2cmの大きさ。白色の胎で透明な釉がかかる。50は淡黄褐色の胎で淡灰色の透明感のある釉がかかる。口径7.3cm、器高5.2cm、高台径3.5cmの大きさ。51は復原口径7.3cm、器高5.7cm、高台径3.7cmの大きさ。高台脇は平らに削られる。外面は区画内に山水文様などが描かれ、内面の縁文様は2条の圈線である。淡黄褐色の胎で透明な釉がかかる。

染付猪口 (52) 口径6.7cm、器高4.2cm、底径3.8cmの大きさの、輪高台の底部から直線的に開く器形である。外面に草と蝶らしい文様が描かれている。

染付向付 (56) 復原口径13.5cm、器高5.2cm、高台径6.1cmの大きさの八角鉢で、外面は各面に了字状文を配し、内面は区画内に草と書物らしい文様を交互に描いている。見込み中央にも文様が描かれるものの、破損のために意匠は不明。白色の胎で透明な釉がかかる。

染付碗蓋 (57) 実測図では皿のように図示しているが、内面よりも外面の文様が充実しているので蓋であろう。復原口径10.0cm、器高3.0cm、高台径6.0cmの大きさ。外面の文様は水辺の様子らしく、高台内に3羽の飛ぶ鳥が描かれ、内面は口縁に2条、見込みに1条の圈線と中央に水と飛ぶ鳥が描かれる。白色の胎で透明な釉がかかる。

染付仏飯器 (58) 復原口径6.0cm、器高5.5cm、裾径3.5cmの大きさ。碗部分の外面に蛸唐草文が描かれる。中実の柱状部を介して脚裾部が開き、蛇の目高台が付く。灰白色の胎で底面以外に透明な釉がかかる。

青磁碗 (54) 底部破片で、高台径6.4cmの大きさ。龍泉窯系の青磁碗で、外面に蓮弁状の凹凸がみられ、高台内の疊付側と底面の釉が搔き取られる。

磁器皿 (60) 復原口径6.2cm、器高1.2cm、底径2.9cmの大きさの皿。灰白色の胎で、ヘラ切り離しの底部をもつ外面は露胎で、内面と口縁部に灰黄褐色を呈する透明感のある灰釉がかかり、貫入がみられる。

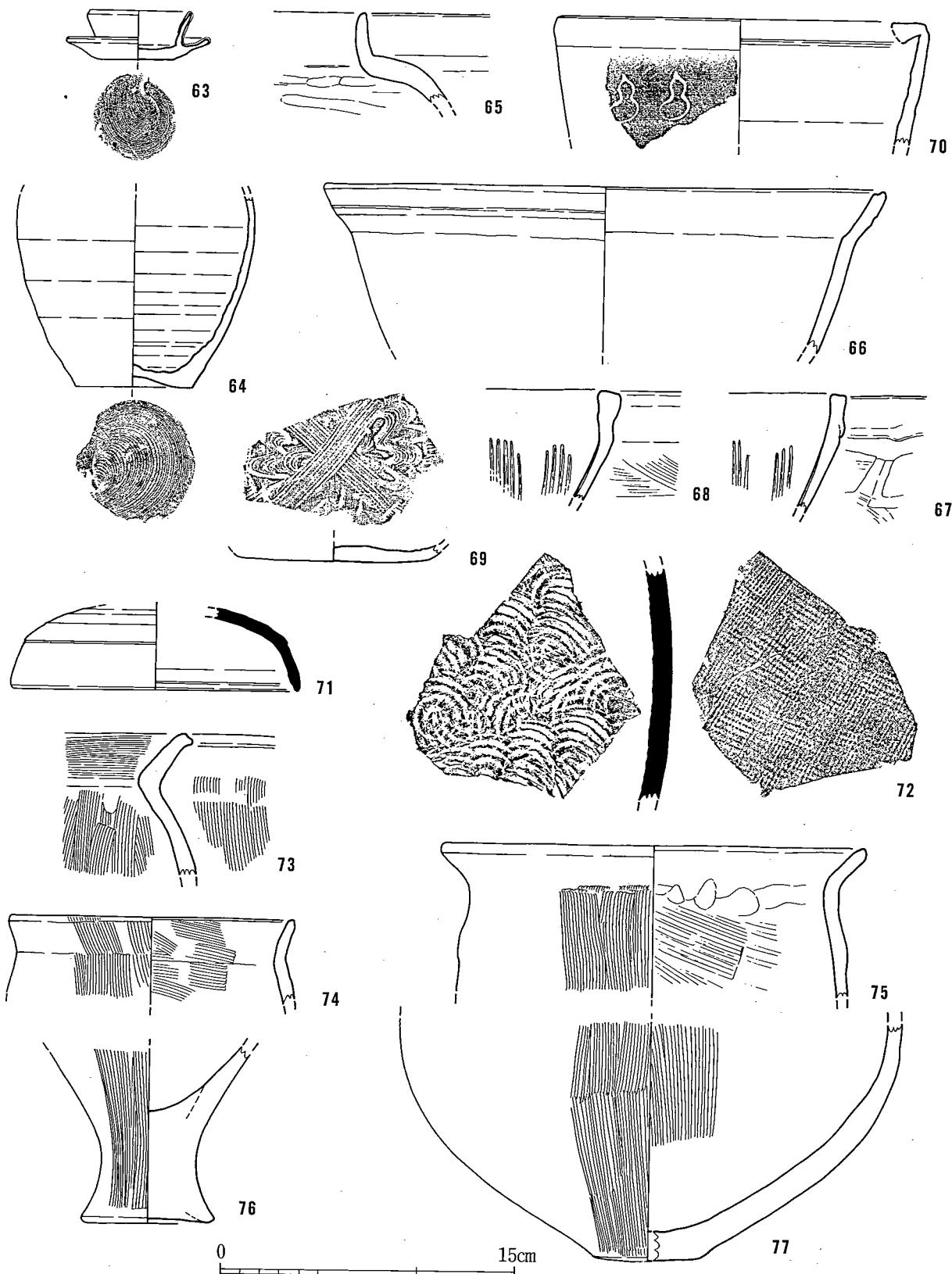
磁器蓋 (61) 復原外径6.2cm、口径4.4cmの大きさの蓋で、笠形の天井部にはつまみが付くが欠失する。天井部は端部で僅かに反り、身の内側に入るかえりは直に近い。灰白色の胎で、天井部外面に透明な釉がかかる。

陶器碗 (55) 底部破片で、疊付以外に淡茶褐色の胎に透明感のある灰釉がかかる。

陶器猪口 (53) 復原口径5.3cm、器高4.5cm、高台径2.9cmの大きさの口縁部が端反りになる器形。高台脇は凹み加減に削られ、高台は3ヶ所の切り込みがある。粉ひきで、うす緑の釉がかかるが、外面は粒状に釉を垂らしている。

陶器甕 (59) 復原口径30.0cm、胴最大径32.2cmの大きさで、肩の張った体部から口頸部が直立気味に開き、口縁部は外側に肥厚する。赤褐色に焼き締められた後に、灰色の藁灰釉が内面の口頸部と外面にかけられるが、外面の胴下部では縞模様である。胴上半に黒色と茶灰色、緑色で岩と樹？らしい絵が描かれる。

陶器蓋（62・63） 62は口径8.6cm、器高2.0cm程の、皿状の蓋で、凹んだ天井部中央に亀形のつまみが貼付けられる。口縁端部は僅かに段をなし、糸切り痕の残る底部は径3.3cmを測る。焼き締めで茶褐色を呈する底部は露胎で、口縁部内面は蠟引き、天井部外面は濃い灰緑色の灰釉がかかる。



第78図 III区 3号溝出土土器実測図 2 (1/3)

陶器灯明受皿 (63) 外径7.5cm、器高2.6cmの大きさで、外反して開く径5.3cmの中皿が付く。口縁端部は僅かに段をなし、糸切り痕の残る底部は径4.0cmを測る。焼き締めで淡茶褐色を呈する底部は露胎で、口縁端部と天井部外面は濃い暗茶褐色の鉄釉がかかる。

陶器壺 (64) 体部下半の破片で、底径6.0cm、胴最大径12.2cmの大きさ。糸切り底の底部は内側に凹み、内外面ともに回転ナデ調整される。精良な胎土で、焼き締められて暗茶褐色を呈する。

土師質土器 (第78図)

壺 (65) 膨らんだ胴部から口縁部が直立気味に立ち上がる、短頸壺である。内外面ともにヨコナデとナデで調整される。

鉢 (66) 復原口径29.0cmの大きさの体部が内彎気味に開いて、頸部で一旦括れ、口縁部が内彎して立ち上がる器形の鉢。内外面ともにヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、灰黄褐色に焼成されるが、外面に僅かながら煤が付着する。

摺 鉢 (67~69) 67は直線的に開く体部から口縁部が内彎して立ち上がり、外面に折り畳んだように肥厚した口縁部帶はやや幅広である。体部外面はヘラ削りされ、内面は3~4条単位の櫛歯状の目が刻まれる。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。68は口縁部が内彎して立ち上がり、口縁部は外側に肥厚する。体部外面はヘラ削りされ、内面は4条単位の櫛歯状の目が刻まれる。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。69は平底の底部破片で、内底面に櫛歯状原体で描いた花弁状の波状文様と×字文様がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙黄褐色に焼成される。

火 鉢 (70) 外径19.0cmの小形の火鉢で、体部はバケツ状に開き、口縁部が内側に屈曲して肥厚する。内外面ともに回転ナデ調整され、外面に瓢箪文が押捺される。胎土に砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。内面の上位に煤が付着する。

須恵器 (第78図)

杯 蓋 (71) 復原口径14.6cm、器高8.5cm程の大きさの杯蓋で、回転ヘラ削りされる天井部と口縁部の間に段を有し、内彎気味の口縁部は端部内側に沈線状の段を有する。

甕 (72) 外面に格子目叩き痕、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片である。

弥生土器 (第78図)

甕 (73~76) く字形に外反する口縁部破片 (73~75) と、細く高い底部破片 (76) である。74の頸部の括れは緩やかである。内外面ともにハケ目調整されて、75の口縁部は内外面ともにヨコナデ調整され、胴部内面のハケ目は板ナデに近い。76は胴部側の外面がハケ目調整される。

壺 (77) 平底から大きく膨らむ胴下半部の破片である。胴部内外面はハケ目調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。

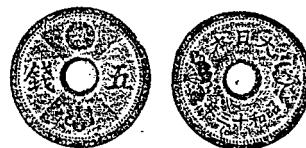
これらの土器類では、弥生土器は甕底部に中期初頭頃の特徴をみるが、他は後期に含まれるものである。須恵器は杯蓋の特徴からみて6世紀代のものである。陶磁器や土師質土器では一部に中世期のものも含まれるが、大半は19世紀以降のもので、くらわんか碗や広東碗が殆どみられないことから明治期以降に主体があるのであろう。

鉄製品 (図版29-2、第68図)

用途不明鉄製品 (20) 両端を欠損する棒状製品で、僅かに曲がる。一方の端では0.4cm角だが、他方では0.7cm角に太くなり、丸味を帯びる。

銅製品（第79図）

古 錢 東南側肩部で2号溝との間の浅い落ち込み部分から出土した。外径19mm、厚さ1.5mm、孔径3.6mmの大きさの五銭である。表面は菊花文と桐文が上下に配され、裏面には「大日本」と「昭和十三年」銘と左右に桜花文が配される。



第79図 III区3号溝
出土古銭拓影(実大)

5. 包含層の縄文時代遺物

包含層出土の遺物のうち、縄文時代に含まれるものを見た。

縄文土器（第81図）

33は2号溝から出土したが、外反する鉢の口縁部破片で、外面に2条の沈線が横走して、斜方向に降りる沈線もみられる。内面はアナグラ条痕で調整される。

78は内弯する椀形鉢の口縁部破片で、外面に沈線で区画される文様が描かれて、区画内に縄文が充填される。内面も研磨される、磨消縄文土器である。胎土に砂粒・雲母を含み、茶褐色に焼成される。

79は波状口縁の深鉢の口縁部破片で、波頂部下にS字状蛇行文が描かれる。胎土に砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成される。

80・81は内外面ともに条痕の後にナデ調整される胴部破片と底部破片である。胎土に砂粒・角閃石・褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成される。

これらの土器は、後期中頃の鐘崎式系土器で、上唐原遺跡に類例がある。

石 器（図版31-1、第71図）

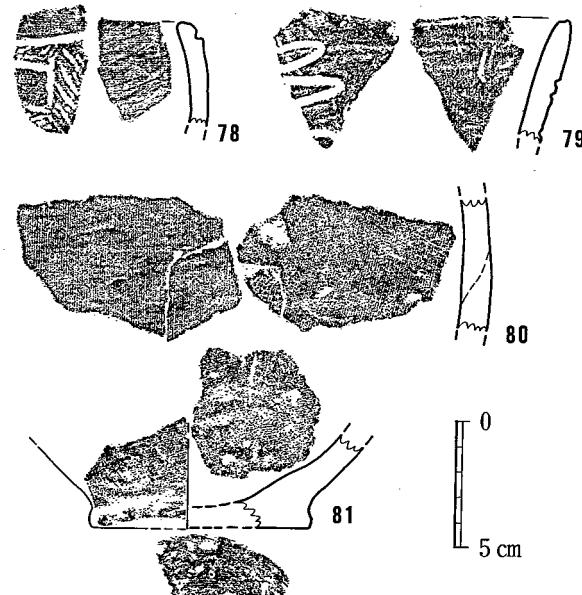
打製石鏸（2）長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量1.2gを測る。姫島産黒曜石製の平基式の石鏸で、全面に調整剝離が及ぶ。

削 器（3）先端側を欠くが、現存長2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重量3.0gを測る。姫島産黒曜石製の縦長剝片を用いて両側縁を主要剝離面側から調整剝離されている。

打製石斧（4・5）4は緑泥片岩製の扁平打製石斧で、刃部の一部を欠失する。現存値で長さ10.3cm、幅6.9cm、厚さ1.1cmの大きさで、重量97.7gを測る。5は緑簾片岩製の扁平打製石斧で、刃部を欠失する。残存長9.6cm、幅5.5cm、厚さ1.3cmの大きさで、重量81.1gを測る。

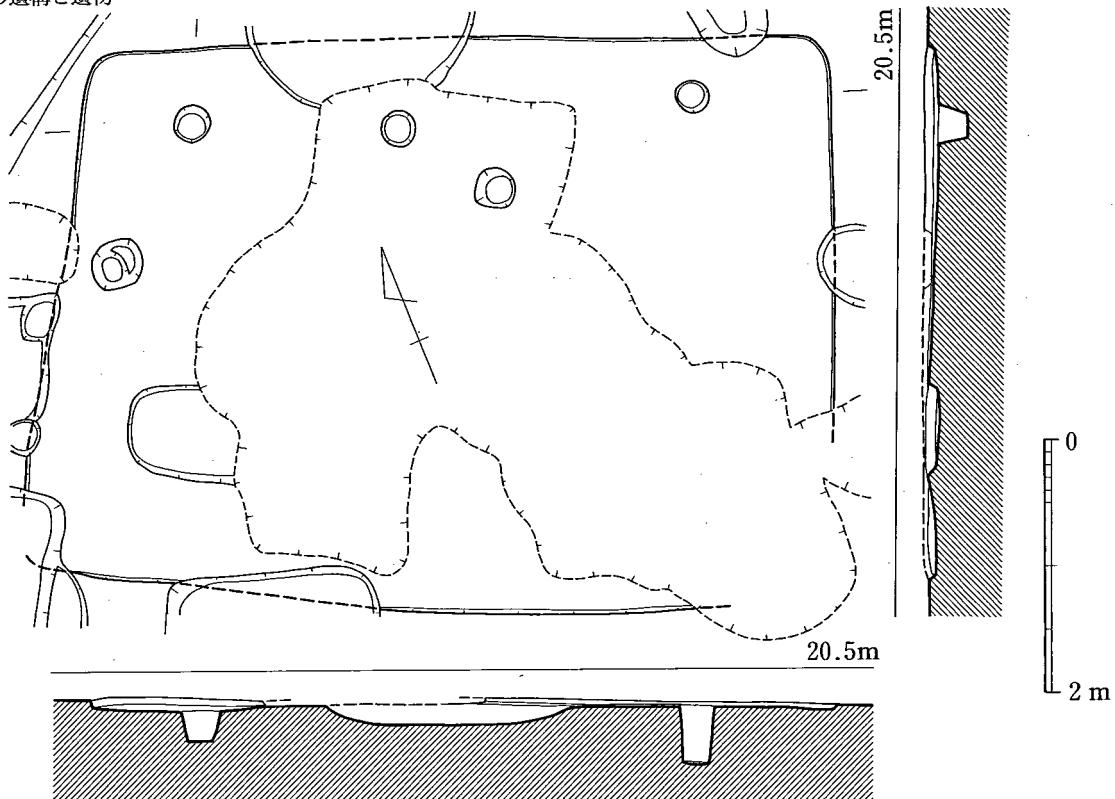
5 IV区の遺構と遺物

IV区では北部や中央部に建築廃材を焼却したとみられる大きな攪乱坑があり、残された北西部と北部で住居跡、北東部で溝状遺構を発見した他には、不整形な土坑や柱穴状ピットが北半部にみら



第80図 III区包含層出土縄文土器拓影(1/3)

5 IV区の遺構と遺物



第81図 IV区住居跡実測図(1/60)

れたものの、南半部は特に遺構としてまとまらない状態であった。また発見された土坑などの遺構のうち堆積土が灰黒色や黄灰色っぽい色調を呈し、締まりがなく軟らかな状態のものについては、ごく最近の攪乱坑と判断して掘り下げていない。堆積土が締まった状態の土坑でも遺物を伴わない土坑が幾つかあり、これについては特に名称を与えていない。柱穴状ピットはいくつか発見されたが、掘立柱建物跡を構成するピットは中央部東寄りで確認した1棟分以外には確認できなかった。

IV区では、住居跡1軒、掘立柱建物跡1軒、溝1条がある。

1. 住居跡

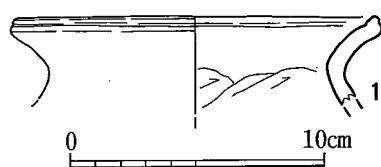
1号住居跡（図版30-1、第81図）

調査区北西部で発見された、長方形プランの住居跡で、長軸方向は N67°30'W を向く。バックフォーによる攪乱坑が大きく入り、溜め枡状の攪乱坑などもあって残された部分は少ないが、長さ 5.90~6.40m、幅 4.20~4.50m の規模をもつ。周壁は 5 cm 前後にしか残らず、床面は平坦でやや堅緻な面をもつが、ベット状遺構や周溝などは分からぬ。床面を掘り込む柱穴状ピットは 6ヶ所に発見されたが、主柱穴と判断しえるのは北西隅部と北東隅部の 2 穴だけである。柱穴は直径 25~30 cm、深さ 25~45cm の規模で、柱痕は確認出来ない。また炉跡についても確認できなかった。

出土土器（第82図）

上部をかなり削平された上に攪乱を大きく被ったためか、出土遺物は極めて少なく、図示しえる資料は 1 点にとどまる。なお、南西隅部の柱穴状ピット出土の土器では、第84図 6 の例がある。

土師器甕（1）復原口径 15.0cm の大きさの、口縁部が外反



第82図 IV区住居跡出土土器実測図(1/3)

して、端部が僅かに上側へつまみ上げられる甕で、胴部内面のヘラケズリは頸部にまで及ぶ。器壁はやや厚く、細砂粒・角閃石・雲母を含む胎土で、茶褐色に焼成される。

古墳時代初頭の古式土師器である。

2. 掘立柱建物跡

1号建物跡（図版30-3、第83図）

1号住居跡の東南側に隣接する位置に発見された、1×1間の建物跡である。N67°Eに長軸方向のある建物で、柱間間は240cmと230cmである。柱穴は直径40～70cm、深さ40～50cmの規模で、柱痕は確認出来なかった。

出土土器（第84図）

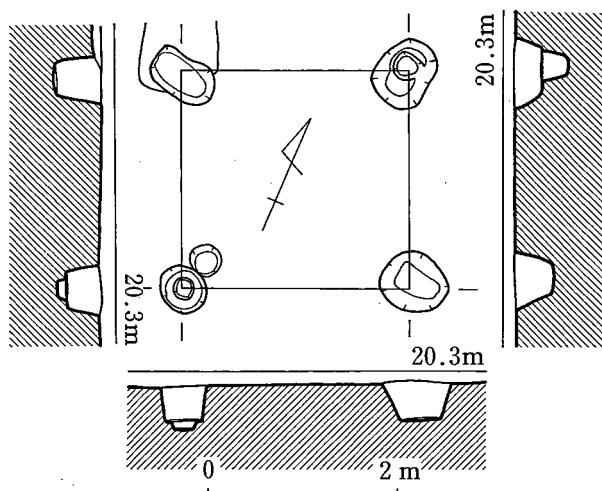
土師器甕（2） 南東側の柱穴から出土した。緩やかに外反する口縁部は、端部内面が僅かに凹む。胴部内面のヘラ削りは頸部まで及ぶ。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡褐色に焼成される。

この甕の特徴は古墳初頭の古式土師器のものである。他の柱穴からも、弥生土器小破片、古式土師器らしい内面ヘラ削りの胴部破片などが出土している。

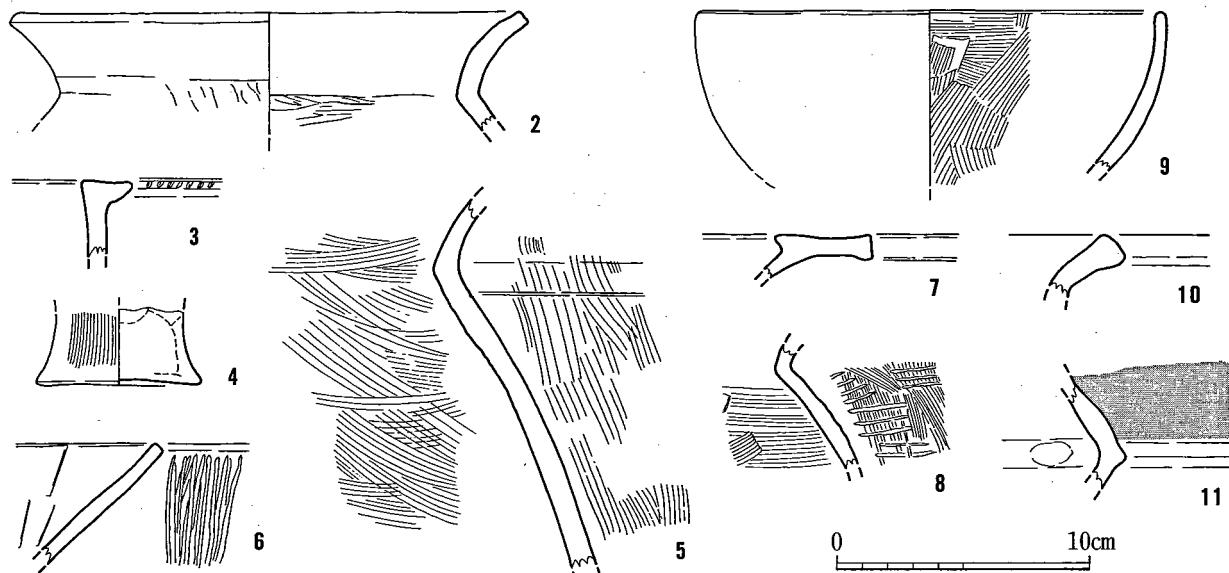
柱穴状ピット出土の遺物

遺構としてのまとまりはないが、柱穴状ピットから出土した遺物のうち主なものを図示する。

弥生土器甕（3～5・8・10） 3～5はいずれも1号住居跡周辺の柱穴状ピットから出土した。3はL字に短く屈折し肥厚する口縁部で、外面に刻み目が付される。4は細く高い底部破片で、胴部側外面はハケ目調整される。5は内外面ともハケ目調整される胴部破片である。8・10は北東部の柱穴状ピットから出土した。8は内外面ともハケ目調整される胴部破片で肩部に叩き目が残る。



第83図 IV区掘立柱建物跡実測図(1/80)



第84図 IV区ピット出土土器実測図(1/3)

10は外反した口縁端部が肥厚するもので、ヨコナデ調整される。

弥生土器壺（7・11） 北東部の柱穴状ピットから出土した。7は鋤先状口縁の破片で、外面は平らに整えられる。11は算盤玉状に膨らむ胴部破片で、断面三角形の凸帯が巡る。

弥生土器鉢（9） 復原口径19.0cmの大きさの、内彎して立ち上がる鉢で、端部は平らに整えられる。外面はナデ調整、内面はハケ目調整される。

土師器高杯（6） 1号住居跡南西部にある深い柱穴状ピットから出土した。直線的に開く口縁部破片で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は板状工具によるナデで調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

土製品（図版31-2、第85図）

管状土錘（1） 半欠資料で、残存長2.9cm、外径1.3cm、孔径0.4cmの大きさ。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡明黄褐色に焼成される。南西部の柱穴状ピットから出土した。

鉄製品（図版31-2、第84図）

用途不明鉄製品（4～6） 1号住居跡周辺の土坑状のピットから出土した。4は2.0×1.9cmの広さ、厚さ0.2cmの方形の板状製品である。5は板状の破片、6は幅0.4cm、厚さ0.2cmの棒状の破片である。

3. 溝状遺構

1号溝（東北隅溝）（第5図）

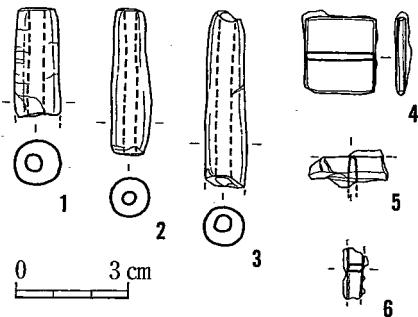
調査区北東隅に発見された溝で、二股に分かれる。東西溝は約5mの長さ、南北溝は約8mの長さを確認した。東西溝は断面U字形の溝で、上縁での幅2.00m、深さ0.60mで、N55°Wの方向を向く。南北溝は東西溝よりも狭小で、上縁での幅1.00m前後、深さ0.10～0.50mで、N5°Wの方向を向くが、北側は調査区域外に潜る。

出土土器（第86図）

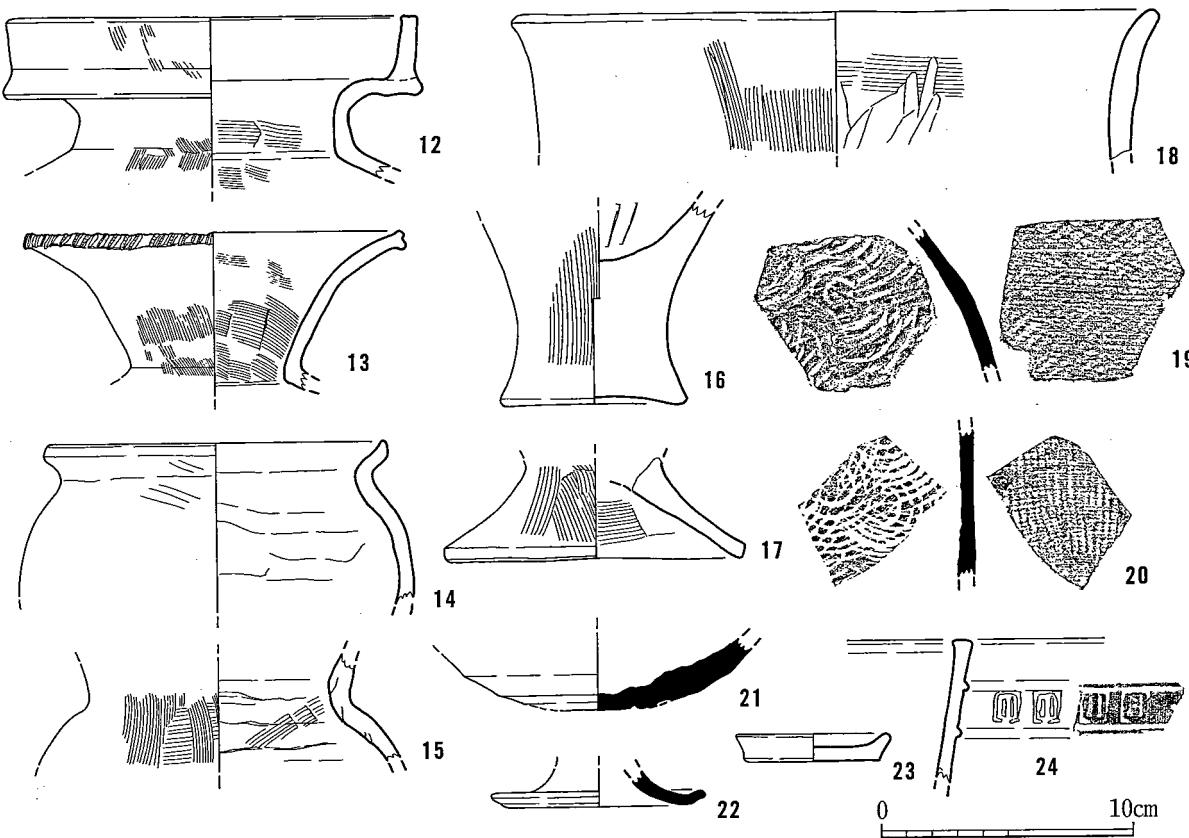
弥生土器壺（12～15） 12は、直立した頸部から大きく外反した口縁部が、突出気味に屈折して、更に直立して立ち上がる複合口縁の壺で、復原口径16.6cmの大きさ。胴部と頸部の内外面はハケ目調整される。13は括れた頸部から口縁部が喇叭状に外反して開き、端部外面はハケ目原体の小口による刻み目が施される。口頸部の内外面はハケ目調整される。復原口径15.4cmの大きさ。14は復原口径14.0cm、胴最大径16.0cmの大きさで、口縁部が短く外反する。器面は内外面ともにナデとヨコナデで調整される。15は口縁部を失うが、胴部外面はハケ目、内面は粘土の継ぎ目の残るナデで調整されて、一部ハケ目がみられる。

弥生土器甕（16～18） 16は細く高い底部破片で、胴部側の外面はハケ目、内面は板ナデ調整される。底径7.2cmの大きさ。17は台付き甕の脚台部で、内外面ともにハケ目調整される。復原裾部径12.0cmの大きさ。

18は復原口径25.8cmの大きさの口縁部が僅かに外反する甕で、甕の可能性がある。胴部外面はハケ目、内面はハケ目とヘラ削りで調整される。



第85図 IV区出土土製品
・鉄製品実測図(1/2)



第86図 IV区1号溝出土土器実測図(1/3)

須恵器壺 (19・20) ともに外面には叩き目痕が残るものカキ目調整され、内面に同心円当て具痕がみられる、胴部破片である。

須恵器壺 (21) 脚台部が剥落するが、底部破片で、外底部はヘラ削りされる。

須恵器高杯 (22) 据部端が跳ねるように反る、脚据部破片で、復原裾径 8.4cm の大きさ。

土師器小皿 (23) 復原口径 6.2cm、器高 1.1cm、底径 5.5cm の大きさで、外底面には糸切り痕がみられる。胎土に角閃石・褐色粒を含むが精良な胎土で、淡赤褐色に焼成される。

瓦質火鉢 (24) 口縁部は直線的に開き、端部は平らに整えられるが内面側に拡張気味となる。口縁部下の外面に巡る 2 条の箍状凸帯間に雷文が刻まれる。

これらの土器類では弥生中期初頭頃の壺底部、終末頃の壺や甕もみられるが、古墳後期の須恵器高杯や、土師器甕も含まれ、更に時期の下降する土師器小皿は口径がかなり小さく中世のもので、瓦質火鉢は近世の19世紀代に下る可能性が高い。

土製品 (図版31-2、第84図)

管状土錐 (2・3) ともに一方の端部を欠くが、2 は現存長 3.9cm、外径 1.0cm、孔径 0.3cm の大きさ。3 は現存長 4.7cm、外径 1.0cm、孔径 0.4cm の大きさ。ともに胎土に細砂粒・角閃石を含み、灰黄褐色・暗黄褐色に焼成されている。

4. その他の遺物

包含層出土土器 (第87図)

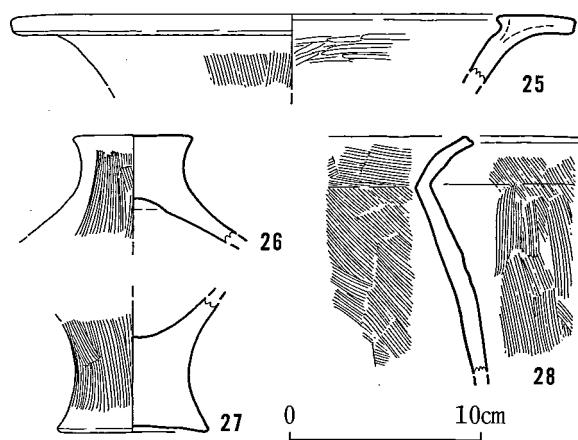
弥生土器壺 (25) 鋤先口縁の口縁部破片で、復原口径 29.8cm の大きさ。外面はハケ目、内面は

5 IV区の遺構と遺物

ヘラミガキで調整される。高杯の可能性もある。
中期中頃であろう。

弥生土器蓋 (26) 底部と同様な形の天井部
をもち、体部が大きく開く蓋であろう。体部外
面はハケ目、内面はナデ調整される。中期前半
であろう。

弥生土器甕 (27・28) 27は甕の細めで高い
底部で、胴部側の外面はハケ目、内面はナデ調
整される。中期初頭であろう。28は内外面とも
にハケ目調整される、く字形に外反する口縁部
をもつ甕で、口縁端部は平らに面取りされる。
後期中頃であろう。



第87図 IV区包含層出土土器実測図(1/4)

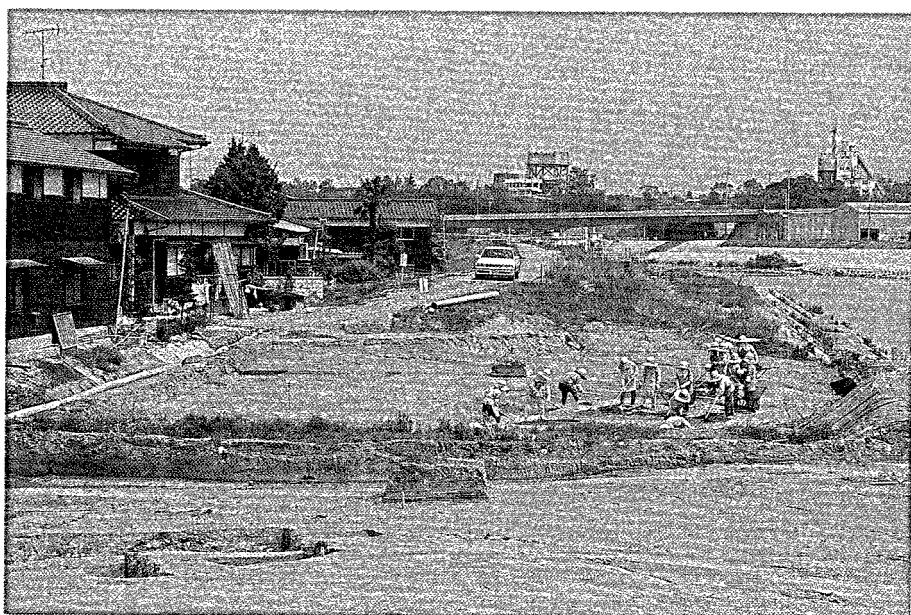


写真2 IV区の遺構検出作業風景

第4章 福岡県上唐原稻本屋敷遺跡出土の牛骨および馬骨

西中川 駿・吉野 文彦
(鹿児島大学獣医学科)

1. はじめに

わが国の牛、馬の出土した遺跡は、筆者らの調査で牛270、馬587カ所もあり、福岡県下では牛6、馬23カ所からその出土例が報告されている。時代的には中世が多く、次いで古墳、平安時代のものである。

近年、九州では各県から牛、馬の遺体が検出され、牛、馬がいつ頃、どこから移入されてきたかの解明の一助となっており、福岡県下では北九州市や福岡市博多遺跡群などからの出土例が報告されている。

上唐原稻本屋敷遺跡は、福岡市築上郡大平村大字上唐原にあり、福岡県教育庁文化課が平成4年4月～6月に、築上堤工事にかかる埋文調査を行ったものである。時期は弥生時代から中、近世の遺構が検出されているが、動物遺体は室町時代に属するという。今回依頼された遺物は、I区東側溝とII区土壙墓から検出され、出土状況を確認後、当教室へ搬入されたものである。牛の遺体は小骨片で、殆んど計測不可能であったが、肢骨の末端の中節骨、馬は上腕骨の計測を行い、体高の推定などを試みたので、その概要を報告する。

2. 出土状況

牛の遺体はII区土壙墓から検出され、発掘時の写真では、後肢骨が両側を合せた状態で埋葬されており、大腿骨、脛骨、中足骨などがよくわかる状況であるが、当教室へ搬入されたときは、2～5cmの小骨片化しており、完形骨はなかった。

馬の遺体は左上腕骨1個で、I区東側溝からの出土である。

3. 出土骨の概要

牛：50数個の骨片からなるが、それらは側頭骨、後頭骨などの頭蓋片、環椎、軸椎その他の頸椎片、寛骨、大腿骨、脛骨、中足骨などがある。骨端の閉鎖などから成獣と思われる。第三趾中節骨の中央幅と径は、 $36.2 \times 20.1\text{mm}$ 、第四趾中節骨のそれらは $36.1 \times 19.7\text{mm}$ であり、これらの値から筆者らの体高推定式で体高を求めるところ 117.28cm 、 116.85cm となる。これらの値は、現代の黒毛和牛(128cm)より低く、日本在来牛である口之島野生化牛や見島牛の雌と同じ大きさである。

馬：I区東側溝からただ1点の出土で、左上腕骨で、両骨端ではなく、骨体のみの標本である。骨体の最小幅×径は $29.8 \times 36.30\text{cm}$ であり、これより骨長を推定し、林田らの方法で体高を推定すると、 127.8cm となる。これは、現生のトカラ馬(115cm)より大きく、御崎馬(131cm)より少し小さい馬であったことが想像される。

4. 考 察

牛の埋葬例は、九州では少く、熊本県のカキワラ貝塚などからは投棄したとみられる沢山の骨が出土している。本遺跡の遺体は、前肢骨はみられないが、頭蓋、頸椎、後肢骨が検出され、また、後肢骨は両足そろえてあることなどから、死後埋葬されたものと考えられる。

一方、馬については、熊本県上の原遺跡や八反原遺跡、宮崎県祇園原地区遺跡など数多くの埋葬例と思われる遺体が出土している。また、最近では福岡市の立花寺B遺跡からは、2体重なり合うように埋葬された馬が検出されている。しかし、本遺跡の馬は上腕骨1点の出土であり、その出土状況は、詳細にされていない。

牛、馬がいつ頃、どこから移入されたかは諸説があり、未だに明らかでないが、古墳時代になると全国各地から出土例が数多く報告されていることや、これまでの縄文遺跡から出土したものは、悉く年代が新しくなっており、現在のところ弥生中期以降、朝鮮半島を経由して、北部九州などに渡来したことが想定されている。

上唐原稻本屋敷遺跡出土の牛は、推定体高117.3cmで、これは古代牛の形質を残している口之島野生化牛や見島牛の雌の大きさであり、また、馬は127.8cmで、中型馬の御崎馬に類似していることがわかった。これらの牛、馬は本遺跡を遺した人々によって、飼養され農耕や運搬、騎馬に使役されていたことがうかがわれる。

5. ま と め

上唐原稻本屋敷遺跡出土の牛、馬の遺体について調査した。

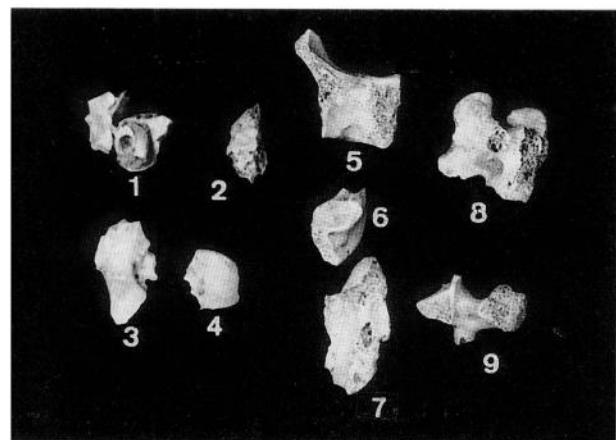
1. 本遺跡のII区土壙墓から牛の頭骨、頸椎、後肢骨の小骨片(50数点)、およびI区東側溝から馬の上腕骨1点が検出された。

2. 牛は基節骨の大きさから体高117.8cmと指定され、これはわが国の在来牛と同じ大きさである。馬は上腕骨の大きさから体高127.8cmと推定され、現生の御崎馬より少し小さい中型馬に属する。牛は農耕に、馬は交通の手段として、また運搬用として使役されていたものと考えられる。

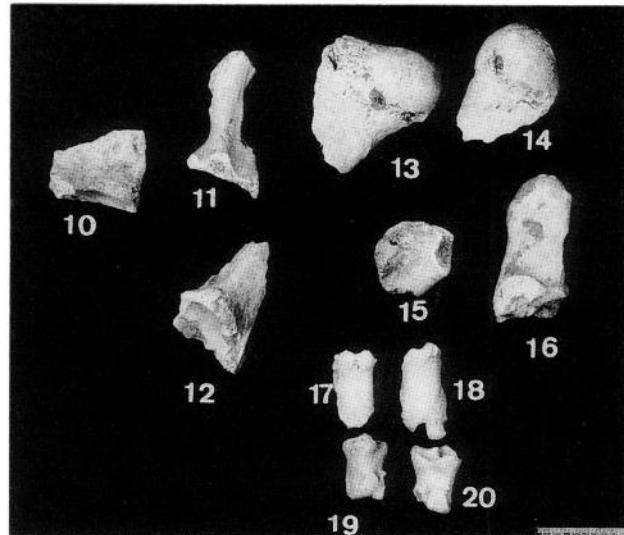
参考文献

1. 長谷部言人：石器時代に飼牛あり、人類誌 54 (10)、21-26 (1939)
2. 林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究 1-180、日本中央競馬会、東京 (1978)
3. 林田重幸・山内忠平：馬における骨長より体高の推定法、慶大農学術報告 6、146-156 (1957)
4. 西中川 駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、文部省科学研究費補助金 (一般B) 研究成果報告書 1-197 (1991)
5. 芝田清吾：日本古代家畜史の研究、100～189、学術出版会、東京 (1969)

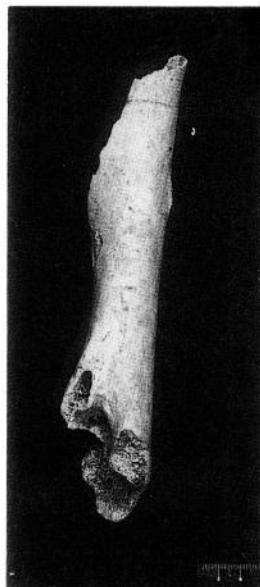
写真図版



1



2



3



4

図1, 2 牛の出土骨

1～4：頭骨片 5～9：頸椎片
10～12：寛骨片 13, 14：大腿骨片
15：膝蓋骨 16：踵骨 17, 18：基節骨
19, 20：中節骨

図3 馬の上腕骨(左)

図4 発掘時の牛の出土状況

第5章 おわりに

今回の上唐原稻本屋敷遺跡の発掘調査で発見された遺構・遺物を通してみれば、地形的な制約もあるのか、遺構の密集度は顕著でない。しかし出土遺物をみるとかなりの時期幅をもつ。

縄文時代

時期的に最も遡る資料は、Ⅲ区包含層や後世の遺構に混入するなどして出土する縄文土器と石器類である。土器は後期前葉後半の鐘崎系土器であり、豊前バイパス建設に伴って調査された上唐原遺跡の住居跡出土土器に特徴的な蛇行沈線文様を有している^(註1)。周防灘南岸地域においては、この時期に集落が急増する傾向があり^(註2)、山国川自然堤防上に立地する上唐原遺跡や、大分県側の佐知遺跡、佐知久保畠遺跡も軌を同一にしているとみられる。

弥生時代

弥生時代の遺物は、前・中・後期の各時期の遺物が出土している。しかし遺構としては中・後期のみが発見されている。前期の遺物は0区の用地境の水路工事の排土に混じっていたものの、調査区域内では発見されていないことから、前期の遺構は既に築堤盛土された部分から西側に存在していた可能性がある。中期初頭の土器である下城式タイプの土器は、底部が細く厚い特徴をもち、く字形に外反して端部が跳ね上がる口縁部をもつ。このような土器は0区3号遺構やⅢ区1号土坑などと、後世の溝の混入資料にみられる。中期末から後期にかけての資料は量的には少ないがI区4号土坑などにある。

後期の土器は、I区2号土坑、Ⅲ区1号住居跡状竪穴、3号土坑などから出土する。

古墳時代

弥生後期後半以降の壺・甕などの底部は丸底化の方向に進むが、一部の甕や、高杯などには畿内系の特徴がみられる。この時期の資料は古墳時代初頭とともに一括廃棄されたとみられるII区2号溝出土例がある。この他に古墳時代初頭頃の遺構としてはII区2号土坑、IV区1号住居跡、1号建物跡などがあげられる。

古墳時代中期の資料は顕著でないが、6世紀後半頃の資料はI区1号遺構、5号遺構、Ⅲ区5号土坑などにみられる。しかし調査区内では、この後、古代の遺構・遺物は中断する。

中世

土器類では後世の溝状遺構に混入する程度だが龍泉窯系青磁碗片があり、13世紀後半以降14世紀頃のものであろう。土師器や土師質・瓦質土器類の中にも中世期の資料が含まれているものの、口縁部など特徴を明確にしえる資料は極めて少ない。

また、II区1号土壙脇からは五輪塔の火輪が出土している。特徴からは南北朝期頃とみられる。

1号土壙には遺存状況は悪いが牛の埋葬がみられた。

このほか、II区1b号溝、Ⅲ区3号溝出土遺物などに僅かながらも中世末らしい遺物が含まれる。

近世

この遺跡で大半を占めるのは、近世の遺構・遺物である。特に区画溝などの溝状遺構に廃棄された遺物は、陶磁器、土師質・瓦質土器、石製品などの日常生活用具で多岐にわたることから家屋に

近接していたものと推測される。しかし瓦の出土量は僅少であることから、家屋は瓦葺きでなく、萱葺きか板葺きの家屋であろう。

時期的には18世紀～19世紀の資料が多いものの、更に明治後半ないし大正期頃と思われる資料もあり、一部は昭和20年代まで下降することも考えられる。

山国川の改修計画概要は、建設省山国川改修事務所から昭和23年10月に発表されているが、昭和22年8月に吉富町・唐原村・南吉富村から提出された山国川直轄改修工事施工採択に就ての陳情書によれば、「昭和十六年以降昭和二十一年の間毎年一度乃至二・三度の大洪水に際会すれば拱手傍観何のなす術もなく」とあり、唐原村では昭和20年の水害で家屋全壊3戸、半壊24戸と記録されている^(註3)。調査時点での土地区画と近接するものの現水路と流路の異なるII区大溝や、III区3号溝はこの時点で水害を被っている可能性がありこの水害頃に埋没したものであろう。なお、この2つの溝を含めて東西に流路をもつ溝状遺構が、僅かな傾斜でいずれも山国川側の東側が高く、西側に低いことは、水害時に山国川側からの浸水も考慮しなければなるまい。

近世の土器について

I区の2・4・6号遺構、I区区画溝など、各地区的遺構では染付碗などの近世陶磁器が多数出土している。肥前系の染付碗が大半を占め、18世紀代から19世紀代に属するものが多い。またこれには土師質土器や瓦質土器なども伴っていて、ある程度時期を判断することが可能である。ここではそのうち主なものについて類例などに触れておきたい。

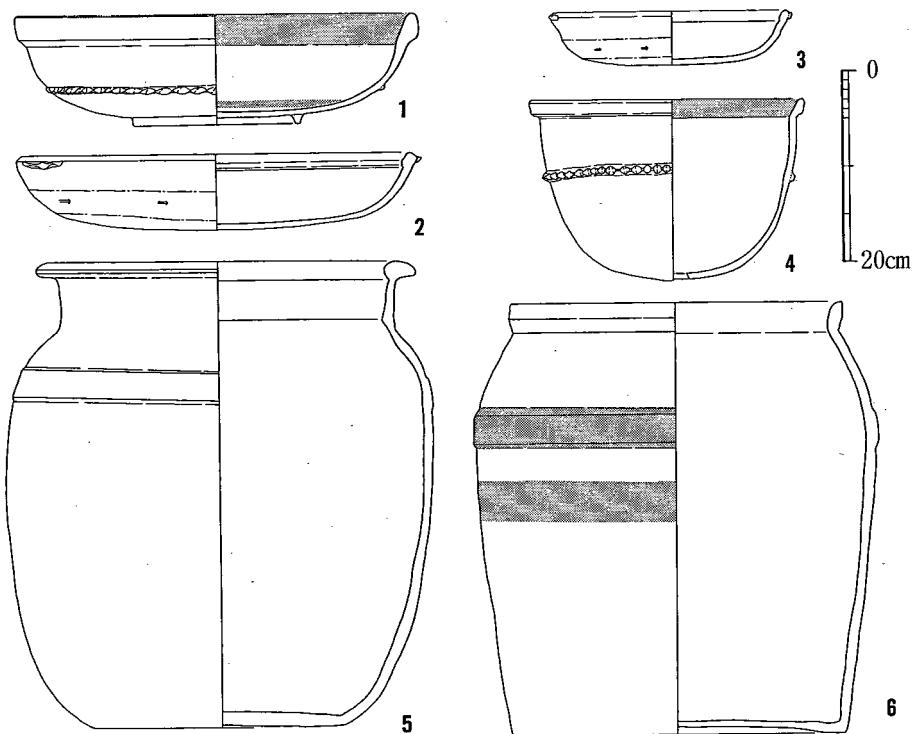
陶磁器では、I区区画溝などで、くらわんか碗、広東碗、くらわんか手の皿などの肥前系の染付碗・皿類などと、陶器急須、土瓶、行平鍋、鍋、徳利など、各種の日常雑器類が多数出土した。これらの陶磁器類は大半が18世紀後半以降のもので、茶碗類は肥前染付碗が大半を占める。しかし隸書体で文字を配する端反り碗は瀬戸・美濃系の染付碗である。割り高台で3ヶ所の刻み目のみられる猪口は明治期のイッチン掛け手法を用いるもので、信楽系のものである。また、急須、土瓶や行平鍋も信楽焼などの関西系陶磁器が多い^(註4)。

庶民層の茶碗とされるくらわんか碗は、やや量を有しているが、くらわんか碗の類でも比較的古いタイプの碗もいくつか含まれている。このことは、いわゆる農村としては比較的富裕な生活環境を窺わせるものであろう。

I区北側溝にみられる色絵皿(78)の高台内の「許」と「29207」の記号と番号は、戦時統制下で陶器製造業者に与えられた許可番号の可能性が高い。このことから、I区区画溝の最終的な埋没時期も昭和20年頃に考える必要がある。

II区大溝出土遺物にみられる陶磁器のなかに、酒瓶(徳利)がある。五合の通い徳利または貧乏徳利と呼ばれるもので、伊万里系の白磁染付瓶、白色灰釉瓶に「梅ノ露」「福田□□(酒場らしい)」銘が書き込まれているもの、鉄釉とイッチン掛けの鎧徳利がある。梅ノ露という銘柄の酒や福田酒場は現在では近傍で確認出来ず、福田酒店も近傍にはみられない。貧乏徳利は明治中期に酒造業の勃興に伴って普及し、大正末～昭和初年にガラス瓶の普及するまでの半世紀に流行したという^(註5)。甕は水などの貯蔵用に用いられたようだが、肩部に五弁花の貼付文様のある甕は小石原系統の産であろう。また、I区東側溝出土の溲瓶も鉄釉がかかり、形態からみて小石原系統であろう。

土師質土器では、体部外面に刻み目突帯が巡る鉢がある。破片では突帯を弥生終末頃の土器と見

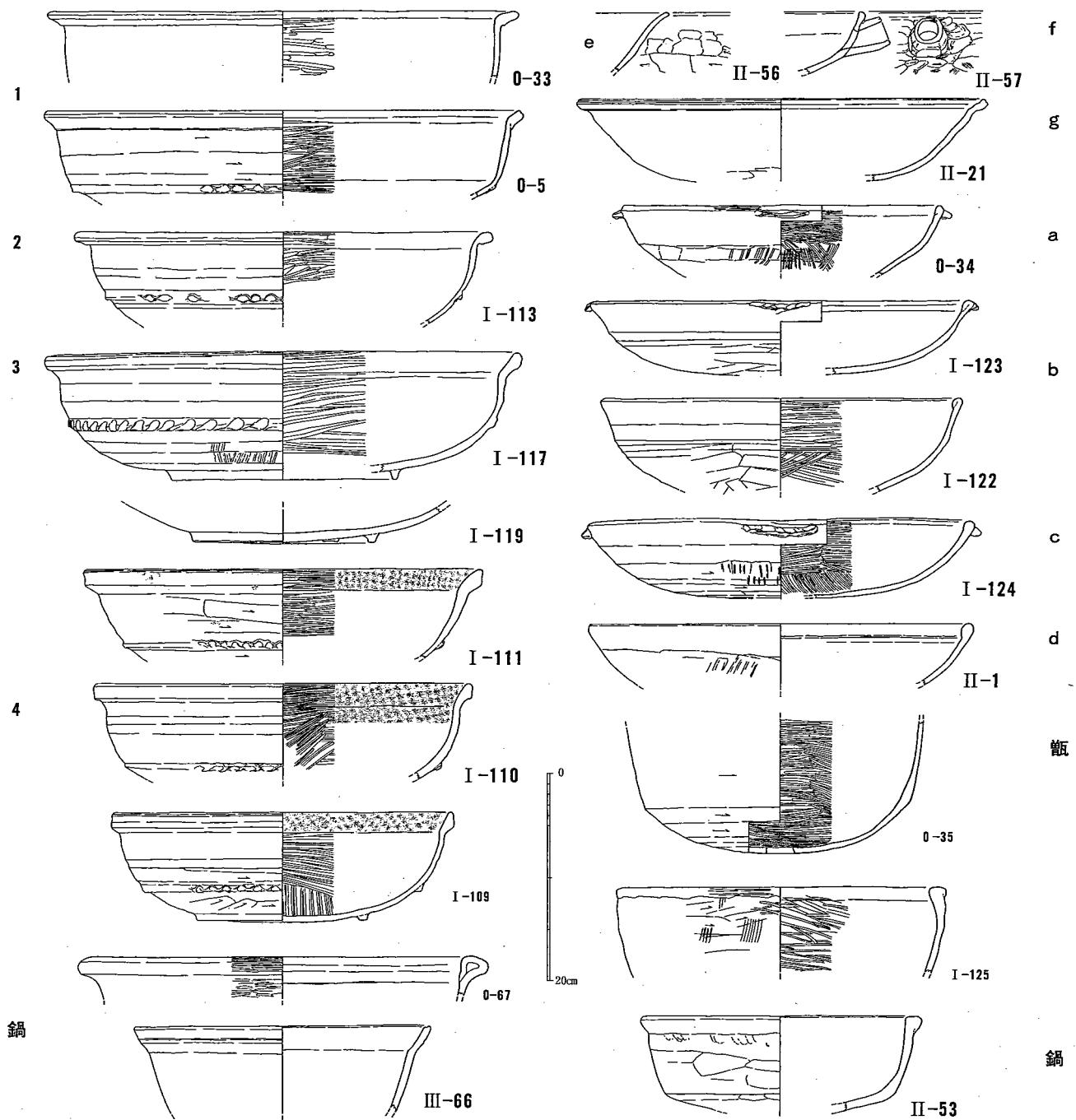


第88図 高村焼の民俗資料(1/8)
(宇佐風土記の丘資料館蔵)
(宇佐風土記の丘資料館1990を改変)

間違えるような資料であるが、外面をヘラ削り、内面をヘラミガキ調整するもので、こね鉢らしい。0区の2・4・6号遺構、I区区画溝、II区4号土坑、II区大溝などから出土していて、形態的には僅かな差異もみとめられる。この他にも、焙烙、鍋などの器種がみられ、いずれも胎土、調整手法が酷似していることから、同一の工人集団にかかる土器と判断できる。この土器類については、宇佐風土記の丘資料館に保管されている民俗資料の高村焼（第88図）によく似ている。

高村焼は、宇佐宮の荘園で土器作りを担い、藤原姓高牟礼氏を称する土器長家の「高牟礼文書」によれば、12世紀から宇佐市下高周辺に居住して土器作りを続けて、近世まで一族世襲を続けてきた宇佐宮の神官集団でもあったらしい。土器長職の下には土器作手職があって、神宮に土器を納める一方で、焙烙などの雑器類を生産して生活の糧にしていたらしいが、第二次大戦期に途絶えたという。中世期の古文書から「かわらけ、小土器、鉢、釜、こしき」が賦課され、宇佐宮・弥勒寺の神事・祭事に使用されたが、昭和初期の記録では「コネバチ、セイロウ、カメ、ハンドウ、火消壺、火鉢」などが作られたと記されている。そして昭和初期まで宇佐周辺で販売されたらしい^(註6)。民俗資料として宇佐風土記の丘資料館には、こね鉢（1）、甌（4）、甕（5・6）、焙烙（2・3）などが収集されている^(註7)。また大平村誌にも民俗資料として、エゴラ（焙烙）・蒸籠の写真が掲載されている。

上唐原稻本屋敷遺跡出土資料には、土師質こね鉢、焙烙、甌、鍋、摺鉢、瓦質火鉢などの器種がある。こね鉢と焙烙は民俗資料と非常によく似ている。こね鉢で、特徴が相似するのは次の事項である。1. 口縁部が緩く外反して肥厚すること。2. 体部下半に刻み目突帯が巡ること。3. 底部に高台を有すること。4. 外面をヘラ削り、内面をヘラミガキ調整すること。5. 口縁部内面に赤色顔料を塗布することなどである。焙烙では、1. 内彎する体部と、端部で内面側に丸く肥厚すること。2. 内耳ではなく、小さな耳が外面に付くこと。3. 外面をヘラ削り、内面をヘラミガキ



第89図 近世土師質土器の形態(1/6)

調整することなどが相似点である。また、甕の胴部外面の扁平な突帯は、図示しないがII区4号土坑出土土器のなかで破片資料にみられる扁平な突帯に酷似しているのである。

民俗資料は製作時期が明確ではないものの、第二次大戦以前の昭和初期の可能性が高いとみられる。上唐原稻本屋敷遺跡は前述したように、最も新しい遺構が昭和20年代頃と判断されるので、民俗資料と遺跡出土資料を比較して、その形態的な変遷を探ることが可能である。

0区4号遺構ではくらわんか碗などの18世紀後半頃の土器類が出土するが、(33) こね鉢、(34) 焙烙が伴う。こね鉢の口縁部は外反してやや肥厚する。この特徴は0区2号遺構の(5)、6号遺構の(68) こね鉢にもみられ、2号遺構例では体部下半の屈曲が強い。いずれも口縁部内面に赤色顔

料の塗布はみられない。(こね鉢1類)。焙烙は(34)例のように、体部が屈曲し、口縁部内面の肥厚は顕著ではない。口縁部外面に貼付けられる耳状把手は比較的大きい。(焙烙a類)。

I区区画溝の北溝出土のこね鉢は口縁部の特徴から3種類に分類が可能である。すなわち(113)の口縁部が強く外反する鉢はこね鉢1類に近いタイプ(こね鉢2類)、(109~110)は口縁部が緩く外反して外側に断面三角形状に肥厚して口縁部内面に赤色顔料を塗布するタイプ(こね鉢4類)、(117)はその中間タイプで、口縁部の肥厚が少なめで外側が平坦面にはならず、内面に赤色顔料塗布はみられない(こね鉢3類)。焙烙は(122~124)が出土し、口縁部の特徴では2分できる。(122・123)は体部から口縁部にかけて僅かに屈曲して外反気味となり、端部は内側に小さく肥厚する(焙烙b類)。器高の高い122では耳状把手は分からぬが、器高の低い123では口縁部外面にやや小振りな把手が貼付けられる。これに対して(124)は体部に緩やかに内彎して、口縁端部が内側に小さく肥厚する。耳状把手は123よりも大きめである(焙烙c類)。この溝からは、18世紀後半代の陶磁器を含み、19世紀前半期の陶磁器も多いが、明治後半期の資料も一部みられる。従ってこね鉢2類は18世紀後半に近く、形態的に後出するとみられるこね鉢4類は明治後半期に近いものと判断しても差し支えないであろう。また焙烙b類とc類も形態的な変化で時期の違いがあるものと考えておきたい。

II区4号土坑では4類こね鉢(2)が出土している。焙烙は口縁端部内面の肥厚がc類よりも丸く顕著になるものである(焙烙d類)。扁平な突帯片も出土していて、陶磁器の特徴からみて明治後半期である。

高村焼民俗例こね鉢と4類こね鉢を比較した時、4類よりも更に口縁部の外反が緩く、外面の肥厚は外側に膨れ気味で、4類よりも形態的な変化を僅かにみとめられる。また口縁部内面のみならず、内底見込みに圈線で塗布される赤色顔料は、中央に書かれた「上」字朱書きとともに普遍的なのは分からぬが、産湯を張るのにも用いられたと伝えられている。

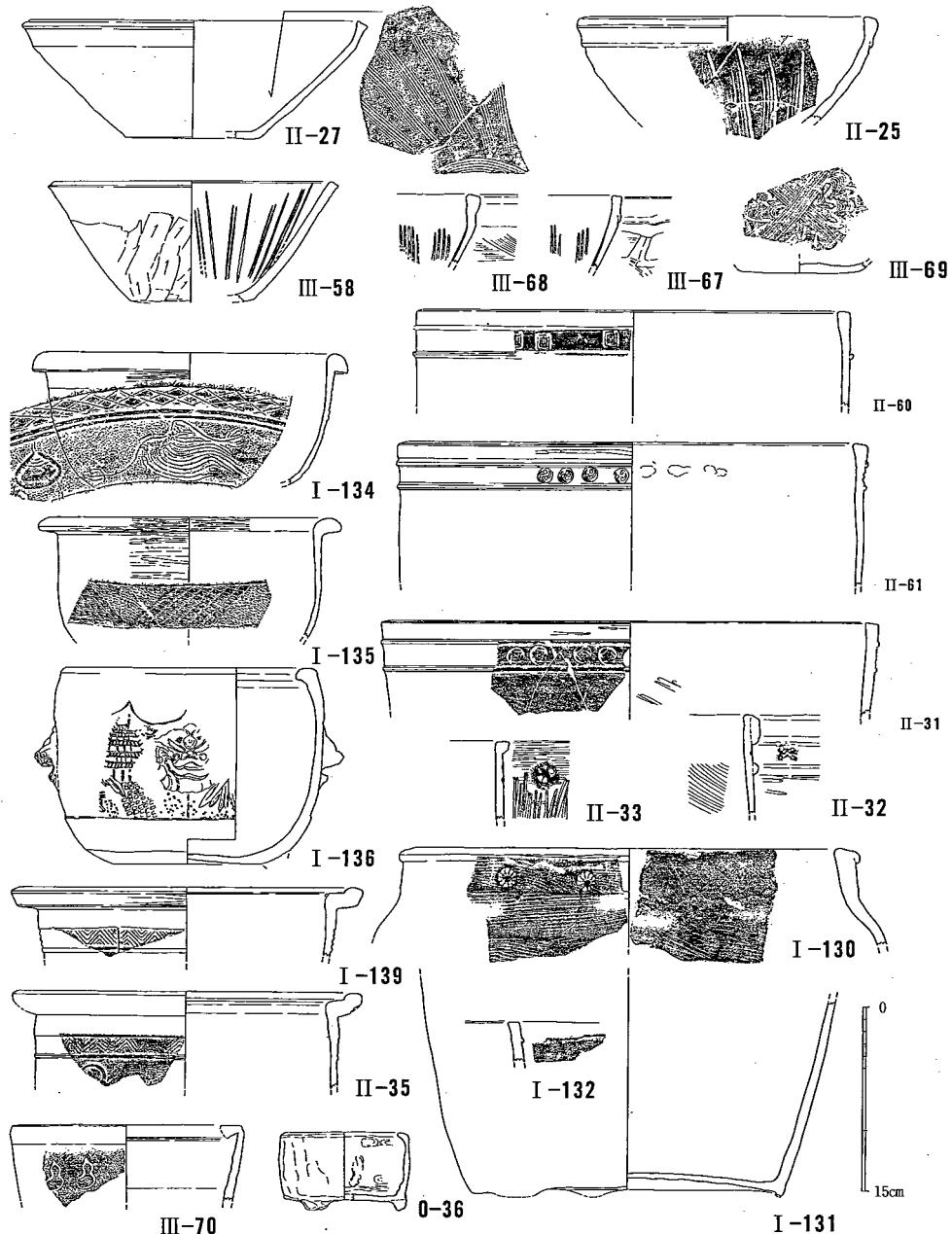
民俗例焙烙とd類焙烙を比較すると、d類例に耳状把手が破片資料のために残らないが、器形と口縁部の肥厚は酷似する。c類と比較すれば、民俗例の耳状把手がかなり退化している。

大平村小松原遺跡では、4類こね鉢とd類焙烙が各1点出土している。染付碗などの共伴遺物から、こね鉢は18世紀後半~19世紀中頃、焙烙は明治~大正期とされ^(註8)、本遺跡例と大差はない。

焙烙は、このほかに上唐原稻本屋敷遺跡のII区大溝とII区1b号溝でも出土していて、1b号溝が大溝よりも先に埋没することから、時期差を考えることが可能である。1b号溝では(56)のような口縁部が緩やかに外反して端部の肥厚しない焙烙片(焙烙e類)と、(57)の行平鍋のように把手か注口らしい中空の突起を有する焙烙(焙烙f類)が出土している。(57)例は突起を除けば0区4号遺構出土のa類焙烙に似た器形に近いが、把手の形態が異なることから先行するものとみておきたい。大溝では(21)のように口縁部が一旦外反して端部が内面側に肥厚する焙烙(焙烙g類)が出土しているが、a~d類焙烙はみられない。焙烙g類らしい破片は1b号溝でも(55)例のように出土していて、鍋らしい(54)も口縁部の特徴は似ていて、一旦括れて内彎気味に開くが、(21)のように内面側には肥厚せずに、端部内面側に尖り気味である。(焙烙g'類)

焙烙e~g類はa~d類とは系譜の異なるタイプであり、むしろ鍋からの系譜で、時期的に先行するものであろうであろう。

甌は、18世紀後半にみている0区4号遺構で出土例(35)がある。口縁部を失うが、民俗例(4)



第90図 近世土師質・瓦質土器の形態(1/6)

の甌と比較すると、体部下半では、4号遺構例は外面に僅かながら稜をもって屈曲するのに対して、民俗例は丸味をもった体部である。民俗例の口縁部はこね鉢4類に近い特徴をもつが、こね鉢と甌が同様な形態変化を遂げたと推定すれば、(35)甌の口縁部は、こね鉢1類のような口縁部であったものと推察される。

I区区画溝出土の鉢か甌か器種不明の例(125)は、口縁端部を外側に折るようにして肥厚させるが、外面をヘラ削り、内面をヘラミガキ調整するので、高村焼系の可能性があろう。甌の口縁部でもおかしくはない。

鍋は焙烙g'類のような形態の口縁部をもつ例(66)がIII区3号溝もある。この溝では、広東碗やくらわんか碗を含まず、時期的に下降する陶磁器が出土するが、土師質鍋は混入かもしれない。

II区1b溝の鍋らしい例(53)は、これよりも先行する可能性が高く、口縁端部を外側に折るよ

うにして肥厚させるもので中世の石鍋にも似る。なお、0区6号遺構出土の口縁部を中空にして丸く肥厚させる例（67）は、外面をヘラミガキする点で、こね鉢、焙烙と異なった器種も考えられるが、今のところ類例を知らない。

摺鉢は、II区1b号溝で（58）の土師質摺鉢が出土している。体部が直線的に開くもので、中世期の摺鉢とみて良いだろう。II区大溝には土師質例（25）と瓦質例（27）がある。土師質例は陶器摺鉢を模倣したような、口縁部を外側に折り畳んで幅広く肥厚させる口縁部をもつ。瓦質例は口縁部が内側に屈折する器形で、内底見込みに花弁状の櫛目を有するタイプである。このような摺鉢は、宇佐地方で類例をみることができる^(註9)。III区3号溝でも口縁部外面を折り畳む摺鉢（67）と内底見込みの櫛目が花弁状と×字状に交差する摺鉢（69）があり、口縁部が括れ加減で端部の肥厚する例（68）もある。これらはいずれも時期的に近接するものと思われ、陶器摺鉢の代用品であったとすれば、16世紀後半以降の在地産摺鉢であろうが、I区区画溝などにみられないことから、18世紀後半まで下らないであろう。

火鉢は、II区1b号溝で（60・61）のような、体部が直立して立ち上がる深鉢タイプの土師質火鉢がある。口縁部を幾つか内面側に肥厚させて上面を平らにするもので、口縁下に貼付けられる2条の箍状凸帯間に雷文や巴文が押捺される。このタイプの火鉢は16世紀頃からみられるものである。土師質火鉢はII区大溝出土の（32・33）のように口縁部が外側に肥厚するタイプに変わるように、33では箍状凸帯は消滅する。

I区区画溝では、（130～132）のような土師質火鉢と、（134～136・139）のような瓦質火鉢が出土している。130～132のタイプは16世紀後半ないし17世紀頃からみられるもので、134・135は体部下半が丸く、口縁部は強く外反して丸く肥厚する火鉢、136は口縁部を内面側に拡張する火鉢で、139は強く外反して肥厚する口縁部に蓋受けのような段を有する。いずれも外面に型押しの文様をもち、19世紀代のものである。

火入れは、0区4号遺構出土例（36）と、III区3号溝出土例（70）がある。前者は18世紀後半の遺物を伴い、中世以来の形態を留める。後者は底部の形態が分からず比較に窮するが、大きさからして火鉢の可能性もある。

焜炉（七厘・かんてき）は、I区区画溝などで出土した。類似資料は北九州市小倉北区の京町遺跡（永照寺跡地）のD3、D31遺構で出土している。これらは共伴出土遺物から、19世紀代でも明治期のものとされている^(註10)。

これらの出土遺物をみたとき、16・17世紀代では摺鉢、火鉢があるものの、他の器種に恵まれていない。封建制度の徹底された時期であり、儉約と制度に縛られた農民層にあっては、物資を充分に入手しえない状態であったことも一因していると思われる。物資が比較的に豊富になるには、町人（商人）の台頭と近代工業化へのきざしと共に、商業化の波が都市近郊の農村にも押し寄せてくる江戸後期まで待たなければならなかつたのであろう。

註1 福岡県教育委員会 1996 上唐原遺跡II 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

2 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢 第30集（下）

3 大平村 1986 大平村誌

4 陶磁器については、西田宏子・大橋康二監修 1988 古伊万里 別冊太陽No63 平凡社、大橋康二 1994 古伊万里の文様 理工学社 を参考にした。

- 5 神崎宣武 1989 やきものへの視点 民具が語る日本文化 河出書房新社
- 6 宇佐風土記の丘資料館 1990 やきもの—豊のくらしと文化— 展示図録
小柳和宏 1995 宇佐高村と中世雜器生産 大分県地方史 第159号
- 7 高村焼民俗資料については、大分県立宇佐風土記の丘資料館の真野和夫課長、菅野剛宏研究员のご厚意によって実見することができ、ご教示も得ることができた。記して感謝したい。
- 8 福岡県教育委員会 1997 小松原遺跡 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集
- 9 宇佐市教育委員会 1994 下林遺跡II区 一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 および、小柳和宏 1995
前掲文献
- 10 北九州市教育文化事業団 1994 京町遺跡3—永照寺跡地（II-2区の調査）— 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第147集

図 版



上唐原稻本屋敷遺跡周辺航空写真(35年前) (K U-62-9. C 12-10)

図版 2



1 上唐原稻本屋敷遺跡全景(北北東上空から)

2 上唐原稻本屋敷遺跡 I・II区空中写真





1



2



3



4

- 1 上唐原稻本屋敷遺跡
① 区(北から)
- 2 ①区 2・3号遺構(西から)
- 3 ①区 3号遺構(南から)
- 4 ①区 4号遺構(西から)

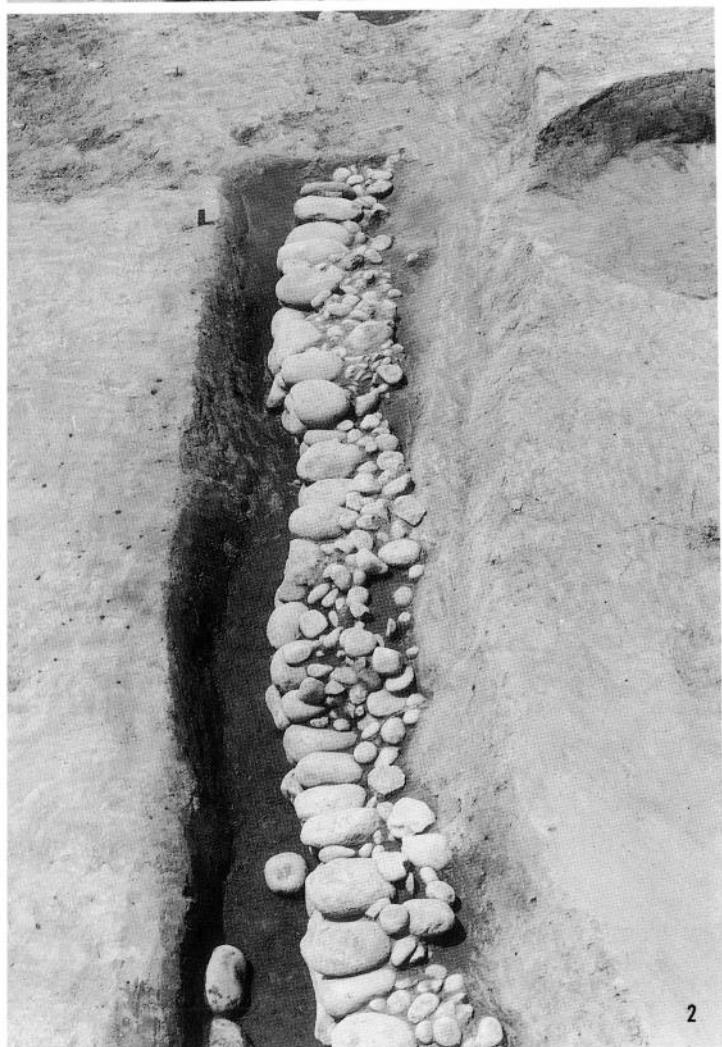
図版 4



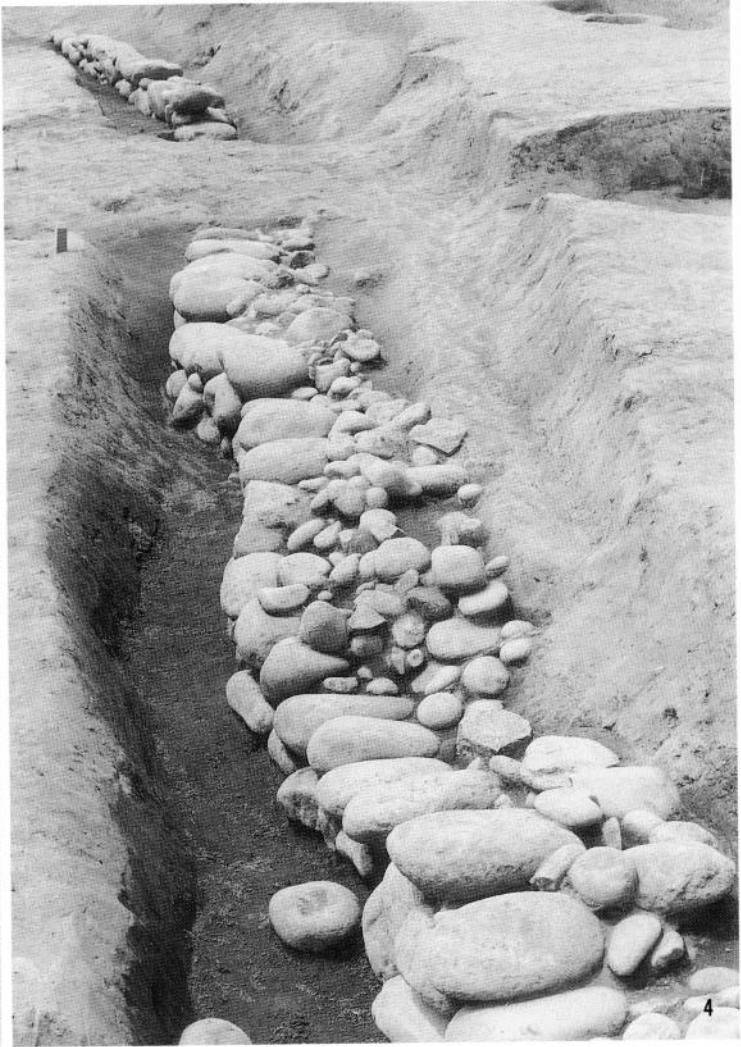
1



3



2



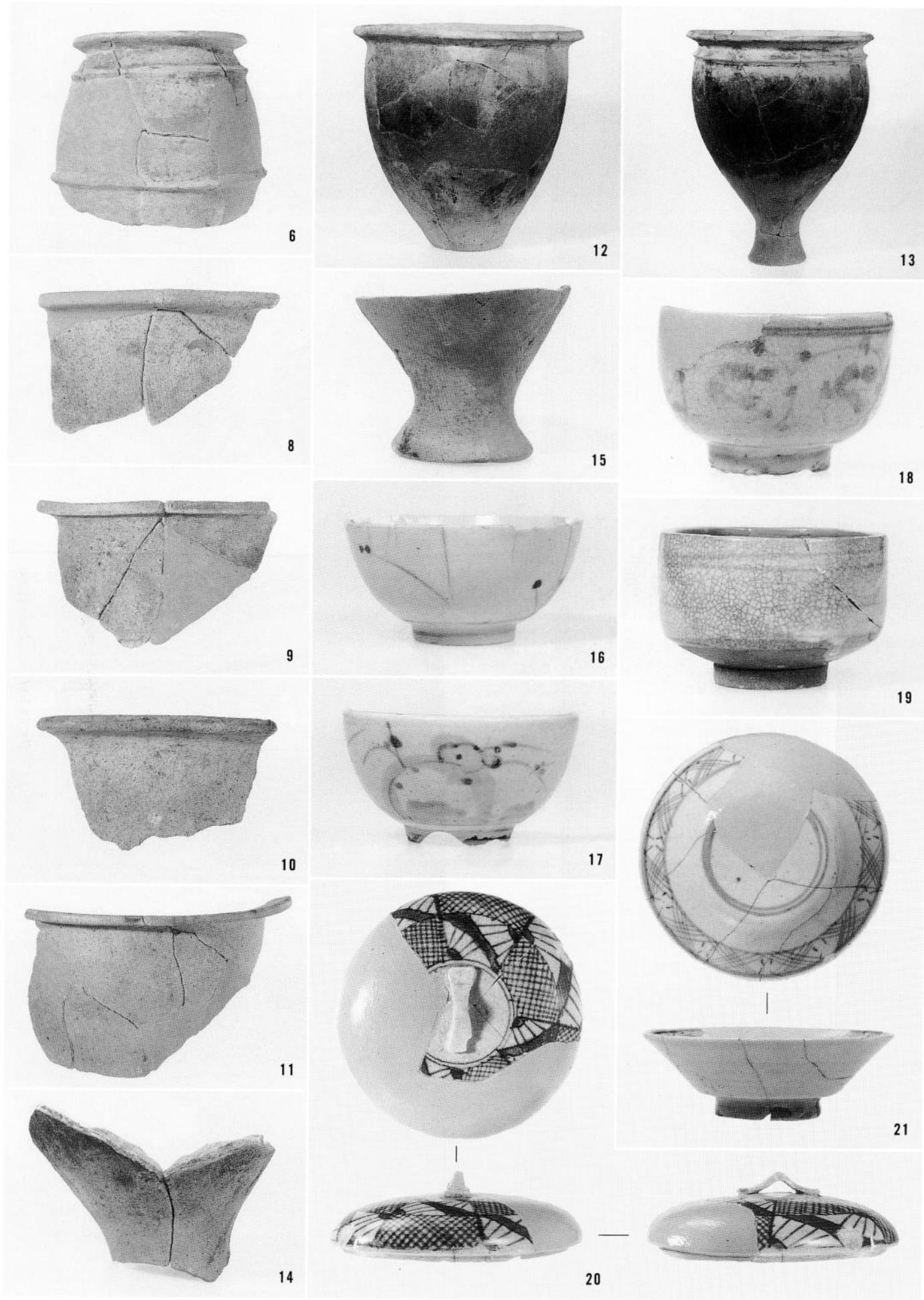
4

1 0区6号遺構(北から)

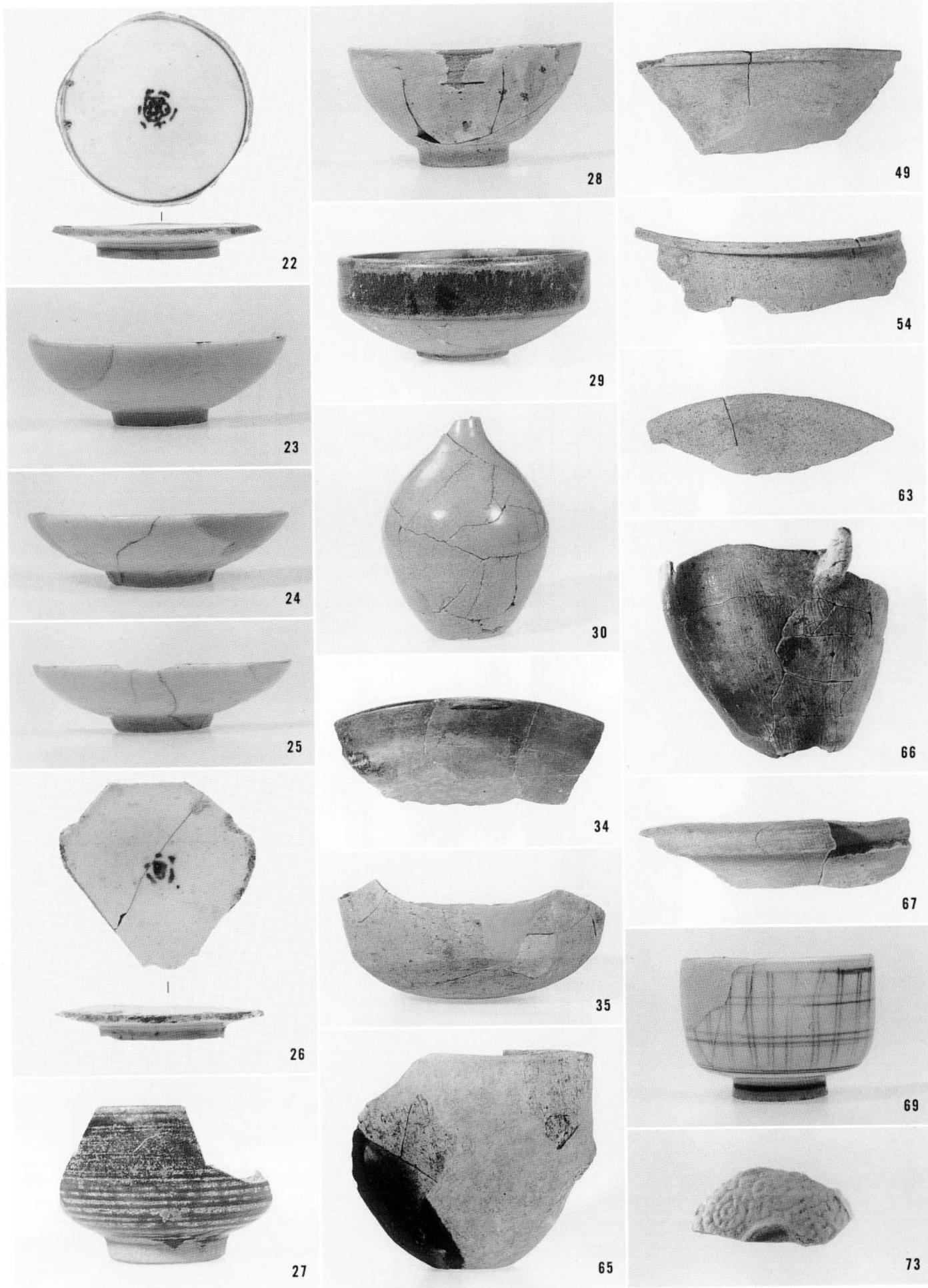
2 0区6号遺構北部

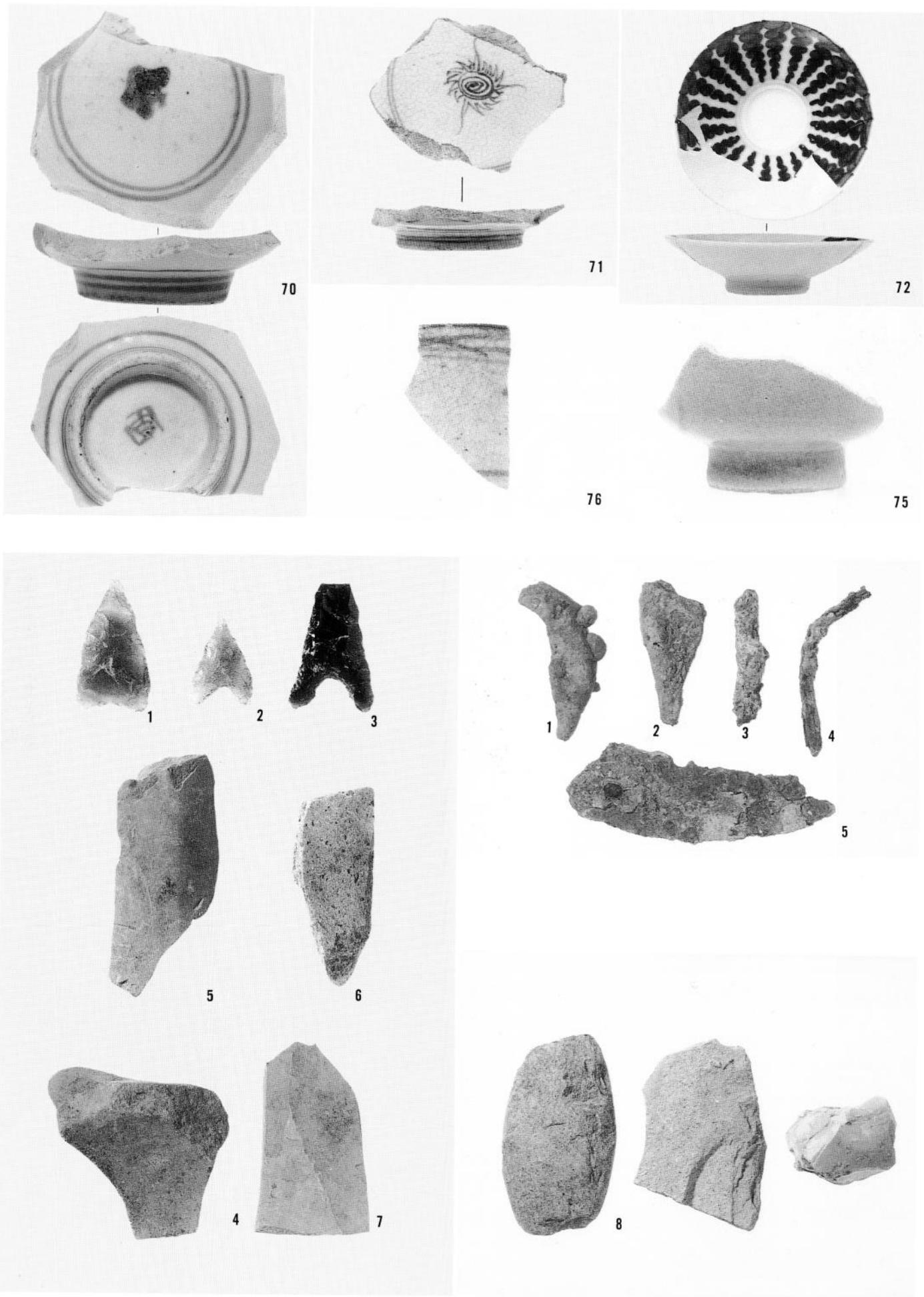
3 0区6号遺構南部近景

4 0区6号遺構北部近景



図版 6

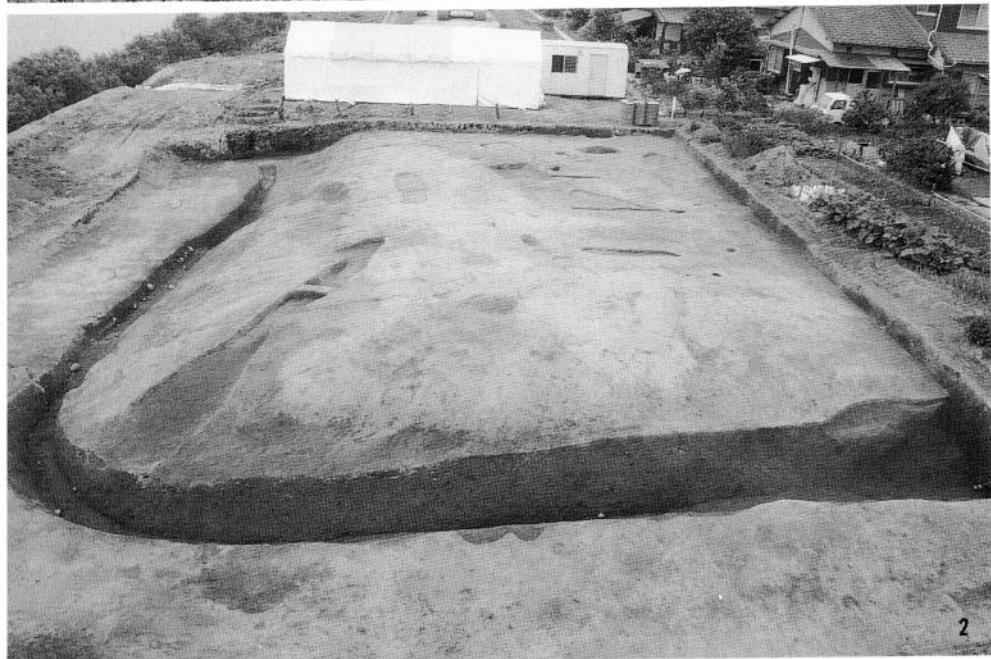




0 区出土土器 3 石器・土製品・鉄製品



1



2



5

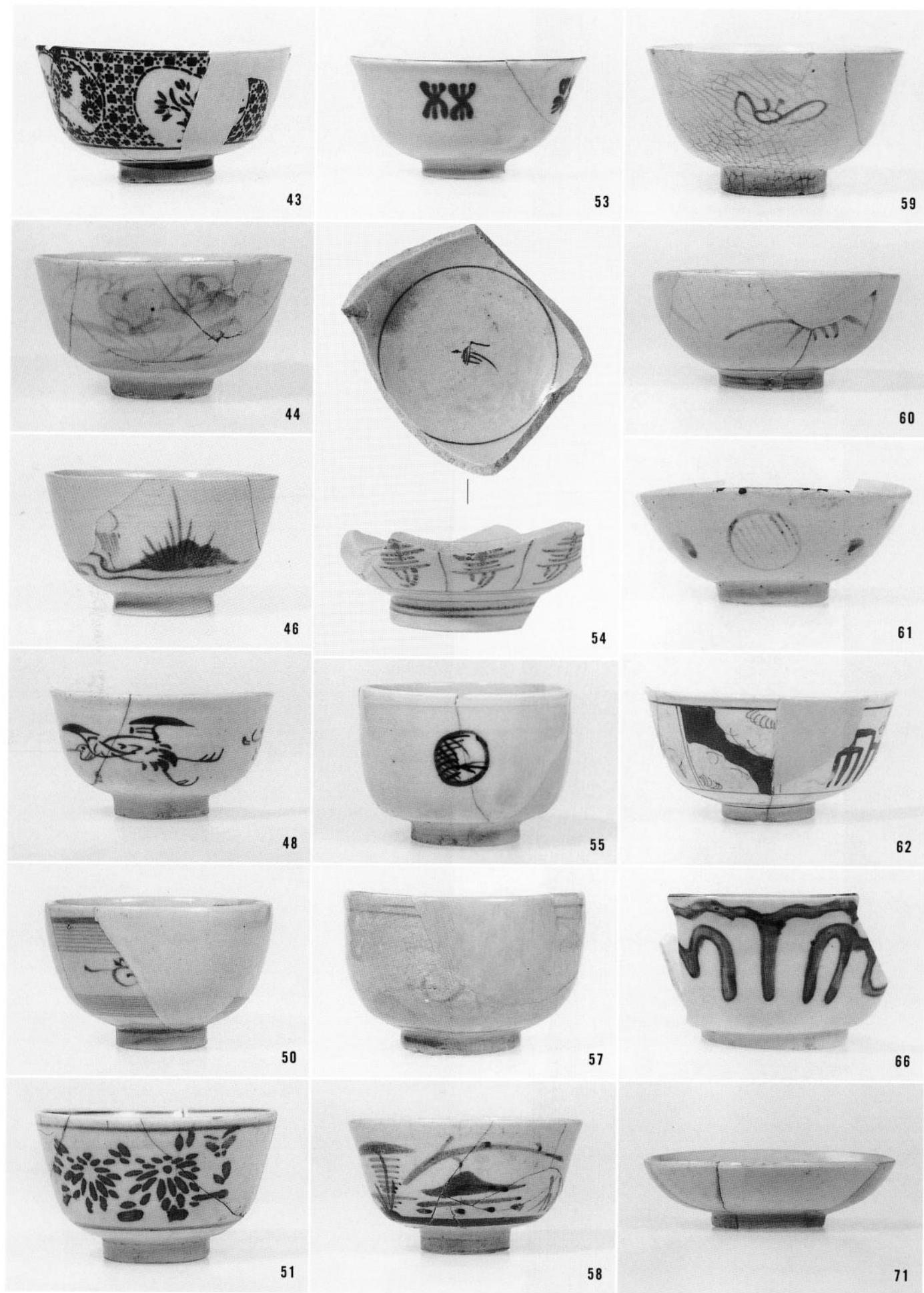


3

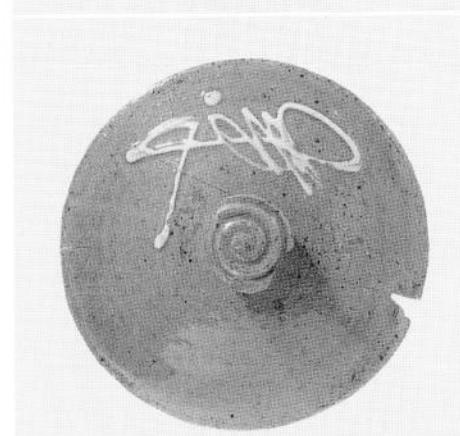
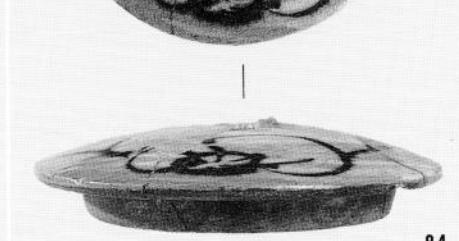
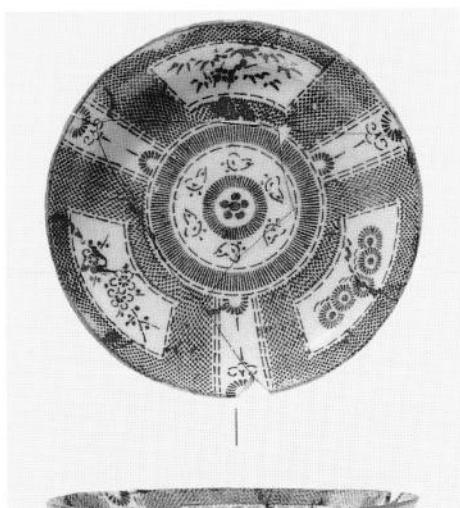


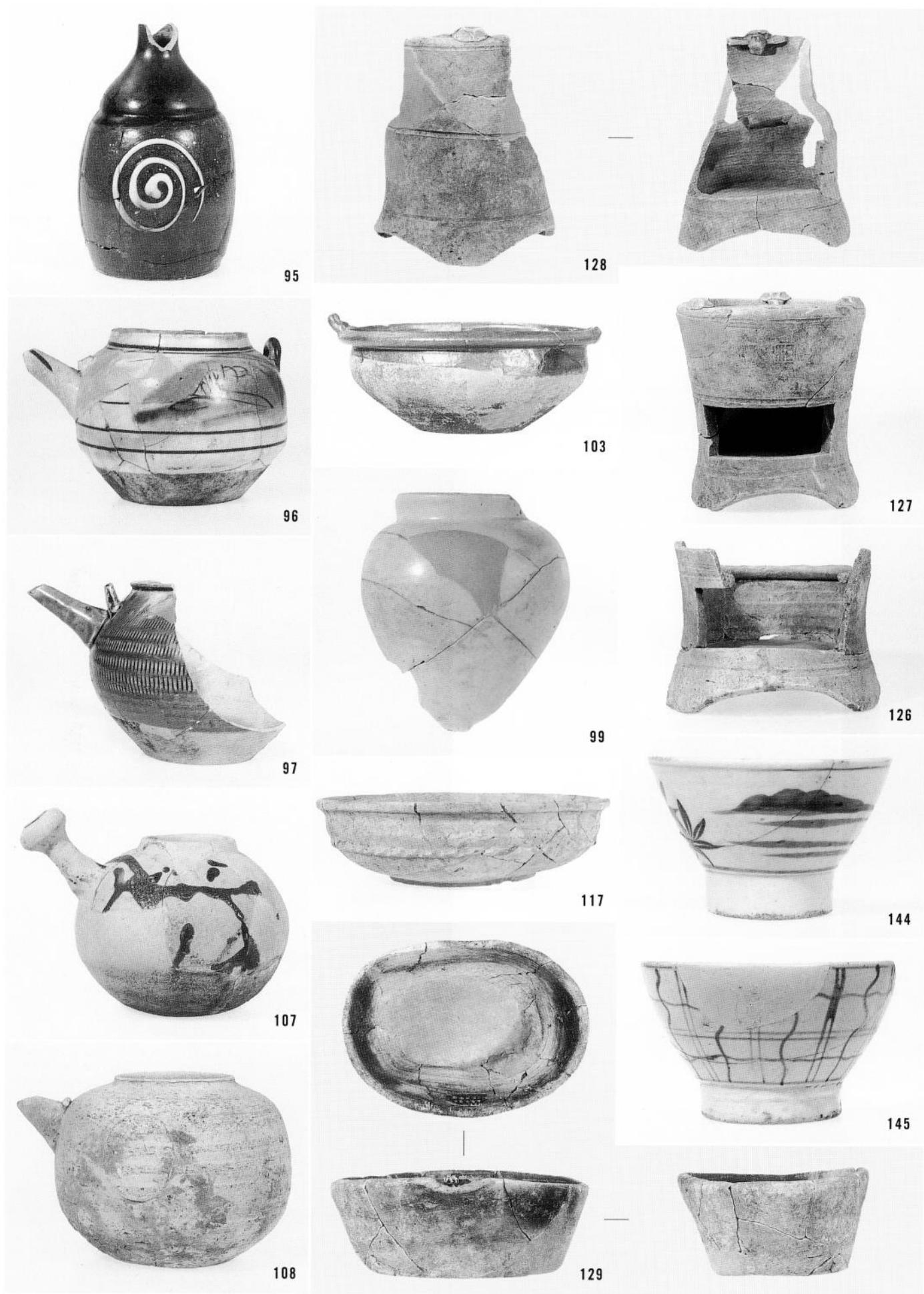
4

- 1 I 区全景空中写真
- 2 I 区区画溝(北から)
- 3 I 区東側溝(北から)
- 4 I 区北側溝(東から)
- 5 I 区北側溝堆積状況

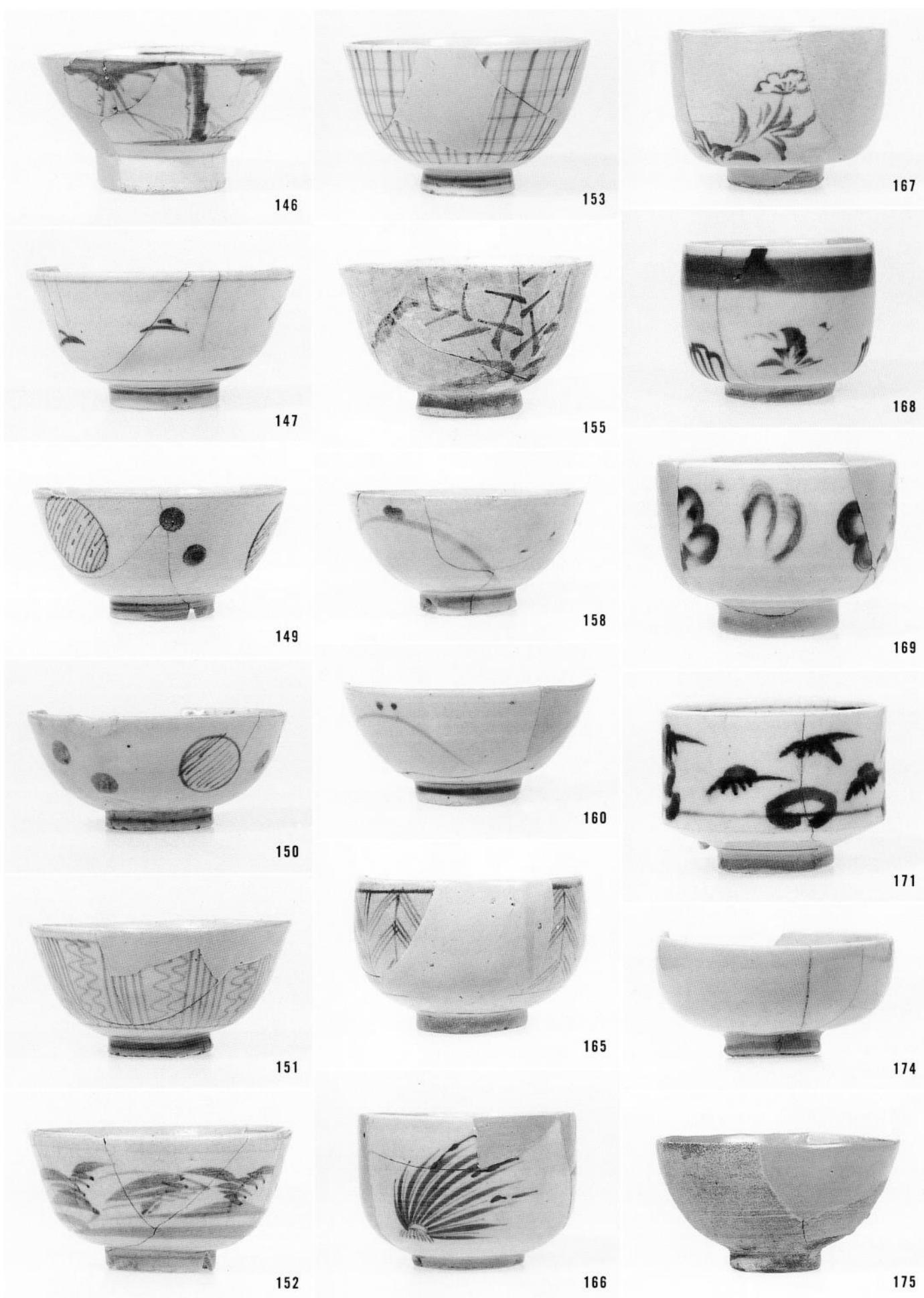


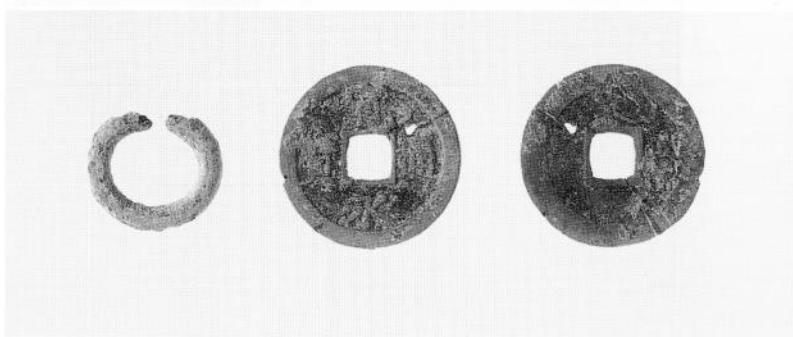
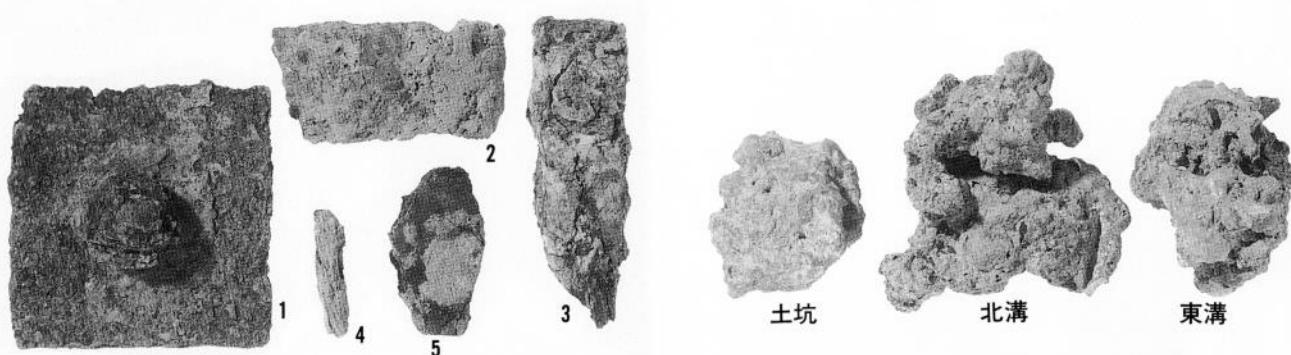
图版 10





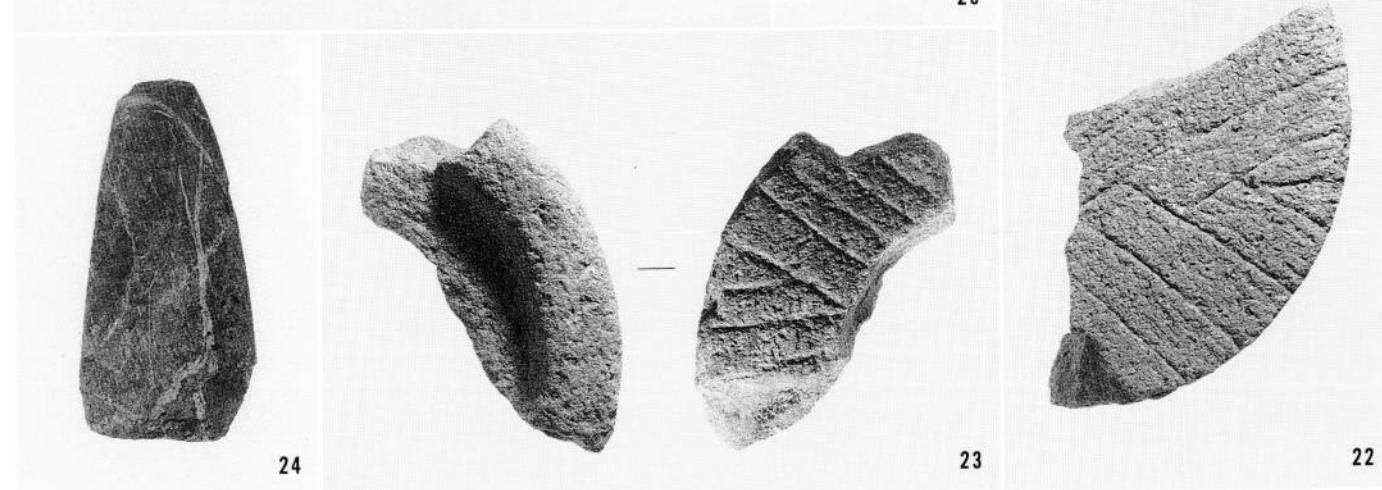
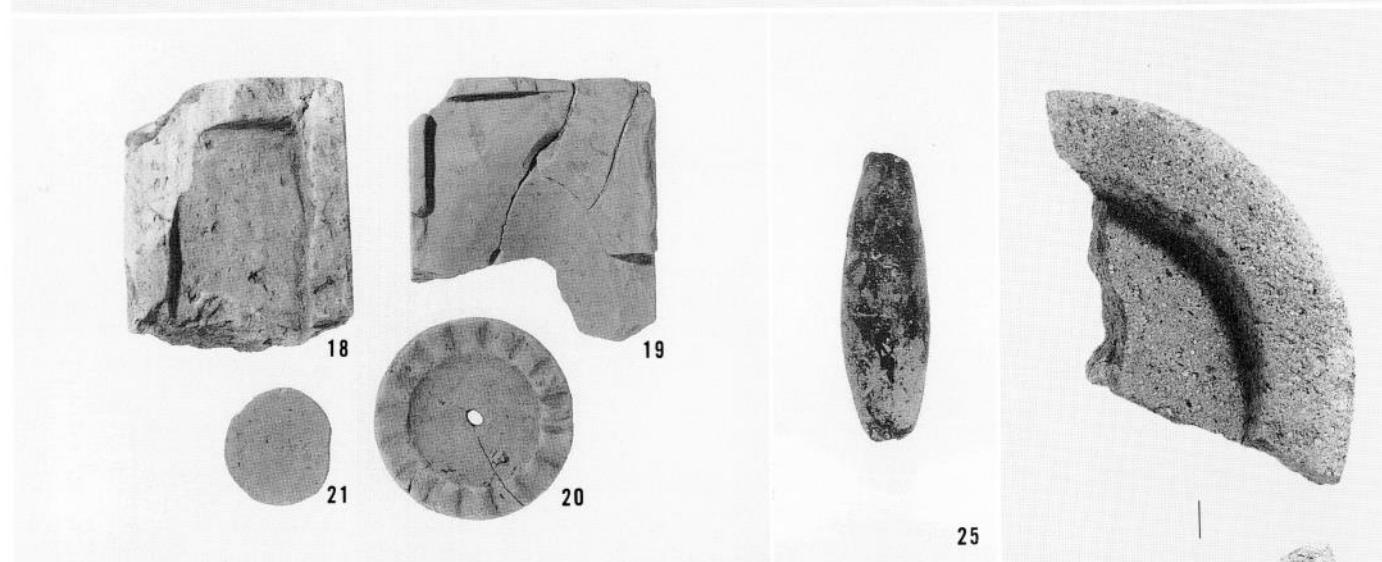
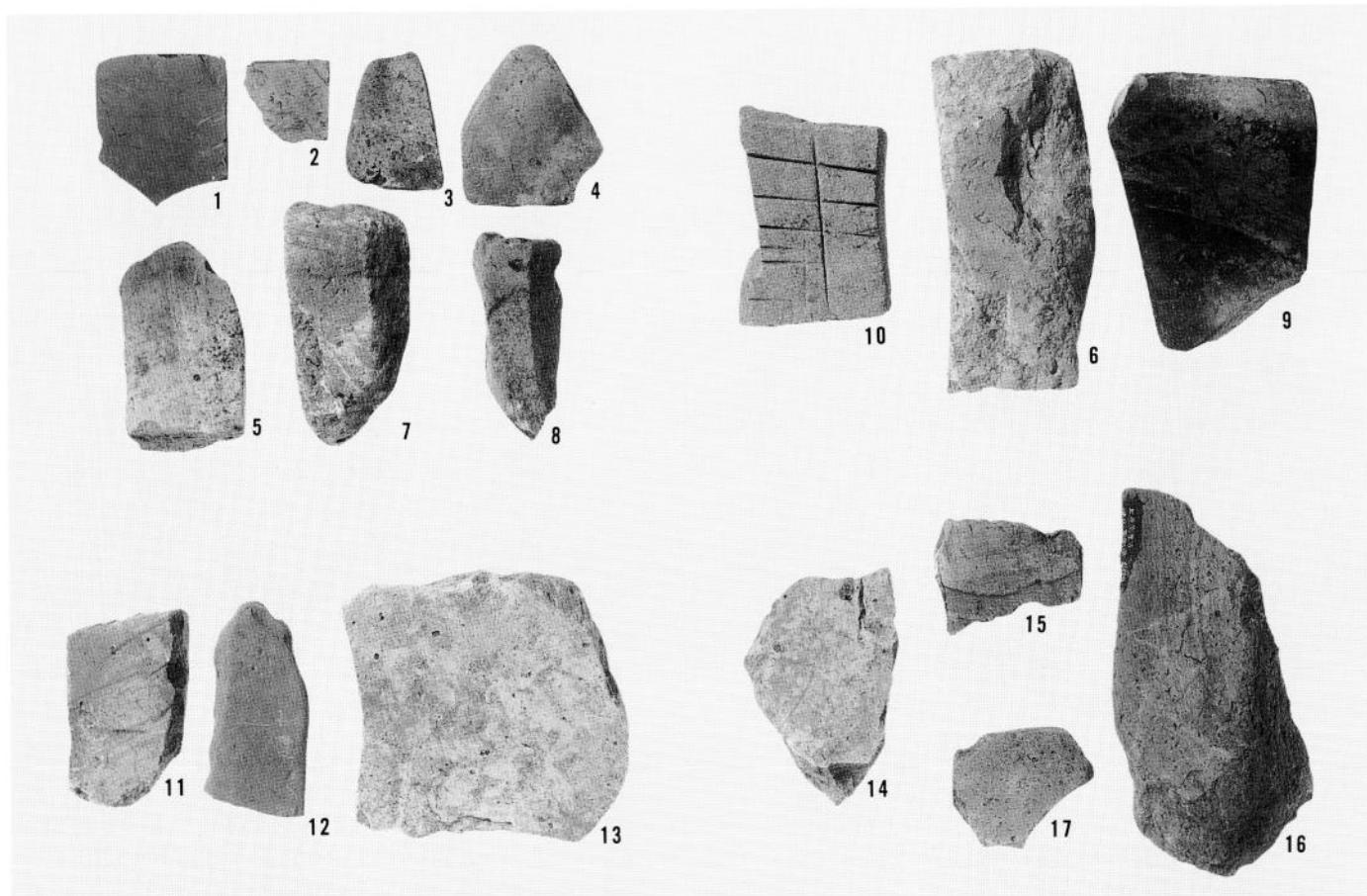
図版 12





2

1. I区出土土器 2. I区出土金属器・鉄滓





1 II区1号建物跡(西から)



2 II区1号土坑(東から)

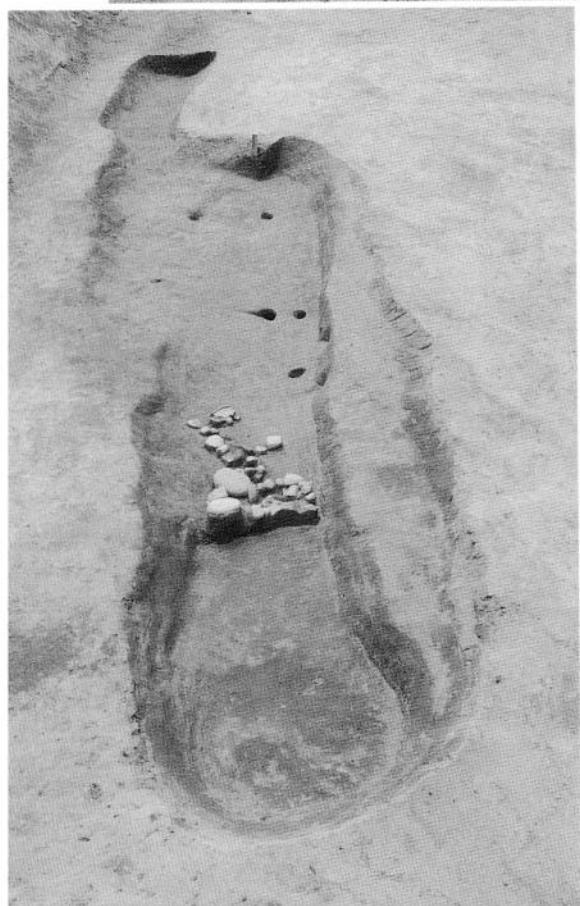


3 II区2号土坑(北から)

図版 16



1



2



3



1 II区 3号土坑(南から)

2 II区 4号土坑(北から)

3 II区 4号土坑遺物出土状況

4 II区 土壙墓(南から)

4

1 II区南半部(北から)



1

2 II区1号建物跡と大溝・1号溝(北から)



2

3 II区大溝と1号溝(南から)



3

図版 18



1



2

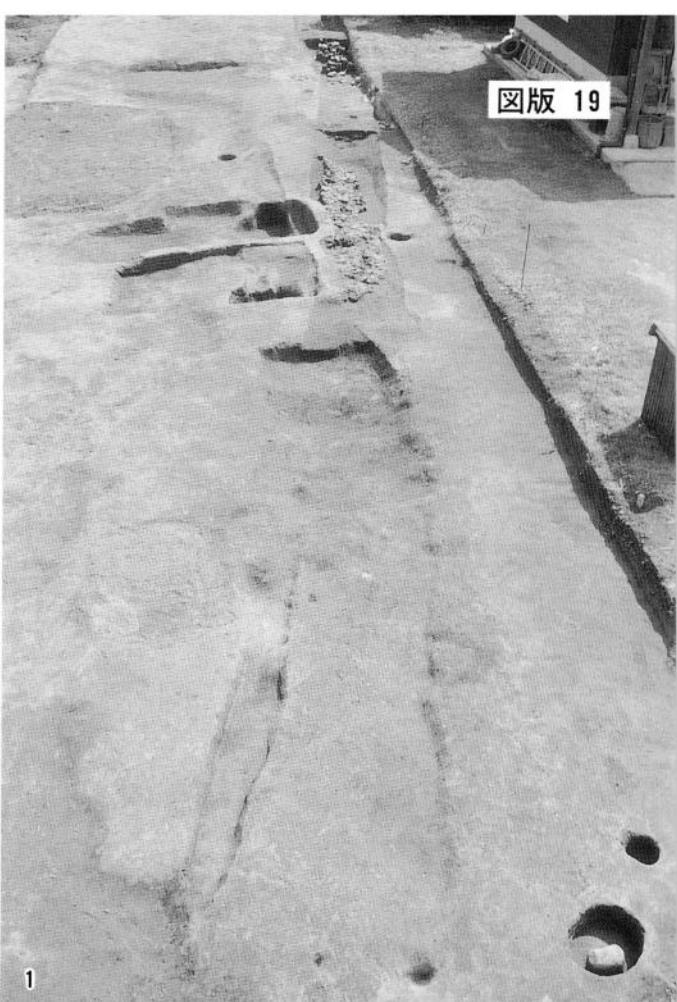


3

- 1 II区大溝堆積状況
- 2 II区大溝の石垣
- 3 II区1号溝堆積状況



2



1



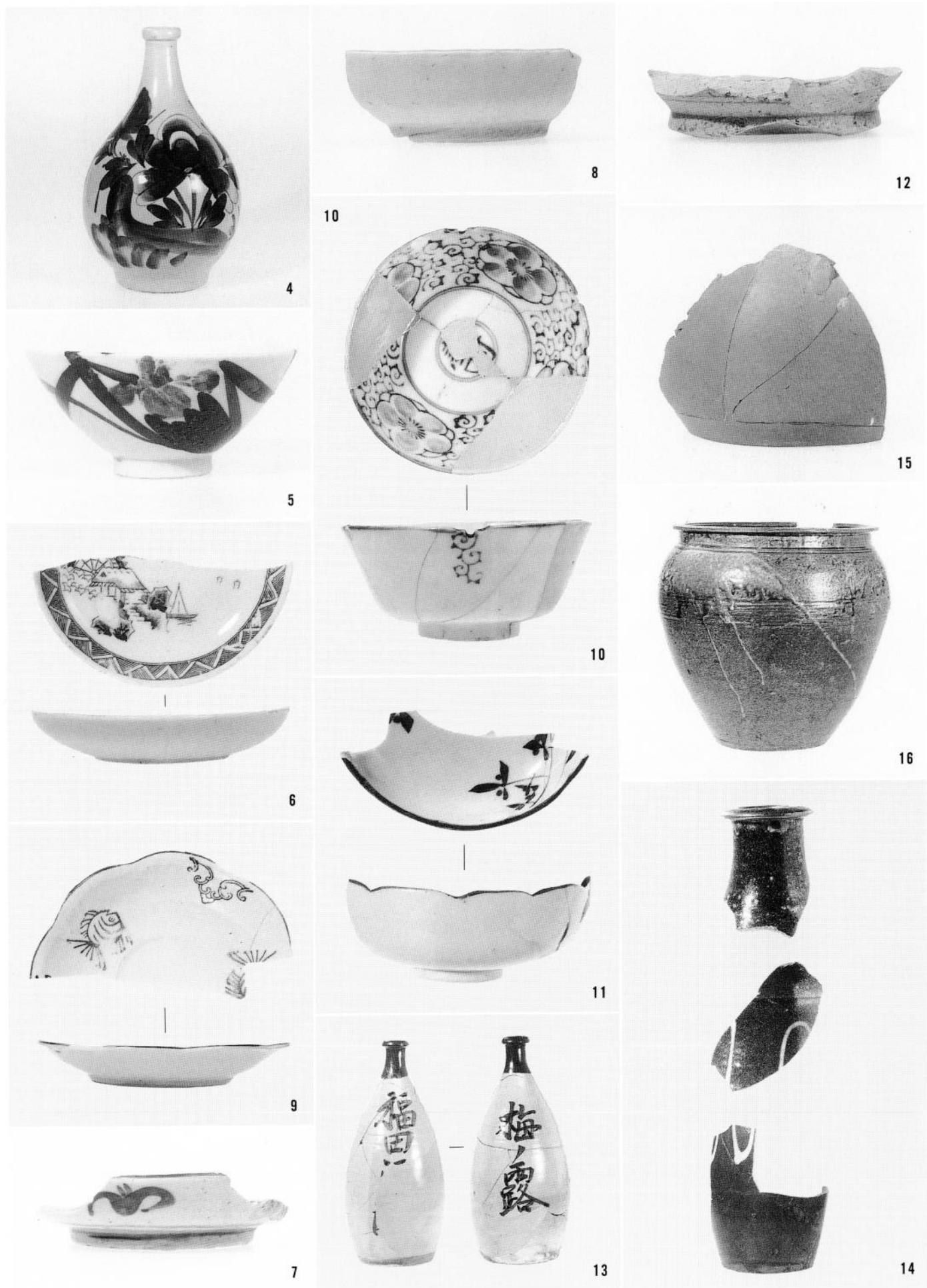
3

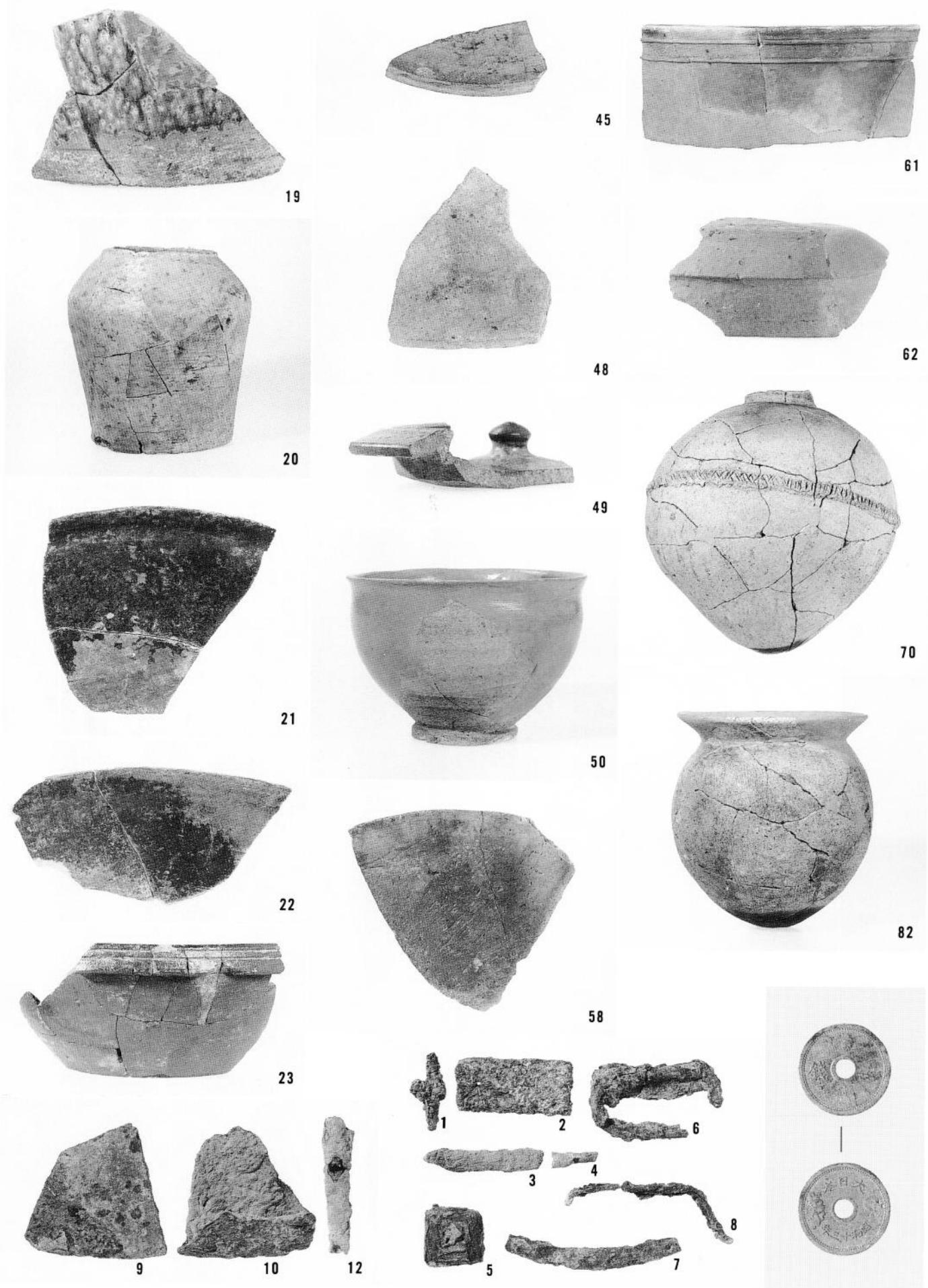
- 1 II区 2号溝(北から)
- 2 II区 2号溝(南から)
- 3 II区 2号溝遺物出土状況(東から)
- 4 II区 2号溝遺物出土状況(南から)



4

図版 20

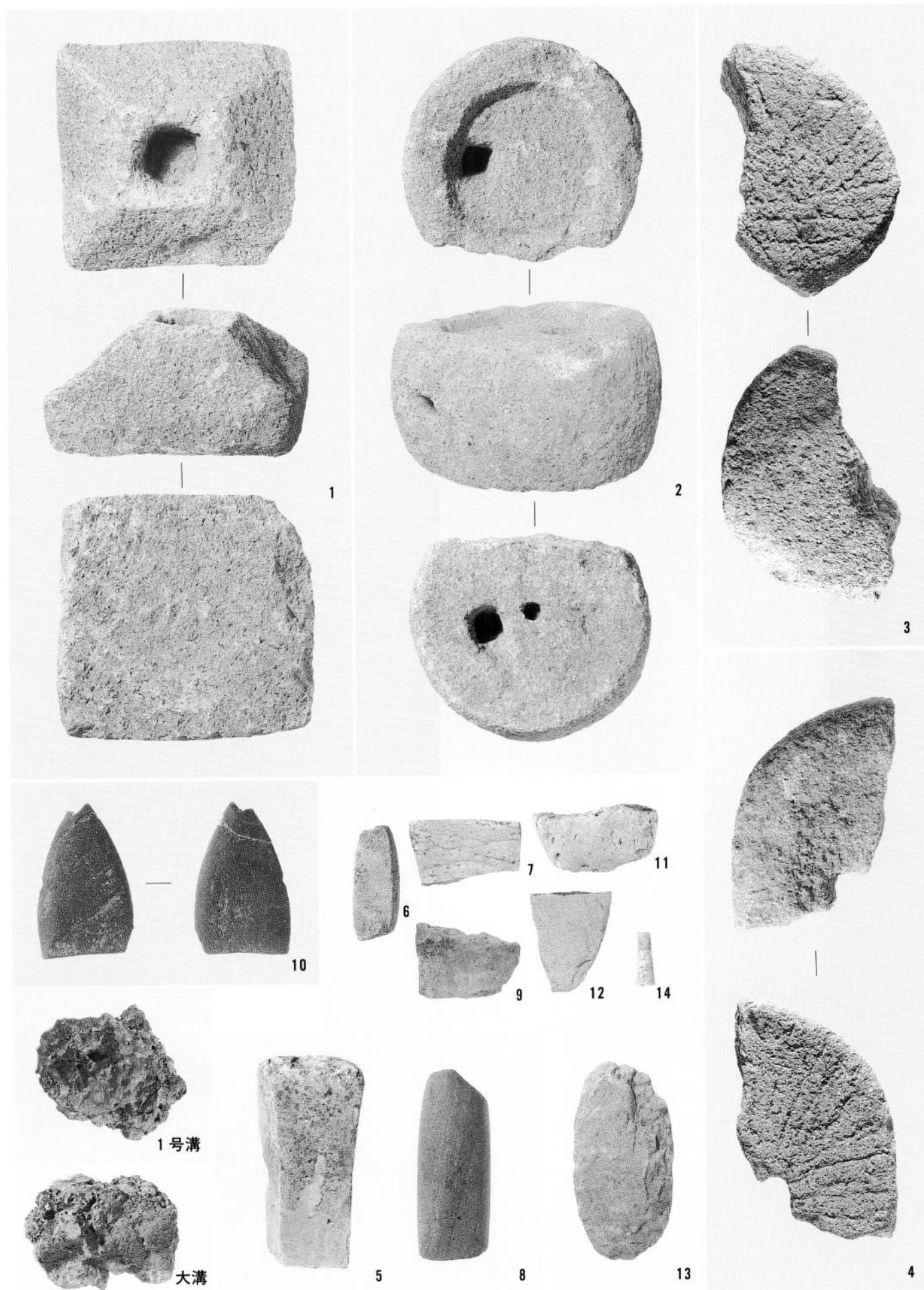




1 II区出土土器 2

2 II区出土金属器

図版 22



II区出土石製品・鉄滓



1 III・IV区全景空中写真

2 III・IV区全景(南から)

図版 24



1



2



3

1 III区全景空中写真

2 III区中央部

3 III区住居跡状竪穴
と 2号溝



- 1 III区 2号土坑(東から)
- 2 III区 1号土坑(南から)
- 3 III区 1号土坑遺物出土状況
- 4 III区 1号土坑(遺物除去後)



図版 26



1



3

- 1 III区1号溝
2 III区2号溝
3 III区2号石垣

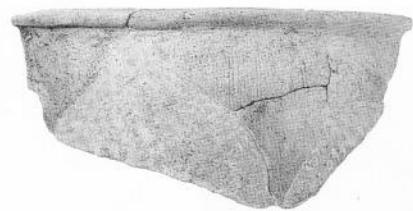


1 III区 3号溝(東から)

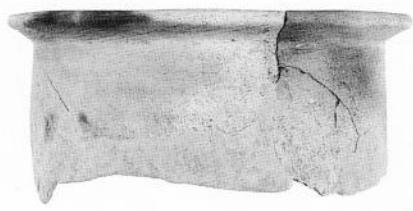
2 III区 3号溝(西から)

3 III区 1号石垣(北西から)

図版 28



3



10



45



8



32



49



9



38



50



11



40



51



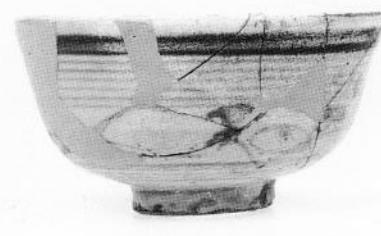
12



41



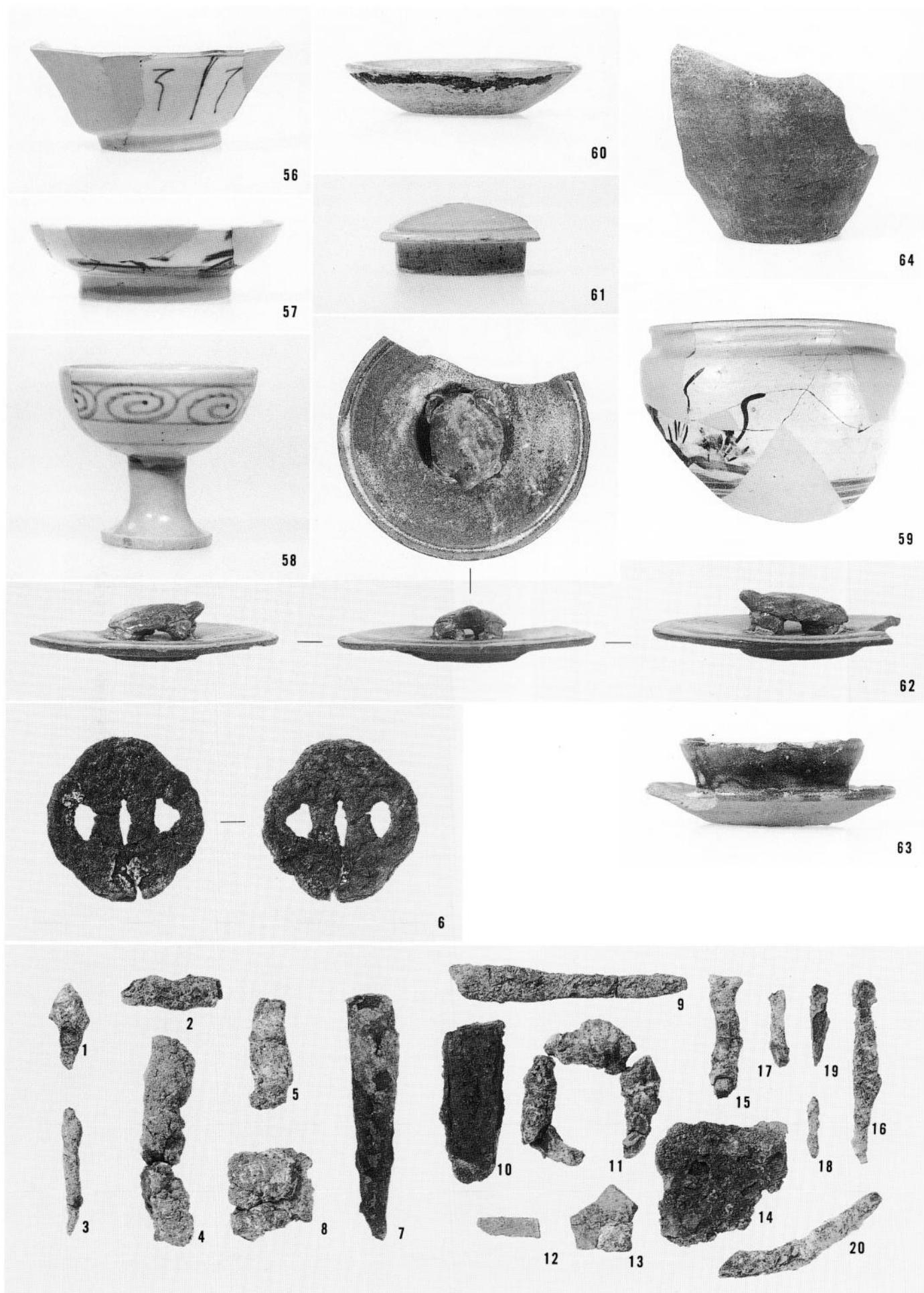
52



43



53





1



2

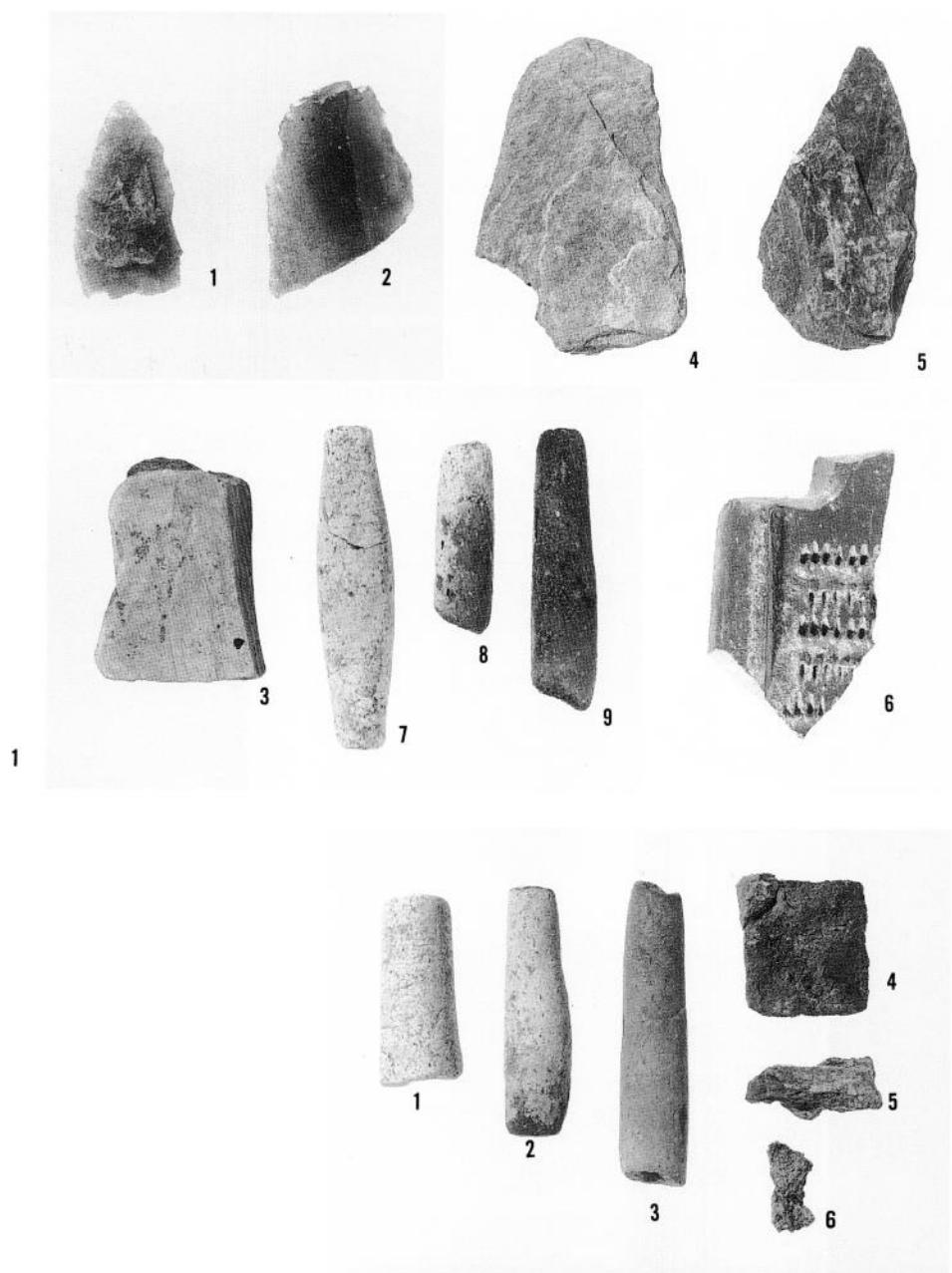


1 IV区全景(南から)

2 IV区1号住居跡
(南西から)

3 IV区1号建物跡
(南西から)

3



- 1 III区出土石器・
土製品
- 2 IV区出土土製品
・金属器
- 3 調査風景



報告書抄録

ふりがな	かみとうばるいなもとやしきいせき							
書名	上唐原稻本屋敷遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	一級河川山国川築堤 関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	I							
編著者名	小池史哲							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-77 福岡市博多区東公園 7-7							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	°	'	°	'	調査期間	m ²	調査原因
かみとうばるいなもと やしき 上唐原稻本屋敷	ふくおかんちくじょうぐん 福岡県築上郡 たいへいむらおおあざかみとうばる 大平村大字上唐原 あざいなもと やしき むらの 字稻本屋敷・村ノ うち 内	40645	960191	33° 33' 03"	131° 11' 26"	19920418 19920625	5500	山国川堤防 改築工事
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
上唐原稻本屋敷		縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	竪穴、土坑、溝 住居跡、建物跡、土坑、 溝 土坑、溝 土坑、溝	縄文後期土器、石器 弥生前・中・後期土器、 石器 土師器、須恵器 陶磁器、土師器、五輪 塔、石製品 陶磁器、土師器、瓦質 土器、石製品、鐵製品、 古錢				

Kamitoubaru-Inamotoyashiki Site

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 8	登録番号 15

一級河川山国川築堤改修関係埋蔵文化財調査報告

第 1 集

上 唐 原 稲 本 屋 敷 遺 跡

平成 9 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会
福 岡 市 博 多 区 東 公 園 7 番 7 号

印 刷 秀 巧 社 印 刷 株 式 会 社
福 岡 市 南 区 向 野 2 丁 目 13-29